

フランス語現象文の意味論
— IL YA / VOILA 構文の分析を通して —

津田 洋子

謝辞

本論文を提出するにあたって、ご指導いただいた東郷雄二先生に深く感謝いたします。東郷先生には、指導教授として、10年以上の長きにわたり根気強くご指導いただきました。講義やゼミの中では、先行研究を分析する観点を様々に示してくださり、言語研究の基本からその奥の深さにいたるまで存分に学ぶことができました。本稿の土台となった個別の研究においては、迷路に入り込んでしまったときなど、講義資料やノートを何度も見直し、筋道を考えました。理解がおそく、本質的な問へと導いて下さる、先生の御手を煩わせることも多かったと思います。退官後も博士論文の執筆を最後まで丁寧にご指導くださり、誠に有難うございました。深く感謝申し上げます。

守田貴弘先生には、博士論文の提出にあたり、主査をお引き受けいただき、誠に有難うございました。内容に丁寧にお目通しいたいただき、論の展開の分かりにくい点など、数多くのご指摘をいただきました。博士論文提出の最終過程において頂戴したご指摘は、論文を見直す上で、大変貴重なものでした。誠に有難うございました。

定延利之先生には、本論文と関係の深い内容の講義に何度も出席させていただき、副査もお引き受けいただき誠に有難うございました。ILYA/VOILA 構文を分析するにあたり、日本語と対照しながら考えることができたことに深く感謝いたします。

谷口一美先生には、授業やゼミでご指導を賜りました。わかりやすい説明とあたたかいご指導を有難うございました。副査をお願いした博士論文におきましても、論の進め方についての的確なご指摘を賜り、誠に有難うございました。

京都大学では、研究科の垣根を越えて多くの授業や研究会に出席し、幅広い観点から、言語学・フランス語学を勉強させていただきました。豊かな知識をご教授いただきました先生方、研究会で助言をくださった先輩・後輩に深く感謝いたします。特に、東郷研究室では、たくさんの論文の分析を通して多くの問題をともに考えることができました。京都での研究生生活の当初からお世話になりました先輩の中川奈津子さん、その他の東郷研究室の皆様に深く感謝いたします。

言葉の意味の面白さを教えて下さった泉邦寿先生、京都での研究生生活を遠くから励まして下さり有難うございます。また関西フランス語研究会では、フランス語を専門とされる先生方の活発な議論を通して、多くを勉強させていただきました。有難うございます。

インフォーマント調査に協力して下さった先生方、英訳を手助けして下さった先生、ドイツ語の先行研究を読む手助けをして下さった研究仲間にも心より御礼申し上げます。最後に、長年の研究生生活を見守り、支えてくれた家族に感謝いたします。

津田 洋子

目次

フランス語／（英語）の表記について.....	iv
表目次.....	v
図目次.....	vi
第1章：先行研究と問題提起.....	1
1.1. 先行研究.....	2
1.1.1. 断定的性質を持つ存在マーカ―やコピュラの機能：Sasse (1987).....	2
1.1.2. 発話の場の役割：Furukawa (1996) (2013)、Erteschik-Shir (2007).....	3
1.1.3. 話し言葉における認知処理を考慮した文の構造：Lambrecht (1987).....	5
1.1.4. 文の解釈領域と指示対象の存在様態：Cannings (1978)、東郷 (2005).....	7
1.1.5. 擬似関係節：Radford(1975)、Cadiot(1976)、Rothenberg(1979)、古川(1984).....	8
1.1.6. 日本語の喚体句、陳述論：Lefevre(1999)、金子(2003).....	10
1.2. 本論文の目的と分析方針.....	11
第2章：使用する概念・理論モデル.....	14
2.1. 文の意味分類：主題構造.....	14
2.2. 指示対象の情報特性.....	16
2.2.1. Prince (1981) : Assumed Familiarity.....	16
2.2.2. Chafe (1987) : Three Activation States.....	17
2.3. Carlson の存在論と談話モデル.....	18
2.3.1. Carlson (1977) の存在論.....	19
2.3.2. 談話モデル：東郷 (1999) (2000) (2001a) (2001b) (2009).....	19
第3章：課題の場と発話の場：(c'est / il y a) 〈 SN qui SV 〉構文.....	22
3.1. 先行研究と分析方針.....	23
3.1.1. Rothenberg (1971).....	23
3.1.2. Wehr (1984).....	25
3.1.3. 平塚 (1991).....	27
3.1.4. 本稿の分析方針.....	29
3.2. 課題の場と発話の場：〈 c'est 〉 〈 il y a 〉と二つの〈 SN qui SV 〉構文.....	29
3.2.1. 聞き手の「疑問」(明示的／非明示的)に答える〈 SN qui SV 〉構文.....	29
3.2.1.1. 音の正体.....	30
3.2.1.2. 対話者の行為・状態の原因・理由.....	31
3.2.1.3. 発話現場の事態の原因・理由.....	35

3.2.1.4. 伝言内容	37
3.2.2. 聞き手に新たな出来事を提示する 〈 SN qui SV 〉 構文	39
3.2.2.1. 先行文脈・状況に関与的な事態の提示	39
3.2.2.2. 先行文脈・状況がなく、眼前の知覚でもない出来事の提示	41
3.2.2.3. 眼前の事態を表す現象文	43
3.2.3. 同定と提示：(c'est / il y a) 〈 SN qui SV 〉 構文のまとめ	44
3.3. 〈 il y a 〉 現象文と出来事の解釈領域	46
3.3.1. 先行研究における 〈 il y a 〉 現象文	46
3.3.1.1. Rothenberg (1971)	47
3.3.1.2. Lambrecht (1988)	47
3.3.1.3. Furukawa (1996)	48
3.3.2. 〈 il y a 〉 説明文と「状況・陰題」	50
3.3.2.1. 〈 il y a 〉 説明文と 〈 il y a 〉 現象文	50
3.3.2.2. 〈 il y a 〉 説明文と 〈 il y a que 節 〉	52
3.3.3. 出来事の情報（知識）化と出来事の直接認識	55
3.3.3.1. 〈 il y a 〉 現象文と局面レベルの指示対象	55
3.3.3.2. 出来事情報の分割と出来事の直接認識	57
3.3.3.3. 出来事の情報化と指示対象の存在レベルのアップデート	60
3.3.4. 〈 il y a 〉 現象文の解釈領域：知覚か知識か	64
3.4. まとめ	65
第4章：現象文と発話の場：〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 〈 SN qui SV 〉 構文	67
4.1. 先行研究と問題提起	68
4.1.1. 直示と存在	68
4.1.2. 〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 現象文	71
4.1.3. 〈 voilà que 節 〉 / 〈 voilà SN qui SV 〉 / 〈 voilà SN 属詞 〉 構文	75
4.2. 〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 現象文の談話機能	78
4.2.1. 〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 〈 SN qui SV 〉 構文の名詞句の指示対象の情報特性	78
4.2.2. 状態変化の有無	83
4.2.3. 〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 現象文の談話機能と先行場面	91
4.3. 〈 voilà 〉 と事態の予測可能性：先行場面と「出来事連鎖のシナリオ」	97
4.3.1. 出来事を表現する 〈 voilà SN qui SV 〉 構文と定名詞句	98
4.3.2. 〈 voilà SN qui SV 〉 構文：先行場面と「出来事連鎖のシナリオ」	99
4.3.3. 出来事の中核的参加者を持たない 〈 voilà que 節 〉 構文と「シナリオ」	104
4.3.3.1. 物理的な場面の变化を表す 〈 voilà que 節 〉 構文	104
4.3.3.2. 「シナリオ」と時間表現	107
4.3.3.3. スキーマ化された「シナリオ」を指す “ça”	109

4.3.4. 出来事の中核的参加者を持つ〈voilà que 節〉構文と想定外の出来事	111
4.4. まとめ	119
第5章：現象文に含まれる指示対象の存在様態と限定詞の機能	121
5.1. 先行研究と問題提起	121
5.1.1. 現象文と指示対象の存在様態	121
5.1.2. 現象文と限定詞の機能	125
5.2. 現象文に含まれる指示対象とトピック	129
5.2.1. 知覚により局所的時空領域で捉えられる指示対象	129
5.2.2. トピックと真偽判断のモダリティー	134
5.3. なぜ定なのか：定冠詞の「値踏みの場」は何によって得られるのか	138
5.3.1. 「フレーム」か「シナリオ」か	139
5.3.2. 〈voilà SN qui SV〉構文と〈SN qui SV〉構文	142
5.3.2.1. コーパスデータの分析	143
5.3.2.2. 先行場面と「出来事連鎖のシナリオ」	147
5.3.2.2.1. 到達動詞	147
5.3.2.2.2. 活動動詞	150
5.3.2.2.3. 結果状態・一時的状態	152
5.3.2.3. 先行場面の有無と「シナリオ」／「フレーム」	154
5.3.3. 指示対象の定・不定と「フレーム」	159
5.3.3.1. 先行研究	159
5.3.3.2. 現象文〈SN qui SV〉の指示対象と「フレーム」	161
5.3.3.3. 出来事の出現か指示対象の出現か	164
5.4. まとめ	169
結論	171
参考文献	176

フランス語／（英語）の表記について

- 〈 il y a 〉
 - 非人称の 〈 il 〉（英：it）＋場所副詞 〈 y 〉（there）＋ 〈 avoir 〉（have）の3人称活用形が固定化された表現で、Damourette & Pichon (1911-1934) によると、12世紀にはその使用が確認され、〈 il y a 〉のくだけた表現とされる 〈 y a / y'a 〉はそれより古くフランス語が確立した頃にはすでに存在していたとされる。

 - 〈 voilà 〉
 - 〈 voir 〉（see）の古仏語命令形 〈 voi 〉＋副詞 〈 ci (= ici) 〉（here）、〈 là 〉（there）で構成される合成語であるが、日常語では遠近の区別をせずに 〈 voilà 〉が好んで用いられる（朝倉 2005）。

 - 〈 c'est 〉
 - 無強勢の中性指示代名詞 〈 ce 〉（this, that, it）＋ 〈 être 〉（be）の3人称活用形。〈 ce 〉は母音の前で 〈 c' 〉になる。

 - 〈 SN qui SV 〉構文
 - SN：Syntagme Nominal (Noun Phrase)
 - SV：Syntagme Verbal (Verb Phrase)
 - qui （主格を表す関係代名詞）

 - 〈 il y a / voilà que 節 〉構文
 - que（接続詞 that）。目的格を表す関係代名詞 que、疑問代名詞 que とは異なる。
 - 〈 c'est que 節 〉形式も存在するが、本論文では形式としては扱わない。
- ※ 英語訳を（ ）内に表記する。容認度の低いフランス語例文にも逐語的あるいは構文的観点からできる限り英語を表記するが、例文理解のためのものであるので英語訳に容認度は表示しない。

表目次

4.1	人称代名詞を含む 〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 〈 SN qui SV 〉	82
4.2	〈 人称代名詞+voilà+過去分詞／形容詞 〉	86
4.3	〈 人称代名詞+voilà+句読点	89
4.4	〈 il y a+人称代名詞強勢形〉	90
4.5	単一の出来事を表す 〈 voilà SN qui SV 〉 構文の定／不定の比較	99
4.6	〈 voilà que 節 〉 構文の人称別コーパスデータ	116
5.1	二つの文タイプと主語名詞句につくマーカー（日本語／英語・フランス語） （Kuroda1972に基づく）	123
5.2	トピックと真偽判断のモダリティーの関係	138
5.3	〈 SN qui SV 〉 の不定／定比率	144
5.4	〈 voilà SN qui SV 〉 / 〈 SN qui SV 〉 の動詞タイプ	145

図目次

2.1	Assumed Familiarity (Prince 1981)	16
2.2	kind / object / stage の関係 (Carlson 1977)	19
2.3	談話モデルを構成する領域 (東郷 2009 他)	20
3.1	文の機能 (同定・提示) と選好される形式 (I 型・II 型・III 型)	45
3.2	テーマ化と脱テーマ化の構図 (Furukawa 1996 : 69)	48
3.3	出来事の情報化(1) 出来事発生時 t1 の局面レベルの Jean ^S	61
3.4	出来事の情報化(2) 個体レベルの Jean ^O へのアップデート	62
3.5	出来事の情報化(3) 言語文脈に導入された局面レベルの Jean ^S	62
3.6	出来事の情報化(4) 聞き手の Jean ^O についての登録情報の更新	63
4.1	〈 il y a 〉現象文 : Papa ! Y'a maman qui pleure ! (1) 出来事の知覚	92
4.2	〈 il y a 〉現象文 : Papa ! Y'a maman qui pleure ! (2) 発話時	92
4.3	〈 il y a 〉現象文 : Papa ! Y'a maman qui pleure ! (3) 聞き手の解釈	93
4.4	〈 voilà 〉現象文 : La voilà qui pleure maintenant ! (1) 先行場面	94
4.5	〈 voilà 〉現象文 : La voilà qui pleure maintenant ! (2) 出来事の知覚	95
4.6	〈 voilà 〉現象文 : La voilà qui pleure maintenant ! (3) 場面転換	95
4.7	因果関係 : 【薪の投入】	100
4.8	因果関係 : 【拒否反応】	100
4.9	【馬の乗り継ぎ】	102
4.10	【子供の遊び】	102
4.11	【雨降りと父の散歩と家出の準備】	105
4.12	【規則違反】	108
4.13	【サン＝ルーのやきもち】 記憶の中の「シナリオ」と先行場面と出来事の知覚..	110
4.14	【「シナリオ」にある Marie】	114
4.15	【「シナリオ」にない Marie】	114
5.1	同定された指示対象についての知識情報の共有	132
5.2	発話時 t ₀ における出来事の知覚と指示対象.....	133
5.3	指示形容詞付き名詞句による 〈 SN qui SV 〉	136
5.4	事態連鎖のシナリオによる想定を持つ 〈 voilà SN qui SV 〉 構文	148
5.5	シナリオによる想定を持たない 〈 SN qui SV 〉 構文	149
5.6	〈 voilà SN qui SV 〉 構文 : 「シナリオ」と出来事発生の知覚	155
5.7	〈 SN qui SV 〉 構文 : 「フレーム」と想定外の出来事の知覚.....	158
5.8	共有知識に存在しないサブクラスの発見 : 〈 SN qui SV 〉	167

第1章：先行研究と問題提起

フランス語には、統語的には「名詞句+関係節」〈SN qui SV〉¹⁾でありながら、たった今話し手の目の前で起こった事態を表す、日本語学で「現象文」と呼ばれる(1)のような文タイプが存在する。この文タイプは、(2)のような通常の「主語+述語」〈SN + SV〉で表される文タイプと異なり主動詞を持っていない。

- (1) Tiens ! Le facteur qui passe !
(Look ! The postman is passing!)
- (2) Le facteur passe.
(The postman is passing.)

Grégoire (1949) は、この文タイプが日常的な話し言葉で用いられるにもかかわらず、文としての研究が行われてこなかった点を指摘し、(1)の文タイプは、(3)のような提示詞を伴う表現の省略形ではなく、一つの文タイプを選択肢として提供していると主張した。

- (3) { C'est / Il y a / Voilà } le facteur qui passe !
(It's the postman passing! / The postman is passing! / There's the postman passing!)

これに続き Pottier (1949) も、(1)の文タイプを、話者の反省を経ずに、思わず口をついて出たような文として捉えるべきとしたうえで、(1)を知覚の反応に関わる主観的な文、(2)を客観的な文として区別する必要性を指摘している。そして、(1)のような文タイプにおいて含意される知覚動詞“je vois”(I see)などの代わりに、{ c'est / il y a / voilà }のような用途の広い表現が(3)のように用いられるとした。

一方、「名詞句+関係節」〈SN qui SV〉で事態を表す文には、(1)のようなたった今話し手の目の前で起こった事態を表す文タイプに限らず、(4)(5)のような聞き手の疑問に答える文タイプも存在する。

- (4) Maman ! — Quoi ? — Alfred qui pleure. (Wehr 1984)
(Mom! — What? — Alfred is crying.)
- (5) Tu t'en vas déjà ? — Un monsieur qui vient déjeuner ! (Ibid.)
(Are you going already? — A man is coming over for lunch!)

¹⁾ Syntagme Nominal (名詞句) + qui (関係代名詞主格) + Syntagme Verbal (動詞句) を、以下、このように表す。

(1) のような現象文タイプや、(4) (5) のような聞き手の疑問に答える文タイプも含め、その後もこれらの通常の「主語＋述語」〈SN＋SV〉形式ではない有標の文タイプについて、文としての成り立ちをめぐって様々な議論がなされてきた。しかしながら、〈SN qui SV〉形式が文として成立するメカニズムや、なぜこのような有標の文タイプが存在するかについて十分に説明されているとはいえない。本章では、1.1.節でこのような文に対する先行研究の主要なアプローチを吟味し、1.2.節で本稿においての分析方針を提示する。

1. 1. 先行研究

1. 1. 1. 断定的性質を持つ存在マーカ―やコピュラの機能：Sasse (1987)

Sasse (1987) は、Kuroda (1972) が日本語の事例をもとに主張した「単一判断」「二重判断」という文の二つの判断タイプについて、通言語的に形態的特徴を吟味した。そして、述定基盤（トピック）となる対象に対して述定を行う「二重判断」タイプの文とは異なり、事態に関与する対象を出来事の一部とし、単なる事態の認識を表す「単一判断」の文として、フランス語には (6) のような有標の構文があることを、Wehr (1984) の例文をもとに示した (Sasse 1987: 538-539)。Wehr (1984) を含め、個別の例文に関する先行研究については 3 章・4 章であらためて検討する。また Kuroda (1972) については、「単一判断」の文に含まれる指示対象の存在様態と限定詞の機能の考察において、5 章であらためて参照する。

- (6) a. 完全形式 (full pattern) : { Il y a / C'est / J'ai / Voilà } NP + QUI
b. 縮小形式 (reduced pattern) : (Et) NP + QUI

(Sasse 1987: 561-562, [127]のフランス語の構文のみを抜粋)

Sasse は、この統語的には大きな名詞句である (6b) のような有標の構文 (NP+QUI) は、外心的関係（主語＋述語の二つの部分から構成）を内心的関係（名詞＋修飾句の一つの単位）に変え、(6a) のようにコピュラや存在マーカ―といった断定的性質を持つ要素を付け加えることによって断定がなされると考えた²⁾。そして「文」としての地位は、断定的性質を持つ存在マーカ―やコピュラに依存するとした³⁾。

確かに、(6a) と (6b) の間には何らかの関係があり、(6a) の形式においては、{ Il y a / C'est / J'ai / Voilà } などが文の成立に寄与していると考えられるが、(6b) のような存在マ

²⁾ In short, split structures are a special method of putting the 'predicate' in an attributive relation to its potential subject. The exocentric construction of the subject-predicate relation is changed into an endocentric noun-attribute relation, the two-unit structure of the predicative sentence becomes a one-unit structure, which itself can be made assertive by adding an element with an assertive character such as a copula or an existential marker. (Sasse 1987:562-563)

³⁾ Such a structure owes its status as a sentence not to a predicative relation holding between the subject and the modifying relative clause, participle, or appositional clause, but to the existential marker or the copula. (Sasse 1987:561)

一カーやコンピュータを持たない「名詞句+関係節」〈SN qui SV〉であらわされる文がどのようにして文として成立するのかという疑問は相変わらず残ってしまう。また、(6b)が、(6a)の完全形式 { Il y a / C'est / J'ai / Voilà } NP + QUI のどの文タイプの縮小形式といえるのかも自明ではない。

さらに (6a) の完全形式の文についても一括りで「単一判断」として扱っているが、平塚 (1991) では、「c'est NP qui VP 構文は文脈・状況を受ける有題文である」(平塚 1991)、つまり、C'est NP + QUI は二重判断であるとする主張が提示されており、{ Il y a / C'est / J'ai / Voilà } を含む構文についても、それぞれの構文の機能の考察が求められる。

本稿では、(6a) と (6b) の対応関係について、Rothenberg (1971) と Wehr (1984) の議論をもとに吟味し、(6b) の統語的には大きな名詞句である有標の構文には、解釈領域⁴⁾に対応して二つの文タイプがあることを3章で分析する。その上で、4章、5章では(1)の現象文タイプを、〈il y a / voilà〉の提示方法の違いとともに考察する。

1. 1. 2. 発話の場の役割 : Furukawa (1996) (2013)、Erteschik-Shir (2007)

Furukawa (1996) (2013) は、Sasse (1987) の考え方では、「名詞句+関係節」〈SN qui SV〉がどのようにして文として成立するのかわからないとし、(1)のようなテーマ性の無い(あるいはレーマ的)発話は、出来事の現場での記述であり、発話の場がテーマ的要素あるいは支え (support⁵⁾) として機能すると考えた。そして Furukawa (2013) では、(7a) (7b) の違いは、テーマ的要素あるいは support が、発話状況にあるか言語文脈にあるかの違いとされる。

- (7) a. Le facteur qui passe ! (Furukawa 2013)
(The postman is passing!)
- b. Le facteur, il court. (Ibid.)
(The postman, he's running / he runs.)

Furukawa (1996) (2013) が指摘する通り、(7a) の「名詞句+関係節」〈SN qui SV〉の文の成立には発話の場が関与していると考えられる。しかし (7a) は、話し手がたった今知覚した事態を表しており、テーマ (トピック)⁶⁾ を聞き手に明示的に設定しそれについて叙述する左方転位構文 (7b) のように、聞き手に発話の場をテーマ (トピック) として明示的に設定しそれについて叙述する文であるとは考えにくい。

⁴⁾ 解釈領域の重要性については、1.1.4 節で先行研究を参照する。

⁵⁾ Pottier (1974) では、話し手が聞き手に伝達する話材は、support / apport という二項構造を持つと考えられている。support は独立して定められている要素であり、apport は support に結びつけられる要素とされる。

⁶⁾ Furukawa (1996: 7) は、thème を « ce dont on parle » 「それについて私たちが話していること」と定義しているが、本稿では同様の概念を「トピック」という用語で議論する。

また Furukawa (1996) (2013) とは異なる観点から、発話の場の時空領域を局面トピック stage topic と考える研究者もいる。Erteschik-Shir (2007) は、トピックを文の真偽判断の基軸とする考えをとり、あらゆる文にはトピックが必要と考える。そして単一判断文は表現されない “stage” topic を持つとされ、(8) のような直前に起きた現在地点での出来事をたずねる文では、この時空地点において真偽が判断されるとする⁷⁾。

(8) Q : What happened?

A : John washed the dishes! (Erteschik-Shir 2007 : [15])

また、以下の二つの例文 (9) (10) においても、談話の「今・ここ」の時空間を表現されない局面トピックとし、文の真偽が判断されると考える。

(9) It's snowing. (Ibid.)

(10) There's a cat outside the door. (Ibid.)

本論文は、(1) (7a) のような主動詞を持たない現象文に対して、発話の場はテーマ (トピック) としてではなく、場面の現働化を行う場として事後的に機能すると考える。「現働化」とは、概念としての言語単位を話し手の現実の表象にすることを言い、以下のように定義されている。一般に、名詞概念は限定詞の機能により現働化が行われ、文は要となる動詞が活用し「法・人称・時制」を示すことにより現働化されると考えられる。

『言語の単位を言へ移行させる操作を言う。ある概念を現働化するということは、話し手の現実の表象にその概念を同一化することである。現働化によって、いかなる概念も (時間あるいは空間の中に) 定位され、(量記号を受けて) 量化される。』(『ラールース言語学用語辞典』)

一方、(4) (5) のような聞き手の疑問により、何かが起こったことを前提とするような問に答える場合には、「課題」がトピックとして設定されていると考え、両文タイプを区別する分析を 3 章で提示する。その上で、(1) (7a) のような主動詞を持たない現象文において、どのように発話の場が機能するかを 4 章、5 章で明らかにする。

⁷⁾ Yet if we adopt the Strawsonian definition of topics, according to which topics are the pivots for assessment, then it is crucial that every sentence have one. (...) Similarly, in Erteschik-Shir 1997,thetic sentences are viewed as having implicit “stage” topics indicating the spatio-temporal parameters of the sentence (here-and-now of the discourse). These are contextually defined. In (15), for example, the question refers to an event in the (immediate) past (due to the tense used) and at the current location. The answer should therefore be evaluated with respect to this spatio-temporal location. (Erteschik-Shir 2007: 16)

b. *où est-ce qu'il est, ce lycée?*

'where is it, this lycee?'

((11)(12)(13)すべて Lambrecht 1987)

(11) の B においては、「名詞句」を主語にする a の返答は選択されず、b の [c'est] を用いた焦点をマークする構文が選択されている。(12) の提示構文では [y a] を用いて談話にとって新しい指示対象 *mon frère* が導入され、直後の関係代名詞によってさらに節が続くため、ここでは二つの「接語代名詞+動詞+(X)」が連続して使用されている。また (13) は有標のトピック構文であり、「名詞句」を左方 (a)、右方 (b) に転位することによりトピックとしてマークしつつ、「接語代名詞+動詞+(X)」を形成している。

このように名詞句の指示対象が主題か焦点か、また指示対象を導入するののかによって、様々な構文を用いつつ「名詞句」を主語位置からはずし、「接語代名詞+動詞+(X)」の文型を維持すると Lambrecht は述べる。そして、このような「接語代名詞+動詞+(X)」の文型が選択される理由として聞き手の認知処理をあげ、「名詞句」の二つの機能（「指示対象をある名で呼ぶ指示機能」と「節内の統語・意味役割機能」）は分けることが好まれるとし、以下のような談話的制約を掲げている。

(14) 指示機能と統語・意味役割機能の兼任についての談話的制約¹⁰

Do not introduce a referent and talk about it at the same time.

(Lambrecht 1987)

Lambrecht (1987) の (11) (12) (13) のような説明は、聞き手の情報処理と文の主題構造が結びつく説明を与えているといえるが、話し言葉において (1) のように「接語代名詞 + 動詞」を伴わずに「名詞句」が登場する場合の説明を与えることができない。また、3章で吟味するが、Lambrecht (1988) が同じ単一判断の出来事報告文として扱う (15a) (15b) は、「名詞句+関係節」として単独で生じ得るかどうかという大きな違いがある (16a) (16b)。しかしながら、情報構造に基づく説明だけでは、この違いを説明することは難しい。

(15) a. *Y'a Jean qu'a téléphoné.*

(Lambrecht 1988)

(Jean has called.)

b. *Y'a le téléphone qui sonne!*

(Ibid.)

(The phone is ringing!)

(16) a. *??Jean qu'a téléphoné.*

(Jean who has called.)

b. *Le lait qui bout !*

¹⁰ Lambrecht (1994) では、The Principle of the Separation of Reference and Role という名の原則として提示されている。

(The milk is boiling!)

本稿では、上記の違いを説明する上でも、文の解釈領域の違いをまず考慮する必要があると考える。次節で、文の解釈領域について考察した先行研究を参照する。

1.1.4. 文の解釈領域と指示対象の存在様態 : Cannings (1978)、東郷 (2005)

Cannings (1978) は、*il y a* が導入する名詞句が (17) のように定名詞句の場合、(18) の不定名詞句で可能とされる 3つの解釈 (① 「存在」読み ‘ontological’ reading、② 「現前」読み ‘presence’ reading、③ 「特定 (リスト)」読み ‘specificational’ reading) のうち、① の存在読みができなくなることをとりあげ、文を解釈する際の関与的領域 *domain of relevance* の重要性を提示した。

(17) *Il y a le Père Noël.* (Cannings 1978 : [1])

(There is Santa Claus.)

(18) *Il y a un Père Noël.* (Ibid. : [2])

(There is a Santa Claus.)

そして (17) の存在読みが容認されないのは、存在が前提される対象 *le Père Noël* の存在についての言明を、同じ領域あるいはそれより広い領域で存在文が行うことが、陳腐あるいはグライスの量の格率に違反するからであると説明する (Cannings 1978 :62-78)。そして、*Il y a NP* の文解釈においては、定名詞句自体が束縛される個体領域よりも、狭い関与的領域を探すことになるとする¹¹⁾。

東郷 (2005) では、文の意味解釈における「領域」の果たす役割が広く深いことを認めた上で、例文 (17) で ②の現前読みが可能となることを説明するためには Cannings (1978) の理論装置では不十分とし、「時空変数付きの領域」という概念を導入する。

そして、(19) のような動詞句外存在文において定名詞句が容認される理由について、以下のように説明する。

(19) *Thereupon, there ambled into the room my neighbor’s frog.* (東郷 2005: [27])

¹¹⁾ Thus, this analysis predicts that when one interprets sentences with *il y a NP* in isolation one will seek to pair them to domains of relevance which do not subsume the domain of individuals D_j to which we might deduce that the definiteness of the focal term is bound. (Cannings 1978:78)

All that is happening is that since we are left relatively clueless as to what the scope of D_w might be, and since we know that if it is the ‘universe’, then the sentence constitutes a platitudinous statement, we deduce via our pragmatic competence that the linguistic context has delimited a more restricted domain of relevance. (Cannings 1978:79)

(19) (= [27]) には時空変数付き領域 *into-the-room(s)* があり、それを舞台として生起する *amble(x,s)* という出来事がある。∃s(*into-the-room(s) ∧ amble(x,s)*)により、世界は時点 *s* により切り出された切片と化す。この働きで *my-neighbor's-frog(x,s)* もまた時点 *s* によって切り出された時間的切片 (=stage) となるが、これはすぐ上にも述べたように不定名詞句と同じ資格において存在量化の対象となる。(東郷 2005: 66)

同様に、(17) の ②の現前読みが可能となる理由についても、発話現場が時空変数付き領域となることにより以下のように説明される。

「現前読み」が可能なのは、「発話現場」という「時空変数付き領域」の作用によって、定名詞句 *le Père Noël* が時空化された存在様態、すなわち *stage* へと変換され、不定名詞句化することがその理由である。この「発話現場へと時空化された存在様態」が、話し手の目の前にいるという「臨場性」の源泉である。(東郷 2005: 66)。

Cannings (1978) や Recanati (1996)、また東郷 (2005) が述べているように、存在文に限らず指示対象や文を解釈する上での関与的領域はすべての文の意味解釈に欠かせない。そして文の解釈領域が異なれば、たとえ同じ文形式であったとしても指示対象の存在様態や、文の意味構造は異なると考えられる。

本論文では、発話の場を解釈領域とする「現象文」に含まれる指示対象がどのような存在であり、またどのような談話資源を用いて聞き手に解釈されるのかを明らかにする。

1.1.5. 擬似関係節 : Radford(1975)、Cadiot(1976)、Rothenberg(1979)、古川(1984)

本稿が対象とする「名詞句+関係節」〈SN qui SV〉で表される (1) のような文に含まれる関係節は、「擬似関係節」とよばれ、制限的關係節 や非制限的關係節 (同格的關係節) と呼ばれる通常的關係節 とは異なることが知られている。擬似關係節については、Rothenberg (1972) (1979)、Radford (1975)、Cadiot (1976)、Declerk (1981)、古川 (1984) (1996) などを含め、多くの論考がある。

例えば、Radford (1975) では、(20) のような文は、關係節の機能により、非制限的關係節 (同格的關係節) としても (21)、制限的關係節としても (22)、擬似關係節 (23) としても解釈できるとされる。

- (20) *J'ai vu le professeur qui fumait.* (Radford 1975 : [11])
(21) *J'ai vu le professeur, qui fumait.*
 'I saw the teacher, who—incidentally—was smoking.' (Ibid. : [12])
(22) *I saw the (particular) teacher who was smoking.* (Ibid. : [13])
(23) *I saw the teacher smoking.* (Ibid. : [14])

そして、固有名には先行詞を限定する機能を持つ制限的關係節を付けることができないので、(24) のように固有名が先行詞であり非制限的關係節（同格的關係節）の特徴とされるコンマ（書き言葉）やイントネーション（話し言葉）を持たない場合に、擬似關係節として判定することができるとされる。

- (24) *J'ai vu Paul qui fumait.*
 'I saw Paul (who was) smoking.' (Ibid. : [15])

また、制限的關係節や非制限的關係節（同格的關係節）では接語代名詞の關係節化ができないが (25)、擬似關係節は接語代名詞の關係節化ができるとされる (26)。

- (25) (a) * *Je la connais(.) dont tu m'as parlé.*
 (b) * *Je la(.) dont tu m'as parlé connais.*
 'I know her(.) about whom you spoke to me.' (Ibid. [16])
- (26) *Je l'ai vue qui fumait.*
 'I saw her (who was) smoking,' (Ibid. :[17])

ただし、接語代名詞の關係節化は、すべての擬似關係節とよばれる關係節で生じるわけではない。(27) (29) のように、先行詞が、典型的には体の一部であるなど、分離不可能所有とよばれる全体-部分の關係におかれるような、主語と強い結びつきを持つ対象であり、その部分の一時的状態・出来事を示す場合などは、先行詞は接語代名詞化されない (28) (30)¹²⁾。

- (27) *Elle a les mains qui sont sales.* (Rotnenberg 1979)
 (She has hands that are dirty.)
- (28) **Elle les a qui sont sales.*
 (She has them that are dirty.)
- (29) *J'ai ma femme qui m'attend.* (Ibid.)
 (I have my wife waiting for me.)
- (30) **Je l'ai qui m'attend.*
 (I have her waiting for me.)

Rothenberg (1979) では、接語代名詞の關係節化の可否や關係節を削除できるかどうかという基準により、擬似關係節とよばれる關係節をさらに二つに区分して分析が行われているが、古川 (1984)、Furukawa (1996) では、脱テーマ化という観点から「名詞句+擬似

¹²⁾ Rothenberg (1979) の例文をもとに、接語代名詞化した文の判定を行った。

関係節」は出来事的命題を表すとし、擬似関係節を統一的に扱う研究がなされている。

前節でも述べたように、本稿は文の意味解釈が行われる解釈領域を重視する立場にたち、同じ「先行詞＋擬似関係節」の形式をもつ〈SN qui SV〉構文でも、解釈領域が異なれば文の意味も変わると考え、特に、話し手がたった今知覚した出来事を表す現象文として、(1)のような〈SN qui SV〉構文について考察する。1.1.2.節でも述べたが、(4)(5)のような、聞き手の疑問により、何かが起こったことを前提とする問に答える〈SN qui SV〉構文は、〈SN qui SV〉形式内部にはトピックがないが、聞き手の疑問によりトピックが設定されていると考え、現象文とは区別する分析を3章で提示する。

また、〈il y a SN qui SV〉構文、〈voilà SN qui SV〉構文については、〈il y a que 節〉構文や〈voilà que〉節構文とも対照し吟味する。

1.1.6. 日本語の喚体句、陳述論：Lefevre(1999)、金子(2003)

金子(2003)は、前節で示した擬似関係節の中で、単独の形式で生じる、(1)のような話し手が知覚した事態を表す「名詞句＋関係節」について、国語学で従来「喚体句」と呼ばれてきた構文と類似するとし、喚体句と単独で生じる擬似関係節の共通点として以下の3点をあげている。

- (31) 擬似関係節と喚体句の共通点(金子 2003: 49-51 から抜粋)
- (i) 名詞句が主格の役割を果たす
 - (ii) 単一判断である
 - (iii) 現場密着性がある

そして、独立擬似関係節における「知覚現場への密着性」を、眼前描写とそぐわない恒常的な述語や過去の出来事と共起しないことにより裏付けている。

- (32) a. *Le facteur qui est grand ! (金子 2003: [10a])
(The postman who is tall!)
- b. ?Le facteur qui passait ! (Furukawa 1996)
(The postman who passed!)

ところで、動詞に定形 (finite form) が与えられることにより、人称・時制・法が決定し、現働化が行われるフランス語と異なり、日本語では動詞形態自体に人称・時制・法が組み込まれていないため、何が文を文として成立させるかという「陳述論」と呼ばれる議論や文タイプの研究が盛んに行われてきた。阪倉(1978)では、用言に陳述の力があるとする山田(1908)と言語主体が用言において陳述を表しているとする時枝(1950)の主張の違いを軸に「陳述論」についての議論がまとめられている。

陳述を言語主体が果たす作用とする類似の考え方は、フランス語学では Bally (1932) において、「明示的な文は『言表様相』(modus) と『言表事態』(dictum) の二つの部分からなり、話し手の操作に対応するモダリティの表現なくして文は成り立たない」¹³⁾として提示されている。

このような観点にたつと、主動詞を持たない (1) のような「名詞句+関係節」が文として成立するには、主動詞が通常であれば果たすと考えられる話し手の操作に対応する作用も何らかの方法で補われていると考えられる。

例えば小説の冒頭などでは (33) のように、出来事文を解釈する時空領域とともに、動詞 *signaler* (signal) が 3 人称・直説法・単純過去で活用されることにより、出来事の内容が書き手により断定され、文の解釈に必要な要素がそろえられている場合もあるが、談話の中では、これらの要素が明示されないことも多い。

- (33) Le 24 février 1815, la vigie de Notre-Dame-de-la-Garde signala le trois-mâts le Pharaon, venant de Smyrne, Trieste et Naples.

(A. Dumas, *Le Comte de Monte-Cristo*)

(The 24th of February, the watch-out of the Notre-Dame-de-la-Garde signaled the barque le Pharaon, coming from Smyrnes, Trieste and Naples.)

(1815年2月24日、ノートル・ダム・ドゥ・ラ・ガルドの見張所では、スミルナ、トリエスト、ナポリからやってきた、三本マストのファラオン号が見えたという合図をした。) (『モンテ・クリスト伯』山内義雄訳、岩波書店)

特に話し言葉においては、文の要とされる主動詞が欠落する場合も多い。Lefevre (1999) はフランス語の「動詞のない文」(La phrase averbale) について、動詞を持たなくても文として成立することを主張した上で、様々な「動詞のない文」を、統語・意味・標識・文脈などの助けによりどのような文タイプと考えるかを分析している。

本稿では、発話の場で話し手がたつた今知覚した事態を表す (1) のような主動詞を欠く現象文が、どのようにして聞き手に解釈されるのかを、話し手と聞き手の相互行為に基づく談話モデルにより説明する。

1. 2. 本論文の目的と分析方針

1.1. 節の〈SN qui SV〉形式に関わる先行研究の議論から、〈SN qui SV〉形式は、

¹³⁾ La phrase explicite comprend donc deux parties : l'une est le corrélatif du procès qui constitue la représentation (p. ex. la pluie, une guérison) ; nous l'appellerons, à l'exemple des logiciens, le *dictum*. L'autre contient la pièce maîtresse de la phrase, celle sans laquelle il n'y a pas de phrase, à savoir l'expression de la modalité, corrélatrice à l'opération du sujet parlant. La modalité a pour expression logique et analytique un verbe modal (p.ex. croire, se réjouir, souhaiter), et son sujet, le sujet modal ; tous deux constituent le *modus*, complémentaire du *dictum*. (Ch. Bally, 1932)

「主語＋述語」〈SN＋SV〉形式では曖昧にされている「二重判断」「単一判断」という文の主題構造に基づく文タイプに関して、「名詞句」を主語位置からはずし「単一判断」の文タイプを明示的に示すことのできる構文であると考えられる。しかしながら、各節においても述べたように、以下のような点については解決すべき問題が残されている。

- 1) 〈SN qui SV〉構文は、すべて同じレベルで「単一判断」を表す文と考えてよいのだろうか。

〈SN qui SV〉構文は、(1)のように、文脈を持たず、話し手がたった今知覚した事態を表す「現象文」と呼ばれる文タイプもあれば、(4)(5)のように、聞き手の疑問に答える文タイプも存在する。3章で詳しく検討するが、これまで両者の区別について十分な説明はされていない。両者を共に同じレベルで「単一判断」を表すと考えてよいのだろうか。

- 2) (1)のような「現象文」として用いられる〈SN qui SV〉構文は、どのようにして文として成立するのだろうか。

〈SN qui SV〉構文で表される現象文は、(2)のような通常の「主語＋述語」〈SN＋SV〉形式で表される現象文と異なり、「統語的には大きな名詞句」であり、文の要となる主動詞を持たない。にもかかわらず、たった今話し手が知覚した出来事を表す文として成立するのはどのようなメカニズムによるのか。また〈il y a〉/〈voilà〉〈SN qui SV〉構文においても、話し手のたった今知覚した事態を表すことはできるが、どのような違いがあるのだろうか。

本稿は、これらの問に対して、「文脈による解釈領域の違い」、「話し手・聞き手の相互行為としての談話」といった観点を重視し、以下のような手順で解決に向けての議論を提示する。

まず2章では、本論文で広く使用する概念・理論モデルとして、文の主題構造による意味分類、指示対象の情報特性・存在様態を示す概念、そして話し手・聞き手の相互行為としての談話プロセスを表すための談話モデルを提示する。

そして3章では、上記1)で問題提起した、これまであまり区別されてこなかった、(1)のような現象文としての〈SN qui SV〉構文と、聞き手の疑問に答える(4)(5)のような〈SN qui SV〉構文を区別する考えを提示する。文脈を設定した上で、〈c'est SN qui SV〉/〈il y a SN qui SV〉構文とともに〈SN qui SV〉構文の容認度判断の調査を行う。そして〈SN qui SV〉構文が、主題構造、解釈領域に基づき異なる文タイプとして二つに区別する必要があることを主張する。さらに、上記の分析によって様々な文脈・状況で用いられることを示した〈il y a SN qui SV〉構文について、3つの文タイプのトピック・コメント構造を吟味し、解釈領域の違いを明らかにする。

次に、上記 2) で問題提起した、現象文としての〈 SN qui SV 〉構文の文の成立を 4 章・5 章で考える。

まず 4 章で、〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 〈 SN qui SV 〉構文が、どのように聞き手に提示されるかを考察する。特に、先行研究において「存在」「直示」の違いとして捉えられてきた〈 il y a 〉 〈 voilà 〉が、どちらも話し手の知覚領域で起きた事態を提示できることに着目する。そして、〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉現象文の意味の違いを、名詞句の指示対象の情報特性や状態変化の有無を分析することにより明らかにし、両文タイプの違いが事態の提示方法の違いにあることを示す。さらに〈 voilà 〉 〈 SN qui SV 〉構文が先行場面とのつながりを持つことを、認知モデルの「事態連鎖のシナリオ」により明らかにする。

その上で 5 章において、4 章で考察したような話し手による事態の提示（断定）のメカニズムを持たない〈 SN qui SV 〉構文が、どのように文として解釈されるかを考察する。まず、現象文に含まれる指示対象がどのような存在であるかを、指示対象を表す名詞句の限定詞（指示形容詞・冠詞）の機能とあわせて吟味する。特に、1) 指示形容詞付き名詞句はなぜ現象文の指示対象になれないのか、2) 現象文の定冠詞で表される指示対象の存在前提はどのようにして得られるのか、という問題を検討する。そして、未展開文とも呼ばれる話し手による事態の断定を欠く〈 SN qui SV 〉タイプの現象文が、どのように想定外の事態の出現を表す文として解釈されるかを示す。

そして、3 章・4 章・5 章の議論を踏まえ、〈 SN qui SV 〉構文の文の成立についての結論を提示する。

第2章：使用する概念・理論モデル

本章では、本論文で広く使用する概念と理論モデルを提示する。

2.1. 文の意味分類：主題構造

本論文は、フランス語の (il y a / voilà) 〈 SN qui SV 〉形式で表される文の中で、日本語学で「現象文／未展開文」と呼ばれる、たった今話し手が知覚した事態を表す文タイプが議論の中心となる。この節では、文の主題構造を「場」との関係で表し、「現象文」と「判断文」の違いを論じた、三尾 (1948) を参照する。

三尾 (1948) は、話し手を言語行動に至らせる過程を「場」¹⁾と捉え、「場」との関係にもとづき、(1) のような文分類を提示している。

(1) 三尾 (1948) による文分類

- | | |
|-------------------|------------|
| a. 場の文 (現象文) | 「雨が降っている」 |
| b. 場を含む文 (判断文) | |
| i) 課題の場の文 | 「これは鉛筆だ」 |
| ii) 転位の文 | 「私が社長です」 |
| c. 場を指向する文 (未展開文) | 「あ!」「雨だ!」 |
| d. 場と相補う文 (分節文) | (これは?)「梅だ」 |

以下、三尾 (1948) を再収録した三尾 (2003) から抜粋要約する。まず三尾は、(1a) の「現象文」を、「一文のあらわすものがすなわち場であり、場そのものがただちにそのまま文となったもの」「場の直接的な言語的表現」とし、(2) のように表している。

(2) 現象文とは：三尾 (2003 : 64)

現象文は現象をありのまま、そのままをうつしたものである。判断の加工をほどこさないで、感官を通じて心にうつったままを、そのまま表現した文である。

形式上の特徴としては、「ガ」格を伴い述部が動詞であることを挙げる。動詞も終止形の場合には少なく、テイル形やタ形が多いとし、「とんぼがとんでるのだ」のようなノダで終わる文は現象文ではなく、判断文に入れられる。

(1b) の「判断文」については、本論文の内容と関係する i) の「課題の場の文」についての説明を中心に参照する。まず「判断文」の主部は題目であって格の概念から離れたものであり、「主語—述語」ではなく、「題目—解説」²⁾の構造をなすものとされる。そして、題

¹⁾ あるしゅんかんにおいて、言語行動になんらかの影響をあたえる条件の総体を、そのしゅんかんの話の場という。(三尾 2003: 23)

²⁾ 「トピック・コメント」「テーマ・レーマ」と同様の、文の主題構造の説明と考えられる。

目は解決を要求する課題であり、解説は課題に対する解決であると考えられる。例えば、(3a)の課題「ねえさんは？」に対して、その解決である(3b)「学校へ行きました」がつなぎ合わされ、判断文である(3c)の「課題—解決」(すなわち「題目—解説」)の構造をなすと考えられている。

(3) 課題の場を含む判断文 (三尾 2003 : 69)

- a. 問「ねえさんは？」(課題)
- b. 答「学校へ行きました。」(解決)
- c. 「ねえさんは学校へ行きました。」(課題—解決)

その上で、(1a)の「現象文」が(1b)の「判断文」と根本的に異なる点は、判断作用を持つかどうかであるとされる。そして、「判断文」における判断作用は、文に表現されている事態と事実との一致を断定し主張するものであり、主観の権利によってなされるものに対し、「現象文」は、事実(対象)そのものから直接にそのまま事態がうつされるものであるから、事態と事実(対象)が一致するかどうかという問題は生じないとされる。そして、このような現象文が持つ原始的な直観作用は、強いていえば存在判断と考えられている(4)。

(4) 現象文がもつ直観作用(存在判断) : 三尾(2003 : 66)

現象文の直接の根底にあるものは直観作用であって判断作用ではないのである。

(...) 直観的な雨が降ってる事実がある。という、判断という言葉が強いてつかえば存在判断である。

(1c)の「未展開文」については、場の文(現象文)である「雨が降っている。」よりも内容的には疎であり、場の概念的な展開が足りないとされるが、場の全領域が指向されるとされる。一方(1d)の「分節文」は、(1b)の「場を含む文」(判断文)の全体から、(課題の)場となる「これは？」を蔭に置いたものと考えられ、従来の文法で省略文と呼ばれたものに対応するとされている。そして、(5)のような、注意喚起を表す感嘆符を伴う「未展開文」は、思いがけない存在や生起が驚きをもって表されるのに対し、(6)のように「あれは何だろう？」という課題の場で「火事だ。」という場合は、「あれは火事だ。」という判断文の一分節と考えられ、「分節文」とよばれ区別される。

(5) 「火事だ！」

- (6) (サイレンの音を聞いて。「あれは何だろう？」という課題の場で)
「火事だ。」

このような三尾による文の分類は、「場」（文に影響を与える条件の総体）との関係に基づく分類であるが、文の主題構造の違いとして捉えることもできる。「現象文」は、知覚を通して捉えられた「場」（事態）そのものを表す直観的な表現であるので、「主題（トピック）」を持たない、無題文／単一判断の文といえる。一方、「判断文」は、「課題の場」において設定された「課題（トピック）」に対して解説する、有題文／二重判断の文である。

本稿では、(1a) の現象文、(1c) の未展開文をあわせて、「場」そのものを表す文と考え、必要な場合を除き総称して「現象文」とよぶ。また、3章では、聞き手の問いかけが「課題の場」を形成すると考え、文タイプの違いを考察する。

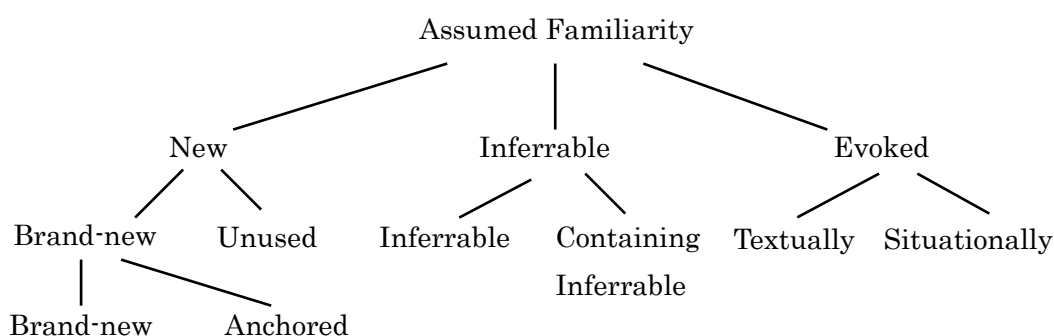
2.2. 指示対象の情報特性

指示対象の情報特性を分析する上で、話し手が想定する聞き手の指示対象についての認知状態を、情報の所在をもとに分類した Prince (1981) と、情報の活性化状態により分類した Chafe (1987) を参照する。特に4章の〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 現象文について、指示対象の情報特性の分析に使用する。

2.2.1. Prince (1981) : Assumed Familiarity

Prince (1981) は、「テキストは談話モデル構築のための話し手から聞き手への指図」と考え、談話モデルに含まれる要素として「談話の指示対象、属性、指示対象をつなぐリンク」を設定する。そして談話の指示対象について「聞き手が何らかの方法で知っている」と話し手が想定する Assumed familiarity」を以下のように分類している（図 2.1）。

図 2.1 : Assumed Familiarity (Prince 1981)



- (7) New : 話し手はじめて談話に導入する指示対象
- a. I bought a beautiful dress. (Brand-new)
 - b. A rich guy I know bought a Cadillac. (Brand-new Anchored)
 - c. Rotten Rizzo can't have a third term. (Unused)
- (8) Evoked : すでに談話モデル内にある指示対象

- a. Susie went to visit her grandmother and *the sweet lady* was making Peking Duck. (Textually)
 - b. *Lucky me* just stepped in something. (Situationally)
- (9) Inferrable : 話し手が聞き手に推論可能と想定する指示対象
- a. I went to the post office and *the stupid clerk* couldn't find a stamp. (Inferrable)
 - b. Have you heard *the incredible claim that the devil speaks English backwards?* (Containing Inferrable³⁾)

そして、既知性の高から低への段階を以下のように示している。

(10) Familiarity Scale

Evoked (Textually,Situationally) > Unused > Inferrable > Containing Inferrable > Brand-New Anchored > Brand-New

2. 2. 2. Chafe (1987) : Three Activation States

Chafe (1987) は、発話の内容というより、発話内容の聞き手に対する伝え方である「言語のパッケージング」における認知的プロセスを説明する上で、情報の活性化状態に着目し、ある一時点において、概念（モノ、出来事、属性）は以下の3種類の異なる Activation States のいずれかにおかれると考える。

- (11) a. active : 現時点において活性化しており、意識の焦点にある。
- b. semi-active : 意識の周辺にあり、背景化されている。
- c. inactive : 長期記憶内にあり、意識の焦点にも背景にもない。

2.1.節の文の主題構造と、2.2.節の指示対象の情報特性の関係については、久野 (1973) で述べられているように、トピック (主題) は旧情報であると考えられている。したがって、「ハ」でマークされる日本文の主題も、総称名詞句か、文脈指示の名詞句でなければならない (久野 1973: 29-30) とされ、以下のような例を示している。

- (12) a. 鯨は哺乳動物です。[総称名詞]
- b. ママは私の友達です。⁴⁾
- c. 二人はパーティーに来ました。[「その二人」の意味] (久野 1973: [13])

³⁾ 推論される名詞句内部に推論をひきおこす対象を持つ。

⁴⁾ 久野 (1973) では、「b. 太郎は私の友達です。[文脈指示]」と記述されているが、固有名は文脈指示とはいえない。かわりに、話し手の関係名詞として旧情報である「ママ」を例文とする。

- (13) a. *大勢の人はパーティーに来ました。
 b. *僕の知らない人はパーティーに来ました。
 c. *誰かは病気です。
 d. *雨は降っていた。 (Ibid: [14])

一方、トピック・コメント構造を持たない単一判断の文タイプについては、久野 (1973) では中立叙述の文と呼ばれ、以下のように「ガ」格で表され、観察できる動作・一時的状態を表すとされる (久野 1973 :28)

- (14) a. 雨が降っています。
 b. おや、太郎が来ました。 (Ibid: [7b])

久野 (1973) が (12) (13) を用いて説明しているように、二重判断の文のトピックは旧情報であることが必要とされるといえる。しかしながら、単一判断の文でも旧情報の指示対象は使用されるので、旧情報 (例えば「太郎」「ママ」) だからといってトピック・コメント構造の文になるわけではない。したがって、現象文に含まれる指示対象を考察するためには、指示対象の情報特性だけでなく、指示対象をどのような存在としてとらえているかという観点が必要となる。

益岡 (1991) は、文の叙述内容に応じて、属性叙述文 (15) と事象叙述文 (16) を大きく分類する。その上で属性叙述文は有題文 (二重判断) とするのに対して、特定の時空間に存在・生起する事象を表現する事象叙述文には、有題と無題の両タイプを認めている (17)。

- | | | |
|--------------------------|--------------|-----------|
| (15) 太郎は音楽が好きだ。 | 【属性叙述文】 | (益岡 1991) |
| (16) 雨が降っている。 | 【単純事象叙述文】 | (Ibid.) |
| (17) a. 花子がテレビのスイッチを入れた。 | 【無題の単純事象叙述文】 | (Ibid.) |
| b. 花子はテレビのスイッチを入れた。 | 【有題の事象叙述文】 | (Ibid.) |

そして、(16) や (17a) のような単純事象叙述文の特徴として、「事象の主体 (ガ格で表されるもの) の存在が事象の叙述に依存する」(益岡 1991) と指摘している。

このような事象の主体の存在様態を説明する上で、本論文では、Carlson (1977) の存在論を導入する。

2.3. Carlson の存在論と談話モデル

本論文では、現象文に含まれる指示対象の存在レベルを Carlson (1977) の存在論をもとに局面レベルの指示対象と考える。また、発話の場で話し手がたった今知覚した事態が、どのように聞き手に提示されるか、あるいは聞き手に解釈されるかを、東郷 (1999) (2000)

(2001a) (2001b) (2009) などで提案されている談話モデルにより示す。

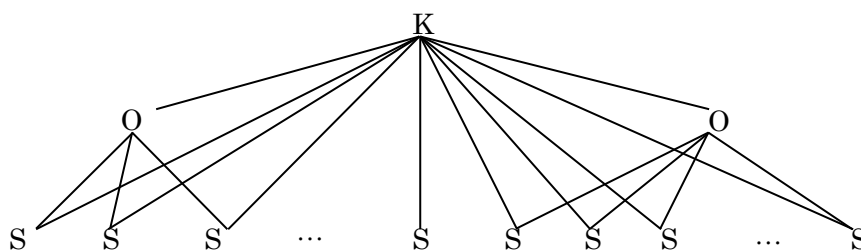
2.3.1. Carlson (1977) の存在論

Carlson (1977) は、英語の裸複数名詞の意味解釈を考察する上で、文の「習慣文」解釈と「出来事文」解釈の曖昧性が文の中で述語が持つ意味によってもたらされるとし、文の中で述語が表す「恒常的」あるいは「一時的」意味内容⁵⁾に呼応して名詞の指示対象の異なる存在レベルについて (18) のような考え方を示した (Carlson 1977: 66-70)。

- (18) a. 類 kind レベル：類概念を表し時間にも空間にも束縛されない存在。
Ex. (種としての) 犬
- b. 個体 object レベル：特定の個体で時間には束縛されないが空間には束縛される。同時に複数の場所には存在できない。
Ex. (うちの) ポチ
- c. 局面 stage レベル：類 kind または個体 object の時間的切片で、時間と空間の両方に束縛され、特定の時間・特定の場所にしか存在することができない。
Ex. 目の前を走っている (うちの) ポチ

そして kind レベルの存在が object レベル、stage レベルの存在から構成される構図を以下のように示している (図 2.2)。

図 2.2 kind / object / stage の関係 (Carlson 1977 : 69)



これらの存在レベルのうち、kind と object は、時間的に安定した存在である individual として stage レベルの存在と対比される。

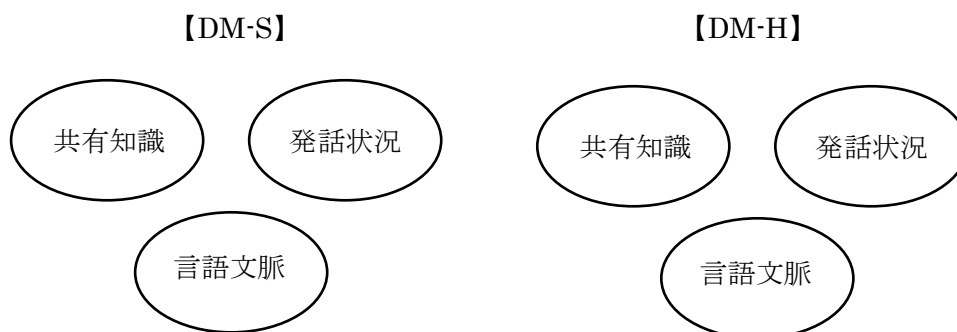
2.3.2. 談話モデル：東郷 (1999) (2000) (2001a) (2001b) (2009)

東郷の談話モデル理論は、Fauconnier のメンタル・スペース理論に立脚する心的スペースを基礎とするものである。Fauconnier の理論との大きな違いは、以下の基本形で見られ

⁵⁾ Carlson は恒常的性質をのべる述語を「個体レベル述語」、一時的な場面を叙述する述語を「局面レベル述語」と呼ぶ。それぞれ Milsark の「属性記述述語」、「状態記述述語」に相当する。

るように、i) 共有知識領域・発話状況領域・言語文脈領域という 3 種類の心的スペースを仮定する点、ii) 話し手側と聞き手側の両方に談話モデルを立て、談話を話し手のモデルと聞き手のモデルの調整作業とみなす点の 2 点である (図 2.3)。

図 2.3 談話モデルを構成する領域 (東郷 1999 他)



そして、それぞれの心的スペースに登録・管理される代表的な談話指示子について以下のように説明される。

共有知識領域は、百科事典的知識領域とエピソード記憶領域の 2 種類の下位領域を持つとされる。そして、百科事典的知識領域には、談話の開始前から私たちが一般的に知っていると思われる世界についての知識に関する談話指示子 (discourse referent) が格納されている。(19a) の例文に見られるように、Columbus や America のような固有名、the earth や the sun などの唯一物、dogs などの種名がこれに該当する。また、エピソード記憶領域は、より個人的な記憶領域で、話し手の体験などに基づく個人的知識が格納されているとされる。(19b) の、話し手と聞き手の共通の友人 Paul や、共通の体験に基づく the restaurant we went last week などがこれにあたりとされる。

(19) 共有知識領域に登録され管理される談話指示子

a. 百科事典的知識領域 Encyclopaedic knowledge

Columbus discovered America in 1492. [固有名]

The earth goes round the sun. [唯一物]

Dogs are loyal. [種名 kind]

b. エピソード記憶領域 Episodic Memory

Have you heard of Paul recently? [個人的知識]

The restaurant we went to last week was very good. [個人的体験]

発話状況領域には、話し手と聞き手、およびその場に存在する事物についての心的表象

である談話指示子が登録される。(20) の現場指示的用法における指示詞 *that hammer* や *this* などは、この領域において解釈される。

(20) 発話状況領域に登録され管理される談話指示子

[指さしながら] *Pass me that hammer.* [demonstratives]

[セーターを指さしながら] *I'll take this.* [Ibid.]

言語文脈領域は、談話開始時の初期値がゼロであり、談話の進行に伴って言語情報が入力され蓄積される領域と考えられている。(21) では、不定名詞句 *a boy* によって、これに相当する談話指示子が言語文脈領域に登録され、照応的代名詞 *he* はその談話指示子を指すとされる。

(21) 言語文脈領域に登録され管理される談話指示子

A boy came in. He sat down. [anaphora]

さらに、東郷 (2001a) (2001b) では、定名詞句の現場指示的用法において、共有知識領域に格納されている認知的フレームが発話状況領域にコピーされるメカニズムが説明されている。本論文では、(*il y a / voilà*) 〈 SN qui SV 〉構文で表される現象文において、共有知識領域に格納されている認知的フレームである「フレーム」「シナリオ (スクリプト)」がどのように作用するかを、特に 4 章・5 章において説明する。

また、2.3.1.節の Carlson の存在論と談話モデルの間には、(22) のような関係が成り立つと考えられる。

(22) 談話モデルと Carlson の存在論の対応関係 (東郷 2009)

a. individual (kind, object) レベルの存在は共有知識領域に登録される。

b. stage レベルの存在は発話状況領域に登録される。

c. 言語文脈領域には kind / object / stage のすべてが登録される。

3 章・4 章・5 章では、上記のような概念・理論モデルを中心に、現象文についての考察を行う。

第3章：課題の場と発話の場：〈 c'est / il y a 〉〈 SN qui SV 〉構文

本章では、まず、以下のような〈 SN qui SV 〉構文には、二つの文タイプがあることを、〈 c'est 〉〈 il y a 〉との共起関係をもとに考察し明らかにする。

- (1) (会話の途中で、すぐ傍らの池からパシヤッという音を聞いて)

A : T'as entendu ? C'est quoi ça ?

B : *Une carpe qui vient de sauter.* (Les Enfants du marais)

(A : Did you hear that? What's that?)

B : A carp that (has) just jumped.)

- (2) (火にかけてミルクが煮え立っていることに気づき)

Allons bon ! *Le lait qui bout !* (M. Arland, *L'Ordre*)

(Oh no! The milk is boiling!)

そして、(1) のような〈 SN qui SV 〉構文は、同定すべき課題の存在（何らかの事態が存在すること）を話し手・聞き手が共有している場合に容認される、課題の場で聞き手によって解釈される文タイプであるのに対し、(2) のような〈 SN qui SV 〉構文は、話し手がたった今知覚した事態を表し、発話の場で聞き手によって解釈される文タイプであることを示す。

さらに、(3) (4) (5) のような〈 il y a SN qui SV 〉構文が、どのような状況において用いられるかが、これまであまり区別されてこなかったことを示し、これらの文のトピック・コメント構造を吟味し解釈領域の違いを明らかにする。

- (3) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)

Il y a Charles qui se marie. (Rothenberg 1971)

(Charles is getting married.)

- (4) *Y'a Jean qu'a téléphoné.* (Lambrecht 1988)

(Jean has called.)

- (5) Papa ! *Y'a maman qui pleure !* (*Un secret*)

(Dad! Mom is crying!)

まず 3.1.節において、〈 SN qui SV 〉構文がどのように先行研究において議論されているかを考察する。そして 3.2.節で、聞き手の疑問に答える場合と、聞き手に新たな事態を提示する場合で、〈 SN qui SV 〉構文が異なるふるまいを見せることを〈 c'est 〉〈 il y a 〉との共起関係をもとに明らかにする。さらに 3.3.節において、様々な状況で使用される〈 il y a SN qui SV 〉構文の違いを (3) (4) (5) の文タイプを中心に明らかにする。

3. 1. 先行研究と分析方針

本節では、〈 c'est 〉 〈 il y a 〉 〈 voilà 〉を伴う〈 SN qui SV 〉構文と、単独の〈 SN qui SV 〉構文についての先行研究での議論を吟味する。その上で本稿での分析方針を示す。

3. 1. 1. Rothenberg (1971)

Rothenberg (1971) は、〈 c'est 〉 〈 il y a 〉 〈 voilà 〉などの提示詞を伴う〈 SN qui SV 〉構文と、提示詞を伴わず単独で用いられる〈 SN qui SV 〉構文との対応関係について以下のような主張をしている¹⁾。

- (6) Rothenberg の提示詞の機能と〈 SN qui SV 〉構文の対応づけについての主張
- i) 提示詞を伴う〈 SN qui SV 〉は、状況によって形成されたテーマに対する述語となり、(A) : 〈 c'est 〉は同定、(B) : 〈 il y a 〉は説明、(C) : 〈 voilà 〉は注意喚起の機能を持つ。
 - ii) 提示詞を伴うそれぞれの文タイプに対応して、提示詞を伴わない〈 SN qui SV 〉構文が存在する。
 - iii) 〈 c'est 〉 〈 il y a 〉に対応する〈 SN qui SV 〉が単独で用いられる場合、(a) : 状況が明示的である (質問がある) か、(b) : 名前や命令形の使用などによる呼びかけが必要である。
 - iv) 〈 voilà 〉に対応する〈 SN qui SV 〉は、〈 voilà 〉の有無による差異はない。

以下に Rothenberg (1971) が分類した〈 c'est 〉 〈 il y a 〉 〈 voilà 〉を伴う〈 SN qui SV 〉構文と、それぞれの構文に対応するとされる提示詞を伴わない単独の〈 SN qui SV 〉構文をあげる。

(A) : 〈 c'est SN qui SV 〉構文と対応する〈 SN qui SV 〉構文

- (7) Drelindin din !... Drelindin !... C'est la messe de minuit qui commence!
(Rothenberg 1971)

(Ding-dong, dong!... Ding-dong!... That's the midnight mass starting!)

(A'-a) : 明示的な質問がある。

- (8) Qu'est-ce donc que ce bruit ? — Des peupliers qu'on nous abat. (Ibid.)
(What's that sound then! — (Those are) poplars that are getting cut.)

(A'-b) : 名前や命令形による呼びかけがある。

- (9) Viens ! Georges qui veut te parler. (Ibid.)

¹⁾ Rothenberg (1971) や次節の Wehr (1984) では、〈 Et SN qui SV 〉構文について、状況に対して「対照的」意味を持つ文タイプとして取りあげているが、本論文では扱わない。

(Come here! Georges wants to talk to you.)

(B) : < il y a SN qui SV > 構文と対応する < SN qui SV > 構文

(10) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)

Il y a Charles qui se marie. (Rothenberg 1971)

(Charles is getting married.)

(B'-a) : 明示的な質問がある。

(11) — J'ai une peur affreuse. — Pourquoi ?

— Frépeau qui n'ose même pas attendre le verdict ! (Ibid.)

(— I have a terrible fear. — Why?

— Frépeau who doesn't even dare to wait for the verdict!)

(B'-b) : 名前、命令形で呼びかけ、説明を与える。

(12) a. Madame, votre sac qui est ouvert ! (Ibid.)

(Ma'am, your bag is open!)

b. Regardez ! Le vase qui va tomber ! (Ibid.)

(Look! The vase is going to fall!)

(C) : < voilà SN qui SV > 構文と対応する < SN qui SV > 構文

(13) Voilà Jean qui s'en va ! (Rothenberg 1971)

(There's Jean leaving!)

(14) a. Maman, oncle Pierre qui s'en va ! (Ibid.)

(Mom, uncle Pierre is leaving!)

b. Regardez ! Le voleur qui s'enfuit ! (Ibid.)

(Look! The thief is running away!)

このように Rothenberg (1971) は、それぞれの提示詞を含む構文に提示詞を持たない単独の < SN qui SV > 構文を対応させるのだが、対応づけに関して問題となる部分もある。例えば、Rothenberg 自身、< c'est > と < il y a > に対応づけられた < SN qui SV > 構文に関して、「原因の同定」と「説明」は、意味的にとても近いと述べているが、実際 (9) のような < SN qui SV > 構文は、< c'est > と < il y a > のどちらに対応する文としても成立し得る。

(15) Viens ! { C'est / Il y a } Georges qui veut te parler.

(Come here! It's Georges who wants to talk to you / Georges wants to talk to you.)

また、< il y a > に対応づけられた < SN qui SV > 構文の (12) の例文は、< voilà >

に対応づけられた〈SN qui SV〉構文の(14)の例文に類似しており、呼びかけたことについての説明というよりも、新たな出来事を提示していると考えられる。

したがって、Rothenberg (1971)の〈SN qui SV〉構文とそれぞれの提示詞との対応づけについては、先行文脈(問いかけや呼びかけ)の存在などについての重要な指摘があるが、以下のような問題点を含んでいる。

- 1) 〈c'est〉〈il y a〉のどちらにも対応できる〈SN qui SV〉構文がある。
- 2) 〈il y a〉に対応する〈SN qui SV〉構文で、「説明」という機能に合致しない例文があり、〈voilà〉に対応する〈SN qui SV〉構文との違いがはっきりしない。
- 3) 〈voilà〉の有無による〈SN qui SV〉構文の違いが説明されていない。

3)については本論文の5章でとりあげ、本章では、1)と2)の問題点を考察する。また2)の〈il y a〉と〈voilà〉の問題については、4章でとりあげる。次節では、Rothenbergの対応づけについて疑問を呈したWehr (1984)の主張を吟味する。

3.1.2. Wehr (1984)

Rothenberg (1971)の提示詞と〈SN qui SV〉構文の対応づけに関して、Wehr (1984)は以下のような主張を行っている。

- (16) Wehr (1984)の提示詞と〈SN qui SV〉構文についての主張
- i) 提示詞を伴う〈SN qui SV〉構文と単独の〈SN qui SV〉構文との間に、Rothenberg (1971)が示すような一義的対応を許す基準は見つけれられない。たとえ省略があったとしても、再構築ができない。〈SN qui SV〉は独立した文タイプと見た方がよい。
 - ii) 単独の〈SN qui SV〉構文が生じる環境には、(I)返答、(II)説明、(III)叫び、があり、三つの環境すべてに〈c'est〉〈il y a〉タイプは生じるが、〈voilà〉タイプが生じるのは(III)の叫び、だけである。

それぞれの環境ごとにとりあげられた例文を以下で参照する²⁾。

(I) 返答 (ANTWORT)

- (17) Quoi de neuf? — Y'a Matsadoon qui est en ville. (Wehr 1984)
(What's new? — Matsadoon is in town.)
- (18) Qu'y a-t-il donc? — C'est la Palmyre qui a une attaque. (Ibid.)

²⁾ Wehr (1984)では、J'ai NP qui タイプの構文も(I)(II)(III)すべての環境に生じる文タイプとして例文をあげているが、ここでの議論に関係しないので例文を省略する。

(What's the matter then? — It's Palmytre who came down with a stroke.)

〈 SN qui SV 〉 構文³⁾

(19) Maman ! — Quoi ? — Alfred qui pleure. (Ibid.)

(Mom! — What? — Alfred is crying.)

(II) 説明 (EXPLIKATIV)

(20) Je ne peux pas venir ; il y a mon article que je n'ai pas terminé. (Ibid.)

(I can't come, I haven't finished my article yet.)

(21) — Ça ne va pas ?

— Laisse. Ne vous occupez pas de moi. C'est ma mère qui est morte. (Ibid.)

(— Are you OK?

— Nothing. Never mind. It's my mom who has passed away.)

〈 SN qui SV 〉 構文

(22) — Tu t'en vas déjà ?

— Un monsieur qui vient déjeuner ! Papa a dit qu'on s'habille. (Ibid.)

(— Are you going already?

— A man is coming over for lunch! Dad told us to get dressed.)

(III) 叫び (AUSRUF)

(23) Attention, il y a le vase qui va tomber ! (Ibid.)

(Watch out, the vase is gonna fall! / the vase is about to fall!)

(24) Maman, c'est Augustine qui met ses mains dans mon assiette ! (Ibid.)

(Mom, It's Augustine putting his hands in my plate!)

(25) Voilà la sirène qui hurle ! (Ibid.)

(There's the siren wailing!)

〈 SN qui SV 〉 構文

(26) Je me mis à crier : “Papa qui bat maman ! ... Papa qui tue maman ! ” (Ibid.)

(I started crying : Dad is hitting mom! ... Dad is killing mom!)

このように Wehr (1984) は、〈 SN qui SV 〉 構文が生じる環境を (I) 返答、(II) 説明、(III) 叫びに分類するが、これらの環境とそれぞれの提示詞が持つ意味機能がどのように関係するのかわかではない。また、それぞれの環境に分類された文について以下のような疑問もある。

³⁾ Wehr (1984) では、NP QUI として表示しているが、本論文での表記とあわせ 〈 SN qui SV 〉 構文として表記する。

- 1) (Ⅱ) の (21) (22) は「説明」に分類されているが「返答」でもある。
- 2) (Ⅲ) の (24) は、「叫び」に分類されているが、Rothenberg (1971) は、Sandfeld (1936) ではこの文タイプも“Maman”の呼びかけの後に、母親の“Qu'est-ce qu'il y a ?”のような質問に対する返答とされていることを述べ、同定、説明のどちらとも考えられる例として示している⁴⁾。本稿でも (24) は、本稿で現象文として捉える他の「叫び」の事例とは異なると考える。

3.1.3. 平塚 (1991)

平塚 (1991) は、〈 SN qui SV 〉構文については扱っていないが、〈 c'est SN qui SV 〉と典型的な無題文とされる〈 il y a SN qui SV 〉の違いについて重要な指摘を行っている。まず平塚は、前節の Wehr (1984) や他の先行研究において、〈 c'est SN qui SV 〉構文が他の提示詞を伴う〈 SN qui SV 〉構文と同様に無題文 (単一判断・中立叙述) として扱われていることに対して問題を提起する。そして〈 c'est SN qui SV 〉構文が、「文脈・状況によって活性度の高まった事柄を指示する指示代名詞 ce を主題とする有題文である」(平塚 1991) と主張し、状況を設定したインフォーマント調査に基づき〈 il y a SN qui SV 〉構文との違いを提示した。その中で本論と関係の深い、発話の場で起こった事態に関わる二つの状況についての、〈 il y a SN qui SV 〉構文と〈 c'est SN qui SV 〉構文の容認度調査をとりあげる⁵⁾。

(Ⅰ) 何らかの具体的状況下で、Qu'est-ce qui s'est passé ? という質問に返答する場合

(27) (On a entendu un bruit) — Qu'est-ce qui s'est passé ? —

(We heard a noise) (— What happened? —)

a. ? Il y a François qui est tombé dans l'escalier. (平塚 1991)

(Francis has fallen from the stairs.)

b. ○ C'est François qui est tombé dans l'escalier. (Ibid.)

(It's Francis who has fallen from the stairs.)

c. ○ Il y a quelqu'un qui est tombé dans l'escalier. (Ibid.)

⁴⁾ Rothenberg (1971 : 106) : Or, selon Sandfeld, une phrase de type : *Maman, c'est Augustine qui met ses mains dans mon assiette !* répond également, de façon anticipée, à un « Qu'est-ce qu'il y a ? » qu'on attendrait de la mère après l'interpellation *Maman*. En effet, deux réponses sont possibles à une question comme « Qu'est-ce qu'il y a ? quoi ? » implicite ou explicite : (...).

⁵⁾ 平塚 (1991) では〈 SN + SV 〉構文もあわせて調査しているが、ここで引用する状況についての〈 SN + SV 〉構文はすべて容認されておりここでの議論と直接関係しないので、引用から除外する。また、平塚 (1991) のインフォーマント調査は、5人のフランス人講師による5段階評価をもとに、特定の基準を設定し「○」「?」「×」で表示されている。容認度評価の詳しい説明については、平塚 (1991) の注2)を参照。また、平塚 (1991) では〈 c'est SN qui SV 〉をCQ、〈 il y a SN qui SV 〉をIQと記述しているが、ここでは本論文での記述にあわせ、〈 c'est SN qui SV 〉 〈 il y a SN qui SV 〉と記述する。

- (Someone has fallen from the stairs.)
- d. ○ C'est quelqu'un qui est tombé dans l'escalier. (Ibid.)
(It's someone who has fallen from the stairs.)
- (28) (En indiquant du doigt l'eau sur le tapis) — Qu'est-ce qui s'est passé ? —
(Pointing at the water on the carpet) (— What happened? —)
- a. ? Il y a François qui a renversé le vase. (平塚 1991)
(Francis has tipped over the vase.)
- b. ○ C'est François qui a renversé le vase. (Ibid.)
(It's Francis who has tipped over the vase.)
- c. ○ Il y a quelqu'un qui a renversé le vase. (Ibid.)
(Someone has tipped over the vase.)
- d. ? C'est quelqu'un qui a renversé le vase. (Ibid.)
(It's someone who has tipped over the vase.)
- (II) 何の脈絡も無く新しい事態を伝える場合
- (29) a. ○ Il y a ton nez qui coule ! (平塚 1991)
(Your nose is running.)
- b. × C'est ton nez qui coule ! (Ibid.)
(It's your nose that's running.)
- (30) a. ○ Madame, il y a votre sac à main qui est ouvert ! (Ibid.)
(Ma'am, your handbag is open!)
- b. × Madame, c'est votre sac à main qui est ouvert ! (Ibid.)
(Ma'am, it's your handbag that is open.)

平塚 (1991) の研究により、(II) のように何の脈絡もなく新しい事態を伝える場合 *c'est SN qui SV* 構文は使用されず、(I) のような「音」や「絨毯の上の水」など具体的な状況の中で “*Qu'est-ce qui s'est passé ?*” という聞き手による問が設定されている場合、有題文として *c'est SN qui SV* 構文が使用されることがわかる⁶⁾。

ただ、平塚 (1991) の論文の骨子は、*c'est SN qui SV* 構文が、「文脈・状況によって活性度の高まった事柄を指示する指示代名詞 *ce* を主題とする有題文である」(平塚 1991) ことであり、(I) のような場合に *il y a SN qui SV* 構文と *c'est SN qui SV* 構文がどのように選択されるのか、また *il y a SN qui SV* 構文が、どのようにして様々な解釈を得ることができるのか、さらに単独で用いられる *SN qui SV* 構文はどのように使用されるかなど、考察の対象となる点は多く残されている。

⁶⁾ 平塚 (1991) では、構文の有題性・無題性を実主語の主題性をもとに連続的なものとして考える記述があるが、その点については本稿と意見が異なる。

3.1.4. 本稿の分析方針

本稿ではまず、〈 *c'est* SN qui SV 〉構文については出来事の「同定」、〈 *il y a* SN qui SV 〉構文については出来事の「提示」が行われると仮定する。そして〈 SN qui SV 〉構文を、先行文脈との関係という観点から、以下のように二つに分類する。(対応する先行研究の例文番号を付記する)

- 1) 聞き手の「疑問」(明示的/非明示的)に答える〈 SN qui SV 〉

Rothenberg (1971) : (8) (9) (11)

Wher (1984) : (19) (22)

- 2) 聞き手に「新たな出来事」を提示する〈 SN qui SV 〉

Rothenberg (1971) : (12) (14)

Wher (1984) : (26)

そして3.2.節で、1) 2) それぞれの文脈において〈 *il y a* SN qui SV 〉〈 *c'est* SN qui SV 〉〈 SN qui SV 〉のどの文タイプが選好されるのかを考察し、二つの〈 SN qui SV 〉構文が、それぞれ課題の場、発話の場において聞き手によって解釈されることを示す。さらに3.3.節において、様々な文脈で用いられる〈 *il y a* SN qui SV 〉構文のトピック・コメント構造を吟味し、それらの文の違いが解釈領域の違いにあることを明らかにする。

3.2. 課題の場と発話の場 : 〈 *c'est* 〉 〈 *il y a* 〉 と二つの 〈 SN qui SV 〉 構文

本節では、1) 聞き手の「疑問」(明示的/非明示的)に答える〈 SN qui SV 〉と2) 聞き手に「新たな出来事」を提示する〈 SN qui SV 〉について、〈 *il y a* SN qui SV 〉〈 *c'est* SN qui SV 〉〈 SN qui SV 〉のどの構文が選択されやすいかをインフォーマント調査をもとに吟味したうえで、〈 SN qui SV 〉構文に二つの文タイプがあることを明らかにする。なお、本節では、〈 *il y a* SN qui SV 〉構文をI型、〈 *c'est* SN qui SV 〉構文をII型、〈 SN qui SV 〉構文をIII型として記述し、インフォーマント調査でのI型、II型、III型の構文比較においては、実例の構文を全文イタリックで表記する。

3.2.1. 聞き手の「疑問」(明示的/非明示的)に答える〈 SN qui SV 〉 構文

聞き手の「疑問」といっても、ここで問題とする「疑問」は、Yes-No 疑問文ではなく、疑問詞 “ *C'est quoi ça ?* ” “ *Qu'est-ce qui se passe ?* ” “ *Pourquoi ?* ” (“What's that ?” “What's happening ?” “Why... ?”)などを用いた「部分疑問」である。つまり、先行文脈や発話現場の状況をもとに何かが起こったことを前提にした問いかけである。また、上記のような言語的に述べられた明示的問いに限らず、呼称による呼びかけや命令形、視線やジェ

スチャーなどの非明示的問いかけについても聞き手の「疑問」として考える。そして本節では、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型のどの構文が選択されやすいかを、聞き手の疑問の対象となる内容ごとに吟味し考察する。聞き手の疑問の対象となる内容として、「音の正体」「対話者の行為・状態の原因・理由」「発話の場の事態の原因・理由」「伝言内容」をとりあげる。

3.2.1.1. 音の正体

まず、音の正体について、Rothenberg (1971) は、音の同定の場合、Ⅱ型の〈c'est〉が用いられ、Ⅰ型の〈ilya〉はほとんど容認されないと述べている⁷⁾。しかし、平塚 (1991) では、Ⅱ型を自然としながらも、Ⅰ型についても容認されないわけではないことが観察されている (27)。(27)の容認度について本稿でもインフォーマント調査を行ったが、Ⅱ型を自然としながらも、(27a)のⅠ型もそれほど容認度は落ちなかった。

さらに、以下の実例である (31c) に見られるように、音の同定にはⅢ型も用いられる。また、同じ状況でⅠ型、Ⅱ型も容認される。

(31) (会話の途中で、すぐ傍らの池からパシャッという音を聞いて)

A : — *T'as entendu ? C'est quoi ça ?* B : —

(A : — Did you hear that? What's that? B : —)

a. *Y a une carpe qui vient de sauter.*

(A carp (has) just jumped.)

b. *C'est une carpe qui vient de sauter.*

(It's a carp that (has) just jumped.)

c. *Une carpe qui vient de sauter.* ((31c) : *Les Enfants du marais*)

(A carp that (has) just jumped.)

また、(31)の状況においては、発話現場で「何か動いて音をたてた」ことについては、聞き手Aは了解していると考えられるので、(32)が示すように、話し手Bは関係節を除いたⅡ型を用い、その「何か」を答えることで同定を試みることができるが、関係節を除いたⅠ型は容認されにくい。また、関係節を除いたⅢ型は、関係節を除いたⅡ型ほどではないが容認される (32)。

(32) (会話の途中で、すぐ傍らの池からパシャッという音を聞いて)

A : — *T'as entendu ? C'est quoi ça ?* B : —

a. ? *Y a une carpe.*

⁷⁾ “D’autre part, lorsqu’il ne s’agit pas de l’identification d’une cause, mais de celle d’un bruit, par exemple, la construction avec IL Y A n’est guère admise : On entendait un pas ; c’était le mari qui montait. (Rothenberg 1971 : 106)

- (There's a carp.)
- b. C'est une carpe.
(It's a carp.)
- c. Une carpe.
(A carp.)

したがって、(31) の状況においては、Ⅱ型は、聞き手と話し手が発話現場で聞いた音の発信源の特定を、音を引き起こした張本人を中心に行うのに対し、Ⅰ型は、指示対象の存在を提示するだけでは、音を引き起こした原因としては解釈されにくく、出来事として提示することにより、その事態が音を引き起こした原因であると容認されると考えられる。つまり、Ⅰ型は事態を提示するのみで、それが音の正体だという解釈は、「何か動いた」から「音がする」という因果関係に基づく推論により、聞き手によって行われていると考えられる。ではⅢ型は、聞き手の問いにどのように答えようとしているのだろうか。(32 c) が容認されることを考えると、音の正体については、「同定」に近いふるまいを果たしていると考えられるが、その他の聞き手の疑問についてはどうだろうか。以下で異なる疑問の対象についてのふるまいを吟味する。

3. 2. 1. 2. 対話者の行為・状態の原因・理由

本節では、対話者の行為・状態の原因・理由を問う質問に答える場合を考える。Rothenberg (1971) は 3.1.1.節の先行研究の検討において述べたように、Ⅲ型がⅠ型、Ⅱ型のいずれかに対応すると考えている。そして、「原因の同定」(Ⅱ型)と「説明」(Ⅰ型)の意味は似ており、両者が同じように感じられる場合があるとしながらも、問いが原因・理由を含意するなら、Ⅰ型のみが認められるとしている⁸⁾。そして、Rothenberg は以下の例文 (33a) においてⅡ型は容認されないとする。検証してみると、確かにⅡ型は容認されにくい。またⅢ型も容認されにくい。

(33) *Est-ce qu'ils sont tous partis ? — Non,*

(Have they all gone/left? — No,)

a. *y a Odile qui cherche son chapeau.* ((33a) : Rothenberg 1971)

(Odile is looking for her hat.)

b. *?*c'est Odile qui cherche son chapeau.*

(It's Odile (who is) looking for her hat.)

⁸⁾ “En effet, deux réponses sont possibles à une question comme « Qu'est-ce qu'il y a ? quoi ? » implicite ou explicite : l'une qui identifie la cause, et on a affaire alors à la construction II précédemment étudiée (本稿のⅡ型), et l'autre qui explique une situation ou une action (本稿のⅠ型). Si la question posée implique un *pourquoi*, seule la réponse avec IL Y A est admise.” (Rothenberg 1971 :106) (括弧内は筆者)

c. ??*Odile qui cherche son chapeau.*⁹⁾

(*Odile who is looking for her hat.*)

しかし、(33) においてⅡ型・Ⅲ型が使用されにくい第一の理由は、聞き手の Yes-No 疑問文「皆は出発しましたか」に対して話し手は“Non”と返答しており、後続する文が“Non”（皆が出発したわけではない）と話者自身が言ったことの原因をのべる文であり、聞き手から理由を問われた事例ではないからだと考えられる。これは、以下のような原因・理由を問う質問にⅡ型が問題なく使われることから裏付けられる (34)。

(34) *Pourquoi est-ce que tu pleures ? — C'est mon papa qui m'a battu.* (平塚 1991)

(*Why are you crying? — It's my dad who has beaten me.*)

ここでは、“*Pourquoi ?*”によって、聞き手に問題とされた対話者の行為・状態 (tu が泣いている) の原因がⅡ型を用いることによって同定されている。

つまり、Ⅱ型は同定する機能を持つ文なので、明示的であれ非明示的 (呼びかけや表情・身振りなど) であれ、話し手と聞き手に共有された同定すべき対象 (ここでは対話者の行為・状態の原因・理由) の設定を必要とするが、Ⅰ型は事態を提示することが本来の機能なので、同定すべき対象が設定されていなくとも事態を提示できる。聞き手が、提示された事態を先行文脈に関連付けて解釈するのである。

(33) のような事例をみると、Ⅲ型はⅡ型と類似しているように見えるが、以下の事例ではⅠ型と類似しているように見える。(35c) のⅢ型は実例だが、同じ文脈でⅠ型は容認されるが、Ⅱ型は容認されにくい。ここでは、Ⅲ型はⅠ型のような提示の機能も持ち得ることがわかる。Ⅰ型同様、提示された事態を「もう帰ってしまうこと」の理由として関連づけるのは、聞き手の解釈に依存すると考えられる。

(35) (海で一緒に泳いでいた友人が砂浜へ戻ったのを見て)

— *Tu t'en vas déjà ?* —

(— *Are you going already?* —)

a. *Y a un monsieur qui vient déjeuner ! Papa a dit qu'on s'habille.*

(*A man is coming over for lunch ! Dad told us to get dressed.*)

b. ? *C'est un monsieur qui vient déjeuner ! Papa a dit qu'on s'habille.*

(*It's a man (who is) coming over for lunch! Dad told us to get dressed.*)

c. *Un monsieur qui vient déjeuner ! Papa a dit qu'on s'habille.*

(*A man is coming over for lunch! Dad told us to get dressed.*)

((35c) : Wehr 1984、括弧内の先行文脈は筆者が追記)

⁹⁾ ただし、*Odile* が目の前で帽子を探していれば容認しやすくなるとのコメントがある。

それでは、ここではなぜⅡ型は容認されにくいのだろうか。“Pourquoi?”ほどの直接的な問いかけはないが、明示的な問いかけにより理由を求めていることは明らかである。実際、似たような以下の事例(36)では、Ⅱ型も容認されている。

(36) — Ça ne vas pas ?

— Laisse, lui dis-je. Ne vous occupez pas de moi. *C'est ma mère qui est morte.*

(川本 1985)

(— Are you all right?

— Just leave me, I told him. Never mind. It's my mom who has passed away.)

(35)でⅡ型が容認されにくい理由は、(36)の出来事内の要素(*ma mère*)と異なり、(35)の出来事内の要素(*un monsieur*)が新情報で、話し手と直接的な関係を持つ対象でないため、「もう帰ってしまうこと」の理由として、聞き手にとって説得的で十分な情報を提供しにくいことによると考えられる¹⁰⁾。(37)のように話し手との直接的な関係を持つ対象を要素とする情報に置き換えると、Ⅱ型による理由の同定が容認されやすくなる。

(37) — Tu t'en vas déjà ? — *C'est mon père qui m'appelle. Je dois y aller.*

(— Are you going already? — It's my dad (who is) calling me. I have to go.)

実際、説得的で十分な情報を同定文として示すⅡ型の名詞句には、所有形容詞(1人称)や、固有名詞の事例が先行研究で多く観察される(34)(36)(38)。

さらに、以下のような積極的に理由を認めさせたい話し手の意図が働くような場合には、Ⅱ型が好まれると考えられる。

(38) (一人で遊びに行かせた息子の友達 Rémy がまだうろついているのを見つけて)

— *Tiens, te voilà encore, Rémy ! Je te croyais parti. J'avertirai ton papa que tu musardes et il te grondera.* —

(— Oh! Remy! You are still there. I thought you had gone. I'll tell your dad your hanging around and he will scold you. —)

a. *Madame, y a Poil de Carotte qui m'a dit d'attendre.*

(*Ma'am, Poil de Carotte told me to wait.*)

b. *Madame, c'est Poil de Carotte qui m'a dit d'attendre.*

¹⁰⁾ *C'est le prof du piano { de ma fille / ?d'une fille }*. のような同定文においても、指示対象の正体を同定する鍵となるのは、話し手と血縁関係にある *ma fille* が anchor となり、談話の展開する状況との関連性を持つからとされている。(東郷 2005:55)

(Ma'am, it's Poil de Carotte who told me to wait.)

c. ? Madame, Poil de Carotte qui m'a dit d'attendre.

(Ma'am, Poil de Carotte who told me to wait.)

((38b) : 朝倉 (2002) に先行文脈を追記)

実例はⅡ型の (38b) だが、インフォーマント調査ではⅠ型もⅡ型もともに容認される。Ⅰ型の (38a) が事実を客観的に提示しているのに対し、Ⅱ型の (38b) は、居残っていた理由として、「にんじんが待つように言った」という事態を直接的に結びつける。Ⅱ型はより積極的に原因・理由を述べていることになる¹¹⁾。また、ここではⅢ型は好まれない。問と応答という直接対応が行われにくい状況であること、さらに、「Rémy がまだその場にいる」事態と「にんじんに待つように言われた」という事態が一般的な因果関係として成り立ちにくいことが要因として働いていると考えられる。

これまでの観察から、Ⅲ型を用いる場合には、直前に質問があり、先行文脈とのつながりから理由として容認されやすい場合に選好されると考えられる。それをよく表す事例として、先行研究の事例 (11) に、原文から文脈を追加して再掲する (39)。追加の文脈なくインフォーマント調査をすると、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型すべて容認されたが、原文からの文脈を追加するとⅢ型が最も適切とされる。

(39) (話し手・聞き手に Frépeau は、時間がなく父親の判決を聞くことができなかつたと言いつつ出ていく。Frépeau が優しい人柄であることを認めつつも不安を訴えて)

— *Seulement, je ne suis pas tranquillisée le moins du monde ! J'ai une peur affreuse.*

— *Pourquoi ?*

— *Frépeau qui n'ose même pas attendre le verdict ! Tu trouves que c'est rassurant, toi ?*

(H. Bernstein, *L'Assaut*)

(— However I'm not calm at all! I'm terribly afraid.

— Why?

— Frépeau who doesn't even dare to wait for the verdict. You find that reassuring?)

Ⅲ型の直前に問いかけがあること、またⅢ型で述べられた事態が、理由づけとして容認されやすい事態、むしろそう思って当たり前と話し手が思っていることは、後続する下線部の発話、強意表現 (*n'ose même pas*)、感嘆符の使用による強調などから観察される。

したがって、話し手の行為・状態の原因・理由にはⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型のすべてが容認さ

¹¹⁾ Ⅱ型がインフォーマントに子供っぽい表現とされる事例は、このように積極的に自分の行為を正当化しようとする事例に多い。

れるが、I型は事態を提示するのみで、聞き手が提示された事態を理由として解釈する。一方II型は、話し手・聞き手に共有された設定された課題（話し手の行為・状態の原因・理由）に対して、説得的で十分な情報を与えることを示す場合に用いられる。またIII型は、I型の提示機能もII型の同定機能も果たし得るが、直前に課題が設定されており、理由として容認されやすい事態に用いられやすいと考えられる。

3.2.1.3. 発話現場の事態の原因・理由

次に、発話現場の事態の原因・理由を問う質問に答える場合を考える。Rothenberg (1971) では、I型で扱われている(40a)のような事例となる。

- (40) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている：説明を求められて)
- a. Il y a Charles qui se marie. (= (10)再掲)
(Charles is getting married.)
- b. C'est Charles qui se marie.
(It's Charles (who is) getting married.)

Rothenberg (1971) では、このような状況でのII型の事例はほとんど紹介されていないが、インフォーマントによるとII型も用いることができる(40b)。以下のように、II型を用いる事例も観察される(41)。

- (41) (近所のVirole の店の前に人だかりがしている。その中に知り合いを見つけたので、様子をたずねる)
- Qu'est-ce qu'il y a ?
— C'est Virole qu'a tué sa femme, dit Houssette.
(R. Queneau, *Le Dimanche de la vie*)
- (— What's the matter?
— It's Virole who has killed / killed his wife, says Houssette.)

また、3.1.3.節で見たように、平塚 (1991) では、「音」の同定とならんで、何らかの具体的状況の下で“Qu'est-ce qui s'est passé?”に返答するという設定で、発話現場の事態の原因・理由を問う事例が観察されている(一部再掲)。

- (42) (En indiquant du doigt l'eau sur le tapis) — Qu'est-ce qui s'est passé ? —
(Pointing at the water on the carpet) (— What happened? —)
- a. ? Il y a François qui a renversé le vase. (= (28a)再掲)
(Francis has tipped over the vase.)

- b. ○ C'est François qui a renversé le vase. (= (28b)再掲)
 (It's Francis who has tipped over the vase.)

あらためて (42 a,b) を調査してみると、音の場合同様、Ⅱ型が選好されるが、Ⅰ型もそれほど容認度は変わらなかった。これらの事例においても、前節同様、話し手と聞き手が共有している目の前の事態 (Charles の店が閉まっている、絨毯に水がこぼれている) とそれらの事態の原因・理由となる事態 (Charles が結婚する、François が花瓶をひっくり返した) を、Ⅱ型は直接的に同定する。一方Ⅰ型は、あるインフォーマントが「事態を語る、描写する」と説明するように、目の前の状況 (Charles の店が閉まっている、絨毯に水がこぼれている) に対する聞き手の問いかけにより、関連する事態 (Charles が結婚する、フランソワが花瓶をひっくり返した) が、単独の出来事としてではなく、ある時空領域に存在する出来事として提示される。このような、ある時空領域に存在する出来事としての提示のあり方は、佐治 (1973) が「状況・陰題の文」と呼んだ文タイプと類似している¹²⁾。つまり、発話現場の状況をもとに課題の場 (「状況・陰題」) が設定され、Ⅰ型は事態を提示するのみで、聞き手が事態を理由として関連付け解釈すると考えられる。

ではⅢ型は、問題とされた事態に対してどのように答えているのだろうか。前節の考察では、Ⅲ型は、Ⅰ型の提示機能もⅡ型の同定機能も果たし得るが、問いかけがあり、対話者の行為・状態と原因・理由が結びつきやすい場合に選好された。発話の場の事態の原因・理由を問う (43) の実例を見てみよう。

(43) (主人公の殺し屋が部屋に戻ると、別れを告げた女に部屋を荒らされ、ひどい状態になっている。そこへやってきた家主がびっくりして)

— Oh ! la la ! déclara le propriétaire en voyant les dégâts et il poussa un sifflement. (二言三言のやりとりの後)

Qu'est-ce qui s'est passé ?

— Une nana qui s'est énervée. Vous savez ce que c'est.

(J.-P. Manchette, *La position du tireur couché*)

(— Oh my god! said the owner when he saw the damage and he whistled.

What happened?

— A woman that got angry. You know what it's like.)

Ⅲ型に続く下線部の発話から、「部屋が荒らされている」事態と「女がヒステリーを起こ

¹²⁾ 佐治 (1973) は、「そのあたりはどうですか?」といった質問の答となる「山が美しい」は、時間・空間的に限定を受けた場所を基にし、それに有形・無形の種々の要素が加わった「状況」に対して、その中にある属性の一つ「山が美しい」を引き出して判断を表したものであるとする。そして、このような文全体が状況を主題とする叙述であり、その主題が顕れない陰題の文を「状況・陰題の文」と呼ぶ。

した」事態との間に、因果関係を結ぶことが容易であると発話者が思っていることがわかる。したがって発話現場の事態の原因・理由を問う質問に対しても、前節の対話者の行為・状態に対する原因・理由を述べる場合同様、問いかけがあり、因果関係が容認されやすい場合に使用されると考えられる。

3.2.1.4. 伝言内容

さて、発話現場の様々な状況（音、対話者の行為・状態、発話現場の事態）について、聞き手の疑問に答える事例を扱ってきたが、ここでは、話し手・聞き手と異なる第3者の伝言を取り次ぐ事例をとりあげる。取次ぎは、I型、II型、III型すべてがよく用いられるが¹³⁾、言語使用域としては、I型は日常会話で、II型は召使による主人への取次ぎなどにも使用される¹⁴⁾。

I型の例(44)とII型の例(45)をまず参照する。

- (44) a. (母親が子供に、アパートの下にいる子供の友人 Fathi を取り次ぐ)
— Abdelkrim ! — Ouais ? — *Ya Fathi qui t'appelle !* (L'esquive)
(— Abdelkrim! — Yeah? — Fathi is calling for you!)
- b. (電話相手の夫に妻が子供 (Alphonse) を取り次ぐ)
— *Il y a Alphonse qui veut te parler.* (L'Amour en fuite)
(— Alphonse wants to talk to you.)
- c. (ホテルのフロント係がお客が帰ってきたのに気付いて)
— Madame Steiner... *Il y a un monsieur qui vous attend au bar.*
(Le dernier métro)
(— Ms Steiner... There is a man waiting for you at the bar.)
- (45) Madame, *c'est Monsieur qui demande si Madame est éveillée.*
(Rothenberg 1971)
(Ma'am, it's Sir (who's) asking if Ma'am is awake.)

I型の(44)では、現場にいない(アパートの下、電話の相手先、ホテルのバーにいる)第3者¹⁵⁾の伝言の取次ぎが話し手に託されている。話し手が取次ぎに出向く場合もあるが(44a)、ホテル、馴染みのカフェなどに聞き手が戻った折に、第3者の用向きが伝えられる

¹³⁾ 第3者の取次ぎは *voilà* を用いても行われるが、ここでは繁雑となるので扱わない。 *voilà* を用いる場合、現場に第3者が登場する。「*Ma mère, voilà un monsieur qui veut vous parler.*」(H. Balzac, *Le Message*)

¹⁴⁾ 朝倉(2002:103): 中性代名詞 *ce* の II. ③「前文の説明」: *Qu'est-ce qu'il y a ? Qu'est-ce que vous avez donc ?* 「どうしたのです」の答えにしばしば用いられる。召使が来客を告げる *C'est M. X.* 「X様がお出でです」はこの種の問いに応じる説明。

¹⁵⁾ ここでは、話し手・聞き手以外の、伝言を託した人物を第3者と呼ぶ。

場合もある (44c)。

Ⅱ型の (45) の例文について Rothenberg (1971) は「召使が戸をたたき、お邪魔をすることの理由を述べるときに使われる」と述べている¹⁶⁾。Ⅱ型が召使に使われるのは、召使が常に主人に伝言をことづかる役割を担っていることを考えると理解しやすい。召使の登場と同時に同定すべき伝言内容があることを聞き手が直接的に喚起できるからである。しかし、喚起しやすいからといって、召使がⅢ型を用いることはインフォーマントによると無い。

では、Ⅲ型はどのように使用されるのだろうか。Rothenberg (1971) は、先行研究を概観した節でも述べたように、Ⅲ型を用いる場合、質問が明示的であるか、呼称や命令形による呼びかけがあることが必要だとする。確かに、(46) のように明示的な問いかけの後には、Ⅲ型が用いられやすい。ここではそれ以外に、職業として秘書や部下である、人声がある、など社会一般常識として伝言内容があることを喚起しやすい条件がそろっている。

(46) (下働きのミシェルが話す声がする。入ってきたミシェルに向かって)

— Qu'est-ce que c'est Michel ?

— *Un monsieur qui demande l'adresse de M. Nachette.*

(E. et J. de Goncourt, *Charles Demailly*)

(— What's up, Michel?

— A man is asking Mr. Nachett's address.)

また、(47) のような電話の伝言内容 (モンテルがテレーズにブリッジの 4 人目になれるかどうかを尋ねている) を取り次ぐ事例では、話し手が電話に出たことを知っている時点で、通話の相手先からの伝言内容だとわかるので、容認されやすい。

(47) *Thérèse, Montel qui pense à toi pour faire un quatrième.* (Rothenberg 1971)

(*Thérèse, Montel is thinking of you to be the fourth.*)

同じ取次ぎでも、電話の相手先に対して話し手が発話現場にいる第 3 者を取り次ぐ場合は、相手先にいる聞き手は発話現場の様子を知ることが難しいので、(44b) のようにⅠ型が使用されている。

これらの点から、取次ぎの事例においてⅢ型が用いられるのは、「伝言内容を話し手が持っている」ことを、発話時の状況から聞き手が気づいていると話し手が判断する場合に容認されると考えられる。また、このような取次ぎは出会い頭に行われることが多いので、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型すべてにおいて呼びかけは多くなるといえる。

ここまで、3.2.1.節では、明示的・非明示的な聞き手の「疑問」に答えるⅢ型の〈SN qui

¹⁶⁾ (Rothenberg 1971:104) “La bonne frappe à la porte et identifie la raison du dérangement.”

SV) 構文を、I 型 (*il y a SN qui SV*) 構文、II 型 (*c'est SN qui SV*) 構文とともに考察してきた。

これらの考察から、I 型は、先行文脈・状況に対する「課題の場」(「状況・陰題」)に関連する出来事を提示することによって、間接的に聞き手の疑問に答える。同定対象に提示された事態を結びつけ解釈するのは聞き手である。一方、直接的に説得的で十分な情報により聞き手の「課題」(同定対象)に答える場合、II 型で同定される。そして、III 型は同定、提示の両方の機能を果たし得るが、問いかけがあり、聞き手の疑問により設定された「課題」(同定対象)と事態が結びつきやすい場合に容認されやすいと考えられる。

3.2.2. 聞き手に新たな出来事を提示する (*SN qui SV*) 構文

本節では、聞き手からの問いかけがなく、話し手から聞き手に新たな出来事を提示する (*SN qui SV*) 構文が、どのような状況で使用されるかを考察する。

3.2.2.1. 先行文脈・状況に関与的な事態の提示

まず、I 型は事態を提示する機能を持つので、話し手・聞き手に共有された聞き手の問いかけなどによる同定すべき課題の設定がなくとも、先行文脈・状況に関与的な事態を提示できる。ここでは、二つのタイプの事例をとりあげる。

一つ目は、先行文脈・状況と因果関係によってつながりを持つ (48) (49) のような事例で、これらの事例は、3.2.1. 節でみたような明示的・非明示的質問があれば、課題の設定が行われ、II 型・III 型も容認可能である。

(48) *J'ai téléphoné hier au plombier. Il y a un tuyau qui fuit.* (Rothenberg 1971)

(I called a plumber yesterday. A pipe is leaking. / There's a pipe leaking.)

(49) (毎週祖母を訪ねている介護施設で、次の訪問予定を別れ際に話す)

Au fait, je ne sais pas si je pourrai venir la semaine prochaine... Ya mon chef qui nous emmène en goguette ... (A. Gavalda, *Ensemble, c'est tout*)

(In fact, I don't know if I'll be able to come next week. My boss is taking us out for a drink.)

3.2.1. 節で述べたように、このような I 型の出来事提示においては、先行文脈・状況に関与的な新たな事態が話し手によって提示されるが、その事態を先行文脈・状況に関連づけて解釈するのは聞き手に委ねられている。平塚 (1991) においても、無題文 (ここでの I 型) の構文の関連性は、「関連性の公理による会話の含意によって、非言語的主題に対する関連性を保証している」(平塚 1991 :18) と指摘されている¹⁷⁾。また、このような事態の関連付

¹⁷⁾ « Qu'est-ce qui s'est passé ? » という質問は、語用論的には、ある事柄について尋ねているのだが、それを非言語的主題と称することになると、この非言語的主題に対するそれぞれの構文の

けは、日本語のノダがなくてもノダ文と同様に容認される (50 a) のような事例と類似している。

- (50) a. (上司に遅刻の理由を問われて) 電車に乗り遅れました。 (名嶋 2007)
b. (上司に遅刻の理由を問われて) 電車に乗り遅れたんです。 (ibid.)

名嶋 (2007) では、「(50a) のような発話が関連性を持ち得るのは、その命題内容が「因果関係のスキーマ」に属する「遅刻のスキーマ」の最も典型的なプロトタイプとかなりの程度で類似することに起因する」(名嶋 2007 :59) と考えられている。

もう一つの事態は、先行文脈・状況との関係が、話者の判断の根拠を示すタイプの事例で、Yes-No 疑問文に対する話者の判断の後に後続する以下に示す (51) (52) のような事例である。これらの事例は、II 型・III 型が容認されにくい。

- (51) — *Est-ce qu'ils sont tous partis ?* — *Non,*
(— Have they all gone/ left? — No,)
a. *y a Odile qui cherche son chapeau.* (= (33))
(Odile is looking for her hat.)
b. ?* *c'est Odile qui cherche son chapeau.*
(It's Odile looking for her hat.)
c. ?? *Odile qui cherche son chapeau.*
(Odile who is looking for her hat.)
- (52) — *Tu as bien fermé le gaz derrière toi ? dit Julia.*
— *C'était pas la peine, dit Valentin,*
(— Have you really closed the gas behind you? says Julia.
— It doesn't matter, says Valentin,)
a. *y a la bonne qui est restée.* (R. Queneau, *Le Dimanche de la vie*)
(The maid is staying.)
b. ?? *c'est la bonne qui est restée.*
(It's the maid staying.)
c. ?? *la bonne qui est restée.*
(The maid who is staying.)

関連性 (ここでは、因果関係ともいうべき関連性) が、どのように保証されているかが問題になる。有題文の場合は、非言語的主題を指示代名詞 *ce* で受けることによって、これを果たしている。無題文の場合は、これと異なり、関連性の公理による会話の含意によって、非言語的主題に対する関連性を保証していると考えられる。即ち、同じ仕事を別の部門が担っているのである。(平塚 1991 :18)

平塚 (1991) においては、I 型が自然で II 型が不自然な (53) のような作例に対して、「何らかの事柄について説明する場合、説明の核心となる部分を導入するための背景となる情報をひとまず提示するのに、SV (主語+述語型) や IQ (本稿の I 型) は自然だが、CQ (本稿の II 型) は不自然である」(平塚 1991 : 括弧内は筆者) と述べられている。

(53) Vous venez avec nous au cinéma ce soir ?

(Are you coming with us to the cinema tonight?)

a. ○— Non, mon père est malade en ce moment, et je dois aller le voir.

(No, my father is sick right now, and I have to go see him.)

b. ○— Non, il y a mon père qui est malade en ce moment, et je dois aller le voir.

(No, my father is sick right now, and I have to go see him.)

c. ×— Non, c'est mon père qui est malade en ce moment, et je dois aller le voir.

(No, it's my father who is sick right now, and I have to go see him.)

(平塚 1991)

しかしながら (53) の事例において、問題となる 'Non,' に後続する文の 2 つ目の文 'et je dois aller le voir.' を取り除いても、インフォーマントによる判定はあまり変化がなく、(53c) の II 型は容認されず、(53b) の I 型は容認される。したがって、(51) (52) のような事例とあわせて考えると、平塚 (1991) の (53) の事例も、「私は皆と一緒に映画を見に行かない」という話者の判断の根拠を表すタイプであり、(48) (49) のように聞き手と課題を共有し、直接的に関連付けられる事態関係とは異なるため I 型が用いられると考えられる。

これらの点から、先行文脈・状況があったとしても、同定すべき課題が話し手・聞き手によって設定されておらず、話者の判断の根拠を示すような、直接的な事態関係で結ばれない場合には、II 型・III 型が容認されないことがあらためて確認される。

3.2.2.2. 先行文脈・状況がなく、眼前の知覚でもない出来事の提示

先行する文脈や状況がなく、眼前の知覚でもない (54) のような事例では、新たな出来事を提示する I 型から 〈il y a〉を取り除き III 型を用いることは難しい。

(54) a. Y'a Jean qu'a téléphoné.

(Lambrecht 1988)

(Jean has called.)

b. ?? Jean qu'a téléphoné.

(Jean who has called.)

(54) は 3.2.1.4. 節で述べた取次ぎの事例とよく似ているが、第 3 者から聞き手への伝言としてではなく、話し手が過去に得た出来事情報を聞き手に提示する場合の事例として考える。

実例においても、出会い頭に行われる、話し手・聞き手に関与的な出来事の提示は、I型が用いられ、II型・III型は容認されにくい。この点において、発話状況や話し手・聞き手の立場（ホテルの受付とお客、召使と主人など）などにより、同定すべき伝言内容（課題）が設定されやすい3.2.1.4.節と異なっている。

- (55) (映画館ゼブラ座の館主のシュザンヌの家に飛び込んできた仲良しの男の子が)
- a. *Suzanne, il y a un connard qui a garé sa chignole de merde sur le trottoir, devant la porte du Zèbre, une Rolls je crois, on peut pas décharger !*
(Suzanne, a jerk has parked his stupid car on the sidewalk, in front of the Zebra's door, a Rolls I think, we can't unload! / there's a jerk who has parked his stupid car....)
- b. ?? *Suzanne, c'est un connard qui a garé sa chignole... !*
(Suzanne, it's a jerk who has parked his stupid car....)
- c. ?? *Suzanne, un connard qui a garé sa chignole ... !*
(Suzanne, a jerk who has parked his stupid car....)
- (D. Pennac, *Monsieur Malaussène*)

(54) は、話し手・聞き手の共通の知人から電話があったという出来事を、(55) は、話し手・聞き手に関与的な出来事を、どちらも聞き手にとっての新情報として提示している。これらの場合、話し手が出来事の内容を話し手の知識領域に保有していることを、I型の[*y-avoir*]を直説法現在形で明示的に断定することにより、聞き手に出来事を提示することができる。一方、先行文脈や状況が共有されていない場合は、話し手と聞き手で同定の対象となる課題を共有できないので、II型・III型は容認されにくい。

このような、先行文脈・状況がなく、話し手の知識領域に保有する出来事情報の提示は、(54) (55) のような過去の出来事情報に限らず、Wehr (1984) の (56) や平塚 (1991) で検証されている (57) のような、「課題」(同定対象) が設定されていない場合の出来事の提示も同様の文タイプと考えることができる。

- (56) *Quoi de neuf ? —*
(What's new? —)
- a. *Y'a Matsadoon qui est en ville.* (= (17))
(Matsadoon is in town.)
- b. ?? *C'est Matsadoon qui est en ville.*
(It's Matsadoon who is in town.)
- (57) *Y a-t-il quelque chose de divertissant aujourd'hui ?*
(Is there any entertainment today?)

- a. ○ Il y a François qui va jouer du Bach.
(Francis is going to play Bach.)
- b. × C'est François qui va jouer du Bach. (平塚 1991 より一部抜粋)
(It's Francis who is going to play Bach.)

平塚 (1991) では、「何かが起こったこと、あるいは起こることを前提しない質問に返答する場合も、SV (主語+述語) や IQ (本稿の I 型) は自然なのに対して、CQ (本稿の II 型) は不自然」(平塚 1991) とされている。つまり、(56) は疑問詞疑問文ではあるが、何かが起こったことを前提とする発話ではなく、また (57) の疑問文も何かが起こることを前提しない Yes-No 疑問文である。したがってこれらの文についても、先行文脈・状況がない場合の事態の提示であり、I 型が用いられていると考えられる。

3.2.2.3. 眼前の事態を表す現象文

前節と同じように、先行文脈・状況が無い場合ではあるが、話し手のたった今、目の前で起こった事態を表す現象文には、I 型と III 型は容認されるが、II 型は容認されにくい。II 型が容認されないことは平塚 (1991) ですでに検証されているが、ここでは II 型が容認されないにもかかわらず、III 型が容認されている点が注目すべき点である。つまり III 型は、眼前の事態においては、I 型のように提示の機能を果たしていることがわかる。

- (58) a. Attention ! Il y a le vase qui va tomber ! (Rothenberg 1971)
(Watch out! The vase is going to fall!)
- b. ??Attention ! C'est le vase qui va tomber !
(Watch out! It's the vase going to fall!)
- c. Attention ! Le vase qui va tomber !.
(Watch out! The vase is going to fall!)
- (59) a. Allons bon ! Y a le lait qui bout !
(Oh no! The milk is boiling!)
- b. ? Allons bon ! C'est le lait qui bout !¹⁸⁾
(Oh no! It's the milk that is boiling!)
- c. *Allons bon ! Le lait qui bout !* (M. Arland, *L'Ordre*)
(Oh no! the milk is boiling!)

ここで 3.2.1.節で吟味した III 型との違いが明らかとなる。3.2.1.節で吟味した III 型は、聞き手の明示・非明示的問いかけにより同定すべき課題が話し手と聞き手で共有されている場

¹⁸⁾ 音が聞こえていたりすると、II 型が容認されやすくなるとのコメントがあったが、これは 3.2.2.節の「音」の正体の同定する文として容認されるということになる。

合に容認された。しかし、話し手がたった今知覚した事態を表す現象文には、Ⅱ型が容認されないことから明らかなように、同定すべき課題は設定されていない。突発的に生じた予想外の事態の知覚を表す文である。それゆえ、3.2.1節のⅢ型の〈SN qui SV〉構文には、特別な理由がなければ感嘆符はつかないことが多いが、現象文としての〈SN qui SV〉構文には、ほとんどの事例において感嘆符がつく。

したがって、3.2.1節のⅢ型の〈SN qui SV〉構文は、「課題の場」において聞き手によって解釈される文タイプであるのに対し、本節で提示した現象文としてのⅢ型の〈SN qui SV〉構文は、「発話の場」において聞き手に解釈される文タイプであり、聞き手が文を解釈する領域が異なっていると考えられる。

3.2.3. 同定と提示：(c'est / il y a) 〈SN qui SV〉構文のまとめ

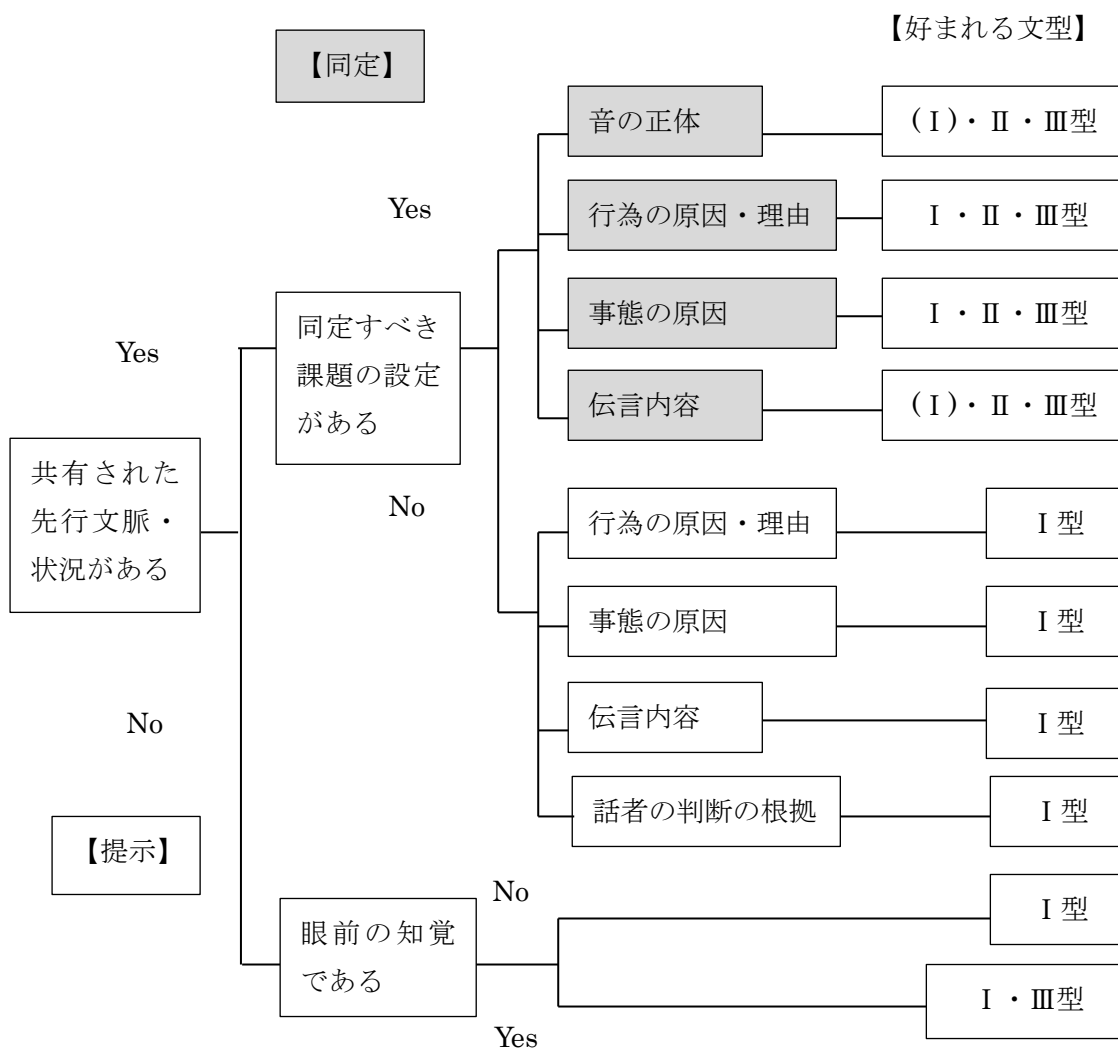
3.2節では、Ⅰ型の〈il y a SN qui SV〉構文の機能を「提示」、Ⅱ型の〈c'est SN qui SV〉構文の機能を「同定」と仮定し、Ⅲ型の〈SN qui SV〉構文がどのような機能を果たす文タイプであるかを、様々な状況を想定し、インフォーマント調査とともに考察した。3.2節で考察した文タイプの事例を、文の機能と選好される文型(Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型)とともに次頁にフローチャートでまとめておく(図3.1)。

まず3.2節では、聞き手の疑問に答える文タイプと、話し手が新たに事態を提示する文タイプに大きく状況をわけて考察した。疑問詞“C'est quoi ça?”“Qu'est-ce qui se passe?”“Pourquoi?”などを用いた「疑問」は、共有された先行文脈・状況に対して発せられるが、この聞き手の疑問により、同定すべき課題の設定が行われる。話し手と聞き手の間で課題の設定が行われた場合(フローチャートの網掛け部分)は、本来同定の機能を持つⅡ型の〈c'est SN qui SV〉構文と、「課題(の場)」と結びつき解釈されるⅢ型の〈SN qui SV〉構文が選好される。またⅠ型の〈il y a SN qui SV〉構文は本来提示の機能しか持たないが、聞き手が課題に結びつけ解釈することにより容認される。

共有された先行文脈・状況がある場合でも、話し手・聞き手の間で課題が設定されていない場合は、Ⅰ型の〈il y a SN qui SV〉構文により、先行文脈・状況と関与的な事態(行為の原因・理由、事態の原因、伝言内容など)が話し手により提示される。特に話者の判断の根拠を示す場合にはⅠ型が選好される。課題が設定されていない場合は、Ⅱ型・Ⅲ型は用いられない。

一方、共有された先行文脈・状況が特にない場合は、Ⅰ型の〈il y a SN qui SV〉構文により聞き手にとって新たな事態が提示される。この場合、Ⅱ型、Ⅲ型は容認されない。しかし、「発話の場」でたった今知覚された事態については、Ⅲ型の〈SN qui SV〉構文が容認される。

図 3.1 文の機能（同定・提示）と選好される形式（Ⅰ型・Ⅱ型・Ⅲ型）



★文の機能と形式
 A 型：同定（同定すべき課題の設定がある） Ⅱ型、Ⅲ型
 B 型：提示（新たな出来事を提示する） Ⅰ型、Ⅲ型

以上の考察から、「課題の場」と結びつき同定の機能を果たす〈SN qui SV〉構文と、「発話の場」において新たな事態を表す〈SN qui SV〉構文は異なる文タイプであることが明らかとなった。2章で分析概念として参照した三尾（1948）の分類では、課題と相補い同定の機能を果たす〈SN qui SV〉構文（フローチャートの網掛け部分）は、場と相補う「分節文」、発話の場で新たな事態を表す〈SN qui SV〉構文は、場を指向する文「未展開文」に相当すると考えられる。したがって、形式としては同じ〈SN qui SV〉形式であるが、「課題の場」において同定の機能を果たす〈SN qui SV〉構文は、聞き手が共有

する課題（トピック）と相補いあうことにより、トピック・コメント構造のコメント部分のみが表された文として聞き手によって解釈され、文として成立すると考えられる。では、「発話の場」では、〈 SN qui SV 〉構文は、どのようにして文として成立するのだろうか。4章で、現象文タイプの〈 il y a SN qui SV 〉 / 〈 voilà SN qui SV 〉構文を吟味した上で、5章で〈 SN qui SV 〉構文について吟味する。

次節では、上記の分析で、様々な文脈で容認された〈 il y a SN qui SV 〉構文についてトピック・コメント構造をもとに考察し、その意味の違いを文の解釈領域をもとに示す。

3.3. 〈 il y a 〉現象文と出来事の解釈領域

本節では、前節で吟味した〈 il y a SN qui SV 〉構文の、以下のような3つの文タイプについて考察する。(60) は共有された先行文脈・状況がある文タイプで、課題が設定されていなくても先行文脈・状況に関連付けられて解釈される。(61) は先行文脈・状況を持たず、また眼前の事態でもない出来事を表す文タイプ、(62) は話し手のたった今目の前で起こった事態を表す文タイプである。

- (60) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)
Il y a Charles qui se marie. (Rothenberg 1971)
(Charle is getting married.)
- (61) Y a Jean qu'a téléphoné. (Lambrecht 1988)
(Jean has called.)
- (62) Papa ! Y a maman qui pleure ! (Un secret)
(Dad! Mom is crying!)

先行研究においては、これら3つの文タイプが様々な分類の中で扱われている。本稿では、(60) の文タイプを〈 il y a 〉説明文、(61) の文タイプを〈 il y a 〉出来事報告文、(62) の文タイプを〈 il y a 〉現象文と称し、それぞれの文のトピック・コメント構造を考察し、これらの文の意味の違いを文の解釈領域の違いにより示す。

まず、3.3.1節で、〈 il y a SN qui SV 〉構文の中で、〈 il y a 〉現象文がどのように先行研究で分析されているかを吟味した後、3.3.2節で〈 il y a 〉説明文と〈 il y a 〉現象文の違いについて、3.3.3節で〈 il y a 〉出来事報告文と〈 il y a 〉現象文の違いを明らかにする。

3.3.1. 先行研究における〈 il y a 〉現象文

〈 名詞句+述語 〉とは異なる統語形式によって明示化される文の主題構造について、川本(1985)では日本語とフランス語の文の主題構造の対照研究が、木下(1978)では〈 非人称の il + VP + NP 〉と〈 il y a NP + qui + VP 〉についてトピックを持たない単一判断の

文とする研究がなされている。以下では、先行研究において (60) (61) (62) の文タイプが様々な分類の中で取り上げられており、トピック・コメント構造に関して、意見が一致していないことを示す。

3.3.1.1. Rothenberg (1971)

3.2.節で示したように Rothenberg (1971) は、〈 il y a 〉説明文 (63) と 〈 il y a 〉現象文 (64) の両者の文タイプを、明示化の有無にかかわらず、状況によって形成されるテーマに対する叙述を 〈 SN qui SV 〉が表現するとし、〈 il y a 〉は “Qu’est-ce qu’il y a ?” “Pourquoi ?” などの問いの答えとなる「説明」の価値をもたらすとする。また、(64) の感嘆形式による文タイプは、命令文、呼びかけ、間投詞などの後でしか生じないため、(63) の 〈 il y a 〉説明文の二次的なタイプとしている¹⁹⁾。

- (63) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)
Il y a Charles qui se marie. (= (60))
(Charles is getting married.)
- (64) Maman, il y a ma poupée qui s’est cassée ! (Rothenberg1971)
(Mom, my doll is broken!)

本稿では、(63) は発話現場の状況をもとにトピック²⁰⁾ (「状況・陰題」) が設定され、それに対する叙述のみが表現された文と考えるが、(64) は話し手がたった今知覚した事態を表す 〈 il y a 〉現象文として異なる文タイプと考える。また、本節では「課題の場」「状況・陰題」を総称する語として「トピック」という用語を用いて議論する。

3.3.1.2. Lambrecht (1988)

Lambrecht (1988) は、本稿で区別する 〈 il y a 〉出来事報告文 (65) と 〈 il y a 〉現象文 (66) を、同じ出来事報告文 event-reporting sentence として扱っている。

- (65) Y’a Jean qu’a téléphoné. (= (61))
(Jean has called.)
- (66) Y’ a le téléphone qui sonne ! (Lambrecht 1988)
(The phone is ringing!)

¹⁹⁾ Rothenberg (1971) : Les syntagmes introduits par C’EST et par IL Y A des deux constructions que nous venons d’étudier peuvent également se présenter sous forme exclamative : *Mon Dieu ! c’est la messe de minuit qui commence ! –Vite ! Il y a un tuyau qui fuit !* Mais ces tours ne deviennent exclamatifs que grâce au contexte, après un impératif, une interpellation ou une interjection, par exemple, donc de façon secondaire.

²⁰⁾ Rothenberg (1971) はテーマという用語を使用しているが、本稿ではテーマ・レーマと同様の概念であるトピック・コメント構造のトピックという用語を用いる。

そして両文タイプを、文頭主語位置から「名詞句」をはずすことで²¹⁾、文全体を新情報の出来事として提示する、トピックを持たない単一判断の文タイプと考える。Lambrecht はこのように、過去の一時点で起こった出来事を伝える (65) のような文タイプも、話し手のたった今目の前で起こった出来事を伝える〈il y a〉現象文も、どちらも聞き手にとって新情報を伝える単一判断の文という点から、同じ文タイプとしている。

本稿では、(65) のような〈il y a〉出来事報告文がトピック・コメント構造を持つ場合もあることを示したうえで、トピックを持たない単一判断の文としかかなり得ない〈il y a〉現象文との違いを明らかにする。

3.3.1.3. Furukawa (1996)

Furukawa (1996) では、〈il y a〉現象文 (67) と、〈il y a〉を持たない単独の〈SN qui SV〉構文 (68) が取り上げられている。

(67) Il y a Pierre qui pleure ! (Furukawa 1996)

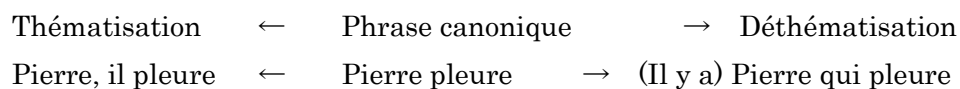
(Pierre is crying!)

(68) Pierre qui pleure ! (Ibid.)

(Pierre is crying!)

Furukawa は Lambrecht 同様、(67) (68) の文タイプを、文主語位置から名詞句をはずした脱テーマ化された構文と捉える (図 3.2)²²⁾。

図 3.2 テーマ化と脱テーマ化の構図 (Furukawa 1996 : 69)



さらに関係節内の述語の意味特徴について Milsark (1977) を参照しつつ分析し、出来事命題を表す以下のような文形式があることを示し、その場合の出来事命題を表す述語が一時的意味特徴を持つ述語に制限されることを示した²³⁾。

²¹⁾ 1.1.3.節でとりあげた、Lambrecht (1987) の話し言葉のフランス語に関する談話的制約に基づいて形成された構文の一つである。

²²⁾ Furukawa (2013) では、不定名詞句を含む文も考慮し、テーマ性のない発話、あるいはレーマ的発話として捉えられている。

²³⁾ Milsark (1974) (1977) は、there 構文の実主語につく述語の制約から、状態記述 state-descriptive 述語 (“sick / drunk” など) と、属性記述 property 述語 (“intelligent / tall”) を区別した。

- (69) a. Elle a les yeux qui sont rouges. (Furukawa 1996)
 (Her eyes are red.)
 b. ? Elle a les yeux qui sont bleus. (Ibid.)
 (She has eyes that are bleu.)
- (70) a. Il y a une place de libre. (Ibid.)
 (There is a vacant seat.)
 b. ? Il y a une place de confortable. (Ibid.)
 (There is a comfortable seat.)

そして関係節内の述語の一時的意味特徴が定名詞句のテーマ性を削減し、出来事命題は「低いテーマ性の名詞句」と「一時的意味特徴を持つ述語」により形成されるとする。その上で、(68) のような、低いテーマ性しか持たない名詞句では発話を談話に定位させることができないので、出来事の場合が発話の場合であることが要求されるとし、(71) が不適切となることにより説明している²⁴⁾。

- (71) a. ? Le facteur qui passait ! (Furukawa 1996)
 (The postman who passed!)
 b. ? Le facteur qui passera ! (Ibid.)
 (The postman who will pass!)

本稿においても、関係節内の述語が一時的意味特徴を持つことは (67) (68) のような現象文と呼ばれる文タイプにとって必要であり、また発話の場は文の解釈領域として重要な役割を果たすと考える。また、Furukawa (1996) の指摘どおり、発話の場は (68) の〈 SN qui SV 〉タイプの現象文に必要と考えるが、出来事の場合が発話の場合であることによって、どのようなメカニズムで〈 SN qui SV 〉構文が談話に定位されるといえるのかについては不明な点が残されている。

さて 3.3.1.節では、以下のような 3 つの〈 il y a SN qui SV 〉構文に関する先行研究の議論を吟味し、3 つの文タイプが様々に分類されていることを示した。

- (72) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)
 Il y a Charles qui se marie. (= (60))
 (Charles is getting married.)
- (73) Y a Jean qu'a téléphoné. (= (61))
 (Jean has called.)

²⁴⁾ Furukawa (1996) の 4 章、9 章を参照。

- (74) Papa ! Y a maman qui pleure ! (=62))
 (Dad! Mom is crying!)

以下では、3.3.2.節において、(72) のような〈 il y a 〉説明文タイプは、先行文脈・状況をもとにトピックが設定され、それに対するコメントのみが表現された文であり、〈 il y a 〉現象文とは区別されることを示す。そして 3.3.3.節においては、(73) のような〈 il y a 〉出来事報告文がトピック・コメント構造を持つ場合もあることを示した上で、トピックを持たない単一判断の文としかなり得ない〈 il y a 〉現象文との違いを明らかにする。その上で、〈 il y a 〉説明文と〈 il y a 〉出来事報告文は共有知識領域で解釈される文タイプであるのに対し、〈 il y a 〉現象文は発話状況領域で解釈される文タイプであることを示す。

3.3.2. 〈 il y a 〉説明文と「状況・陰題」

本節では、まず 3.3.2.1.節において Rothenberg (1971) で曖昧にされている〈 il y a 〉説明文と〈 il y a 〉現象文の違いを明らかにする。その後、3.3.2.2.節において、〈 il y a 〉説明文と同様に課題に答える〈 il y a que 節 〉構文との違いを示す。

3.3.2.1. 〈 il y a 〉説明文と〈 il y a 〉現象文

まず、Rothenberg (1971) が明示化の有無にかかわらず状況によって形成されるテーマに対する叙述を行う文タイプとする〈 il y a 〉説明文は以下のような文である。

- (75) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)
 Il y a Charles qui se marie. (=3)(10)(40a)(60))
 (Charles is getting married.)
- (76) (家に帰ってくると皆が毛布にくるまっている：理由をたずねられて)
 Il y a le chauffage qui ne marche pas. (Rothenberg 1971)
 (The heating isn't working.)
- (77) J'ai téléphoné hier au plombier. Il y a un tuyau qui fuit. (=48))
 (I called the plumber yesterday. A pipe is leaking.)

これらの〈 il y a 〉説明文は文内部にはトピックを持たないが、先行文脈・状況によってトピックが形成され、〈 il y a 〉説明文で叙述（コメント）する、トピック・コメント構造を持つ。3.2.節で参照した、国語学で「状況・陰題」の文（佐治 1973）と呼ばれる文タイプに相当する。

佐治（1973）は、「『A が B だ』の全体が一つのまとまりを示しながら言外の主題に応じており、その主題を顕在させることがむしろ普通ではない文をすべて『陰題』の文」と

呼ぶ (佐治 1973: 115)。そして、「東京が日本の首都だ」のような叙述の内部に主題が含まれているような「転位・陰題」の文とは別に、「状況」を陰題とする文を「状況・陰題」の文と呼び、以下のように説明している。

この文 [=②⑥山が美しい] は転位・陰題の文「(美しいのは) 山が美しい。」であり得るほかに、「そのあたりはどうですか?」といった質問の答でもあり得る。ということは、②⑥は、時間・空間的に限定を受けた場所を基にし、それに有形・無形の種々の要素が加わった「状況」に対して、その中にある属性の一つ「山が美しい」を引き出して判断を表したものだとして理解できるということである。言いかえれば、②⑥のような文は、その全体が状況を主題とする叙述であり、その主題が顕れないところの陰題の文であると把握できるのである。この種の文を「状況・陰題」の文と呼ぶことにする。
(佐治 1973:116)

先行文脈や発話現場の状況によって形成される「状況・陰題」としてのトピックは、〈 il y a 〉説明文自体には含まれないが、“Qu’est-ce qu’il y a ?” “Pourquoi ?” などの話し手の知識を問う聞き手の質問が想定できることから、トピック・コメント構造の文として解釈できる。

一方、Rothenberg (1971) が 〈 il y a 〉説明文との区別を曖昧にしている (78) (79) のような 〈 il y a 〉現象文は、命令文 (Regarde ! / Attention !) や呼びかけ (Maman !) や気づきを表す間投詞 (Tiens !) など聞き手の注意を喚起する表現を伴うことから明らかなように、聞き手の意識には話し手の発話時の直前に、叙述に関連する事態は何も生じていない。つまり、先行文脈・状況によって形成され得るようなトピックは聞き手の意識には存在していないと考えられる。

(78) Maman, il y a ma poupée qui s’est cassée ! (=(64))

(Mom, my doll is broken!)

(79) Attention, il y a le vase qui va tomber ! (Rothenberg 1971)

(Watch out, the vase is going to fall!)

このことは、〈 il y a 〉説明文は、先行文脈・状況により形成されるトピックに結びつけられるため、接続詞 “Parce que” などを付加しやすいのに対し (80) (81) (82)、〈 il y a 〉現象文は容認しないことから裏付けられる (83) (84)。

(80) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)

Parce qu’il y a Charles qui se marie.

(Because Charles is getting married.)

- (81) (家に帰ってくると皆が毛布にくるまっている：理由をたずねられて)
 Parce qu'il y a le chauffage qui ne marche pas.
 (Because the heating doesn't work.)
- (82) J'ai téléphoné hier au plombier. Parce qu'il y a un tuyau qui fuit.
 (I called the plumber yesterday. Because a pipe is leaking.)
- (83) *Maman, parce qu'il y a ma poupée qui s'est cassée !
 (Mom, because my doll is broken!)
- (84) *Attention, parce qu'il y a le vase qui va tomber !
 (Watch out, because there's the vase that is going to fall!)

さらに、〈 il y a 〉説明文は、先行文脈・状況と叙述される事態の間に関連性があれば、(75) (76) (77) の Rothenbberg (1971) の例文を改作し、以下に示すように発話時点に制約されず時の状況補語を設定することができることから、発話時 t_0 のたった今知覚した事態を表す〈 il y a 〉現象文とは異なる。

- (85) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)
 Il y a Charles qui se marie *cet après-midi*.
 (Charles is getting married this afternoon.)
- (86) (家に帰ってくると皆が毛布にくるまっている：理由をたずねられて)
 Il y a le chauffage qui ne marche pas *depuis ce matin*.
 (The heating hasn't been working since this morning.)
- (87) J'ai téléphoné hier au plombier. Il y a un tuyau qui fuit *depuis une semaine*.
 (I called the plumber yesterday. A pipe has been leaking for a week.)

したがって〈 il y a 〉説明文は、先行文脈・状況により形成されるトピック（「状況・陰題」）と関連する話し手の知識情報を叙述することにより、聞き手の知識を更新する文といえる。一方〈 il y a 〉現象文は、トピックを持たず、話し手の知覚領域で捉えた出来事存在を聞き手に提示する文タイプである。

3.3.2.2. 〈 il y a 〉説明文と〈 il y a que 節 〉

さて、前節の〈 il y a 〉説明文タイプは、先行文脈・状況によりトピックが形成され、“Qu'est-ce qu'il y a ?” “Pourquoi ?” などの質問の答えとなりやすい文タイプであることを述べてきたが、〈 il y a SN qui SV 〉形式ではなく、〈 il y a que 節 〉によっても、“Qu'est-ce qu'il y a ?” のような問の答を表す以下のような文タイプがある (88) (89)。特に〈 il y a que 節 〉においては、“Qu'est-ce qu'il y a ?” “Qu'y a-t-il ?” などの問いかけ

が先行する事例が多いことが知られている²⁵⁾。両構文はどのような違いがあるのだろうか。

(88) — *Qu’y a-t-il donc ?* — *Il y a que j’étouffe.* (朝倉 2005)

(— *What’s the matter?* — (It’s just that) *I’m suffocating.*)

(89) — *Dis-moi ce que tu as...* — *Il y a que tu ne m’aimes pas.* (Ibid.)

(— *Tell-me what’s wrong...* — *Well, (It’s just that) you don’t love me.*)

Giry-Schneider (1988) は、“*Qu’est-ce qu’il y a ?*” “*Qu’est-ce qui se passe ?*” に対する答となる文タイプとして両構文がともに出来事を表すことを示し、〈 *il y a SN qui SV* 〉(90b) は〈 *il y a que* 節 〉(90a) から派生するとしている。

(90) a. *Il y a que la baignoire déborde.* (Giry-Shneider 1988)

((It’s just that) *the bath is overflowing.*)

b. *Il y a la baignoire qui déborde.* (Ibid.)

(*The bath is overflowing.*)

その他の先行研究 (Willems & Meulleman 2010) においても出来事文 (*la construction événementielle*) と呼ばれることの多い〈 *il y a que* 節 〉ではあるが、「出来事」をある時空領域で展開する事態表現と考えると、*que* 節内で表される事態が (89) や以下の例文 (91) (92) のように出来事とはみなしにくい事例も存在する。また〈 *il y a que* 節 〉においては、(88) (91) の “*Qu’y a-t-il donc ?*” の “*donc*” (いったい) や、(92) の押し問答の状況、また常に漠然とした問いかけの答としてのみ使用されることから、聞き手が発話現場から手がかりを得にくい状況で使用されることがわかる。

(91) (貴婦人のふりをして囚人の面会に来た女の正体に、女が立ち去った直後に気付いた刑事は怒り狂う。その様をみた書記がたずねる)

— *Qu’y a-t-il donc ? (...)*

— *Il y a que cette femme doit être une voleuse !*

(H. Balzac, *Splendeurs et misères des courtisanes*)

(— *What’s the matter?*

— (It’s just that) *that woman must be a thief.*)

(92) (散歩に出かけることを拒む男の態度にいらいらする夫人。押し問答の後、男が答える。)

— *Qu’est-ce que tu as ? pourquoi prends-tu ces manières-là ? J’ai le désir de faire un tour, je ne vois pas en quoi cela peut te fâcher.*

²⁵⁾ 朝倉(2005)では、「*il y a* が反覆されるか、類似の構文に限る」と記載されている。

- *Il y a que je n'ai pas le sou... Voilà.* (G. Maupassant, *Bel-Ami*)
 (— What's the matter? Why are you behaving like that? I feel like going out,
 I don't see how that can make you angry.
 — (It's just that) I don't have money. That's it.)

また〈 *il y a que* 節 〉内の名詞句の指示対象は、(88) や (92) のような1人称代名詞がコーパスで多く観察され、(91) のような発話現場の指示対象を指す指示詞も観察される。つまり〈 *il y a que* 節 〉は、課題と結びつく具体的な状況が聞き手に与えられていないため、発話の場に存在する、2.2.1.節で見た Prince (1981) の情報特性の *situationally-evoked* な、指示対象に関与する事態として表現されることが多くなると考えられる。

一方、〈 *il y a SN qui SV* 〉形式による〈 *il y a* 〉説明文は、先に見た Rothenberg (1971) の例文のように、トピックとなる先行文脈・状況が、具体的に聞き手に与えられている。

- (93) (Charles の両親の店がめずらしく閉まっている。説明を求められて)
Il y a Charles qui se marie. (=75)
 (Charles is getting married.)
 (94) (家に帰ってくると皆が毛布にくるまっている：理由をたずねられて)
Il y a le chauffage qui ne marche pas. (=76)
 (The heating isn't working.)
 (95) *J'ai téléphoné hier au plombier. Il y a un tuyau qui fuit.* (=77)
 (I called the plumber yesterday. A pipe is leaking.)

そして3.2.節で分析したように、問いかけにより示されるトピックと答であるコメントの間には、以下のような因果関係が存在しており、その因果関係をもとに話し手のコメントを聞き手はトピックに結びつけて解釈すると考えられる。

- (96) (93)の事例： Charles の両親の店の休業 ← Charles の結婚
 (97) (94)の事例： 寒い部屋 ← 暖房の故障
 (98) (95)の事例： 配管工に電話 ← 水道管が漏れている

このような事態の因果関係の聞き手による推論については、第5章の5.3.1.節で検討するが、スキーマ、スクリプト、フレームといった経験から抽出され、パターン化された認知モデルが利用されていると考えられる。Chafe (1987) では、「スキーマは相互に関連付けられた予測のかたまりとして捉えられ、談話にあるスキーマが喚起されると、その中の予測に基づく概念のいくつかは *semi-active* になる」(Chafe 1987) ²⁶⁾とされている。例えば、(96)

²⁶⁾ “The other way in which concepts may become semi-active is amply illustrated in this

では「店の休業」によって「経営者の家族 (Charles)」、(97) では「寒い部屋」によって「暖房」、(98) では「配管工への電話」によって「水道管」はアクセス可能な指示対象として semi-active な状態になっているといえる。

したがって、〈 il y a 〉説明文も〈 il y a que 節 〉も、先行文脈・状況から形成されるトピックに対して、〈 il y a 〉説明文や〈 il y a que 節 〉がコメントを述べる、トピック・コメント構造を持つ文タイプであるが、先行文脈・状況が、共有知識領域に格納されているスキーマを喚起する具体的なものかどうかという違いがあると考えられる。

3.3.3. 出来事の情報（知識）化と出来事の直接認識

本節では、Lambrecht (1988) が同じ出来事報告文として扱う以下の文 (99) (100) が異なる解釈領域を持つことを主張する。本稿では、(99) を〈 il y a 〉出来事報告文、(100) を〈 il y a 〉現象文と称し、事態に含まれる指示対象の存在レベル、トピック・コメント構造を吟味することにより、解釈領域の違いを明らかにする。

(99) Y a Jean qu'a téléphoné. (=65))

(Jean has called.)

(100) Y a le téléphone qui sonne ! (=66))

(The phone is ringing!)

3.3.3.1. 〈 il y a 〉現象文と局面レベルの指示対象

まず、〈 il y a 〉現象文に含まれる名詞句の指示対象の存在様態を考える上で、2章で提示した Carlson (1977) の存在論を導入する。Carlson は、文の中で述語が表す「恒常的」あるいは「一時的」意味内容に呼応して、名詞の指示対象の存在レベルを「類レベル」「個体レベル」「局面レベル」として提示している。

第1章の1.1.5.節で擬似関係節について述べたように、〈 il y a 〉現象文の関係節は、聞き手に同定済みの固有名詞が先行詞として使われることから制限的關係節とは異なり、また virgule (カンマ) を先行詞と関係節の間におけない (virgule をおくと意味が変化する) ことから非制限的 (同格的) 関係節とも異なるとして、擬似関係節と呼ばれる特別な関係節として扱われてきた (Radford 1975, 古川 1984)。

本論では、Carlson (1977) の局面レベルの存在様態の概念を導入し、〈 il y a 〉現象文においては、定・不定にかかわらず、「名詞句」に対する局面レベルの存在量化が関係節の制限的機能により行われると考える。

narrative. These are concepts which belong to the set of expectations associated with a schema (Bartlett:1932, Mandler and Johnson:1977, Schank and Abelson: 1977, Tannen: 1979, etc.). A schema is usefully regarded as a cluster of interrelated expectations. When a schema has been evoked in a narrative, some if not all of the expectations of which it is constituted presumably enter the semi-active states.” (Chafe 1987 : 29)

- (101) Papa ! Y' a maman qui pleure ! [object → stage]
 (Dad! Mom is crying!)
- (102) Y'a le téléphone qui sonne ! [object → stage]
 (The phone is ringing!)
- (103) Y a une bagnole qui arrive, (...), merde ! [kind → stage]
 (A car is coming, (...) damn!)
- (104) Tiens ! Il y a une petite qui te fait de l'œil, regarde donc. [kind → stage]
 (Oh! A girl is making eyes at you, look.)

そして、「たった今、目の前で泣いているママ」(101)、「たった今、鳴っている電話」(102)、「たった今、出現した車」(103)、「たった今聞き手に色目を使っている娘」(104)、これらの局面レベルの指示対象が話し手の知覚領域に存在することを、[y-avoir] が局面レベル述語として使用されることにより話し手によって断定されると考える。

このことから、従来指摘されてきた〈il y a〉現象文の関係節内の述語に属性述語が容認されないことが説明される。

- (105) a. Regarde ! Il y a Paul qui est en train de draguer une fille ! (東郷 2009)
 (Look! Paul is seducing a girl!)
- b. Regarde ! *Il y a Paul { qui est grand / qui a les yeux bleus } ! (Ibid.)
 (Look! There's Paul { who is tall / who has blue eyes }!)

〈il y a〉現象文の指示対象は、話し手の発話時点＝知覚時点に起こっている事態の中で知覚される局面レベルの存在であるのに対し、(105b) のような恒常的な性質を表す属性述語は individual レベルの存在を要求するため、容認されないといえる。

また〈il y a〉現象文が、なぜ単一判断の無題文となるのか、なぜトピック・コメント構造を持つことができないかが以下のように説明できる。

「ある対象について何かを述べる」というトピック・コメント構造を持つ文においては、語られる対象の存在が前提されてはじめて、その対象について語る事ができる。ところが、〈il y a〉現象文の名詞句の指示対象は、出来事の知覚時点＝発話時点に切り出された、話し手の今、目の前にしか存在しない局面レベルの存在である。この局面レベルの指示対象は、出来事場面が話し手に知覚されることによりはじめて認識される、出来事に含まれる存在であり、出来事から独立して認識されることはない。したがって、話し手の目の前で起こっている出来事の一部としてのみ存在する局面レベルの指示対象は存在前提を持たず、語られる対象としてのトピックとなることができないので、〈il y a〉現象文は

トピック・コメント構造を持つことはできないといえる²⁷⁾。

3.3.3.2. 出来事情報の分割と出来事の直接認識

〈 *il y a* 〉 出来事報告文の指示対象の存在レベルを考察する前に、本節では、〈 *il y a* 〉 出来事報告文と 〈 *il y a* 〉 現象文について、場所句や時の副詞句との関係を考察する。

以下で示すように、〈 *il y a* 〉 出来事報告文は、出来事の発生場所や発生時点である場所句や時の副詞句を伴うことができ (106)、またそれらの状況補語が前置される場合もある (107)。

(106) a. *Y'a Jean qu'a téléphoné ce matin.*

(Jean (has) called this morning.)

b. *Y'a un restaurant qui a brulé près de chez nous.*

(A restaurant burnt down near our house.)

(107) a. *Ce matin, y'a Jean qu'a téléphoné.*

(This morning, Jean (has) called.)

b. *Près de chez nous, y'a un restaurant qui a brulé.*

(Near our house, there's a restaurant that burnt down.)

以下のコーパス事例では、直示表現の時の状況補語や、文脈・状況から旧情報と考えられる場所の状況補語が使用されている (108) (109)。

(108) *Ce matin, il y a un type qui a laissé son journal sur la table, au café du*

Commerce. C'était Le Populaire. J'ai apporté la première page pour vous en faire profiter. (B. Clavel, *La Maison des autres*)

(This morning, there was a guy who left his newspaper on the table, at the Cafe du Commerce. It was Le Populaire. I've brought the first page to share with you.)

(109) (要塞のあるドウオモンの戦況を話している)

Au village de Douaumont, il y a un colonel qui a déclaré : " moi vivant, les

²⁷⁾ 東郷 (2009) では、(73)のような眼前描写存在文で、存在文に課せられる定性制約が解除される理由を以下のように説明している。

(73) *Regarde! Il y a le Père Noël devant ta maison!* (東郷 2009)

「類 (kind) レベルと個体 (object) レベルの存在は、共有知識領域に登録されており存在前提を持つ。しかし局面 (stage) レベルの存在は、出来事を構成する要素として、類レベルや個体レベルの存在からその都度新たに切り出されるものであり、存在前提をいかなる領域にも持たないと考えられる。したがって、すでに存在前提を持つ事物についても、その局面レベルの存在を新たに述べることは Grice の格率に違反せず、文として情報価値を持つのである。」(東郷 2009 : 34-35)

boches n'entreront pas.”

(H. Bordeaux, *Les Derniers jours du fort de Vaux (9 mars-7 juin 1916)*)

(In the village of Douaumont, there's a colonel who declared: "As long as I live, the Boches will not enter.")

これに対して、〈 il y a 〉現象文は出来事の発生場所や発生時点「今・ここ」についての情報は一般に付与されない。このような違いは、状況補語に対する質問が〈 il y a 〉出来事報告文にはできるのに対し、〈 il y a 〉現象文にはできないことから裏付けられる。

(110) — Y'a Jean qu'a téléphoné.

(Jean has called.)

— Quand ?

(When?)

(111) — Y'a un restaurant qui a brûlé.

(A restaurant burnt down.)

— Où ?

(Where?)

(112) — Papa ! Y a maman qui pleure !

(Dad! Mom is crying!)

— *Quand ?

(When?)

(113) — Papa ! Y a maman qui pleure !

(Dad! Mom is crying!)

— ?*Où ? ²⁸⁾

(Where?)

しかし〈 il y a 〉現象文には状況補語が全く付加できないわけではなく、出来事性を高めるような場所句は以下のように付加することができる。ただし、それらの場所句を前置すると容認度が下がる。

(114) a. Regarde ! Il y a le Président qui fume dans l'église !

(Look! The President is smoking in the church!)

b. Regarde ! Il y a un chien qui fait caca sur ton sac !

(Look! A dog is shitting on your bag!)

²⁸⁾ 話し手の声は聞こえるが、どこにいるかわからないような場合に場所を問う質問ができるという意見があった。

(115) a. Regarde ! ? Dans l'église, il y a le Président qui fume !

(Look! In the church, the President is smoking!)

b. Regarde ! ? Sur ton sac, il y a un chien qui fait caca !

(Look! On your bag, a dog is shitting!)

なぜ、〈 il y a 〉 出来事報告文では時や場所の状況補語を前置することができるのに対し、〈 il y a 〉 現象文では場所の状況補語を前置できないのだろうか。〈 il y a 〉 出来事報告文で前置された (107) (108) (109) のような状況補語は、出来事が適用される範囲を設定しており、Chafe (1976) の考えるトピックに相当する。Chafe (1976) では「トピックは主たる叙述が成り立つ空間的・時間的な枠組みを示したり、叙述が成り立つ個体を指定する²⁹⁾」として (116) のような文における時や場所の副詞句をトピックと位置付けている。

(116) a. Tuesday, I went to the dentist. (Chafe 1976)

b. In Dwinelle Hall people are always getting lost. (Ibid.)

Langacker (1991) においても、(117) のような主節の叙述全体を位置づける場所副詞句は *setting* と呼ばれ、ある参加者が置かれる場所 *location* を示す前置詞句とは区別されている。そして出来事全体の叙述を含む *setting* は文頭に生じ得るが、参加者が置かれた場所を示す前置詞句は、文頭や文末に生じにくい場合があることを示している (118)³⁰⁾。

(117) a. *In Louisiana*, a hurricane destroyed several small towns.

(Langacker 1991: [=7a])

b. She saw many interesting people *at the beach*. (Ibid.: [=7b])

(118) a. I chopped the onions *on the counter* with a cleaver. (Ibid.: [=10a])

b. ??I chopped the onions with a cleaver *on the counter*. (Ibid.: [=10b])

c. ? *On the counter*, I chopped the onions with a cleaver. (Ibid.: [=10c])

このように前置された状況補語が出来事の枠組みを示すトピックとして機能することを考えると、〈 il y a 〉 出来事報告文の前置された状況補語は、出来事の枠組みを示すトピッ

²⁹⁾ “What the topics appear to do is to limit the applicability of the main predication to a certain restricted domain. (...) Typically, it would seem, the topic sets a spatial, temporal, or individual framework within which the main predication holds.” (Chafe 1976:50)

³⁰⁾ “We see from (7)-(8) that both spatial and temporal expanses lend themselves to contrual as the setting, which is global and wholly includes the event. By contrast, a location—which we can characterize as a fragment of the setting—may be the site of just a single participant at a certain moment. (...) In (10), we observe another difference between a location and a setting, namely that an expression describing the former is sometimes most naturally situated in the middle of a clause instead of at its periphery.” (Langacker 1991: 300)

クとして機能しており、(107) を例にとると以下のように表すことができる。

- (119) a. [Ce matin]_{TOPIC} — y'a [Jean qu'a téléphoné]_{COMMENT}
(This morning, Jean has called.)
b. [Près de chez nous]_{TOPIC} — y'a [un restaurant qui a brûlé]_{COMMENT}
(Near our house, a restaurant burnt down.)

これに対して、〈 il y a 〉現象文の場所句は前置しづらいことからわかるように、これらの場所句は出来事の枠組みを示すのではなく出来事に含まれていると考えられる (120)。

- (120) a. Il y a [le Président qui fume dans l'église]_{COMMENT}
(The President is smoking in the church!)
b. Il y a [un chien qui fait caca sur ton sac]_{COMMENT}
(A dog is shitting on your bag!)

つまり、過去に起こった出来事など知識情報を表す〈 il y a 〉出来事報告文は、出来事の発生した空間的・時間的枠組みを示す状況補語をトピックとして分割し、トピック・コメント構造を持つ文を形成することができるのに対し、〈 il y a 〉現象文は話し手の目の前で発生した出来事の直接認識をそのまま伝える文であるため、出来事の部分を取り出すことができず、トピック・コメント構造を持ってないと考えられる。

3.3.3.3. 出来事の情報化と指示対象の存在レベルのアップデート

本節では〈 il y a 〉出来事報告文の指示対象の存在レベルについて考察する。3.3.3.1.節で〈 il y a 〉現象文の存在レベルは、関係節の制限的機能により局面化された局面レベルの存在であり、話し手の知覚領域という局所的な時空領域で話し手が [y-avoir] を局面レベル述語として用い断定すると考えた。一方〈 il y a 〉出来事報告文は、例えば (121) の例文において、関係節内の述語 [a téléphoné] は局面レベル述語であるが、出来事発生時 t_1 < 発話時 t_0 の期間においては、Jean が参与者となる出来事を、いつ、どこにおいても同じように表現することができる。

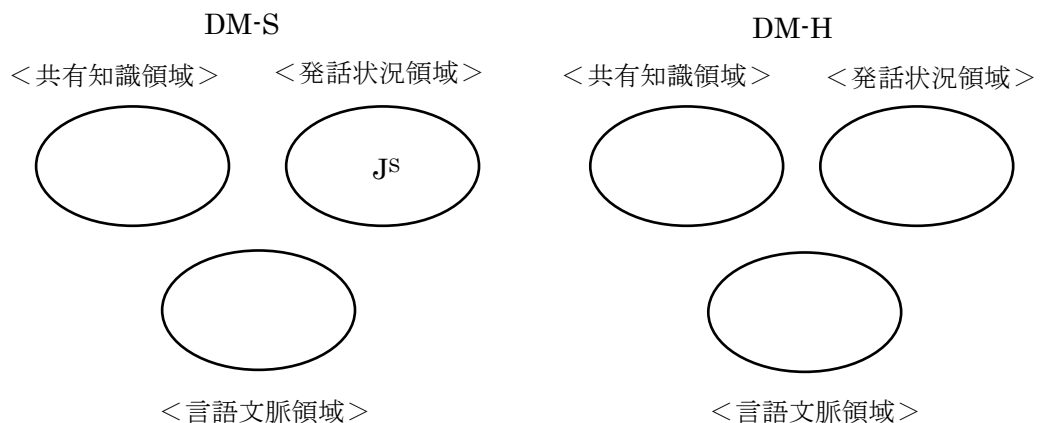
- (121) a. *Ce matin*, y a Jean qu'a téléphoné.
(This morning, Jean (has) called.)
b. *Hier*, y a Jean qu'a téléphoné.
(Yesterday, Jean called.)
c. *Avant-hier*, y a Jean qu'a téléphoné.
(The day before yesterday, Jean called.)

このようにいつどこで話しても同じ出来事の参与者である **Jean** を、特定の時間・特定の場所にしか存在しない局面レベルの存在と考えることができるだろうか。また、過去に起きた事態であるにもかかわらず、[*il y a*] の現在形により出来事の報告が行われている。なぜ過去の事態の報告であるにもかかわらず、現在形が用いられるのだろうか。

確かに < *il y a* > 出来事報告文の名詞句 **Jean** の指示対象は、出来事発生時 **t1** においては、特定の時間・特定の場所にしか存在しない局面レベルの存在である。ただしその後は、出来事 (E1) [**Jean^s** ³¹⁾ **a téléphoné**] は情報 (知識) 化され、**Jean** の個体レベルについての情報として話し手の共有知識領域に蓄えられ、指示対象は局面レベルから個体レベルへ存在レベルのアップデートが行われたと考えられる。

談話モデルにより時系列で表すと、まず話し手が **Jean** から電話をもらった時点 **t1** においては、電話をかけてきた **Jean** は、以下の図で示すように、時点 **t1** における局面レベルの存在である (図 3.3)。

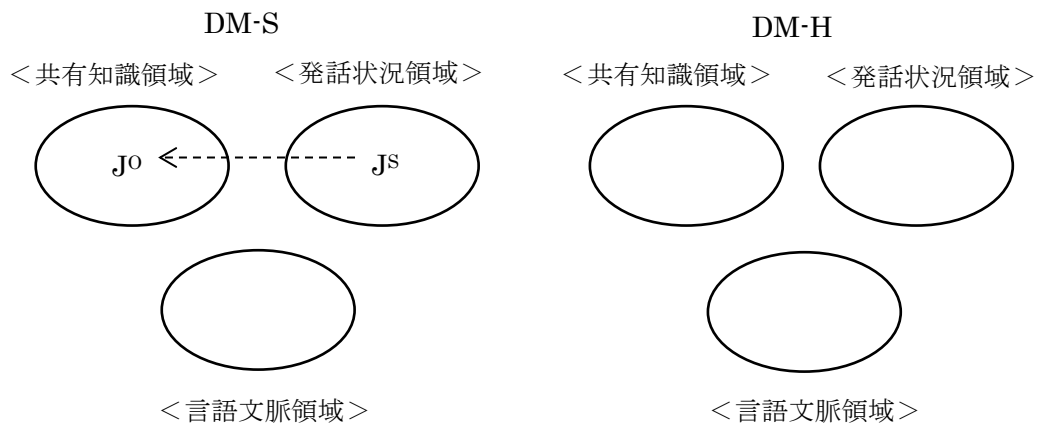
図 3.3 出来事の情報化(1) 出来事発生時 **t1** の局面レベルの **Jean^s**



その後この出来事情報は、話し手の記憶が蓄積される共有知識領域において、個体レベルの **Jean** の出来事情報として登録される (図 3.4)。

³¹⁾ Carlson (1977) では、存在レベルを上付き文字で示す。s が局面レベル、o が個体レベル、k が類レベルである。

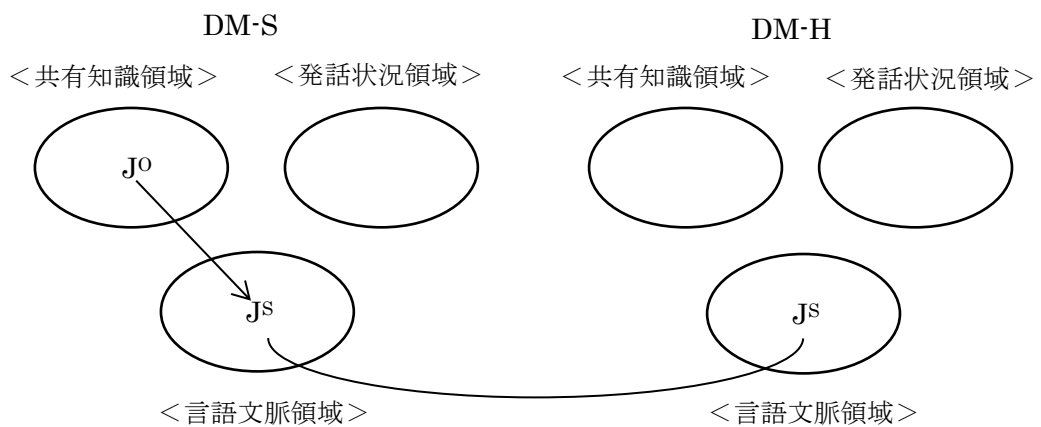
図 3.4 出来事の情報化(2) 個体レベルの Jean⁰ へのアップデート



発話状況領域の J^s から共有知識領域の J^0 への点線は、stage-object コネクタを表す。話し手の共有知識領域では、「Jean が電話をしてきた」という出来事情報以外にも、「Jean は話し手と聞き手の友人である」「Jean は今海外にいる」など、個体レベルの Jean に関する様々な情報が登録されている。それらの知識情報の中には、話し手と聞き手が共有している情報もあれば、話し手だけが保持している情報もある。

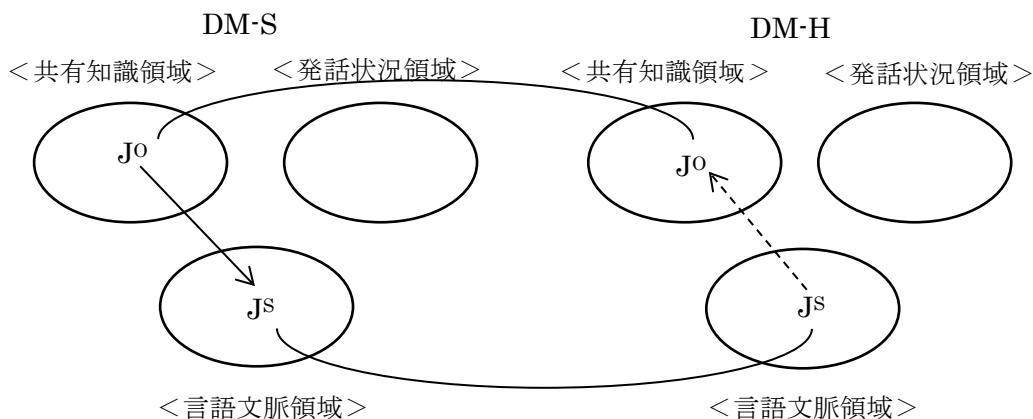
そして発話時 t_0 においては、話し手の共有知識領域において個体レベルの Jean について蓄えられていた、聞き手にとっては新情報と話し手が想定する出来事情報「Jean が電話をしてきた」が、話し手・聞き手に関与的な時空領域内に起きた Jean の出来事情報として、言語文脈領域を介して聞き手に伝えられる (図 3.5)。言語文脈領域の J^s は、出来事発生時の時空領域に束縛された局面レベルの Jean を表す。共有知識領域の J^0 と言語文脈領域の J^s を結ぶ矢印線は、個体レベルの存在から局面レベルの存在を切り出す object-stage コネクタを表す。

図 3.5 出来事の情報化(3) 言語文脈に導入された局面レベルの Jean^s



話し手から局面レベルの **Jean** について新たな出来事情報を得た聞き手は、共有知識領域に管理されている個体レベルの **Jean** についての情報と照合し登録情報を更新する (図 3.6)。

図 3.6 出来事の情報化(4) 聞き手の **Jean**⁰ についての登録情報の更新



DM-H の言語文脈領域の **Js** と共有知識領域の **Jo** は、**stage-object** コネクタで結ばれアップデートされる。DM-S と DM-H の個体レベルの **Jean** は同一性コネクタで結ばれ、最終的に「**Jean** が電話をしてきたと」という情報の共有化が行われたことを示す。

出来事の情報 (知識) 化にともなう指示対象の存在レベルのアップデートという概念については東郷 (2009) でとりあげられており、〈 *il y a* 〉出来事報告文だけでなく、様々な文において観察されることが示されている。以下に例文を一部紹介する。

- (122) a. The rat was (just) reaching Australia in 1770. (Carlson et al. 1995)
 b. Ah, tu fumes ! Je ne savais pas. (東郷 2009)
 (Oh, you smoke! I didn't know (that).)

東郷 (2009) においては、(122a) は、何匹かのネズミがオーストラリアにはじめて出現した現実の出来事が、類としてのネズミの大陸への出現として認識されており、上陸したネズミが局面レベルから類レベルへアップデートされたと説明される。また (122b) は、煙草を吸わないと思っていた人が煙草を吸っているところを目撃した際の発話であり、目撃した喫煙行為の局面レベルの出来事が、「君は煙草を吸う」という習慣的喫煙を意味する、個体レベルの恒常的属性の知識へとアップデートされたと説明されている。

つまり、局面レベルの指示対象が存在するからには、個体レベルや類レベルの指示対象も存在すると考えられ、時間に束縛されない知識領域において、抽象的な個体レベルや類レベルの存在にアップデートされることが考えられる。

このような出来事の情報 (知識) 化が 〈 *il y a* 〉出来事報告文において行われていることは、(123a) のような知識を問う状況節と 〈 *il y a* 〉出来事報告文が共起することからも

裏付けられる。一方〈il y a〉現象文は話し手の目の前で発生した出来事を咀嚼することなくありのままに述べる文であるため、知識を問うような状況節とは共起しない(123b)。

- (123) a. Si je me souviens bien, y a Jean qu'a téléphoné.³²⁾
(If I remember well, Jean called.)
b. * Si je me souviens bien, y a maman qui pleure !
(If I remember well, mom is crying!)

(123a) の出来事の情報化は、過去に起こった出来事の情報化の事例であるが、知識情報の提示という点においては、(124) のような、過去に得た、現在も続く一時的な状態についての情報や、近接未来の予定を表すような知識情報も、共有知識領域から〈il y a〉を用いて報告されることがわかる。

- (124) a. Si je me souviens bien, y a Macron qui est en ville.³³⁾
(If I remember well, Macron is in town.)
b. Si je me souviens bien, y a François qui va jouer du Bach aujourd'hui.³⁴⁾
(If I remember well, Francis is going to play Bach.)

つまり〈il y a〉出来事報告文は話し手の知識に基づく文であり、個体レベルのJeanについての出来事情報を話し手が発話時現在において共有知識領域に保有していることを、話し手が断定することにより、聞き手に新情報として明示的に伝達していると考えられる。また、共有知識領域において情報化された出来事情報は、3.3.3.2節で見たように、情報を加工してトピック・コメント構造を持つ文を形成できる。一方〈il y a〉現象文は話し手の知覚により捉えられた出来事がそのまま表現されるため、出来事に含まれる指示対象は局面レベルの存在でしかあり得ず、トピック・コメント構造を持つ文を形成することはできない。

3.3.4. 〈il y a〉現象文の解釈領域：知覚か知識か

ここでこれまでの考察のまとめとして、同じ文形式が文脈によって異なる文タイプとして用いられた場合の、聞き手による応答可能な表現を観察する。(125) は〈il y a〉説明文、(126) は〈il y a〉出来事報告文、(127) は現象文として、同じ文形式“il y a ma poupée qui s'est cassée.” が用いられたとした場合の作例である。

³²⁾ Lambrecht (1988) の例文に知識を問う状況節をつけて容認度調査を行った。

³³⁾ Wehr (1984) の (56) の Matsadon を Macron に変更し状況節をつけ容認度調査を行った。

³⁴⁾ 平塚 (1991) の (57a) に状況節をつけ容認度調査を行った。

- (125) — Pourquoi tu fais la tête ?
 — Il y a ma poupée qui s'est cassée.
 — Ah, bon... je ne le savais pas.
 (— Why are you sulking?
 — My doll is broken.
 — Oh really? I didn't know that.)
- (126) — Hier, il y a ma poupée qui s'est cassée.
 — Ah, bon.... je ne le savais pas.
 (— Yesterday, my doll broke.
 — Oh really? I didn't know that.)
- (127) — Maman, il y a ma poupée qui s'est cassée !
 — ?*Ah, bon... je ne le savais pas.
 (— Mom, my doll is broken!
 — Oh really? I didn't know that.)

まず、応答“je ne le savais pas”が(125)(126)で適切であることから、〈il y a〉説明文と〈il y a〉出来事報告文については、聞き手が文を共有知識領域で解釈し、知識状態を更新したことが確認できる。これに対し(127)の応答が容認されないのは、〈il y a〉現象文の解釈領域が発話状況領域であるにもかかわらず、聞き手が共有知識領域の知識状態に言及しているためであると考えられる。

3.3節では、〈il y a〉説明文と〈il y a〉出来事報告文は、聞き手の共有知識領域で解釈され、知識状態の更新を行う文であるのに対し、〈il y a〉現象文は、話し手の知覚領域で捉えられた出来事として発話状況領域において聞き手に解釈される文タイプであることを明らかにした。

3.4. まとめ

本章ではまず、3.2節において、〈SN qui SV〉構文に二つの文タイプがあることを〈c'est〉〈il y a〉との共起関係をもとに明らかにした。〈c'est〉は同定の機能を〈il y a〉は提示の機能を果たすと仮定した上で、聞き手の疑問に答える場合と、聞き手に新たな事態を提示する場合に〈SN qui SV〉構文がどのように使用されるかを検討した。

そして、〈SN qui SV〉構文は、共有された先行文脈・状況がある中で“C'est quoi ça ?” “Qu'est-ce qui se passe ?” “Pourquoi ?”などの問により設定された「課題(の場)」と結びつき解釈される場合と、話し手・聞き手が存在する「発話の場」でたった今起きた事態として解釈される場合があることを明らかにした。

また、話し手と聞き手で「課題」が共有されている場合、本来同定の機能を持つ〈c'est SN qui SV〉構文は問題なく用いられるが、本来提示の機能しか持たない〈il y a SN qui

SV) 構文も、聞き手が「課題の場」で事態を結びつけ解釈することにより容認されることを示した。一方、共有された先行文脈・状況がある場合でも「課題」が共有されていない場合は、〈 c'est SN qui SV 〉構文や〈 SN qui SV 〉構文は用いられず、〈 il y a SN qui SV 〉構文により、先行文脈・状況と関与的な事態が話し手により提示されることを明らかにした。特に、話者の判断の根拠を示す場合には、〈 il y a SN qui SV 〉構文が選好されることを示した。

さらに3.3節では、様々な文脈で使用される〈 il y a SN qui SV 〉構文について、先行文脈・状況がある〈 il y a 〉説明文、先行文脈・状況を持たず、眼前の事態でない〈 il y a 〉出来事報告文、眼前の事態を表す〈 il y a 〉現象文の3つの文タイプにわけて、トピック・コメント構造をもとに考察した。

そして、〈 il y a 〉説明文は、先行文脈・状況により形成されるトピック（「状況・陰題」）をもち、そのトピックに関連する事態として共有知識領域で解釈されることを、〈 il y a 〉出来事報告文は、出来事の発生した空間・時間的枠組みを示す状況補語をトピックとすることができ、情報化された知識情報として共有知識領域において解釈されることを明らかにした。一方〈 il y a 〉現象文は、共有知識領域で解釈される〈 il y a 〉説明文や〈 il y a 〉出来事報告文と異なり、たった今話し手の目の前で起きた事態として発話状況領域で解釈されることを示した。

4章、5章では、発話の場で、たった今目の前で起きた事態を表す〈 il y a 〉現象文、〈 voilà 〉現象文、そして〈 SN qui SV 〉構文がどのように話し手によって提示され、聞き手にどのように解釈されるのかを考察していく。

第4章：現象文と発話の場：〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 〈 SN qui SV 〉 構文

第3章では、課題の場、発話の場において、〈 SN qui SV 〉によって表される事態が、どのように同定あるいは提示されるかを〈 c'est 〉 〈 il y a 〉とともに考察した。本章では、たった今話し手が知覚した事態が、どのように聞き手に提示されるか、また聞き手によって解釈されるかを、〈 il y a 〉 〈 voilà 〉とともに考察する。特に、これまで「存在」「直示」の意味を持つとされてきた〈 il y a 〉 〈 voilà 〉が、以下の(1)のような〈 il y a SN qui SV 〉形式、(2)のような〈 voilà SN qui SV 〉形式のどちらにおいても、たった今話し手が知覚した事態を表すことができることに着目し、両者にどのような意味の違いがあるのか、またそれらの違いが何によって生じるのかを考察する。

- (1) Papa ! *Ya* maman qui pleure ! (*Un secret*)
(Dad! Mom is crying!)
- (2) Bon dieu ! Les *voilà* qui s'amènent ! (*Tirez sur le pianiste*)
(Oh, my God! There / Here they come! ¹⁾)

3章の〈 il y a SN qui SV 〉構文の考察で明らかのように、同じ形式の構文でも、文の解釈領域が異なると文の意味タイプが異なる。ここでは、文の意味タイプとして、たった今話し手が知覚した事態を表す文タイプを「現象文」と称し、〈 il y a SN qui SV 〉形式や〈 voilà SN qui SV 〉形式によって、たった今話し手が知覚した事態を表す文タイプを、〈 il y a 〉現象文、〈 voilà 〉現象文と呼ぶ。

また、〈 voilà 〉構文には、(3)(4)(5)のような発話現場で生じた事態を表す様々な形式の文タイプがある。(3)は、(2)のような1.1.5節で見た擬似関係節の位置に過去分詞や形容詞などの属詞や状況補語などを持つ文タイプである。また、(4)(5)は〈 voilà que 節 〉形式の文タイプであるが、事態の中核的参加者を持たない(4)のような文タイプと、(5)のような事態の中核的参加者(e.g. Marie)を持つ文タイプがある。本章ではこれらの文タイプと〈 voilà SN qui SV 〉形式の文タイプの違いを分析することにより、〈 voilà SN qui SV 〉構文が話し手の知覚領域における状態変化を表す有標の文タイプであることも明らかにする。

- (3) Alors, te *voilà* rassurée. (*Les Nuits de la pleine lune*)
(So, you are reassured now.)
- (4) Allons bon, *voilà* qu'il pleut ! (J. Green, *Adrienne Mesurat*)

¹⁾ インフォーマントによると、英語の *there* / *here* の対立については、遠方にやってくるのが見えたときには *there* が、近くにやってくるのに気付いたときには *here* が選好されやすい。また、心理的状态も選択に影響するとの意見があるが、ここでは文脈からなるべく自然な訳を、括弧内に付記するに留める。

(Oh no, it starts to rain ! / it's raining now!)

(5) *Voilà que Marie chante !*

(Now Marie is singing!)

そして、(1) (2) のような、話し手がたった今知覚した事態を表す 〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉現象文がどのように事態を聞き手に提示するかを明らかにした上で、(6) のような統語的には名詞句である 〈 *SN qui SV* 〉構文が、どのようにして文として解釈されるのかについての5章の考察の糸口とする。

(6) *Allons bon ! Le lait qui bout !*

(M. Arland, *L'Ordre*)

(Oh no! The milk is boiling!)

4. 1. 先行研究と問題提起

この節では、話し手がたった今知覚した出来事を表す 〈 *il y a* 〉現象文と 〈 *voilà* 〉現象文を考察する上で、まず4.1.1.節で、どのように「直示」と「存在」という考え方が議論されているかについて英語の *there* 構文についての Bolinger (1977) の論考を吟味する。その上で、〈 *il y a* 〉現象文と 〈 *voilà* 〉現象文を直接比較した先行研究は少ないが、話し手がどのように知覚した事態を聞き手に提示するかについての Lambrecht (2000) の議論を、4.1.2.節で検討する。そして4.1.3.節では、様々な事態を提示する 〈 *voilà* 〉構文についての先行研究を検討する。

4. 1. 1. 直示と存在

朝倉 (2005) にあるように、〈 *voilà* 〉はその成り立ちを背景として (7) のように相手に見ることを促す直示的表現が基本とされ²⁾、〈 *il y a* 〉は存在そのものを問題とする場合をのぞけば、(8) のようにある場所やある状況で存在するものを述べる表現とされることが多い³⁾。

(7) *Voilà la tour Eiffel.*

(朝倉 2005)

(Here's the Eiffel tower.)

(8) *Il y a des photos [deux photos] sur la table.*

(Ibid.)

(There are pictures (two pictures) on the table.)

²⁾ 朝倉 (2005 : 327-328) : *voici* [*voilà*]+名詞[代名詞] : 「これは[あれは]...である、ここに[そこに]...がある」と指さして相手に見ることを促すのが、いちばん普通の用法である。

³⁾ 朝倉 (2005 : 334) : *il y a* はある状況で存在しているものが何であるかを述べる言い方である。*Il y a un Dieu.* 「神は存在する」のように、あるものの存在そのものを問題にしている特別な場合を除けば、存在する場所を示す補語を伴うか、またはそれが前の文か状況で示されている。

そして朝倉 (2005 : 334) では、〈 il y a 〉は「voici, voilà とは異なり、指示する働きはないので、Voilà mon père. 『あそこにお父さんがいる』の代わりに×Il y a mon père.とは言わない。」と述べられている。

この直示性の有無という点について、Bolinger (1977) は次の (9) (10) をともに提示構文と称したうえで、「(9) は、あるものを眼前の場面に差し出す (あるものをわれわれの面前に (BEFORE OUR PRESENCE) 、文字どおりあるいは比喩的に差し出す) のに対し、(10) はあるものをわれわれの心に向けて差し出す (ある知識を意識にのぼせる)」とし、there には意味がないとする研究に対し、there が意味をもつことを主張した。

(9) Across the street is a grocery. (Bolinger 1977)

(10) Across the street there's a grocery. (Ibid.)

そして、そのように考えることにより以下の違いが説明できるとし、「(12) と (15) は一片の情報を扱っているのに対し、(13) は直示的 (deictic) である。see that は、tell that と同様、叙実的なのである」としている⁴⁾。

(11) *As I recall, across the street is a grocery. (Bolinger 1977)

(12) As I recall, across the street there's a grocery. (Ibid.)

(13) As you can see, across the street is a grocery. (Ibid.)

(14) *I can see that across the street is a grocery. (Ibid.)

(15) I can see that across the street there's a grocery. (Ibid.)

このように Bolinger は、(9) のような there のない提示構文が直示的に事態を聞き手の目の前に提示するのに対し、(10) のような there のある提示構文は聞き手の意識に情報を提

⁴⁾ Bolinger (1977 : 93-94) : I shall use the term PRESENTATIVE CONSTRUCTION for both of the following, where a locative, or there, or both, precedes the verb:

[20] Across the street is a grocery.

[21] Across the street there's a grocery.

The question is, do these two presentatives mean the same? At first blush they look identical. Yet if we assume that the first presents something on the immediate stage (brings something literally or figuratively BEFORE OUR PRESENCE) whereas the second presents something to our minds (brings a piece of knowledge into consciousness) we have an explanation for the following:

[22] *As I recall, across the street is a grocery.

[23] As I recall, across the street there's a grocery.

[24] As you can see, across the street is a grocery.

[25] *I can see that across the street is a grocery.

[26] I can see that across the street there's a grocery.

Examples [23] and [26] deal with a piece of information, whereas [24] is deictic; see that, like tell that, is factive.

本文の鍵括弧内は、中右(1981 : .185-186)の邦訳を参照し、例文番号は改変した。

示すると説明している。

また、(9) のような *there* のない提示構文については、「場面こそが既出部分とのつなぎとなるわけで、だから場面は、ある意味では、すでに話題化されているということになる」が、「ある思考の流れをはじめて述べるにあたって提示構文を用いるとすれば、それは *there* の付いた提示構文でなければならない」とする。そして (16) のような *there* のない提示構文について、「ある人が脳について講義をするとすれば、その人は立ち上がって、次のようなことばで始めることはないだろうと思われる。しかし大脳における役割の分業という問題がすでに取り上げられていて、たとえば、右半球の機能についてはすでに説明が済んでいるということであれば、それに続いて(16)が来ても無理はないのである」と説明している⁵⁾。

(16) *In the left hemisphere of the brain are centers that control the production of
speech. (Bolinger 1977)

このように Bolinger (1977) は、提示構文において *there* の有無によって、「直示 (*there* 無)」と「存在 (*there* 有)」という提示の仕方が異なるという点に加え、先行文脈の有無という違いがあることも指摘している。

Lakoff (1987) においても、「直示」と「存在」という捉え方は *there* 構文の分類の根幹として踏襲されている。Lakoff は *there* 構文そのものについて、(17) のように *here* と交替可能な「直示的 *there* 構文」と (18) のように *here* と交替できない「存在的 *there* 構文」の二種類にまず大きく分類し⁶⁾、その上で下位分類した構文間の意味関係をプロトタイプ的な中心をもつ放射状カテゴリーによって示している。

(17) [直示的] There's Harry with his red hat on. (Lakoff 1987)

(18) [存在的] There was a man shot last night. (Ibid.)

同じような考え方による研究は、フランス語の 〈 *voilà* 〉 〈 *il y a* 〉 については Bergen &

⁵⁾ Bolinger(1977:110-111): In presentatives without *there*, the stage is a link to what has gone before; it is in a sense topicalized. (...) But if the presentative initiates a line of thought, *there* must be added. Someone lecturing on the brain would not stand up and say, as an opener,

[275] *In the left hemisphere of the brain are centers that control the production of speech. But if the matter of lateralization has already come up – for example, if the functions of the right hemisphere have been mentioned – this sentence can follow naturally.

本文の鍵括弧内は、中右(1981 : 221)の邦訳を参照し、例文番号は改変した。

⁶⁾ Lakoff (1987: 468) : Let us begin with certain basic and relatively well-known facts. There are two types of *there*-constructions, the deictics and the existentials:

Deictic: There's Harry with his red hat on.

Existential: There was a man shot last night.

Plauché (2005) が行っており、〈 *voilà* 〉の中心的意味を「直示」、〈 *il y a* 〉の中心的意味を「存在」とし、それぞれのプロトタイプをもとに拡張した構文間の関係を示す研究を行っている。

本論文では、Lakoff (1987) や Bergen & Plauché (2005) が行うような「直示」「存在」をプロトタイプとする構文とそれぞれの下位構文のつながりを示す研究ではなく、〈 *voilà* 〉の「直示」、〈 *il y a* 〉の「存在」というそれぞれの提示方法が、「話し手のたった今、目の前で起きた出来事を表す」現象文タイプにどのような意味の違いとなって表れるかを考察する。3章でも示したように、〈 *il y a* 〉構文は、過去に起こった出来事や予定された出来事、また現在の状態も含め、様々な事態を情報として提示できるだけでなく、話し手のたった今目の前で起きた出来事も提示する。また〈 *voilà* 〉構文にも話し手の「今、ここ」を基準としない語りで用いられる文タイプが存在する。したがって、聞き手の目の前に事態を提示（直示）、聞き手の意識に事態を提示（存在）という捉え方だけでは〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文の違いを十分に説明できない。そこで、Bolinger が *there* のない提示構文に関して先行文脈の必要性を指摘している点に着目し、〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉現象文と発話状況領域における先行文脈との関係を考察する。そして〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉の事態の提示方法と先行文脈との関係を明らかにした上で、話し手のたった今知覚した事態がどのような意味を伴って提示されるかを示す。

次節では、〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文についての先行研究を検討する。

4.1.2. 〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉 現象文

Lambrecht (2000) は、提示構文の下位分類として主節が知覚にかかわる文タイプを分析している。その中で、(19) のような *voilà* 提示構文の直示タイプと (20) のような 3章で取り上げた *il y a* 出来事文の違いについて、*voilà* 提示構文の直示タイプは発話状況において聞き手に知覚可能なものとして提示されるが、*il y a* 出来事文においては聞き手の直接知覚は含意されておらず、知覚していない聞き手に反応をおこさせるための発話と述べている⁷⁾。

(19) *Voilà la sirène qui hurle !*
(There's the siren crying!)

(Lambrecht 2000 : [31])

⁷⁾ Lambrecht (2000 : 63) : Il est révélateur aussi de comparer la construction en *voilà* avec la CRP en *avoir* événementielle. Considérons les exemples (31) et (1c), qui dénotent tous les deux un événement audible :

(31) *Voilà la sirène qui hurle !* (Wehr 1984, p.76)

(1) c. *Y a le téléphone qui sonne.*

Dans les deux cas, un son inattendu provenant d'un appareil avertisseur est annoncé à l'interlocuteur. Mais tandis qu'avec *voilà* le son est marqué comme perceptible dans la situation d'énonciation, avec *y a* aucune perception directe n'est impliquée. Le but de l'énoncé (quasi stéréotypé) est de faire réagir un interlocuteur qui n'a pas entendu le son du téléphone, ou qui fait semblant de ne pas l'avoir entendu.

(20) *Ya le téléphone qui sonne !*

(Ibid. : [1c])

(The phone is ringing!)

確かに (20) のような 〈 *il y a* 〉現象文タイプは発話時においては聞き手が知覚していないと想定される出来事を伝えているといえるが、(19) のような 〈 *voilà* 〉現象文タイプも発話時においては聞き手が知覚していないと想定される事態に聞き手の注意を向ける例が多く、両者の違いは明らかではない。また 〈 *voilà* 〉現象文で表される出来事は、必ずしも聞き手に知覚可能なものばかりとは限らない。例えば、(21) のような身体内部の感覚など、聞き手に知覚可能とはいえない出来事も存在する。

(21) *Voilà mon genou qui recommence à me faire mal !*

(Here goes my knee hurting again!)

したがって、〈 *il y a* 〉現象文と 〈 *voilà* 〉現象文の違いを、聞き手に知覚可能なものとして提示するかどうかという点に帰着させることはできない。

また、Lambrecht (2000) は、*voilà* 提示構文を直示タイプ (19) と、「話し手の今・ここ」を離れた出来事タイプ (22) の二つに分類し、(22) のような語りにおける出来事タイプは直示的価値を失い、*il y a* 出来事文同様、驚くべき予想外の状況への参与者として指示対象を提示すると述べている⁸⁾。

(22) *Figurez-vous, Monsieur, qu'ils n'étaient pas mariés depuis un an, paf !*

voilà la femme qui part en Espagne avec un marchand de chocolat.

(Lambrecht 2000 : [35]⁹⁾)

(Can you imagine, sir, they hadn't been married for even a year, and hop,
there leaves the wife for Spain with a chocolate merchant.)

しかし、(22) の例文を以下のように 〈 *il y a* 〉構文に置き換えてみると、容認度あるいは文脈のつながりが低下する。

⁸⁾ Lamrecht (2000: 64) : Dans la version événementielle de la CRP en *voilà*, le prédicat *voilà* a perdu sa valeur déictique et fonctionne comme une marque présentative figée, comparable au marqueur *y a* dans la CRP en *avoir* événementielle. La principale n'exprime donc plus une assertion et la construction est logiquement mono-propositionnelle. Comme l'événementielle en *avoir*, celle en *voilà* est marquée comme présentant non pas l'entité par elle-même mais l'entité en tant que participant à une situation surprenante ou inattendue (cf. Lamrecht 1988).

⁹⁾ Lamrecht (2000) では、*depuis* が消失しているが、引用元の原文 A. DAUDET, *Lettres de mon moulin*, Gallimard (1999) folio classique を引用する。

(23) ? Figurez-vous, Monsieur, qu'ils n'étaient pas mariés depuis un an, paf !

il y a la femme qui part en Espagne avec un marchand de chocolat.

(Can you imagine, sir, they hadn't been married for even a year, and hop, the wife is leaving for Spain with a chocolate merchant.)

また以下の語りの事例において、確かに〈 *voilà* 〉構文は指示対象が含まれる新たな事態を表してはいるが、「(何かを見るために) 扉をあける」(24) や「隣の家の医者が外にでてくる」(25) のように、必ずしも驚きを伴うような事態を表しているとはいえない。

(24) (見せたいものがある、と言われ廊下の突き当りまで走らされドアの前につく)

Deux ou trois secondes pour reprendre notre souffle, et le *voilà* qui ouvre la porte, et qui s'écrie, la voix fendue par les aigus : -Regardez !

(D. Pennac, *La Petite marchande de prose*)

(We have two or three seconds to regain our breath and there he opens the door and shouts with a cracked, high-pitched voice : Look!)

(25) (普段から様子を観察している隣の家の医者が家から出て来るのを見て)

J'épluche les dernières pommes de terre et j'entends de la musique. Le *voilà* qui sort de chez lui, je lève l'œil vers la pendule, dix heures quinze, il aura mis le temps !

(M. Winckler, *La Maladie de Sacks*)

(I'm peeling the last potatoes and I hear some musique. There he is, leaving his place. I look up to the clock. It's ten fifteen. He has taken his time.)

(22) の事例においても、先行文脈で「連れの男の女房が半年ごとに駆け落ちしては戻って来る退屈しない女だ」と前置きがされた語りであり、それほど指示対象の驚くべき想定外の事態というわけでもない。

したがって、Lambrecht の分類による *voilà* 出来事タイプと *il y a* 出来事文を同一のものとして置き換えることはできない。また、発話現場で生じた出来事と語りで生じた出来事を表す場合で談話環境の違いにより文の意味解釈が異なることはあるにしても、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文の機能そのものが異なるとは考えにくい。本論文では、〈 *il y a* 〉構文と〈 *voilà* 〉構文の違いは知覚可能性ではなく、発話状況であれ言語文脈であれ、文脈との関係を含む提示の仕方の違いから生ずると考える。そこで本論文では、話し手の知覚領域で起こっている出来事を表す現象文という状況が限定された文タイプに絞って、〈 *il y a* 〉構文と〈 *voilà* 〉構文の違いを考察する。

さらに Lambrecht は、*voilà* 構文が提示構文でありながら談話内で確立した指示対象を示す 3 人称代名詞が用いられる点について、次のように説明している。まず、(26) のよう

な直示タイプについては、「談話内の世界」から「談話が産出される外界」に移行することにより、3人称代名詞で表される指示対象の特徴は、談話内世界で確立したトピックから、談話における新たな存在に置き換えられるとする¹⁰⁾。一方、(27)のような出来事タイプについては、新しい情報は指示対象ではなく指示対象が参与する状況であり出来事的機能が認知的新しさの条件に優先すると述べている¹¹⁾。

(26) *Le voilà qui vient par ici.* (Lambrecht 2000 : [32c])

(Here he comes!)

(27) *Lui, quelque temps après, pouf ! le voilà qui meurt !* (Ibid. : [36])

(And then, after a little while, bam! He drops dead!)

確かに Lambrecht が直示タイプとする〈voilà〉現象文において3人称代名詞が用いられる場合、(26)や(2)のように、言語文脈において注意の焦点となっている指示対象が発話現場に出現する事例も多いが、発話現場に既に存在し意識の焦点にある指示対象が、新たな事態の参与者として表現されることを示す以下の(28)(29)(30)のような事例も多い。

(28) *Le voilà qui se tue maintenant !* (E. Zola, *Nana*)

(There he is, killing himself now!)

(29) *La voilà qui pleure maintenant !* (*4 aventures de Reinette et Mirabelle*)

(There she is, crying now!)

(30) *Le voilà qui prend un couteau. Empêchez-le donc !* (E. Zola, *Pot-bouille*)

(There he is, taking a knife. Stop him!)

後述するように、〈il y a〉現象文と〈voilà〉現象文の談話機能を考察する上で欠かすことのできない点が、〈il y a〉現象文では3人称代名詞が容認されないのに対し、〈voilà〉現象文では3人称代名詞が容認されるどころか頻繁に使用されるという点である。本論文では、〈voilà〉現象文においては、場面転換により指示対象があらたな出来事の要素と

¹⁰⁾ (Lambrecht 2000 : 62) Pour que les énoncés en (32) soient acceptables pragmatiquement, il est nécessaire que l'entité dénotée par le pronom objet ait été un topique établi dans un monde de discours interne avant de faire apparition dans *Le Monde* externe de l'énonciation. La phrase indique en quelque sorte le « passage » de l'entité d'un monde à l'autre. Il y a donc en même temps contextualisation interne et contextualisation externe. Sur le plan de l'analyse formelle, nous pouvons dire, empruntant la terminologie des Grammaires d'Unification, que la construction [voilà SN], en intégrant le pronom atone préverbal, *hérite* de celui-ci le trait pragmatique « topique établi dans le discours » et le substitue au trait « entité nouvelle dans le discours » attaché au SN postverbal, tout en préservant le trait global « présentation d'un référent nouveau » qui est inhérent à la construction.

¹¹⁾ (Lambrecht 2000 : 64) Ce n'est pas l'entité qui est « nouvelle » mais la situation à laquelle elle participe. (...) Le fait que la fonction événementielle l'emporte sur la condition de nouveauté cognitive de l'entité est particulièrement évident dans l'exemple (36).

して提示されるため 3 人称代名詞の使用が容認されると同時に、3 人称代名詞は先行する場面と発話時の場面をつなぐ重要な役割も担っていることを以下で示す。

4. 1. 3. 〈voilà que 節〉 / 〈voilà SN qui SV〉 / 〈voilà SN 属詞〉 構文

第 3 章では、〈il y a SN qui SV〉と〈il y a que 節〉によって表される事態が、聞き手のどの領域で解釈されるかによって様々に解釈されることを明らかにしたが、〈voilà〉が事態を提示する場合、以下のように〈voilà que 節〉(31) や〈voilà SN qui SV〉(32)、また〈voilà SN 属詞 (状況補語)〉¹²⁾(33)(34) で提示される場合がある。この節ではこれら〈voilà〉構文の機能を検討し、〈voilà SN qui SV〉構文が、「出来事連鎖のシナリオ」を持ち、そのシナリオから想定可能な事態の実現としてたった今知覚した事態を表す文形式であることを示す。

ここでは、先行研究としてこれらの文形式を含む〈voilà〉構文全体について研究した Lafontaine (1989) を検討する。また〈voilà〉構文については Léard (1992) でも多くの例文による容認度判定が行われているので、適宜本論の中で分析する。

- (31) *Voilà qu'il se met à ronfler !* (朝倉 2005)
(Now he is starting to snore!)
- (32) *Tiens, le voilà qui revient.* (Ibid.)
(Oh, there he is, coming back.)
- (33) *Vous voici arrivée, Mademoiselle.*¹³⁾ (Ibid.)
(Here you are, Miss.)
- (34) *Nous voilà à la maison. [Nous y voilà].* (Ibid.)
(Finally we are home.) (There we are.)

まず、〈voilà que 節〉と〈voilà SN qui SV〉の違いについて Lafontaine (1989) は、関係節内の動詞の共起関係を (35)(36) のように示している。そして、〈voilà que 節〉構文は、語彙的に点括的事態を意味する到達動詞 (35e,f) や新たな事態の開始を指定する動詞 (35c) とより多く共起し、まるでアスペクトマーカールのようなであると述べている。一方、〈voilà SN qui SV〉構文は、事態の開始というアスペクトの重要度は低くなり、活動動詞 (36a,g) も到達動詞 (36e,f) もともに容認するが、アスペクト動詞 (36b,c,d) とは共起しにくいとしている¹⁴⁾。

¹²⁾ 〈voilà SN 属詞〉の属詞部分には、関係節以外で、名詞、過去分詞、形容詞など指示対象の属詞となるもの、また状況補語が生じる。これらをまとめて〈voilà SN 属詞〉構文と称することにする。

¹³⁾ 運転手や車掌が到着したことを告げる同じような場面で *voilà* も問題なく使われる。“vous voilà arrivé, monsieur” (A. Daudet, *Aventures prodigieuses de Tartarin de Tarascon*)

¹⁴⁾ Lafontaine(1989 : 87-88) : Dans les complétives, *voici-voilà* semble plutôt compatible avec

- (35) a. ? *Voilà que* Marie chante. (Lafontaine1989 : [9a])
 (Now Marie is singing.)
- b. ? *Voilà que* Marie est en train de chanter. (maintenant) (Ibid. : [9b])
 (Now Marie is singing.)
- c. *Voilà que* Marie se met à chanter. (Ibid. : [9c])
 (Now Marie is starting to sing.)
- d. ? *Voilà que* Marie finit de chanter. (Ibid. : [9d])
 (Now Marie stops singing.)
- e. *Voilà que* Marie part. (Ibid. : [9e])
 (Now Marie is leaving.)
- f. *Voilà que* Marie arrive. (Ibid. : [9f])
 (Now Marie is coming.)
- g. ? *Voilà que* Marie mange. (Ibid. : [9g])
 (Now Marie is eating.)
- (36) a. *Voilà* Marie qui chante. (Ibid. : [9h])
 (There's Marie singing.)
- b. ? *Voilà* Marie qui est en train de chanter. (Ibid. : [9i])
 (There's Marie singing.)
- c. ? *Voilà* Marie qui se met à chanter. (maintenant attendu) (Ibid. : [9j])
 (There's Marie starting to sing.)
- d. ? *Voilà* Marie qui finit de chanter. (Ibid. : [9k])
 (There's Marie about to stop singing.)
- e. *Voilà* Marie qui arrive. (Ibid. : [9l])
 (Here comes Marie.)
- f. *Voilà* Marie qui part. (Ibid. : [9m])
 (There goes Marie.)
- g. *Voilà* Marie qui mange. (Ibid. : [9n])
 (There's Marie eating.)

des verbes qui impliquent lexicalement l'ouverture d'un procès ponctuel ((9e) et (9f)) ou qui sont des spécificateurs d'ouverture de bornes (9c). Du point de vue spatial, *voici-voilà* suggère l'ouverture, le début du procès. On a le sentiment qu'il devient presque un marqueur aspectuel. (...) Dans les attributives de l'objet, (...), l'aspect d'ouverture du procès se révèle moins important. *Voici-voilà* accepte tout aussi bien un procès duratif (9h) et (9l) qu'un procès ponctuel ((9m) et (9n)) tandis qu'il semble incompatible avec les verbes qui sont des spécificateurs de bornes. (本論文では見やすくするため構文ごとに例文番号をわけて表記した。また、引用文中の(9l)と(9n)は著者の誤植と思われるので、入れ替えて解釈した。)

そして、〈 *voilà que* 節 〉では、事態は全体的に捉えられ、他の別の事態と関連して位置付けられることにより連続性が感じられるとする¹⁵⁾。一方、〈 *voilà SN qui SV* 〉においては、事態は進行中という明確な感覚を持つとし (37a)、境界あるいはすでに起こった変化という感覚を持つ、形容詞や過去分詞を含む〈 *voilà SN* 属詞 〉構文 (37b,c,d)と対比している¹⁶⁾。

- (37) a. *Voilà les Espagnols qui traversent l'Atlantique.* (Ibid : [37a])
 (There are the Spaniards crossing the Atlantic.)
 b. *Voilà les Espagnols partis.* (Ibid. : [37d])
 (And now the Spaniards have left.)
 c. *Voilà les Espagnols riches.* (Ibid. : [37e])
 (And now the Spaniards are rich.)
 d. *Voilà les Espagnols devenus conquérants.* (Ibid. : [37f])
 (And now the Spaniards became conquerors.)

このような Lafontaine の指摘にみられるように、起動相のアスペクト動詞や到達動詞と共起する〈 *voilà que* 節 〉は「出来事レベルでの起動相」を表現するのに対し、〈 *voilà SN qui SV* 〉は継続中の出来事のある一時点における「知覚レベルでの気づき」を事態内部において表現しているといえる。また〈 *voilà SN* 属詞 〉は指示対象の状態変化後の結果状態をとりたてていると考えられる。本論ではこのような様々な〈 *voilà* 〉構文間の意味の違いを、人称代名詞との共起関係や、先行場面とのつながりをもとに明らかにし、〈 *voilà SN qui SV* 〉構文が「出来事連鎖のシナリオ」とともにたった今知覚した事態を場面転換により提示することを示す。

ここまで 4.1.節では、〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文の違いを明らかにする上で、関連する先行研究を概観してきた。先行研究では「存在」「直示」の違いとして捉えられる〈 *il y a* 〉〈 *voilà* 〉だが、〈 *il y a* 〉現象文、〈 *voilà* 〉現象文においては、どちらも発話現場で話し手がたった今知覚した事態を表しており、事態の「存在」を示すことと、事態を「直示」することが、どのように〈 *il y a* 〉現象文、〈 *voilà* 〉現象文の違い

¹⁵⁾ (Lafontaine 1989 : 136) Il faut alors se demander si les complétives possèdent aussi une valeur aspectuelle et, si oui, laquelle. En effet, si elle existe, on peut l'imaginer identique à celle de la relative attributive ou différente. (...) Soit l'énoncé : *Voilà que Pierre arrive*. On peut proposer assez spontanément une interprétation répétitive, ou une idée de saturation, ou une idée d'inattendu, mais cette fois, le procès nous apparaît envisagé de façon globale. (...) Dans ce cas, le procès global semble être en liaison avec un autre procès par rapport auquel il est repéré : on sent une idée de successivité.

¹⁶⁾ (Lafontaine 1989 : 113-114) Dans les structures à attribut de l'objet, on a le sentiment très net d'un procès en cours (37a). (...) Avec des adjectifs ou des participes passés, on a, au contraire, le sentiment d'un terme, d'un changement acquis ((37d),(37f) et (37g)). (引用文中の(37d,f,g)は、(37d,e,f)の誤植と思われる。)

として現れるのかが明らかではない。Lambrecht の「知覚可能性」という説明も、発話現場で話し手に知覚された事態は、発話後においては〈 *il y a* 〉現象文も〈 *voilà* 〉現象文も聞き手に知覚可能であることが多く、違いが明らかではない。そこで、Bolinger の先行文脈とのつながりや、Lafontaine などの〈 *voilà* 〉が示すアスペクト的価値についての議論を念頭に以下のような手順で〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文の違いを明らかにする。まず 4.2.節において、たった今知覚した事態を表す〈 *il y a SN qui SV* 〉で表される〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà SN qui SV* 〉で表される〈 *voilà* 〉現象文の談話機能を考察し、両者の違いが先行場面の有無にあることを示す。そして 4.3 節において、〈 *voilà SN qui SV* 〉の先行場面とのつながりが、スキーマ化された出来事の連鎖関係である「出来事連鎖のシナリオ」によって与えられることを示す。さらに〈 *voilà que* 節〉について、出来事の中核的参加者を持たない場合と持つ場合とに分けて、「出来事連鎖のシナリオ」との関係性を考察する。そして、先行研究での「存在」「直示」という説明だけでは違いが明確にならない〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文の事態の断定（提示）のメカニズムを明らかにした上で、〈 *il y a* 〉〈 *voilà* 〉を持たない、統語的には名詞句である〈 *SN qui SV* 〉の 5 章の考察の糸口とする。

4.2. 〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉 現象文の談話機能

本節では、たった今目の前で起こった出来事を表す現象文タイプの〈 *il y a SN qui SV* 〉と〈 *voilà SN qui SV* 〉において、〈 *il y a* 〉や〈 *voilà* 〉がどのような機能を果たし、二つの文タイプにどのような違いが生じるのかを考察する。まず 4.2.1.節で、〈 *il y a SN qui SV* 〉と〈 *voilà SN qui SV* 〉の名詞句の指示対象の情報特性を分析し、どのような違いがあるかを吟味する。そして 4.2.2.節で、〈 *il y a SN qui SV* 〉と〈 *voilà SN qui SV* 〉の関係節内の述語を分析し、それぞれの構文がどのような事態と共起するかを考察する。その上で 4.2.3.節において、〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文がどのように目の前で起こった出来事を聞き手に伝えているかを考察する。

4.2.1. 〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉 〈 *SN qui SV* 〉 構文の名詞句の指示対象の情報特性

この節では、〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文について、〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉 〈 *SN qui SV* 〉の名詞句で表される指示対象の情報特性を、2 章でみた Prince (1981) と Chafe (1987) の分類をもとに考察する。まず、話し手が想定する聞き手の指示対象の認知状態について、Prince の情報の所在を中心とした分類に基づき観察した上で、Chafe の指示対象の活性化状態の観点を加え吟味する。

まず〈 *il y a* 〉現象文は、以下のような名詞句の指示対象との共起関係を示す。実例の見つからないものについては、作例でインフォーマント判断を付記する。

【Brand-new】

- (38) (無免許だが空地で車の運転を友人に教えてもらっていると、車がやってくる)
Y a une bagnole qui arrive, (...), merde ! Reprends vite le volant, je me planque ! (V. Thérôme, *Bastienne*)
 (There's a car coming, (...), Damn! Get back behind the wheel, I'll hide!)
- (39) (一仕事終えたレストランの厨房。レンジで何かがふきこぼれている)
Hé, Lestafier ! cours vite à ton piano, y a un truc qui déborde !
 (A. Gavalda, *Ensemble, c'est tout*)
 (Hey, Lestafier! quickly run to your stove, there's something boiling over!)
- (40) (忘れ物を取りに行った教室で先生が女の子とセックスしているのをみつけて)
Eh les mecs, y'a un prof qui baise une meuf toute nue ! (*Noce blanche*)
 (Hey guys, there's a teacher fucking a girl totally naked.)
- (41) (道を歩いていて、友人に色目を使っている女の子に気付いて)
Tiens ! Il y a une petite qui te fait de l'œil, regarde donc.
 (V. Hugo, *Les Misérables*)
 (Look! There's a girl making eyes at you, look then.)

【New-unused】

- (42) (幼い息子が間違っってバスルームに閉じ込められたのに気づき助けを求めて)
Bon Dieu ! Y a Archie qui s'est enfermé dans la salle de bain !
 (P. Djian, *37°2 le matin*)
 (My god! Archie has locked himself into the bathroom!)
- (43) (台所で料理の手伝いをしていると、母親が夫の愛人に耐えられず泣きだす)
Papa ! Y'a maman qui pleure ! (=1)
 (Dad! Mom is crying!)

【Inferrable】

- (44) *Maman, il y a ma poupée qui s'est cassée !* (Rothenberg 1971)
 (Mom, My doll is broken!)
- (45) (二人の殺し屋。狙っている男の家に郵便屋が来るのを見た一人がもう一人に)
Y a le facteur qui arrive. (J.P. Manchette, *Le petit bleu de la côte Ouest*)
 (The postman is coming.)

【Sit-evoked】

- (46) *Y'a le téléphone qui sonne !* (Lambrecht 2000)
 (The phone is ringing!)
- (47) **Il y a moi qui pleure !*
 (There's me crying!)
- (48) **Il y a toi qui pleures !*
 (There's you crying!)

【Text-evoked】

- (49) **Il y a lui qui pleure !*
(There's him crying!)

このように、〈 il y a 〉現象文は【Brand-new】の指示対象と問題なく共起する(38) (39) (40) (41)。さらに、一見旧情報と思われる【New-Unused】や【Inferrable】¹⁷⁾な指示対象も、3章でも見たように、〈 il y a 〉現象文においては、話し手に知覚された新たな出来事の一部となるため、新情報として問題なく提示できる (42) (43) (44) (45)。また、発話現場に存在する【Sit-evoked】な指示対象については、すでに意識の焦点にある active な指示対象は新たな出来事の要素としては提示できないが (47) (48)、発話現場に存在していても inactive な指示対象は新たな出来事の要素として提示できることがわかる (46)。一方、言語文脈において既出で【Text-evoked】、しかも active である 3 人称代名詞で表される指示対象は〈 il y a 〉現象文では容認されない (49)。

つぎに、〈 voilà 〉現象文と共起する名詞句の指示対象を観察する。

【Brand-new】

- (50) (たてこもっている家屋で、銃弾の盾にしている鎧戸がおちそうなのに気付いて)
Attention ! (..) Voilà une parsiennne qui tombe ! (E. Zola, *Le Débâcle*)
(Take care! (...) There's a shutter falling!)
- (51) (遊びにきている友人の家で、戸口で馬車の音がするのを聞いて)
*Voilà un cabriolet qui arrête ici !*¹⁸⁾
(H. Balzac, *Splendeurs et misères des courtisanes*)
(Look, a carriage is stopping here!)

【New-unused】

- (52) (聞き手がねらっていた女性客が他の店員 (Bouthemont) にとられそうになっていると知らせる)
Voilà Bouthemont qui vous fait votre particulière.
(E. Zola, *Au Bonheur des dames*)
(Look! There's Bouthemont taking your customer.)
- (53) (新聞の創刊について話そうと集まっているグループ。電話で中座したメンバー

¹⁷⁾ Inferrable に分類した (44) (45) の *ma poupée, le facteur* は、「小さい子供は人形を持っている」「一般的な地域にはその地域の担当の郵便配達人がいる」などの社会・文化的な共有知識に基づき存在が推論可能な指示対象と考える。(44) の *ma poupée* は個体まで同定されている可能性もある。(43) の *maman* は、ここでは固有名に近い役割を果たしていると考え、New-Unused に分類した。

¹⁸⁾ 文法的には再帰代名詞を用いた *s'arrêter* が用いられるのが標準的な用法だと思われるが、原文をそのまま表示する。

がテーブルに戻って来るのを見て)

Voilà Villars qui revient ! Ah ! Voici aussi Décugis. Nous allons pouvoir parler du journal. (M. Arland, *L'Ordre*)

(There's Villars coming back! There's also Décugis. We'll be able to talk about the news paper company.)

- (54) (常に行動を共にする犬 (Brusco) のあとを追いかける Brandolaccio を見て)

Mais qu'a donc Brusco à grogner ? ... *voilà* Brandolaccio qui court après lui... voyons ce que c'est. (P. Mérimée, *Colomba*)

(but why is Brusco growling then? ... there's Brandolaccio running after it... Let's see what's up.)

【Inferrable】

- (55) (男にしつこくせまられ発疹がでると訴えて)

Arrête, mais arrête ! Ça y est ! *Voilà* mes plaques qui recommencent ! (*Amélie*)
(Stop it, stop it! That's enough! There's my rash again!)

- (56) (ぬかるみの中を車もつかわず母親に歩かされ、靴の踵が取れたと訴える)

Voilà mon talon qui part. (E. Zola, *Pot-bouille*)
(There goes my heel.)

- (57) (奥様から熱いお湯を頼まれていた女中が、お湯がわいたことを告げる)

Madame, *voilà* votre eau qui bout. (E. Zola, *Une page d'amour*)
(Ma'am, your water is boiling.¹⁹⁾)

【Sit-evoked】

- (58) *Voilà* le jour qui baisse ! (Rothenberg 1971)
(There's the sun setting!)

- (59) (首切りが横行するデパートで経営者のふるまいを様々に解釈して)

Voilà le patron qui rit maintenant ! (E. Zola, *Au Bonheur des dames*)
(There's the boss laughing now!)

- (60) ? Me *voilà* qui pleure !

(Here I am, crying!)

- (61) ? Te *voilà* qui pleures !

(Here /There you are, crying!)

- (62) (主人の部屋の前を通りかかった女中が、主人が持病の発作でうめくのを聞き)

Le *voilà* qui gueule. (E. Zola, *La Joie de vivre*)
(There he is, crying.)

¹⁹⁾ この例文で *There's your water boiling*, を用いると、奥様と女中という語用論的關係の中で指し示す *there's* を用いることになり、とても失礼にあたるというインフォーマントの意見があり、例外的に *there's* を用いない訳を採用した。

- (63) (夫婦喧嘩中の妹を助けようと狂暴な兄が割り込んでくるのに恐れをなした夫が)
 Le *voilà* qui prend un couteau. Empêchez-le donc ! (=30)
 (There he is, taking a knife. Stop him!)

【Text-evoked】

- (64) (追われて逃げ込んだ先で、追手が現れたのを見て)
 Les *voilà* qui s'amènent ! (=2)
 (There / Here they come!)
- (65) (訪問を受けた当人がちょうど、二階から降りてくるのを見て管理人が)
 Tenez, le *voilà* qui descend ! (Amélie)
 (Look, there he is, coming down!)

【Brand-new】【New-unused】【Inferrable】の指示対象については、〈 il y a 〉現象文と同じくすべて容認される。また、【Sit-evoked】な指示対象も容認される (58) (59)。1・2 人称の代名詞も容認可能とされる場合も想定されるが²⁰⁾、後述するようにコーパスでのデータ数は限定的である (60) (61)。〈 il y a 〉現象文と決定的に差がでるのが 3 人称代名詞で表される指示対象で、【Sit-evoked】(62) (63) であれ【Text-evoked】(64) (65) であれ、〈 voilà 〉現象文においては 3 人称代名詞で表される active な指示対象が容易に容認される。

ここで、フランス語のコーパス FRANTEXT²¹⁾ (2012 年度) により、数量的に人称代名詞の使用頻度を確認しておく (表 4.1)。

表 4.1 人称代名詞を含む 〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉 〈 SN qui SV 〉

	件数		件数
Il y a moi qui	0	Me voilà qui	10
Il y a toi qui	0	Te voilà qui	13
Il y a nous qui	0	Nous voilà qui	0
Il y a vous qui	0	Vous voilà qui	3
Il y a lui qui	1	Le voilà qui	662
Il y a elle(s) qui	0	La voilà qui	363
Il y a eux qui	0	Les voilà qui	245

FRANTEXT (2012 年度)

²⁰⁾ 「1 人称は、ふと泣いているのに気づいたことを自分自身に言うような場合に容認可能。2 人称は、都会に比べ人間関係の濃い地方で容認され得る。どちらも “maintenant” をつけると容認されやすくなる」との意見があった。

²¹⁾ 17～21 世紀の文学作品を中心とした約 5000 件の作品からなる、書き言葉のデータベース。本論文では、数量的な調査目的以外にも、作品中の前後の文脈を考慮した上で、主に会話部分を研究に使用している。

上記のように、〈 *il y a SN qui SV* 〉においては、発話状況においてでも、言語文脈においてでも、活性度が高く意識の焦点にある *active* な指示対象は容認されないことが確認できる²²⁾。一方、〈 *voilà SN qui SV* 〉においては、3人称代名詞が高い頻度で使用され、語りの文脈でも使用されるが、話し手がたった今知覚した事態を表現する〈 *voilà* 〉現象文も多く存在する。ただし、1・2人称代名詞はコーパスでは語りの文脈でしか使用されていない。

これらの観察から、〈 *il y a* 〉現象文は意識の焦点にある *active* な指示対象を新たな出来事に含まれる要素として提示することができないが、〈 *voilà* 〉現象文は *active* な指示対象を新たな出来事に含まれる要素として提示できることがわかる。なぜ、そのような違いが生じるのかを考えるうえで、次節では、アスペクトを中心に〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文の違いを考察する。

4.2.2. 状態変化の有無

この節では、〈 *il y a* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文が表す出来事のアスペクトの性質を考察する。

まず、動詞の語彙的アスペクトについては、先行研究において、当論文で扱うような〈 *voilà* 〉現象文タイプは、状態述語と共起しにくいとされている。

(66) * *Voilà Marie qui reste !* (Léard 1992)

(There's Marie staying!)

(67) * *Voilà Pierre qui est fatigué !*²³⁾ (Rothenberg 1971)

(There's Pierre tired!)

確かに〈 *voilà* 〉現象文では状態述語が容認されにくいことが、以下に示すインタビュー調査により確認される。一方、〈 *il y a* 〉現象文ではこれらの状態述語は容認される(68)(69)。

(68) a. *Tiens ! Il y a Marie qui reste !*

(Look! Marie is staying!)

b. * *Tiens ! Voilà Marie qui reste !* (= (66))

²²⁾ 1件の事例は、*Mais (touchant son fusil) il y a lui qui sans forcer les rattrape et les étend raides, d'un coup.* (R.CHAR, *Trois coups sous les arbres*) であり現象文ではない。

²³⁾ Rothenberg は非文マークを使わず文章でのべているが、ここではわかりやすくするため非文マークをつけて表す。(Rothenberg 1971 : 111) *Comme nous l'avons déjà indiqué, les verbes d'état sont exclus: Voilà Pierre qui est fatigué est différent, et la proposition relative y est une proposition relative descriptive.*

- (Look! There's Marie staying!)
- (69) a. *Tiens ! Il y a Marie qui est fatiguée !*
 (Look! Marie is tired!)
- b. ? *Tiens ! Voilà Marie qui est fatiguée !* (= (67))
 (Look! There's Marie tired!)

これは、〈 *il y a* 〉現象文がある状態を出来事として提示できるのに対し、〈 *voilà* 〉現象文は、発話時に指示対象がある一定の状態に置かれていることを示す事態表現とは共起しにくいことを示している。

しかし〈 *voilà* 〉現象文であっても、一時的状態述語に以前の状態と発話時の状態との対比を表すような副詞を付加すると、(70) で示すように共起するようになる。

- (70) *Tiens ! Voilà Marie qui est fatiguée maintenant !*
 (Look! Marie is tired now!)

〈 *voilà* 〉現象文が状態変化を表す表現と共起しやすいことは、〈 *revoilà* 〉のような接頭辞を付加することにより継続活動を表す動詞の断続的の反復を捉えることができることや(71) (72)、以前の活動の反復を示す動詞 *recommencer* と共起しやすいことから裏付けられる(73) (74)。

- (71) *Le revoilà qui travaille.* (Léard 1992)
 (There is " the worker "again.)
- (72) (自分の娘に言い寄る男が、また娘をくどいているのを見て)
Le revoilà qui lui fait du plat. (R. Queneau, *Pierrot mon ami*)
 (There he is courting her again.)
- (73) *Voilà mon genou qui recommence à me faire mal.* (= (21))
 (Here goes my knee hurting again.)
- (74) (男にしつこくせまられ発疹がでると訴えて)
Arrête, mais arrête ! Ça y est ! Voilà mes plaques qui recommencent ! (= (55))
 (Stop it, stop it! That's enough! Now my rash starts again!)

さらに、〈 *il y a* 〉現象文は予測不可能な突発的な事態を表すことができるが(75)、〈 *voilà* 〉現象文でそのような事態を表現することはインフォーマント調査によると難しい(76)。

- (75) *Attention ! Il y a le vase qui va tomber !* (Rothenberg 1971)

(Watch out! The vase is going to fall!)

(76) *Attention ! *Voilà* le vase qui va tomber !

(Watch out! There's the vase, going to fall!)

反対に、先行する状態から予測可能な事態を示す表現とは 〈 il y a 〉 現象文は共起しにくい
が (77)、 〈 voilà 〉 現象文は容易に共起すると判断される (78)。

(77) **Il y a* le téléphone qui sonne enfin !

(The phone is finally ringing!)

(78) *Voilà* le téléphone qui sonne enfin !

(There's the phone ringing, finally!)

これらのことから、 〈 voilà 〉 現象文は以前の状態 P1 から現在の状態 P2 への状態変化を示すのに対し、 〈 il y a 〉 現象文は現在の状態 P2 のみを示すと考えることができる。

(79) 〈 il y a 〉 現象文と 〈 voilà 〉 現象文の状態変化の有無についての仮説

〈 voilà 〉 現象文は、以前の状態 P1 から現在の状態 P2 への状態変化を表す。

〈 il y a 〉 現象文は、現在の状態 P2 のみを表す。

また、 〈 voilà 〉 現象文が状態変化を表すことは、関係節の位置に過去分詞や形容詞など指示対象の属詞となるものや状況補語を持つ、本稿で 〈 voilà SN 属詞 〉 構文と呼ぶ、以下のような文タイプにおいても同様に状態変化を表すことから裏付けられる。(80) は「到着したあなたがいる」という一時的状態ではなく、「あなたが到着した」という状態変化を表し、(81) は「私たちが家にいる」という一時的状態ではなく「私たちが家に到着した」という状態変化を表す文である。

(80) Vous voilà arrivé, monsieur.

(A. Daudet, *Aventures prodigieuses de Tartarin de Tarascon*)

(Here you are, sir.)

(81) Nous voilà à la maison. [Nous y voilà]. (= (34))

(Finally we are home..) (There we are.)

〈 voilà 〉 が時間の流れを伴う状態変化を表すことは、時を表す前置詞句と共起した以下のような事例においても明らかである。(82) では、「今、2019年である(私たちは2019年にいる)」ということではなく、「今、2019年になった」という状態変化を表している。

(82) Nous voilà en 2019 ! Bonne année à tous !

(So here we are in 2019! Happy New Year to everyone!)

また、Léard (1992) は以下の事例において〈 voilà SN 属詞 〉構文が語彙的に変化を示さない形容詞とは共起しにくいことを示しているが²⁴⁾、この事例は〈 voilà SN 属詞 〉構文の性質をよく表している。

(83) a. Le *voilà* enfin cuit à point. (Léard 1992 : [50b])

(Finally it's perfectly cooked.)

b. * Le *voilà* cru. (Ibid. : [50c])

(There it is raw.)

これらの点からも〈 voilà 〉現象文が、以前の状態 P 1 から現在の状態 P 2 への状態変化を表すとする、仮説 (79) が裏付けられる。

一方、(80) (81) (82) (83a) のような〈 voilà SN 属詞 〉構文は、指示対象の状態変化を表すので定名詞句、特に人称代名詞と共起しやすいが、表 4.1 で観察した〈 voilà SN qui SV 〉構文ではほとんど見られなかった 1・2 人称代名詞の事例が多く存在する。属詞の中で過去分詞／形容詞と共起する〈 voilà 〉構文において、人称代名詞がどの程度使用されているかを、フランス語のコーパスデータ FRANTEXT (2018 年度) により示す (表 4.2)。

表 4.2 〈 人称代名詞+voilà+過去分詞／形容詞 〉

過去分詞 (p.p.)	件数	形容詞 (adj.)	件数
Me voilà p.p.	751	Me voilà adj.	390
Te voilà p.p.	335	Te voilà adj.	202
Nous voilà p.p.	446	Nous voilà adj.	184
Vous voilà p.p.	368	Vous voilà adj.	214
Le voilà p.p.	555	Le voilà adj.	212
La voilà p.p.	256	La voilà adj.	122
Les voilà p.p.	222	Les voilà adj.	74

FRANTEXT (2018 年度)

1・2 人称代名詞についての、表 4.1 の〈 voilà SN qui SV 〉構文と表 4.2 の〈 人称代名詞+voilà+過去分詞／形容詞 〉構文のこのようなコーパスデータの結果を、現象文についての仁田 (1989) の指摘とあわせて考慮すると、〈 voilà SN qui SV 〉構文と〈 voilà SN

²⁴⁾ (Léard 1992 : 139) seuls les adjectifs qui indiquent une modification sont acceptables (50b, 50c).

属詞〉構文の違いが明らかとなる。仁田は、現象描写文の文法的特徴として、ガ格名詞は原則として3人称に限られるとしている。

(84) {子供たちが／*私が} 運動場で遊んでいる。 (仁田 1989)

つまり〈voilà SN qui SV〉構文は、指示対象の動作や一時的状態の知覚による気づきとして状態変化を表すので、発話現場で通常意識の中心にある1・2人称の人称代名詞が使用されることは少ないが、〈voilà SN 属詞〉構文は、指示対象についての以前の状態から現在の状態への状態変化を表すのみで、知覚による気づきに限定されない。

ここで〈voilà SN qui SV〉構文と〈voilà SN 属詞〉構文の違いについて考えておく。

まず、上記のように、〈voilà SN qui SV〉構文と違って、〈voilà SN 属詞〉構文は1・2人称の指示対象を含む表現が以下のように容易に使用される。

(85) (バイクで走っていてふと気づくと陸橋の鉄格子に囲まれている自分に気付いて)
Comme une souris timide, me voilà prise au piège. (La Motocyclette)

(Like a shy mouse, I was trapped.)

(86) (奥さんにうそがばれたのを知って)
Mon Dieu ! me voilà dans un terrible embarras ! (H. Balzac, La Cousine Bette)

(My god! There I was, terribly embarrassed!)

(87) (仕事場の情報を仲間から聞いて)
Bon ! Me voilà prévenu. (E. Zola, L'Assommoir)

(So, I was warned.)

(88) (恋人の浮気を心配していた友人が、勘違いだったと落ち着いているのを見て)
Alors, te voilà rassurée. (=3)

(So, you are reassured now.)

(89) (持病のある娘が、激しく咳をするのを見て)
Mon dieu ! Te voilà malade, maintenant. (E. Zola, Une page d'amour)

(My god! So you are sick now.)

(90) (長いあいだ借金に苦しめられた相手に)
Je te devais soixante francs, te voilà payé, voleur ! (E. Zola, Germinal)

(I owed you 60 francs, now you are payed, thief!)

1 人称の指示対象の事例においては、(85) のような指示対象の物理的な状態変化だけでなく、言語情報による心理的・認知的な状態変化を表すものが観察される (86) (87)。また 2 人称の指示対象の事例においては、状態変化の知覚による気づきを表すものもあれば(89)、知覚と言語情報による気づきを表すもの (88)、話し手の聞き手に対する行為による状態変

化を表すものもある (90)。1 人称については、書簡や日記での使用も多い²⁵⁾。

また、〈 *voilà* SN 属詞 〉構文は〈 *voilà* SN qui SV 〉構文と違い、局面レベルの状態変化にとどまらず、以下のように個体の属性レベルの変化を表すこともできる。

(91) (息子とつきあっている女の子が妊娠したという話を聞いて)

Me *voilà* déjà grand-mère ! (N. de Buron, *Chéri, tu m'écoutes ?*)
(So, I am grandma now!)

さらに、指示対象の状態変化後の結果状態を前提とした以下のような文への埋め込みが容認されやすい²⁶⁾。

(92) (近くに住むようになった知人を家に招待して)

Maintenant que vous *voilà* dans nos contrées, vous viendrez, j'espère, de temps à autre, nous demander à dîner ? (G. Flaubert, *Madame Bovary*)
(Now that you are in the area, I hope you will come over for dinner from time to time.)

(93) (休憩をとったので出発しようと誘う)

Et maintenant que nous *voilà* reposés, en route ! (M. Aymé, *Les cygnes*)
(And now that we have rested, let's go!)

(94) (成長した妹との折り合いが悪くなったので、嫁にだすことに異論がないと言い)

Maintenant que la *voilà* femme, je préférerais avoir à sa place une servante que je commanderais.... (E. Zola, *La terre*)
(Now that she has become a woman, I would like a maid in her place at my disposition.)

これらの点から、〈 *voilà* 〉現象文を考察する上で、〈 *voilà* SN 属詞 〉構文は〈 *voilà* SN qui SV 〉構文と以下のような違いがあると考えられる。発話現場で展開中の動作の知覚による気づきにより状態変化を表す〈 *voilà* SN qui SV 〉構文とは異なり、〈 *voilà* SN 属詞 〉構文は知覚に限らず言語情報や発話現場で行われた行為の結果など、幅広い情報源による指示対象の状態変化を表す。したがって、〈 *voilà* SN 属詞 〉構文は〈 *voilà* 〉現象文と

²⁵⁾ FRANTEXT (2018 年度) のジャンルでは、〈 *me + voilà + 過去分詞* 〉の使用例 751 件中、書簡が 68 件 (9.1%)、日記が 26 件 (3.5%) だが、〈 *le + voilà + 過去分詞* 〉の使用例 555 件中では、書簡が 28 件 (5.0%)、日記が 12 件 (2.2%) であった。

²⁶⁾ 〈 *voilà* SN qui SV 〉構文や〈 *voilà* que 節 〉構文の埋め込みはかなり限定される。

FRANTEXT (2018 年度) のコーパスデータで、〈 *voilà* SN 属詞 〉構文の埋め込みの例〈 *que* clitique objet *voilà* 〉が 379 件に対し、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文の埋め込みの例〈 *que* clitique objet *voilà* qui 〉は 6 件、〈 *voilà* que 節 〉構文の埋め込みの例〈 *que* *voilà* que 〉は 7 件である。

して解釈される場合もあるが、本論文では、〈 *voilà* 〉現象文のプロトタイプとして〈 *voilà* SN qui SV 〉構文を考察の対象とする。

最後に、指示対象の状態変化の最も基本的な情報である非存在→存在の状態変化について考えると、〈 *voilà* 〉は、以下のように、発話現場への 3 人称で表される指示対象の出現はもちろんのこと、1・2 人称代名詞により話し手・聞き手の発話現場への出現、つまり発話状況領域への非存在→存在という状態変化を表すことができる²⁷⁾。

- (95) *Le voilà ! / La voilà ! / Les voilà !*
 (There/Here he(it) is! / There/Here she(it) is! / There/Here they are!)
- (96) *Me voilà ! / Nous voilà !*
 (Here I am! / Here we are!)
- (97) *Te voilà ! / Vous voilà !*
 (There/Here you are! / There/Here you are!)

語りで用いられる事例もあるが、コーパスデータをみると頻繁に使用されることがわかる(表 4.3)。

表 4.3 〈人称代名詞+voilà +句読点〉

	件数		件数
<i>me voilà</i>	552	<i>nous voilà</i>	196
<i>te voilà</i>	442	<i>vous voilà</i>	460
<i>le voilà</i>	1045	<i>les voilà</i>	485
<i>la voilà</i>	689		

FRANTEXT (2018 年度)

一方、〈 *il y a* 〉は 1・2 人称代名詞については指示対象の発話現場への出現という意味で用いることはできず、以下のように話し手あるいは聞き手によって設定された課題に対する答(リスト)のひとつとして指示対象の存在が提示される事例が多い。

- (98) (A : 馬で出かけるメンバーの数を数えている。B : 自分を入れるように主張²⁸⁾)
 A : *Il y a moi, il y a Salvador, il y a Cruzier Belle-Cravate, il y a Barles
 Petit-Fumier, il y a le grand Pinier, Jocelme, Tronchet, Girardn et Hauvière
 le Collet-Vert. On est neuf.*

²⁷⁾ これらの事例には、指示対象の移動による発話状況領域への出現もあれば、話し手の探索による発話状況領域での指示対象の発見を表す文もある。

²⁸⁾ 会話をわかりやすく提示するため、A と B として話者を記載する。

B: Ah ! *il y a moi.* (J. Giono, *Deux cavaliers de l'Orage*)

(A: There is me,There's nine of us.

B: Hey! And there is me.)

- (99) (裏切者で顔を出せないはずの男が帰って来る理由として考えられるのは、子供と妻 vous に会うためであると説明して)

puisqu'il n'a jamais vu le petit, tout en sachant qu'il existe... et, en outre, il y a vous, ... (E. Zola, *La Débâcle*)

(since he has never seen the boy, though knowing he exists, and furthermore, there is you,...)

これは、発話状況領域で意識の焦点にある指示対象であっても、設定された課題の場では、新情報としてあらたにその存在を提示できるため〈*il y a*〉が用いられることによる。

また、3人称代名詞と〈*il y a*〉が共起する頻度は、以下のコーパスデータにみられるように、1・2人称代名詞よりも少ない(表 4.4)。語りにおいて(100)のような事例が若干見受けられるのみである。

表 4.4 〈*il y a* + 人称代名詞強勢形〉²⁹⁾

	件数		件数
<i>Il y a moi</i>	58	<i>Il y a nous</i>	19
<i>Il y a toi</i>	39	<i>Il y a vous</i>	21
<i>Il y a lui</i>	11	<i>Il y a eux</i>	1
<i>Il y a elle</i>	10	<i>Il y a elles</i>	1

FRANTEXT (2018 年度)

- (100) Curieuse, la grand-mère : (...) Elle a l'esprit de caste. *Il y a elle* et puis, après, les autres. (J-J. Gréco, *Jujube*)
(She's strange, that grandma: (...) She has a caste mindset, there is her and then, the others.)

このようにリストの一項目として提示する場合 3 人称代名詞が用いられることが少ないのは、(98) の例文の A の発話で見られるように、固有名詞を使って提示することが多いためと考えられる。いずれにしても〈*il y a*〉は設定されたリスト自体が新情報となる場合に人称代名詞を用いることができるが、発話状況領域への出現を表す事例はない。

これらの点から、〈*voilà*〉現象文は以前の状態 P1 から現在の状態 P2 への状態変化を示すのに対し〈*il y a*〉現象文は現在の状態 P2 のみを示すと考えることができるとする

²⁹⁾ *il y a* 〈SN qui SV〉の数はこのぞく。

(79) の仮説が裏付けられる。次節では、このような状態変化の有無と 4.2.1.節で見た指示対象の情報特性をもとに、〈 *il ya* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文の機能の違いを考察する。

4.2.3. 〈 *il ya* 〉 / 〈 *voilà* 〉 現象文の談話機能と先行場面

ここで、4.2.1.節と 4.2.2.節の考察をもとに、〈 *il ya* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文の談話機能の違いについて考える。

4.2.1.節では、〈 *il ya* SN qui SV 〉と〈 *voilà* SN qui SV 〉の名詞句の指示対象の情報特性を吟味し、〈 *il ya* 〉現象文は意識の焦点にある *active* な指示対象を新たな出来事に含まれる要素として提示することができないが、〈 *voilà* 〉現象文は *active* な指示対象を新たな出来事に含まれる要素として提示できることを示した。そして、4.2.2.節では、〈 *voilà* 〉現象文は以前の状態 P1 から現在の状態 P2 への状態変化を示すのに対し、〈 *il ya* 〉現象文は現在の状態 P2 のみを示すことを明らかにした。

これらの分析をもとに、〈 *il ya* 〉現象文は先行場面を伴わず話し手の知覚領域で起きた出来事の存在を提示するが、〈 *voilà* 〉現象文は先行場面からの文脈のつながりのある場面転換を行うことを、2章で説明した談話モデルにより例を用いて説明する³⁰⁾。

まず、〈 *il ya* 〉現象文に含まれる指示対象は、4.2.1.節の名詞句の指示対象の情報特性で見たように、共有知識領域に存在する不定冠詞付き名詞句や固有名詞で示される【Brand-new】【New-unused】な指示対象や聞き手に推論可能な【Inferable】な指示対象であった。また、発話時の発話状況領域に存在する【Sit-evoked】な指示対象であっても、*inactive* で発話時の先行場面においては意識の焦点にない指示対象が用いられた。そして〈 *voilà* 〉現象文と大きく異なる点として、先行場面において指示対象の存在を含意するような 3 人称代名詞とは共起しないことが観察された。さらに、先行場面を含意する副詞 *enfin* などと共起しにくい。これらの点から、発話状況領域において文脈によって結びつけられた先行場面のないことが〈 *il ya* 〉現象文の特徴であることがわかる。4.2.1.節でみた〈 *il ya* 〉現象文で表される事態においても、(38)「車の出現」、(39)「ふきこぼれ」、(40)「先生が教室でセックス」、(41)「女の子にもてる」、(42)「子供が一人で閉じ込められる」、(43)「母親が泣く」、(44)「人形がこわれる」、(45)「郵便屋の出現」、(46)「電話が鳴る」など、発話現場において発生が予期されていない事態の出現である。このように、発話現場において予期していない、つまり先行場面のない出来事が話し手の知覚領域に出現したことを聞き手に提示するのが〈 *il ya* 〉現象文の談話機能と考えられる。

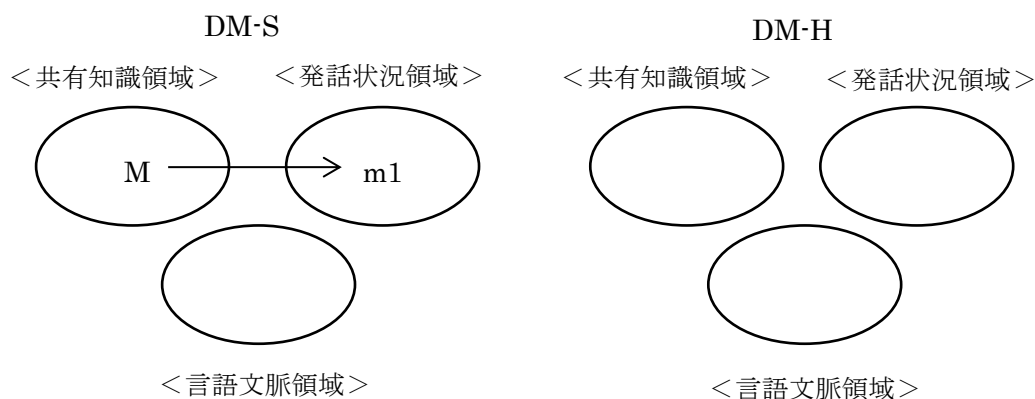
以下では、(43) *Papa ! Ya maman qui pluerre !* を例にとり、〈 *il ya* 〉現象文の出来事の存在提示と聞き手による解釈のメカニズムを談話モデルを用いて説明する³¹⁾。

³⁰⁾ 津田 (2013) では、Langacker (2001) の CDS (Current Discourse Space) を参照し図示したが、本論文では、共有知識領域、言語文脈領域、発話状況領域の各領域と指示対象の関係をより明らかにするため、東郷 (1999 他) の談話モデルを使用する。〈 *il ya* 〉現象文と〈 *voilà* 〉現象文の談話機能の違いについてのポイントとして示している点は同じである。

³¹⁾ 東郷 (2009 : 34) の現象描写存在文の談話モデルを参照している。

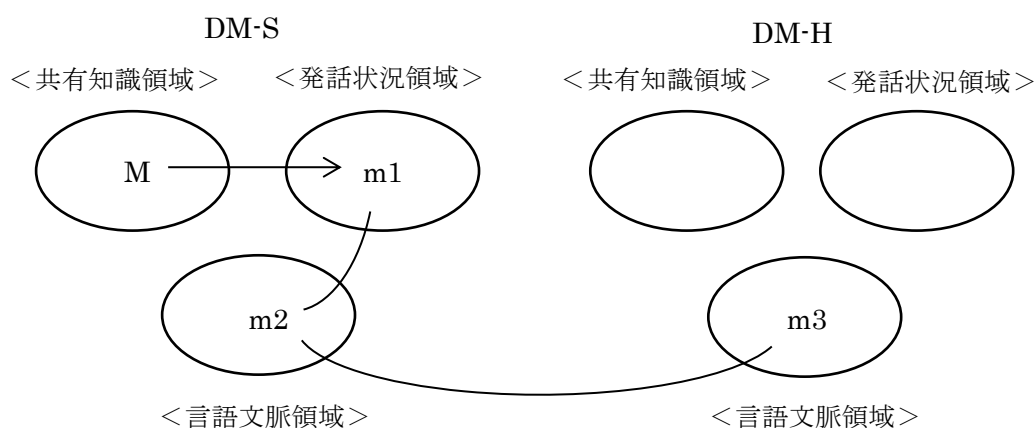
まず、図 (4.1) は、突然泣き出した *maman* を、話し手が知覚により捉えた状況を表している。話し手が共有知識領域に保有している個体レベルの存在 *M* から展開中の一時的状態（泣いている）の局面レベルの存在 *m1* として切り出されることを、矢印の個体・局面コネクタにより示している。

図 4.1 〈 *il y a* 〉現象文：Papa ! Y'a maman qui pleure ! (1) 出来事の知覚



そして、話し手が発話現場で知覚した事態に含まれる局面レベルの存在 *m1* は、話し手が〈 *il y a* 〉を局面レベル述語として使用し展開中の事態を知覚場面として断定することにより、言語文脈領域を介して (*m2*→*m3*)、聞き手に伝えられる (図 4.2)。

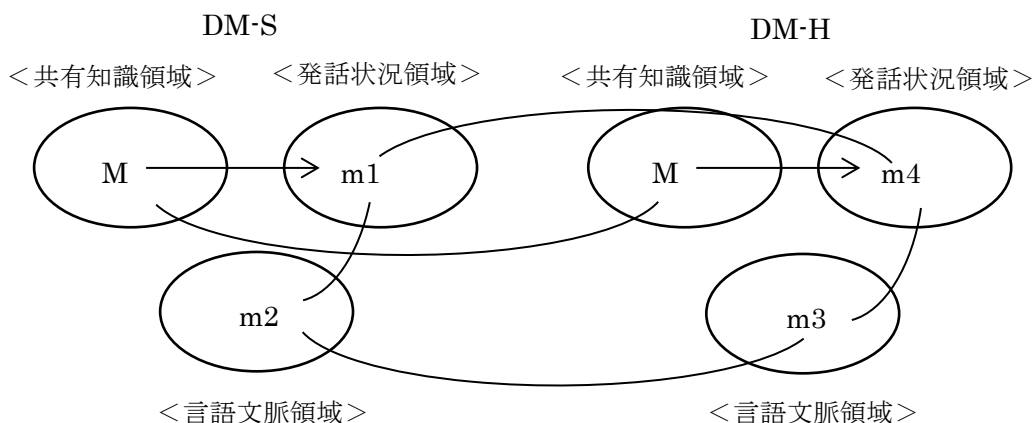
図 4.2 〈 *il y a* 〉現象文：Papa ! Y'a maman qui pleure ! (2) 発話時



聞き手は、呼びかけなどにより、発話現場で事態が起きていると理解し、発話状況領域において事態を解釈し (*m3*→*m4*)、発話現場の事態が共有される (図 4.3)。聞き手の発話状況領域で解釈された事態に含まれる局面レベルの *maman* (*m4*) も、聞き手の共有知識領域に登録されている個体レベルの *maman* (*M*) と個体・局面コネクタで結ばれている。

また、話し手と聞き手の共有知識領域に登録されている個体レベルの *maman* (M) も ID コネクタによりつながれている。

図 4.3 〈 *il y a* 〉現象文：Papa ! Y'a *maman* qui pleure ! (3) 聞き手の解釈



このように 〈 *il y a* 〉現象文は、先行場面を伴わず、話し手が目の前で突然知覚した事態の存在が聞き手に提示される。聞き手は、言語文脈領域を介して提示された事態を、呼びかけなどにより発話現場で生じた事態と理解し、発話状況領域において事態を解釈する。

では 〈 *voilà* 〉現象文では、どのように事態は提示されるのだろうか。〈 *il y a* 〉現象文との差異が最も著しい 3 人称代名詞を伴う場合の 〈 *voilà* 〉現象文をもとに考える。

3 人称代名詞で示される指示対象は発話状況であれ言語文脈であれ、先行文脈ですでに喚起されており発話時点で *active* な状態に置かれている。そうすると、先行研究で指摘されるような³²⁾、談話において *New* な情報特性を持つ指示対象を主語位置からはずすという談話上の理由もあてはまらず、なぜ通常の 〈主語+述語 (SN+SV)〉構文 (*Elle pleure !*) によって意識の焦点にある指示対象についての事態を述べないのかという疑問が生じる。これは 〈 *voilà* 〉現象文が以前の状態 P1 から現在の状態 P2 への状態変化を示すことからわかるように、たとえ意識の焦点にある指示対象であっても、あらたな事態に含まれる要素として指示対象を表現するためと考えられる。つまり、先行する場面に既に存在する指示対象の以前の状態から現在の状態への状態変化を伴う「場面転換」を表すのが 〈 *voilà* 〉現象文の談話機能と考えられる。一方で、3 人称代名詞の指示対象を含む先行場面の存在が示すように、〈 *voilà* 〉現象文は先行場面と文脈でつながっているものである。

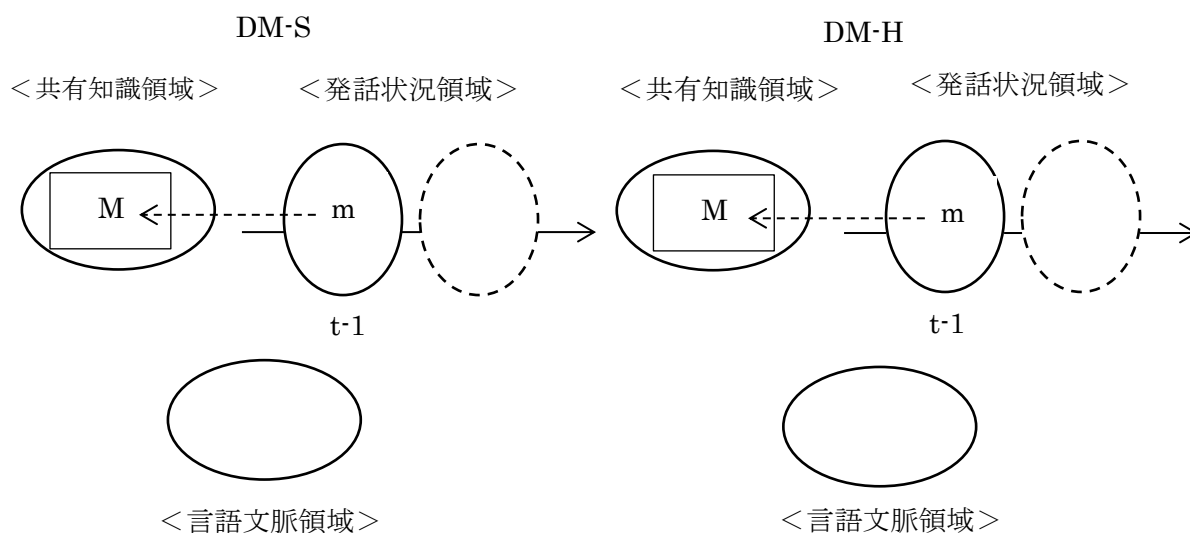
³²⁾ Prince (1981) では、話し言葉による、ある語りの事例分析において、主語位置を占める指示対象の情報特性は、*Evoked* (93.4%)、*Inferable* (6.6%)、*New* (0.0%) というデータ結果を残している。そして、*there* 構文や *it* 分裂文、左方転位構文、関係代名詞の主語を省いたアマルガム構文などの統語的操作により、聞き手にとって到達可能性の低いと想定される指示対象の名詞句を主語位置から外す傾向があることにも言及している。また東郷 (1998) では、フランス語の話し言葉の分析により、*il y a* 構文を含む様々な構文による指示対象の導入方略が考察されている。

以下では、〈voilà〉の場面転換の機能により事態がどのように提示されるかを、例文(29) : *La voilà qui pleure maintenant !* をもとに、談話モデルにより示す³³⁾。

(29) の事例では、3 人称代名詞で示される指示対象は、発話時 (t₀) より先行する時点 (t-1) から発話現場に存在し、文脈とともに、すでに意識の焦点におかれている。

まず図 4.4 では、意識の焦点におかれた指示対象 (e.g. Marie) の局面レベルの存在が、発話現場の文脈 (四角で表す) とともに、共有知識領域で蓄積されていくことを示している。例えば、画商の店に絵を売りにきた Marie の先行場面 (店に入ってくる→絵を見せる→価格交渉をする、おどおどしている) が、Marie の個体レベルの情報として更新され、共有知識領域に蓄積されていく。このような発話現場で得た情報の蓄積は、発話現場に存在する聞き手においても概ね同様に行われると考えられる³⁴⁾。

図 4.4 〈voilà〉現象文 : *La voilà qui pleure maintenant !* (1) 先行場面



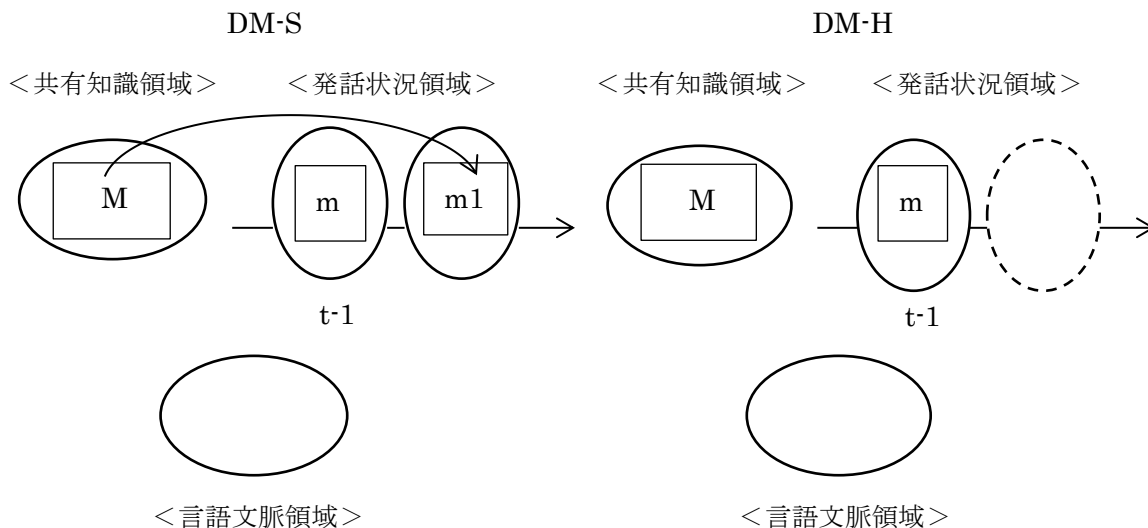
次に図 4.5 では、価格交渉を有利にすすめようとする画商に絵をけなされ、泣き出した局面レベルの Marie を話し手が知覚したことを示している。m1 は、知覚時点 (≒発話時 t₀) の局面レベルの泣き出した Marie を表している。この局面レベルの Marie (m1) は、矢印の個体・局面コネクタで示すように、先行場面 (t-1) 時点までの情報を蓄積した共有知識領域

³³⁾ 津田 (2013) では、3 人称代名詞で表される指示対象の先行文脈とのつながりを Langacker (2001) の CDS (Current Discourse Space) を用いて表したが、本論文では東郷 (1999 他) の談話モデルにおける発話状況領域の場面転換として示す。

³⁴⁾ この (29) の映画の実例では、話し手である画商の話しかけた相手が、絵を売りにきた女の子なのか、店内にいるもう一人の客なのか、画商自身に言い聞かせるような発話なのかははっきりしないが、通常聞き手は、発話現場で先行場面を共有している、その場にいる話し相手 (複数の場合もある) であり、特定可能な事例が多い。

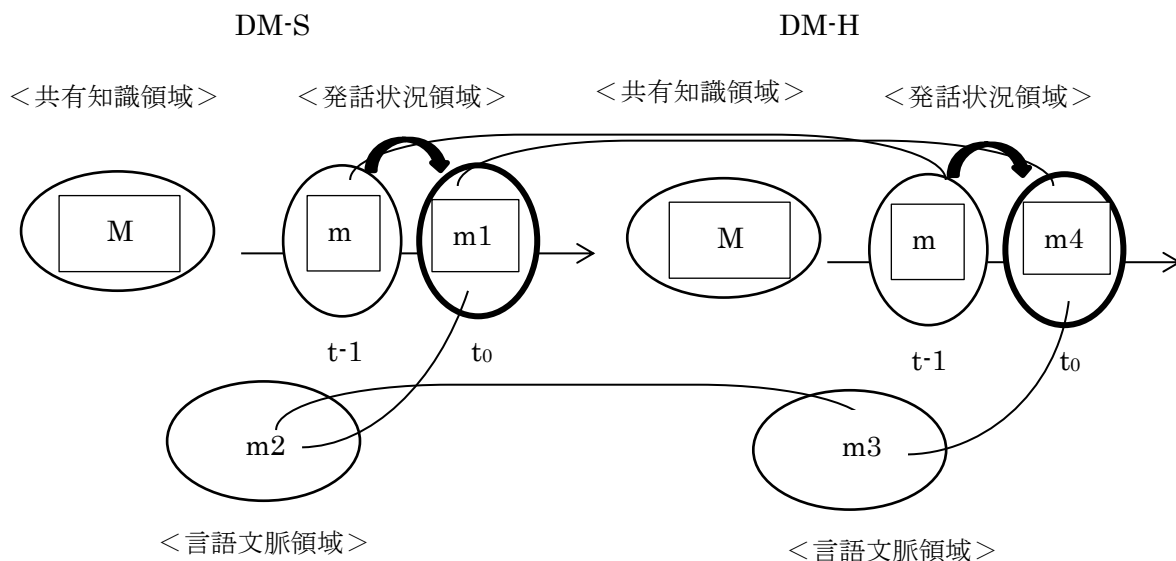
の個体レベルの Marie (M) から切り出される。発話現場の文脈が引き継がれていることを四角の枠で示している。

図 4.5 〈 voilà 〉 現象文 : La voilà qui pleure maintenant ! (2) 出来事の知覚



話し手は、この知覚した事態を、〈 voilà 〉の機能により発話状況領域の場面転換として聞き手に提示する(図 4.6)。発話状況領域の右側の太線で表されたスペースが、発話時 (t₀) における話し手・聞き手を含む発話状況領域を示し、左側のスペースが、時間的に先行する発話状況領域を示す。

図 4.6 〈 voilà 〉 現象文 : La voilà qui pleure maintenant ! (3) 場面転換



発話時 (t₀) より先行する時点 (t-1) において、Marie を含む発話現場における状況が話し手と聞き手で共有されていることにより、話し手が知覚した事態は先行場面からの場面転換として〈voilà〉を用いて聞き手に提示される。発話時 (t₀) に話し手が知覚した事態に含まれる局面レベルの存在である Marie (m₁) は、言語文脈領域を経由し (m₂ → m₃)、〈voilà〉の場面転換機能により解釈領域として提示された発話時 (t₀) の発話現場で起きた事態に含まれる局面レベルの存在として解釈される (m₄)。

図 4.3 と 図 4.6 をみてわかるように、〈il y a〉現象文と〈voilà〉現象文の最大の違いは、知覚された事態に 3 人称で表される指示対象が含まれる事例のあることからわかるように、〈voilà〉現象文には、指示対象を含む四角で示す先行文脈を形成する先行場面が存在することである。

また、(29) の事例は、3 人称代名詞で表される指示対象が、発話現場にすでに存在し、active な状態におかれている【sit-evoked】な事例であるが、3 人称代名詞を伴う〈voilà〉現象文には、3 人称代名詞で表される指示対象が言語文脈領域で話題になっており発話時に発話現場に出現するような事例も多い。そのような指示対象が先行場面で発話現場に存在していない事例においても、指示対象は発話現場の状況と文脈上つながって active な状態におかれている。例えば、4.2.1 節でみた【Text-evoked】な事例を以下に再掲すると、(101) では追手が発話現場に現れるかどうかを常に気にかけている中での発話であり、(102) では訪問した相手が出現したことを表す発話である。また (103) の事例においては、語っている内容の一場面が発話現場で展開しようとしていることを示す発話である。

(101) (追われて逃げ込んだ先で、追手が現れたのを見て)

Les *voilà* qui s'amènent ! (=(64))

(There / Here they come!)

(102) (訪問を受けた当人がちょうど、二階から降りてくるのを見て管理人が)

Tenez, le *voilà* qui descend ! (=(65))

(Look, there he is, coming down!)

(103) (隣の畑で農作業をしている家族の娘に言い寄る教師のうわさをしていると、当の教師が娘のところにやってくるのを見て)

Juste ! Le *voilà* qui arrive les aider. (E. Zola, *La Terre*)

(Right on time! There he is, coming to help them.)

したがって、3 人称代名詞による〈voilà〉現象文は、談話モデル内に active な状態で存在する指示対象の発話状況領域における状態変化 (泣いていない→泣いている) (非存在→存在) を伴う、先行場面からの場面転換を表すといえる。

これらの考察から、〈il y a〉現象文は、文脈によるつながりのある先行場面をもたず、話し手が知覚した指示対象の予期せぬ事態の存在を聞き手に提示するのに対し、〈voilà〉

現象文は、発話現場の状況と文脈上つながりのある先行場面からの指示対象の状態変化を発話状況領域の「場面転換」として表すと考えられる。

従来、〈 il y a 〉は聞き手の意識に提示、〈 voilà 〉は直示的に提示として説明され、先行文脈の有無やそれぞれの提示方法と先行文脈の存在との関係については、明確にされてこなかった。〈 il y a 〉 〈 voilà 〉のどちらもが発話状況領域において解釈される現象文の事例において、発話現場における先行場面とのつながりを吟味することにより、〈 il y a 〉現象文が、聞き手の意識に（談話モデルの言語文脈領域を介して）事態を提示することで、発話現場における先行場面とのつながりを持たずに事態を提示できるのに対し、〈 voilà 〉は共有された発話現場の先行場面からの場面転換として知覚した事態を提示するメカニズムを示した。

さらにこのように考えると、3章で議論した“Qu'est-ce qu'il y a ?” “Qu'est-ce qui se passe ?” “C'est quoi ?” “Pourquoi ?”などにより設定された「課題(の場)」に、なぜ〈 voilà 〉が使用されないかも説明することができる。聞き手により設定された「課題(の場)」に答えることと、話し手が聞き手に場面転換を促すことは相反する発話行為であるからである。つまり、聞き手の問いかけに答える「課題(の場)」は聞き手によって発動され、共有知識領域に格納されている記憶・知識情報に結びつけられるように話し手によって同定・提示される。一方〈 voilà 〉は、話し手が聞き手に新たな場面を提示するという場面転換の働きを持つ語だからである。

本節では、先行場面の有無に着目し、〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉現象文の事態の断定(提示)のメカニズムの違いを示したが、図 4.6 で示した〈 voilà 〉の発話状況領域における先行場面からの場面転換は、共有知識領域に格納されている指示対象 M とどのような関係があるのだろうか。次節では、この関係を共有知識領域内に格納されているスキーマ化された「出来事連鎖のシナリオ」により明らかにする。

4.3. 〈 voilà 〉と事態の予測可能性：先行場面と「出来事連鎖のシナリオ」

前節では、〈 il y a 〉現象文と〈 voilà 〉現象文の違いが先行場面の有無にあることを、特に〈 il y a 〉現象文には使用されない3人称代名詞が〈 voilà 〉現象文に使用されることに注目して説明した。この節では〈 voilà SN qui SV 〉や〈 voilà que 節 〉で表される〈 voilà 〉現象文タイプにおいて、先行場面と発話時の知覚された場面が、スキーマ化された出来事の連鎖関係である認知モデル「シナリオ」³⁵⁾によって文脈上つながりを持つことを明らかにする。まず4.3.1.節で、3人称代名詞で表されるものを除いても出来事を表す〈 voilà SN qui SV 〉構文に定名詞句が共起する比率が高いことをコーパスデータにより示す。そして4.3.2.節で、〈 voilà SN qui SV 〉構文の具体事例を観察し、我々が出来

³⁵⁾ 経験に基づき形成される、推論や解釈に用いられる知識集合であり、「シナリオ」という用語は、Sanford & Garrod (1981) で用いられている。類似の概念である「スクリプト」という用語は、Schank & Abelson (1977) で用いられている。

事を認知する上で、スキーマ化された認知モデルとしての「シナリオ」が使用されているという仮説を提示する。次に 4.3.3.節で、以下のような、話し手が知覚によって気付いた出来事に、事態の主体となる中核的参加者が存在しないタイプの〈 *voilà que* 節 〉構文をとりあげる。そして、事態の中核的参加者が存在しない〈 *voilà que* 節 〉構文においても、「シナリオ」に基づき予測可能な事態として出来事が提示されることを示し、そのメカニズムを明らかにする。

- (104) *Allons bon, voilà qu'il pleut !*
(Oh, look, it starts to rain!)
- (105) *Mais voilà qu'il est neuf heures.*
(But now it's nine o'clock.)
- (106) *Voilà que ça commence, j'en étais sûr !*
(And now it starts, I knew it!)

一方 4.3.4.節では、(107) のような〈 *voilà SN qui SV* 〉構文ではなく、(108) のように出来事の中核的参加者が〈 *voilà que* 節 〉内に存在する構文をとりあげ、これまでに見た文タイプと異なり〈 *voilà que* 節 〉構文で表現される事態が意外性のある出来事として提示されることを観察する。その上で、出来事の中核的参加者が予測に組み込まれるかどうか両構文の意味の違いとなることを示す。

- (107) *Voilà Marie qui chante !*
(There is Marie singing!)
- (108) *Voilà que Marie chante !*
(Now Marie is singing!)

4.3.1. 出来事を表現する〈 *voilà SN qui SV* 〉構文と定名詞句

まず、3人称代名詞を除いた〈 *voilà SN qui SV* 〉構文の名詞句のタイプを、定／不定という観点から観察する。

表 4.5 は、FRANTEXT (2013 年度) のコーパスデータを用いて〈 *voilà SN qui SV* 〉構文の出来事を表す事例について、定／不定の使用比率を調査したものである。〈 *voilà SN qui SV* 〉構文、総件数 1343 件のデータの中から、定／不定の名詞句を持つ構文それぞれ 100 件ずつをランダム抽出した上で、単一の出来事を表す事例の件数を数えている³⁶⁾。

³⁶⁾ 不定名詞句は、不定冠詞付き名詞句、定名詞句は定冠詞付き名詞句と所有形容詞付き名詞句の単数のみを基データとしている。また中性代名詞 *en* を含む構文は出来事を述べる文タイプとは異なるので、データから除外している。津田 (2014) の調査に基づくデータであるが、不定名詞句の件数を、その後の観察により 13 件→11 件に修正している。

表 4.5 単一の出来事³⁷⁾を表す〈voilà SN qui SV〉構文の定／不定の比較

不定名詞句		定名詞句		合計	
件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
11	(18.0)	50	(82.0)	61	(100.0)

FRANTEXT (2018 年度)

表 4.5 が示すように、不定名詞句を含む〈voilà SN qui SV〉構文には 100 件中 11 件、定名詞句を含む〈voilà SN qui SV〉構文には 100 件中 50 件の単一の出来事を表す事例が観察された。合計すると 61 件であるが、単一の出来事を表す事例では、定名詞句が多く（8割以上の比率で）使用されているといえる。

これらのコーパス事例には、(109a) や (110a) のように発話時に話し手の目の前で起こった出来事を表す文や、(109b) や (110b) のように語り手が出来事を直示的に表現する文タイプも含まれる。

(109) 不定名詞句のコーパス事例

- a. tiens, *voilà un monsieur qui revient du bal* : ...
(Look, there's a man coming back from the ball...)
- b. v'lan. *Voilà un homme qui se noie* !
(Oh dear. There's someone drowning!)

(110) 定名詞句のコーパス事例

- a. *Voilà la neige qui tombe* !
(There's the snow falling!)
- b. mais *voilà la porte qui s'ouvre*...
(but there opens the door...)

次節では、出来事を表現する〈voilà SN qui SV〉構文で、なぜ定名詞句が使用される比率が高いかを、より具体的に出来事連鎖の関係をスキーマ化した認知モデル「シナリオ」を用いて考え、さらに不定名詞句が使用される〈voilà SN qui SV〉構文と「シナリオ」の関係についても考える。

4.3.2. 〈voilà SN qui SV〉構文：先行場面と「出来事連鎖のシナリオ」

この節では、話し手の目の前で起こった出来事を表す〈voilà SN qui SV〉構文の名詞句の定／不定の事例それぞれについて、4.2.3.節で示した先行場面がどのように関係するか

³⁷⁾ (i) のような、関係代名詞を介して複数の出来事を述べる文タイプは除外している。

(i) a. Bien entendu, *voilà un mec qui le suit, qu'a pas l'air idiot*...
b. Et *voilà le soleil qui a sauté les collines et qui monte*.

を考察する。

まず、〈 *voilà* SN qui SV 〉に定名詞句が使用される以下のような例文を文脈とともに考察する。

(111) (雪が積もる山中で火をおこし、薪をくべる。火が燃え上がるのをみて)

— Ah, *voilà* le feu qui flambe.

— Oh, c'est bon, ça ; il fait chaud maintenant. (A. Jarry, *Ubu Roi*)

(— Ah, Here's the fire burning.

— Oh, that feels good; it feels warm now.)

(112) (つきあっていた男にしつこくつきまとわれて)

Arrête, mais arrête ! ça y est ! *voilà* mes plaques qui recommencent ! (=55)

(Stop it, stop it! That's enough! There's my rash again!)

これらの事例を観察すると、(111) では因果関係 (薪を投入すると火が燃え上がる)、(112) では因果関係 (男にしつこくつきまとわれると湿疹がでる) に基づき、以下の図に示すように先行場面と後続場面の出来事連鎖の関係が構築されているといえる。

図 4.7 因果関係：【薪の投入】

(=(111)の事例)

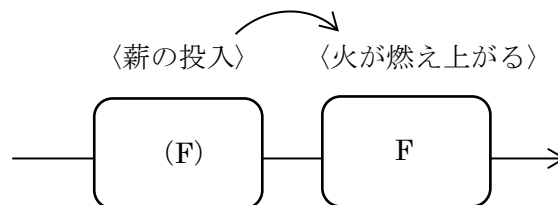
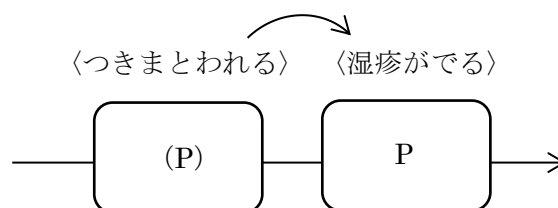


図 4.8 因果関係：【拒否反応】

(=(112)の事例)



このように先行場面と後続場面のあいだにスキーマ化された出来事連鎖の関係が構築されているため、名詞句の指示対象は先行場面から何らかの意味で予測可能な対象となり、(111) のように定冠詞や (112) のように習慣的の性質を表す所有形容詞が用いられていると考えられる。また (112) では、動詞 *recommencer* により、事態が繰り返し生じているスキーマ化された連鎖関係であることが示されている。

このようなスキーマ化された時系列上の出来事連鎖の関係は、「シナリオ」や「スクリプト」といった認知プロセスとして知られており、Schank & Abelson (1977) は、以下の

(113) で示すように、「スキーマ化されたシナリオ（スクリプト）は、よく知られた状況についての、前もって存在するステレオタイプな行為連鎖であり、これらの「シナリオ」に含まれる対象はすでに存在が含意されているため、はじめて談話に導入される対象に定冠詞 “the” が用いられる」としている。

(113) “Scripts allow for new references to objects within them just as if these objects had been previously mentioned; objects within a script may take ‘the’ without explicit introduction because the script itself has already implicitly introduced them.” (Schank & Abelson 1977)

定名詞句で示される指示対象に「シナリオ」に基づく出来事連鎖の関係が存在することは、先にみた事例からも裏付けられる。

- (114) (ぬかるみの中を車もつかわず母親に歩かされ、靴の踵が取れたと訴える)
Voilà mon talon qui part. (=56)
(There goes my heel.)
- (115) (奥様から熱いお湯を頼まれていた女中が、お湯が沸いたことを告げる)
Madame, voilà votre eau qui bout. (=57)
(Ma’am, your water is boiling.)
- (116) *Voilà le jour qui baisse !* (=58)
(There’s the sun setting!)
- (117) (首切りが横行するデパートで経営者のふるまいを様々に解釈して)
Voilà le patron qui rit maintenant ! (=59)
(There’s the boss laughing now!)

(114) は 19 世紀末の小説の中での会話だが、足元の悪い場所では靴に常に気を使うが、ハイヒールの踵をいためる事態は多くの女性が持つ経験だろう。(115) は火にかけた水が沸くという時間軸上の出来事連鎖の「シナリオ」であり、(116) は時間の進行を気にしている日暮時に容易に使用され得る。また (117) では経営者のふるまい一つで様々な「シナリオ」に従業員が持つことを表している。

これらの点から、定名詞句が用いられる〈 *voilà SN qui SV* 〉構文で表現される事態は、スキーマ化された「シナリオ」をもとに先行場面とつながっており、予測可能な事態として提示されているといえる。

それでは、〈 *voilà SN qui SV* 〉構文で不定名詞句が使用されている事例においては、先行場面や事態連鎖の「シナリオ」は存在しないのだろうか。事例をもとに考えてみよう。

- (118) (馬を乗り継いで飛び出した男が、懐から紙きれを落としたのに気付いた馬番が)
 Eh ! monsieur ! (...) eh ! monsieur , *voilà* un papier qui s'est échappé de votre
 chapeau ! Eh ! monsieur ! eh ! (A. Dumas, *Les Trois Mousquetaires*)
 (Hey, sir! (...) hey! sir, there's a piece of paper that slipped out of your hat! Hey!
 sir! hey!)
- (119) (工事中の足場で遊んでいる。職人が二人昼休みから帰ってくるのに気付いて)
 Aie ! *voilà* des ouvriers qui reviennent ! (S-G. Colette, *Claudine à l'école*)
 (Oh no! There are some laborers coming back!)

これらの事例を観察すると、以下の図で示すように、不定名詞句をとる〈 *voilà* SN qui SV 〉
 構文で表現される出来事は、先行場面の出来事とスキーマ化された関係を持っていない。

図 4.9 【馬の乗り継ぎ】

(= (118) の事例)

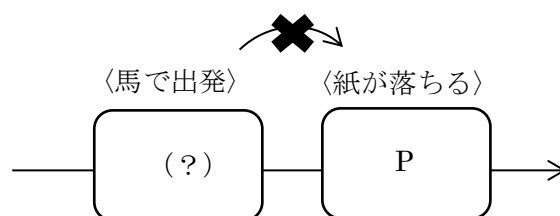
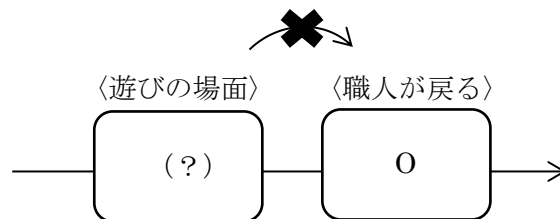


図 4.10 【子供の遊び】

(= (119) の事例)



(118) の「馬の乗り継ぎ」場面のスキーマ化された「シナリオ」の中に、「紙が落ちる」という出来事は含まれていない。また (119) の「子供の遊び」の「シナリオ」においては、工事現場は遊びの場所として利用されており、現実の工事現場の職人が戻って来ることは、「子供の遊び」の「シナリオ」には含まれない。したがって、(118) (119) の図で示すように、不定名詞句をとる〈 *voilà* SN qui SV 〉構文の先行場面には不定名詞句で表される指示対象の存在は含意されない。

では、これらの不定名詞句をとる〈 *voilà* SN qui SV 〉構文で示される事態は、どのように聞き手に提示されているのだろうか。

4.2. 節では、〈 *il y a* 〉現象文は、文脈上のつながりのある先行場面を持たず、指示対象の予期せぬ事態の存在を聞き手に提示するという仮説を提示した。そして〈 *il y a* SN qui SV 〉構文で表される〈 *il y a* 〉現象文タイプの名詞句が定名詞句で表される場合、先行場面において指示対象が **active** になっている〈 *voilà* SN qui SV 〉構文と異なり、先行場面を持たず **inactive** な指示対象の予期せぬ事態と解釈されることを説明した。

以下では、不定名詞句で表される現象文についての、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文と〈 *il y*

a SN qui SV 〉 構文を比較する。

ここでは、〈 il y a SN qui SV 〉 構文の不定名詞句の事例を、動詞のタイプにより二つに分けて、再掲し考察する。

(120) (無免許だが空地で車の運転を友人に教えてもらっていると、車がやってくる)

Y a une bagnole qui arrive, (...), merde ! Reprends vite le volant, je me planque ! (=38))

(A car is coming, (...), Damn! Get back behind the wheel, I'll hide!)

(121) (一仕事終えたレストランの厨房。レンジで何かがふきこぼれている)

Hé, Lestafier ! cours vite à ton piano, y a un truc qui déborde ! (=39))

(Hey, Lestafier! quickly run to your stove, there's something boiling over!)

(120) や (121) の関係節内の到達動詞 *arriver* や *déborder* は指示対象の変化を表す。このような指示対象の変化を動詞が表す場合、不定名詞句で表される 〈 *voilà SN qui SV* 〉 構文も出来事を表すことができる。この節で説明した (118) (119) の事例を含め、4.2.節で観察したコーパス事例にも以下のように存在する。

(122) (遊びにきている友人の家で、戸口で馬車の音がするのを聞いて)

Voilà un cabriolet qui arrête ici ! (=51))

(Look! A carriage is stopping here!)

(123) (たてこもっている家屋で、銃弾の盾にしている鎧戸がおちそうなのに気付いて)

Attention ! (..) Voilà une parsienne qui tombe ! (=50))

(Take care! (...)) There's a shutter falling!)

一方、〈 *il y a SN qui SV* 〉 構文で表される 〈 *il y a* 〉 現象文の不定名詞句の事例には、以下の (124) や (125) のように状態変化を表さない関係節内の事態の事例も存在する。

(124) (放課後の教室で先生が女の子とセックスしているのを生徒がみつけて)

Eh les mecs, y'a un prof qui baise une meuf toute nue ! (=40))

(Hey guys, there's a teacher fucking a girl totally naked!)

(125) (友人に色目を使っている女の子に気付いて)

Tiens ! // y a une petite qui te fait de l'œil, regarde donc. (=41))

(Look! There's a girl making eyes at you, look then.)

このような状態変化を表さない事態を不定名詞句による 〈 *voilà SN qui SV* 〉 構文で表すと、指示対象の状態変化ではなく、関係節が表す属性を持つ指示対象の提示という意味と

なり、指示対象の予期せぬ事態を表す発話場面とそぐわなくなってしまう。

(126) (放課後の教室で先生が女の子とセックスしているのを生徒がみつけて)

?? Eh les mecs, *voilà* un prof qui baise une meuf toute nue ! ³⁸⁾

(Hey guys, there's a teacher fucking a girl totally naked!)

(127) (友人に色目を使っている女の子に気付いて)

? Tiens ! *Voilà* une petite qui te fait de l'œil, regarde donc.

(Look! There's a girl making eyes at you, look then.)

したがって、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文は、定名詞句であれ不定名詞句であれ、聞き手に場面を提示し、指示対象の状態変化をとまなう場面の転換を表す。そして、定名詞句で表される場合は、先行場面から「出来事連鎖のシナリオ」に基づき予測可能な場面転換を表すのに対し、不定名詞句で表される場合は、状態変化を表す動詞と共起し、新たな事態の出現を場面転換により表すことを示した。

4.3.3. 出来事の中核的参与者を持たない〈 *voilà que* 節 〉構文と「シナリオ」

この節では、話し手の目の前で起きた出来事を表す以下のような〈 *voilà que* 節 〉構文を考察する。

(128) Allons bon, *voilà qu'il pleut* ! (=104)

(Oh, look, it starts to rain!)

(129) Mais *voilà qu'il est neuf heures*. (=105)

(But now it's nine o'clock.)

(130) *Voilà que ça commence, j'en étais sûr* ! (=106)

(And now it starts, I knew it!)

これらの文は、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文と同じように、発話現場で起きた出来事の知覚による気づきを表している。しかし名詞句で表される出来事の中核的参与者を持たないため、「シナリオ」に基づく先行場面との関係を知ることができない。以下では、具体的な事例をもとに、これらの〈 *voilà que* 節 〉構文が表す出来事と先行場面や「シナリオ」との関係を検討していく。

4.3.3.1. 物理的な場面の变化を表す〈 *voilà que* 節 〉構文

まず (128) を具体的な文脈とともに事例 (131) として考察する。

³⁸⁾ (126) の事例は下品な語彙を多用しているので、その点においても〈 *voilà* 〉と共起しにくいとするインフォーマントもいた。

(131) (父の散歩中に姉 Germaine が妹に家出の準備を手伝わせている)

G1: ... Mais vite. Il va pleuvoir et papa va revenir.

(家出の準備のためのやりとりが少し続く)

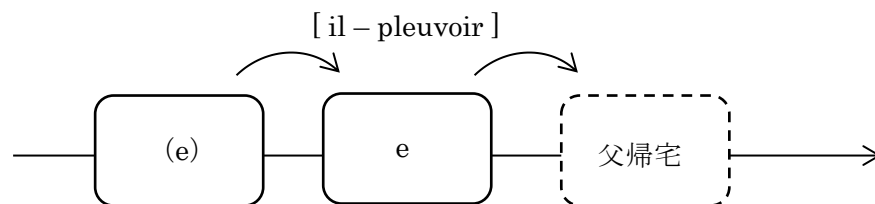
G2: ... Allons bon, voilà qu'il pleut ! (J. Green, *Adrienne Mesurat*)

(G1: Come on. It's going to rain and Dad is coming back.

G2: Oh, look, it starts to rain!)

この事例においては、「雨が降る」という事態を話し手 G (Germaine) が想定していたことは G1 の発話で示されているが、単に「雨が降る」という事態を予測していた先行場面が存在するというのではなく、図 4.11 の a,b,c のような複数の、話し手に関与的な「シナリオ」の合成 (雨模様→雨が降る→父が帰宅する→家出が妨げられる) によって、「雨が降る」という事態を話し手に関与的な事態として話し手が想定・懸念している先行場面が存在する。図 4.11 の中の e は、話し手がたった今知覚した事態 [il-pleuvoir] (雨が降る) を表し、先行場面で括弧付きで表した (e) は、事態が想定されていたことを示している。

図 4.11 【雨降りと父の散歩と家出の準備】



- 雨降りのシナリオ：雨模様→雨が降る
- 散歩のシナリオ：天気がよい→散歩 (雨が降ると帰宅する)
- 家出のシナリオ：親に知られることなく準備→こっそり家を出る

「シナリオ」に基づく想定を話し手・聞き手が共有しているため、(131) の G2 の発話は、「今、目の前で雨が降っている」という事態だけではなく、図 4.11 のような複合的な「事態連鎖のシナリオ」に基づき先行場面において話し手が抱いていた想定・懸念が現実の事態となったという、先行場面からの場面転換を聞き手に提示しているといえる。このような先行場面の存在は、事態発生時 (発話時) の間投詞 “Allons bon” などの事態発生に対する話し手の発話態度によって示される。先行場面の存在は、以下のような後続文を付加すると、さらに明確となる。

(132) Allons bon, voilà qu'il pleut ! J'aurais voulu qu'il ne pleuve pas encore...

(Oh no, it starts to rain! I wish it didn't rain yet.)

〈 *voilà que* 節 〉構文が「事態連鎖のシナリオ」を持つ構文であることは、(133) や (134) のような事例において、通常の 〈 SN + SV 〉構文よりも 〈 *voilà que* 節 〉構文が選好されることから裏付けられる。

(133) (何故かわからないが、父が車を洗うと、そのすぐ後、いつもきまって雨が降る。今日も、父が洗車したあと、雨が降り出した。父が私に。)

a. *Voilà qu'il pleut !*

(It starts to rain!)

b. *Il pleut !*

(選好度 : a > b)

(It's raining!)

(134) (「通勤電車が事故で会社に遅刻する」→「突然お客さんが苦情を言う」→「お昼のランチで注文を間違えられる」→「会社のパソコンがダウンし取引先への連絡に四苦八苦する」のようなついていない一日の終わりに仕事を終え、夜遅くオフィスを出ると雨が降っている。天気予報は晴れといていたので傘は持っていない。思わず一言。)

a. *Voilà qu'il pleut !*

(It's raining!)

b. *Il pleut !*

(選好度 : a > b)

(It's raining!)

(133) や (134) の事例では、イントネーションや表情の付加などにより、〈 SN + SV 〉形式の (133b) (134b) も使用されるが、〈 *voilà que* 節 〉構文が選好されやすい。(133a) では、「父が車を洗う」→「雨が降る」という「事態連鎖のシナリオ」により、想定可能な事態が今目の前で起きたことを表現している。また(134a) では、よくないことが続けて起こる日に、また何かよくないことが起こるのではないかと想定していたよくない出来事が、今目の前で起きたということを 〈 *voilà que* 節 〉で表現している。

一方、何の想定もしていない (135) のような状況においては、〈 SN + SV 〉構文が選好される。

(135) (ある晴れた日に、母親は庭で洗濯物を干す。お手伝いをしていた子供は、その後も庭で遊ぶが、母親はお昼の準備に家の中に入る。しばらくすると、雨が降り出す。子供が母親に。)

a. ? Maman ! *Voilà qu'il pleut !*

- (Mom! It's raining!)
- b. Maman ! Il pleut !
(Mom! It's raining!)

また、〈 il y a que 節 〉では発話現場でたった今知覚した事態を表すことはできない。

- (136) *Tiens ! *Il y a qu'il pleut !*
(Look! It's raining!)

3章でみたように、聞き手の漠然とした問いかけに答える〈 il y a que 節 〉構文は、推論が働きやすい〈 il y a SN qui SV 〉構文との違いはあったが、課題の場は設定されており、話し手の知識情報として提示され、聞き手によって課題に結びつけられ解釈されると考えられた。しかし〈 il y a que 節 〉構文で、たった今知覚した発話現場の物理的な場面全体の変化を表すことはできない。これは〈 voilà que 節 〉構文が、〈 voilà 〉の場面転換の機能により、先行場面からの物理的な場面全体の変化として発話現場で起きた事態を伝えることができるのに対し、〈 il y a 〉は発話現場で起きた事態の存在を提示するのみで、時空領域である発話現場そのものを提示する機能は持たないため、場面全体の変化を表す天候表現や次節でとりあげる時間表現などの事態を提示することはできないと考えられる。

4.3.3.2. 「シナリオ」と時間表現

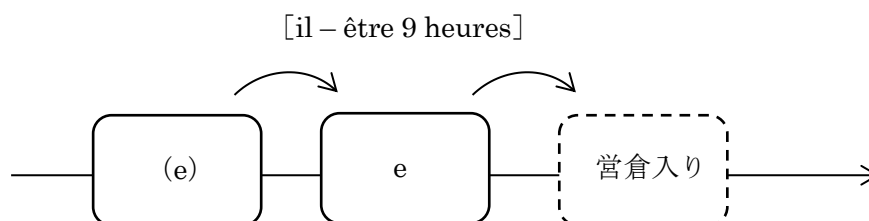
再び〈 voilà que 節 〉構文に戻り、(129)の例文を、文脈とあわせて以下で考察する。

- (137) (寄り道をしようとする相手に、軍隊で決められた就寝時刻に間に合わなくなることを喚起して)

Mais *voilà qu'il est neuf heures*. Si on nous pince dans les rues après neuf heures, c'est la prison. (J-P. Sartre, *Lettres au Castor et à quelques autres*)
(But now it's nine o'clock. If they catch us in the street after nine, we are busted.)

この事例は、単に「今 9 時になろうとしている」という発話時の出来事だけを表現しているのではない。〈 voilà que 節 〉構文で時間表現が用いられた場合には、時間に対応づけられる「シナリオ」の存在が必要とされ、その「シナリオ」の存在を聞き手に喚起し共有するために話し手は〈 voilà que 節 〉構文を用いていると考えられる。(137)では、以下の図で示すような時間に対応づけられる「シナリオ」の存在が想定されている。

図 4.12 【規則違反】



軍隊規則で就寝時刻は9時に決まっているのだが、9時になろうという時間に寄り道をしようとする仲間の行動によって、「9時すぎに外で見つかったら規則違反で処罰を受ける」という「シナリオ」が話し手に喚起され、同じ「シナリオ」を聞き手に喚起するために、強意の“mais”とともに時間表現 e : [il – être 9 heures] を〈voilà que 節〉構文で表しているといえる。

〈voilà que 節〉構文で表される時間表現が単に時刻のみを伝えているわけではなく、時間と対応する「シナリオ」の存在が必要とされることは、以下のような例文において、時間と「シナリオ」との対応関係を問う質問ができることから明らかである。

- (138) (9時になったら一緒に外出しようと約束していたにもかかわらず、例によって何の支度もしていない夫をみつけた妻が夫に。すると夫が妻に。)
- Ah ! *Voilà qu'il est déjà neuf heures !*
- Et alors ? On avait quelque chose à faire ?
- (— Ah! It's already nine o'clock!
- So what? Did we have anything to do?)

(138) では、いつも約束を守らない、時間にルーズな夫（約束する→裏切られる）（待ち合わせる→遅れてやってくる）の行動パターンに基づく「事態連鎖のシナリオ」を持つ時間表現として〈voilà que 節〉構文が用いられている。

一方、(139) のような特定の「事態連鎖のシナリオ」が働きにくい状況では、〈voilà que 節〉構文は選好されにくい。

- (139) (友人とカフェで楽しくおしゃべりをしている。ふと気づくと夜の9時になろうとしている。)
- a. ? *Tiens ! Voilà qu'il est déjà neuf heures !*
- (Oh! It's already nine o'clock!)
- b. *Tiens ! Il est déjà neuf heures !*
- (Oh! It's already nine o'clock!)

したがって、時間を表す〈voilà que 節〉構文は、時間を伝えるだけでなく、時間表現に対応する「シナリオ」を聞き手と共有しようとする発話と考えられる。

4.3.3.3. スキーマ化された「シナリオ」を指す“ça”

出来事の中核的参加者を持たない〈voilà que 節〉構文の最後の事例として、(130)の事例を文脈とともに(140)として考察する。

(140) (いつものようにやきもちを焼き始めたサン＝ルーに対して愛人が)

Voilà que ça commence, j'en étais sûr ! (M. Proust, *Le côté de Guermantes*)

(And now it starts, I knew it!)

〈voilà〉構文内に“commencer”や“recommencer”が共起しやすいことは、すでに4.2.節で指摘したとおりだが、特に(141)の事例のように〈voilà que 節〉構文のque 節内の主語に“ça”をとる文タイプと動詞“commencer”や“recommencer”とが共起する率は非常に高い³⁹⁾。なぜ共起しやすいのか、そして〈voilà que 節〉構文内の指示代名詞“ça”が何を指しているのかを、〈voilà SN qui SV〉構文の分析を援用して考察する。

4.3.1.節で分析した〈voilà SN qui SV〉構文のコーパスデータを参照すると、動詞“commencer”や“recommencer”は、(158)のように定名詞句と共起しやすい。

(141) a. *Voilà le cafouillage qui commence...*

(And here the confusion starts...)

b. *Voyez ! voilà le trouble qui commence ;*

(You see! There the problem arises;)

c. *Allons, voilà la discussion qui va recommencer,*

(So, there's the discussion starting again,)

つまり〈voilà SN qui SV〉構文で動詞“commencer”や“recommencer”が事態の出現を表す場合には、定冠詞と共起しやすいことからわかるように、出来事の出現を予測させる先行場面が存在している。同様に、動詞“commencer”や“recommencer”が用いられる〈voilà que 節〉構文においても、出来事の発生を予測させる先行場面が存在すると考えられる。

したがって事例(140)においては、que 節内の主語の“ça”は、現場指示的に「目の前の焼きもち」だけを指し示しているのではなく、話し手の体験に基づき、これまでも起こったパターン化された以下の図のような出来事連鎖「E₁ (愛人が他の男を目で追う) →

³⁹⁾ FRANTEXT (2013年度)のコーパスデータの〈voilà que 節〉構文内の主語に“ça”が用いられる文56件中、21件でこれらの動詞が用いられている。

E₂ (サン＝ルーが不機嫌になる)」、つまりスキーマ化された「シナリオ」を指していると考えられる。そして、そのような「シナリオ」から予測された事態連鎖の話し手の目の前での出現を、〈voilà que 節〉構文により表現しているといえる。

図 4.13 【サン＝ルーのやきもち】 記憶の中の「シナリオ」と先行場面と出来事の知覚⁴⁰⁾

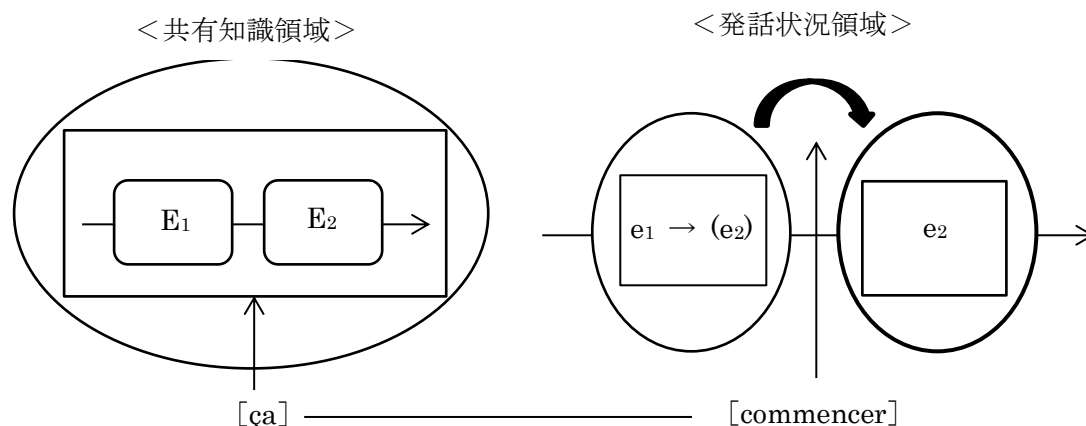


図 4.13 では、話し手（聞き手）の共有知識領域にある記憶の中の「シナリオ」にある出来事連鎖を大文字の E₁→E₂ で表している。また、目の前で起こった事態を小文字 e₁（愛人が目の前の男に興味を示す）、e₂（サン＝ルーが不機嫌になる）で表す。まず、発話現場において事態 e₁（愛人が目の前の男に興味を示す）が起こる。そのことによって、共有知識領域の記憶の中の「シナリオ」E₁→E₂ が、談話資源として利用可能な状態になる。そして〈voilà que 節〉構文が、発話状況領域で知覚された事態 e₂（サン＝ルーが不機嫌になる）が「シナリオ」に基づく先行場面からの予測可能な場面転換として生じた事態として表現されると考えられる。

「シナリオ」の存在は、以下に再掲する例文の下線部「ほうら始まった、きつこうなると思ったわ！（吉川一義訳、岩波文庫、傍点は筆者）」からも明らかである。傍点「なる」に示されるに、事態の連鎖（E₁→E₂）が私の想定内にあったことを示している。そして、このような事態連鎖のシナリオが記憶の中に保持されていることは、「ほうらいつもの焼きもちが始まった、きつこうなると思ったわ！」のように、下線部「いつもの」を自然に付け加えることができることから裏付けられる。

(142) *Voilà que ça commence, j'en étais sure!* (= (140))
 (There it starts, I knew it!)

さらに、日本語で記憶の中の事物を「あ系指示詞」で指示することはよく知られているが、

⁴⁰⁾ 発話は、言語文脈を介して話し手から聞き手に伝えられるが、煩雑な図となるため、DM-S と DM-H の言語文脈を介した手続き的処理についての記述を省略している。

このような〈voilà que 節〉構文の“ça”の翻訳においても「あ系指示詞」が使用されている(143b)。

- (143) (会社の経営計画立案者にオーナーの兄妹が疑念をさしはさむと、その立案者が)
- a. Voyons, *voilà que ça va recommencer, la méfiance !...* (E. Zola, *L'argent*)
(You see, now it's going to start again, the distrust! ...)
 - b. 「おいおい、またあの腹のさぐり合いが始まるのかね。…」
(野村正人訳、藤原書店)

ここで、4.3.3.1 節から 4.3.3.3 節で行った考察をまとめると、4.3.3 節でみた〈voilà que 節〉構文は、que 節内が、発話時点の天候や時間といった物理的な場面全体⁴¹⁾を表す表現であったり、出来事連鎖そのものの出現を表現したりするため、出来事の中核的参与者を持たない。しかし、これらの〈voilà que 節〉構文も、4.3.1 節や 4.3.2 節で考察した〈voilà SN qui SV〉構文同様、聞き手と共有された「シナリオ」に基づき、場面転換を表していることに何ら変わりはない。

次節では、出来事の中核的参与者を持つ〈voilà que 節〉構文について考える。

4.3.4. 出来事の中核的参与者を持つ〈voilà que 節〉構文と想定外の出来事

前節では、出来事の中核的参与者を持たない〈voilà que 節〉構文が、〈voilà SN qui SV〉構文同様、スキーマ化された出来事連鎖の「シナリオ」とともに場面転換を伝えることを考察したが、以下の例文(145)においては、〈voilà que 節〉構文内に出来事の中核的参与者 Marie が存在し、(144)の〈voilà SN qui SV〉構文で表される文も、どちらも[Marie-chanter]という出来事の中核となる参与者 Marie を含んでいる。二つの文の違いはどこにあるのだろうか。

- (144) Voilà Marie qui chante !
(There's Marie singing!)
- (145) Voilà que Marie chante !
(Now Marie is singing!)

本節では、「指示対象 Marie が『出来事連鎖のシナリオ』に基づき想定可能な事態に含まれる出来事の参与者となり得るかどうか両構文の違いである」とする仮説をたて、以下で吟味する。そしてその仮説が語りの事例においても適用可能であることを示す。

4.3.1 節と 4.3.2 節では、〈voilà SN qui SV〉構文が定名詞句の場合、「シナリオ」に

⁴¹⁾ 本論文で示す共有知識領域、言語文脈領域、発話状況領域などの「先行場面」「発話時の場面」「後続場面」として示す「場面」は心的領域内の場面を表し、ここでの物理的場面とは異なる。

基づき先行場面から予測可能な出来事を表現することを明らかにした。同様の分析を (144) の〈 *voilà SN qui SV* 〉構文に適用すると、(144) の発話は、例えば「隣の家で陽気な Marie がいつものように洗濯物を干しながら歌を歌っている」のに気付いた話し手の発話と想定することができる。したがって、(146) のように〈 *voilà SN qui SV* 〉構文には“*comme d’habitude*”を容易に付加できる。

- (146) *Voilà Marie qui chante, comme d’habitude !*
(There’s Marie singing, as usual!)

それでは、(145) の〈 *voilà que* 節 〉構文で表された場合は、知覚された事態はどのような事態として伝えられているのだろうか。先行研究の指摘をまず参照する。

Lafontaine (1989) は、〈 *voilà que* 節 〉構文は、(147a) のような活動動詞や、(147b) のような属性を表す表現とは共起しにくいことを指摘しているが、対立を表す表現を付加すると属性表現が容認可能となることもあわせて指摘している (147c)。

- (147) a. ? *Voilà que* Marie chante. (Lafontaine 1989)
(Now Marie is singing)
b. * *Voilà que* la terre tourne. (Ibid.)
(Now the earth turns.)
c. *Voilà que* la terre tourne contrairement à ce qu’on pensait. (Ibid.)
(Now the earth turns contrary to what one thought.)

(147c) の事例は、〈 *voilà que* 節 〉構文は〈 *voilà SN qui SV* 〉構文と異なり、指示対象についてこれまで想定していなかったような事態と共起しやすいことを示している。実際〈 *voilà que* 節 〉構文は、以下の (148) のように、事態に話し手がはじめて遭遇することを明記する表現 *la première fois* と共起しやすい⁴²⁾。

- (148) (下宿人をことごとく失い、悲嘆にくれる下宿屋のおかみが泣くのをみて)
Voilà la première fois qu’elle se vide les yeux depuis que je suis à son service.
(H. Balzac, *Le Père Goriot*)
(This is the first time (that) she cries her eyes out since I started to serve her.)

さらに Léard (1992) は、〈 *voilà SN qui SV* 〉構文は事態の繰り返しを示す接頭辞 *re* をつけて (147) のように表すことができるのに対し、〈 *voilà que* 節 〉構文は接頭辞 *re* を容認しないことを指摘している (150)。

⁴²⁾ FRANTEXT (2018 年度) では、*voilà la première fois que / qu’,,,* の実例が 40 件ある。

(149) *Revoilà* le ciel qui s'obscurcit / *Le voilà* qui chante. (Léard 1992)

(And there the sky got dark again. / There he sings again.)

(150) **Revoilà* qu'il part. (Ibid.)

(Now he is leaving again.)

Léard は (150) が容認されない理由を特に述べていないが、〈 *voilà que* 節 〉構文について出来事の中核的参加者が「シナリオ」に組み込まれない表現と考えると、指示対象の断続的な反復行為を表す “*revoilà*” と共起しないことが説明できる。断続的な反復行為は指示対象を含む事態連鎖の「シナリオ」を形成するが、〈 *voilà que* 節 〉構文は「シナリオ」にない指示対象の事態を表現するので “*revoilà*” と共起しないのである。

ここで、このような考察をさらに検証するため、(151) のような「アルプスの少女ハイジ」に基づいた状況設定を行い、クララが立ち上がって歩くのを見たハイジの発話として (151a,b) のどちらが適切かをインフォーマントに確認したところ、(151) のような文脈においては (151b) の 〈 *voilà que* 節 〉構文が選好されるとの回答を得た。

(151) 【アルプスの少女ハイジの物語のような状況から】

Vous avez une amie qui ne peut pas marcher depuis qu'elle est petite. Sa famille est riche et elle est dans un fauteuil roulant chez elle. Elle ne sort presque jamais. Mais un jour, vous réussissez à l'amener à la montagne dans les Alpes. L'air est pur, les oiseaux chantent et le paysage est magnifique. Et vous regardez en arrière vers votre amie, et quelle surprise ! Elle marche !

A ce moment-là, comment dites-vous ?

a. Hein ! *Voilà* Clara qui marche !

b. Hein ! *Voilà que* Clara marche !

(You have a friend who cannot walk since she was small. Her family is rich and she is in a wheel chair at home. She almost never goes out. But one day, you succeed in taking her to the mountains in the Alps. The air is pure, the birds are singing and the landscape is magnificent. And you look back to your friend, and what a surprise! She is walking!

At that moment, what do you say?

a. Hey! There's Clara walking!

b. Hey! Now Clara is walking!)

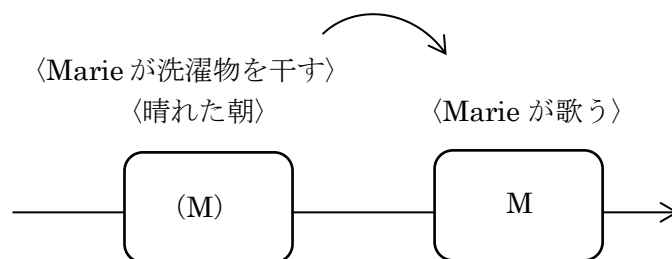
(151b) が選好されるという結果から、クララが歩くことを「シナリオ」に基づき予測させる 〈 *voilà SN qui SV* 〉構文とは異なり、〈 *voilà que* 節 〉構文は「シナリオ」に基づ

く出来事の中核的参与者として先行場面において指示対象を組み込まない表現であるため、指示対象「クララ」に対して話し手・聞き手が持つ共有知識（「歩くことができない」）と対立する驚くべき事態が目の前で起きたことを表現すると考えられる。

これらの点から、(144) のような〈voilà SN qui SV〉構文は、出来事連鎖の「シナリオ」に基づき指示対象の存在が先行場面において含意され、指示対象の状態変化を伴う場面転換を表すが、(145) のような〈voilà que 節〉構文は出来事連鎖の「シナリオ」に指示対象が組み込まれないため、思わぬ事態として表現されると考えられる。

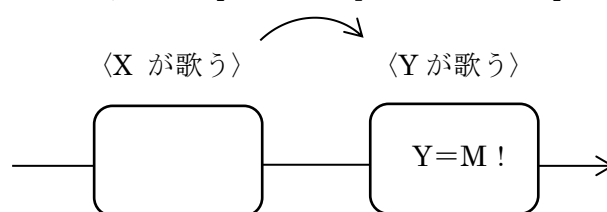
例えば、(144) の〈voilà SN qui SV〉構文で表される事態は、出来事連鎖の「シナリオ」に基づき予測可能な事態として「ほら、マリーが歌をいつものように歌い出したよ、歌っているよ」という予測可能な事態の表現となる。図 4.14 で示されるように、出来事の中核的参与者である Marie の存在が先行場面において含意されるような、例えば、「Marie が洗濯物を干す」→「Marie が歌を歌う」とか、「晴れた朝」→「Marie が歌を歌う」などのスキーマ化された「シナリオ」が存在する。

図 4.14 【「シナリオ」にある Marie】



一方、出来事の中核的参与者が「シナリオ」に組み込まれない〈voilà que 節〉構文の (145) が用いられる状況として、図 4.15 で示されるようなカラオケでの状況を考えよう。通常カラオケでは、「X が歌う」→「Y が歌う」というように、いろいろな人が入れ替わり歌を歌う。そのような発話現場において、(145) のような〈voilà que 節〉構文は、事態連鎖の「シナリオ」に基づき予測される事態の中核的参与者として Marie が想定されていない、M の属性についての知識情報（M は歌わない）も含意した表現である。そのため、〈voilà que 節〉構文は、図 4.15 が表すように、「Y=Marie」という事態、「マリーが歌っている」という事態が出現したことに対する驚きを表すことになるのである。

図 4.15 【「シナリオ」にない Marie】



(X, Y= Marie 以外の人)

このような事態の中核的参加者が存在する〈voilà que 節〉構文と〈voilà SN qui SV〉構文との違いは、代名詞で表される指示対象の事例についても観察される。3人称代名詞で表される指示対象の思わぬ行為の知覚を表す(152)(153)のような事例と4.2節で考察した〈voilà SN qui SV〉構文の例文(154)(155)を再掲して比べてみよう。

(152) (冗談を言い合っていた50歳を超える門番の女が泣いているのを見た踊り子が)
Ah ! pauvre femme, *voilà qu'elle pleure* ! (H. Balzac, *Le Cousin Pons*)
(Ah! poor woman, now she is crying!)

(153) (邪魔者の兄を追い払おうと泥棒一家の親子が兄の部屋に押し入ろうとしている。
耳をそばだてていた子供たちが、その親子が自分たちの部屋に近づいてくる足音
に気付いて)
Voilà qu'ils reviennent de chez mon frère, dit François à voix basse ;...
(E. Sue, *Les Mystères de Paris*)

(Now they are coming back from my brother's, whispered François:...)

(154) (絵を売りに来た若い女が価格交渉でもめ、泣き出したのを見た画商が)
La voilà qui pleure maintenant ! (=29)
(There she is crying now!)

(155) (追われて逃げ込んだ先で、追手が現れたのを見て)
Bon dieu ! Les voilà qui s'amènent ! (=2)(64)(101)
(My god! there / here they come!)

(152) や (154) は、はじめて出あった指示対象についての発話であるが、話し手は先行場面においてすでに指示対象についての情報を入手している。〈voilà que 節〉構文の(152)は、50を超える年齢であるにもかかわらず若い踊り子である話し手と張り合おうとするくらいたくましい女が泣いているのを見た驚きの事態を表す発話であるのに対し、〈voilà SN qui SV〉構文の(154)は、口もきけないおどおどした若い女が泣き出したのを見た、価格交渉に慣れた画商の想定内の事態を表す発話である。また(153)や(155)は、どちらも既知で意識の前面にある指示対象が話し手の方にやってくる発話だが、〈voilà que 節〉構文の(153)は、兄の心配をしており自分たちの部屋にやってくるとは思っていない状況での子供の発話であり、〈voilà SN qui SV〉構文の(155)は、自分自身を追いかけている追手がついに目の前に現れたのを見た発話である。したがって、意識の焦点におかれている3人称代名詞についても、発話現場で知覚された事態が出来事連鎖の「シナリオ」に含まれるかどうかの違いが両構文の意味の違いとなっていると考えられる。

また、出来事の中核的参加者を持つ〈voilà que 節〉構文は、4.2節で分析した〈voilà SN qui SV〉構文(表4.1)と異なり、1・2人称の指示対象、特に1人称の事例が多い(表4.6)。

表 4.6 〈 voilà que 節 〉 構文の人称別コーパスデータ

	件数		件数
Voilà que je / j'	608	Voilà qu'il ⁴³⁾	588
Voilà que tu	150	Voilà qu'elle ⁴⁴⁾	263
Voilà que nous	87	Voilà qu'ils	133
Voilà que vous	154	Voilà qu'elles	35

FRANTEXT (2018 年度)

そして、出来事を表す 〈 voilà SN qui SV 〉 構文では観察されにくい (157) のような複合過去の事例が見られたり、主体の動作中心の事態表現である 〈 voilà SN qui SV 〉 構文に対し目的語を含む事態 (156) (158) や一時的状態を表す事態 (159) が存在したり、表現される事態の範囲が 〈 voilà SN qui SV 〉 よりも広い。

(156) (名前を間違えて紹介してしまって)

— mon Dieu, est-ce que je perds la tête ? dit celle-ci en riant, *voilà que* je t'appelle le baron de Guermantes. (M. Proust, *À la recherche du temps perdu*)
 (— My god, have I lost it? she said laughingly, now I'm even calling you the baron of Guermantes.)

(157) (ストーブの火で暖まりながら話していた警視がマントを焦がしてしまって)

Voilà que j'ai brûlé mon carrick. (V. Hugo, *Les Misérables*)
 (Now I burnt my coat.)

(158) (無駄遣いをしない女が、子供たち (les) の買い物に散財させられて)

J'étais venue les promener, et *voilà que* je dévalise les magasins !
 (E. Zola, *Au bonheur des dames*)
 (I came for a walk with them, and now I find myself emptying the stores!)

(159) (休み時間に少年と別れの言葉を交わしていた神父が授業に遅れそうになり)

Bon ! *Voilà que* je suis en retard, dit-il en rassemblant à la hâte ses livres et ses cahiers.
 (A. Daudet, *Le Petit Chose*)
 (Right, now I'm late, he said, quickly gathering his books and notes.)

さらに、小説などでは (160) や (161) のように自由間接話法による内言として認識主体の思わぬ事態が 〈 voilà que 節 〉 構文で表されることも多い。〈 voilà que 節 〉 内では、

⁴³⁾ Voilà qu'il の件数には、非人称の il の件数も含まれている。また (160) (161) のような自由間接話法の事例が多くみられる。

⁴⁴⁾ Voilà qu'il の事例同様、Voilà qu'elle にも自由間接話法の事例が含まれている。

認識主体である話し手の思考が、自分自身の現在の状況であるにもかかわらず、3人称代名詞〈il〉で表され、半過去で表されている。つまりここでは、認識主体である話し手が、自分自身の現在の驚くべき状態を以前の状態やあるべき状態と対照し、発話現場をはなれ、第3者的立場からみたまぎれもない事実として認めていることを表していると考えられる。

- (160) (高邁な思想のもと運動のリーダーとして働いた自分が、盗みによって生き延び、隠れ住む状況をなげき)

Maintenant, *voilà qu'il vivait de vols!* (E. Zola, *Germinale*)

(And now he lived of theft!)

- (161) (自分は貴族の末裔であるにもかかわらず、欲望に負けた妻が万引きをしたことを知って)

Etait-ce possible? *Voilà qu'il était entré dans une famille de voleuses!*

(E. Zola, *Au bonheur des dames*)

(Was this possible? Now he was in a family of thieves!)

このように、出来事の中核的参加者をもつ〈voilà que 節〉構文は、発話現場に適合する「事態連鎖のシナリオ」に基づき想定可能な場面転換として提示される〈voilà SN qui SV〉構文とは異なる。想定可能な場面転換を表す〈voilà SN qui SV〉構文は、1・2人称で表される指示対象を含む事態は、通常注意の焦点におかれているので使用されにくい。しかし、〈voilà que 節〉構文は予測可能な事態の参加者として指示対象を含まないため、指示対象の思わぬ事態を表すこととなり、表4.6のコーパスデータに見られるように、1・2人称の指示対象であっても使用頻度が高くなる。また、〈voilà que 節〉構文で表される事態は、たった今知覚した場面を表す未完了の局所的な事態に限定されず、(156)~(159)のような話し手が認識した様々な事態を表現できる。つまり、〈voilà que 節〉構文は、発話現場に身を置く知覚主体としてではなく、発話現場で認識した思わぬ事態を俯瞰する話し手の立場から聞き手に事態を提示しているといえる。

最後に、これまでの〈voilà que 節〉構文と〈voilà SN qui SV〉構文の事態連鎖の「シナリオ」による分析が、語りにおいても同様に適用できることを提示しておく。

4.1.3節で参照した先行研究において、Lafontaine (1989) は「〈voilà que 節〉構文は出来事を全体として捉え、他の別の事態と関連して位置付けられることにより連続性が感じられる」と指摘している。確かに、以下のような語りの事例において、事態は連続して捉えられるが、想定されていなかった事態の発生による場面転換を表すことが多い。

- (162) (聖女を妊娠させた男をつきとめようと殴りかかる相手からのがれようと男たちはビリヤード台の下に逃げ込むが、台は持ち上げられ…)

Ils croyaient avoir trouvé refuge sous le billard, et *voilà que* le billard s'élevait

au-dessus de leurs têtes. (D. Pennac, *Monsieur Malaussène*)
(They thought they had found refuge under the billiard table, and now the
billiard table rose up above their heads.)

- (163) (もう会えないと思っていた病院で出会った素敵なお医者さんから電話があった
ことを興奮して語る)
...et en partant je me suis dit Voilà, c'est fini, je ne le reverrai jamais... Et *voilà*
qu'il me rappelle ce soir... (M. Winckler, *La maladie de Sachs*)
(...and when I left, I thought OK, this is it, I'll never see him again... And now,
he calls me back this evening.)

(162) は著者による地の文の語りだが、持ち上げられることはないと思って逃げ込んだビリヤード台が持ち上げられたという想定されていない事態の発生を表し、(163) は物語の中の登場人物による口頭での語りだが、想定していなかった事態の発生を語っている。

一方、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文が語りで用いられた場合には、事態は「シナリオ」に基づき想定可能な場面として提示される。

- (164) (半年ごとに駆け落ちしては戻って来る女がいると前置きして)
Figurez-vous, Monsieur, qu'ils n'étaient pas mariés depuis un an, paf !
voilà la femme qui part en Espagne avec un marchand de chocolat. (=22)
(Can you imagine, sir, they hadn't been married for even a year, and hop, there
leaves the wife for Spain with a chocolate merchant.)
(165) (見せたいものがある、と言われ廊下の突き当たりまで走らされドアの前につくと)
Deux ou trois secondes pour reprendre notre souffle, et le *voilà* qui ouvre la
porte, et qui s'écrie, la voix fendue par les aigus : -Regardez ! (=24)
(We have two or three seconds to regain our breath and there he opens the
door and cries in a cracked, high-pitched voice : Look!

(164) は、事態の展開 (シナリオ) が前置きされた中で、その一事例として女の駆け落ち場面が知覚した場面のよう提示されており、(165) では、「見せたいものがある」として連れていかれた部屋の入口でドアをあける場面が、まるでドアがあくのを見ているかのように、ステレオタイプな事態連鎖 (目的地に行く→ドアをあける→見せる) の中で表現されている。

また、〈 *voilà* que 節 〉構文の事態の参与者として不定名詞句が生じる事例は少ないが、(166) や (167) の語りにおいては、思わぬ事態を引き起こす指示対象の登場として使用されている。(166) は登場人物による口頭での語り、(167) は地の文の語りである。

- (166) (刑事が犯人にこれまでの悪事の筋書きの種明かしをしている。最後に悪事終結の発端となったジャーナリストの登場を述べ、種明かしを終了する)

Et puis *voilà* qu'une journaliste vient mettre son nez dans ce commerce... C'est la première tuile. (...) Voilà, dit Pastor. C'est tout ce que je sais. J'ai fini.

(D. Pennac, *La Fée Carabine*)

(And now a journalist starts sniffing into this business... That's the first piece of disaster. (...) OK, said Pastor. That's all I know. I'm done.)

- (167) (父親と姉妹の三人家族のところへ、姉の夫である男がやってきたために環境が変わり妹は悩まされるようになる。)

Jusque-là, glacée par le veuvage du père Mouche, la maison, où l'on ne s'aimait pas, n'avait eu pour elle aucun souffle troublant. Et *voilà* qu'un mâle l'habitait, un mâle brutal, habitué à trousseur les filles au fond des fossés, ...

(E. Zola, *La Terre*)

(Until then, frozen by the widowhood of father Mouche, the house where one did not love, hadn't troubled her, the least. And now a man lived in it, a brutal man, used to lifting up girl's skirt in the dithes.)

つまり、〈 *voilà que* 節 〉構文は、語りにおいても、通常のステレオタイプな出来事連鎖の「シナリオ」に含まれない事態の生起を表しているのである。

したがって、4.3.4節の考察をまとめると、出来事の中核的参与者を持つ〈 *voilà que* 節 〉構文と〈 *voilà SN qui SV* 〉構文の違いは、「シナリオ」に基づく先行場面に予測可能な存在として出来事の中核的参与者が含意されるかどうかにあることがわかる。そして出来事の中核的参与者を持つ〈 *voilà que* 節 〉構文は、先行場面に「シナリオ」に基づく指示対象が存在しないので、思わぬ事態を表現することになると考えられる。

4.4. まとめ

本章は、発話現場で話し手がたった今知覚した事態を表す「現象文」としての〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉 〈 *SN qui SV* 〉構文に、どのような違いがあるのかを明らかにした。

まず4.1節の先行研究において、従来〈 *il y a* 〉と〈 *voilà* 〉の違いが「存在」「直示」という違いとして捉えられてきたことを示した上で、〈 *il y a SN qui SV* 〉 / 〈 *voilà SN qui SV* 〉で表される〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉現象文が、どちらも「たった今目の前で」知覚した事態を表し、どのような違いがあるかについて十分に説明されていないという問題提起を行った。

そして4.2節では、〈 *il y a SN qui SV* 〉 / 〈 *voilà SN qui SV* 〉で表される〈 *il y a* 〉 / 〈 *voilà* 〉現象文について、名詞句で表される指示対象の情報特性や指示対象の状態変化の有無について分析した。特に〈 *voilà* 〉現象文には頻繁に共起する3人称代名詞が〈 *il y*

a) 現象文では共起しないことに着目し、〈 il y a 〉現象文は文脈によるつながりのある先行場面を持たず、話し手が知覚した予期せぬ事態を聞き手に提示するのに対し、〈 voilà 〉現象文は、発話現場の状況と文脈上つながりのある先行場面からの場面転換により、指示対象の状態変化を表すことを示した。そして、〈 il y a 〉 / 〈 voilà 〉現象文の違いは事態の提示の仕方であり、〈 il y a 〉現象文は事態の存在を提示（断定）し、〈 voilà 〉現象文は場面転換により事態を提示（断定）することを示した。

さらに4.3節では、出来事を表す〈 voilà SN qui SV 〉構文において定名詞句が使用される比率が高いことを示した上で、〈 voilà 〉現象文は、スキーマ化された出来事の連鎖関係を表す認知モデル「シナリオ」によって、先行場面から想定可能な事態として表されることを示した。また、〈 voilà que 節 〉構文の事態の中核となる参加者を持たない場面全体の変化を表すような文タイプについても、〈 voilà 〉の場面転換機能により「シナリオ」を持つ先行場面からの場面転換を表すことを示した。一方、事態の中核となる参加者を持つ〈 voilà que 節 〉構文は、〈 voilà SN qui SV 〉構文と異なり、指示対象が「シナリオ」に含まれないため、事態全体が意外性のある驚きの事態として表現されることを明らかにした。

第5章：現象文に含まれる指示対象の存在様態と限定詞の機能

第3章では、聞き手によって設定された課題の場で、存在が前提された事態についての事態内容を表す〈SN qui SV〉(分節文)と、話し手がたった今知覚した事態を表す〈SN qui SV〉(未展開文)とでは、聞き手が文を解釈する領域が異なることを明らかにした。そして第4章では、同じ解釈領域を持つ〈il y a〉現象文と〈voilà〉現象文の違いを、事態の提示(断定)方法の違いと先行場面の有無の点から明らかにした。

本章では、発話状況領域¹⁾で解釈される、話し手がたった今知覚した事態を表す、以下のような現象文に含まれる指示対象とはどのような存在であるのかを、指示対象を表す名詞句の限定詞(指示形容詞・冠詞)の機能とあわせて考察する。

- (1) Le facteur qui passe !
(The postman is passing!)
- (2) Mon chapeau qui s'envole ! (Wehr 1984)
(My hat is flying away!)
- (3) Tiens ! Fortuné qui pleure ! (Furukawa 2013)
(Well well! Fortuné is crying!)

特に、たった今知覚した事態であるにもかかわらず、〈SN qui SV〉タイプの現象文で、なぜ定冠詞付き名詞句が使用されるのかを明らかにする。そして、主動詞を持たない「未展開文」である〈SN qui SV〉構文が、どのような文として解釈されるかを示す。

5.1. 先行研究と問題提起

現象文に含まれる指示対象の存在について考察する上で、まず、5.1.1.節で、現象文と指示対象の存在様態についての先行研究を、5.1.2.節で、名詞句の限定詞の機能についての先行研究を参照し、問題点を整理する。

5.1.1. 現象文と指示対象の存在様態

現象文に含まれる指示対象の存在様態について、まず、Kuroda (1972) が提示した、単一判断と二重判断の文に含まれる指示対象の違いに関する指摘を参照する²⁾。Kuroda は、日本語の「は」と「が」を形態的論拠として、文には、単一判断(thetic judgment)と

¹⁾ 本論文は、談話の構築にあたって発動される心的領域の操作やメカニズムによる説明を行う。発話状況領域(東郷 1999,2000)は、話し手と聞き手を含む発話の現場と、その場に存在するものについての心的表象である。本論文では、「発話の場」という語が、説明において曖昧となることを避けるため、特に心的領域について述べる場合は「発話状況領域」とし、物理的な状況を述べる場合は「発話現場」という語を用いて説明する。

²⁾ Kuroda (1972) の単一判断/二重判断は、概ね本論文での現象文/判断文に相当する。

二重判断 (categorical judgment) の二つの文の判断タイプがあることを提唱した。

(4) 犬が走っている。／犬が猫を追いかけている。(単一判断の文)

(5) 犬は走っている。／犬は猫を追いかけている。(二重判断の文)

そして、(4) のような単一判断の文タイプにおいて判断の中核となるのは、「Running of X (何かが走っている)」や、「X's chasing of Y (何かが何かを追いかけている)」という出来事の直接的認定であり、指示対象 X や Y は、それらの出来事に含まれる参与者として出来事に従属するものとして捉える³⁾。

これに対して (5) のような二重判断の文タイプにおいては、犬は任意の犬ではなく、発話に先立って指示が確立している特定の犬である必要があり、話し手の関心は、第一義的にこの存在物 X に向けられているとする。そして、存在物 X を設定し、それに対して生じた出来事を結びつけるという意味において、二重の判断がなされていると考える⁴⁾。

そして、日本語の「は」と「が」のような、二つの判断タイプについての明示的マーカーを持たない英語やフランス語においては、不定の主語の場合、総称文を除き、単一判断の文タイプしか容認されないが、定の主語の場合には、単一判断、二重判断の決定が曖昧であることを指摘している。二つの文タイプと、日本語の主語名詞句につく後置詞、英語・フランス語の主語名詞句につく限定詞の対応関係を表にまとめると、表 5.1 のようになる。

³⁾ “The judgements underlying the assumed utterances of (7.1) (=犬が走っている) and (8.1) (=犬が猫を追いかけている) might be analyzed as

(11.1) Running of X.

(11.2) X is a dog.

and

(12.1) X's chasing of Y.

(12.2) X is a dog.

(12.3) Y is a cat.

In (11) and (12) the first components, (11.1) and (12.1), are in a certain sense, the kernels of the whole acts of judgement represented by those schemata. They represent the fact that an event of running or of chasing is taking place, involving necessarily one or two participants in the event. The remaining component(s), i.e., (11.2) or (12.2) and (12.3) represent the function of naming the entities involved in the event. One might assume that the act of naming X as a dog or Y as a cat involves the judgement that the thing doing the action or the patient acted upon is a dog or a cat, respectively. But these judgements which underlie the acts of naming are subordinated to the kernel judgement represented by (11.1) or (12.1), respectively. And these kernel judgements represent direct recognition of the events of something running or something chasing some other thing.” (Kuroda 1972 : 162-163; 括弧内の日本語は筆者が追記)

⁴⁾ このような二つの文タイプに含まれる指示対象の違いは、Sasse (1987) や益岡 (1991) においても、出来事の一部として提示される存在、出来事とは独立して存在する対象の違いとして説明されている。

表 5.1 二つの文タイプと主語名詞句につくマーカー（日本語／英語・フランス語）

	日本語の主語名詞句につく後置詞	英語・フランス語の主語名詞句の限定詞
単一判断	「が」	不定／定
二重判断	「は」	定 ⁵⁾

(Kuroda1972 に基づく)

Kuroda が二重判断の文タイプの主語として捉える指示対象の有り様は、「文がそれについて述べるもの」という *aboutness* によって定義されるトピックの有り様であり⁶⁾、二重判断の文タイプが不定の主語を容認しないのは、トピックとなる主語は、文が述べる叙述（属性や出来事）とは独立して存在が認定されている（旧情報である）必要があるということである。

では、不定も定も容認される、単一判断の文タイプにおける「出来事に含まれる参与者として出来事に従属した存在」とは、具体的には出来事の何に従属した存在なのだろうか。また、単一判断の文タイプにおいて、指示対象の定・不定は、どのような意味の違いをもたらすのだろうか。Kuroda は日本語の「が」でマークされる単一判断の文が、英語の定・不定のどちらによっても翻訳できるとしているが、その意味の違いについては述べていない。

Danon-Boileau (1989) は、時間概念をもとに出来事文と属性文を区別し、この二つの文で主語の指示対象の認定方法が異なるとしている。

(6) 出来事文 (*énoncé événement / event utterance*)

Un étudiant a appelé ce matin pour toi.

(A student has called this morning for you.)

(7) 属性文 (*énoncé propriété / property utterance*)

Ravaillac détestait la poule au pot.

(Ravaillac hated chicken-in-a-pot.)

(6) の出来事文においては、まず、主語と述語の関係を設定する述部情報「電話してきた」の成立が時点 *t* に限定され、次にその *t* が主語 *un étudiant* の存在認定に用いられると考える。一方、(7) の属性文においては、主語 *Ravaillac* の存在認定に用いられる時点 *t* が続く間述語は成り立つとし、属性文の主語は述語から独立して認定されるとする。

Danon-Boileau はこのように、発話はどのようなタイプであっても、時点 *t* のような時

⁵⁾総称文には不定名詞句主語が存在する。

⁶⁾ Kuroda (1972) では、トピックという語を旧情報の指示対象を表す用語として説明し、本論文で考える *aboutness* の意味のトピックの用語としては用いていない。Kuroda はこのような *aboutness* の意味のトピックについて、伝統的アリストテレス的主語（文法的主語とは異なる）に倣い、「主語 (subject)」という用語を用いて論述している。

間的制約を含むと考える。そして出来事文と属性文の違いは、この時点 t が決められる方法に起因し、出来事文では出来事が起きた時点が時点 t を決めるのに対し、属性文では、主語の存在する時間が時点 t を決めると述べている⁷⁾。

Danon-Boileau のように、指示対象の存在認定に時間パラメータを用いて説明することは、出来事文においては部分的に有効と考えるが、属性文の主語は、述語とは独立してすでに存在が認定されているので、主語の存在認定に時間パラメータを用いる必要はないと考える。

また、Danon-Boileau は、過去に起こった出来事も、話し手のたった今目の前で起こった出来事も同じように扱うが、本論文では、第 3 章で述べたように、過去に起こった出来事を述べる文は共有知識領域において、指示対象の話し手の眼前で展開している出来事を述べる文（現象文）は発話状況領域において解釈される文として区別する。Danon-Boileau は、(6) の文において「主語 *un étudiant* の存在は、出来事が起きた時点をはなれて認定されない」としており、照応の問題をどのように扱うのかという課題を残している。本稿では、(6) のような文で示される *un étudiant* は、3.3.3.3 節で示したように、電話がかかってきた段階では局面レベルの存在であるが、その後 *toi (you)* の個体レベルの生徒の一人についての情報（電話をかけてきた）として共有知識領域に蓄積された上で、出来事報告が行われると考える。したがって、照応は個体レベルの存在を介して行われると考えることができる。

さらに Danon-Boileau は、「定冠詞の場合、「 t 」の定義は当該の文の外部にある。存在判断の時点「 t 」は、展開中の発話の述語の成立時点「 t 」によって形成されるのではなく、照応形式により、発話に先行する存在判断において定として名詞に関わる⁸⁾」と述べている。つまり、定の主語の指示対象の存在認定については、「（言語的）照応により、主語の存在判断 (t_1) が述語の成立時点 (t_2) に先行する ($t_1 < t_2$) 」と考えており、現象文のような、話し手がたった今知覚した出来事に含まれる指示対象の存在に、なぜ定冠詞が使用されるのかという疑問に答えることはできない。

単一判断の文の中で、4 章では、出来事を聞き手に提示する *< il y a >* / *< voilà >* 現象文において、素材としての *< SN qui SV >* に対して *< il y a >* *< voilà >* がどのように事

⁷⁾ “En résumé, je pense qu’un énoncé, quel qu’en soit le type, contient une restriction temporelle que j’appelle « t ». Ce « t » limite à la fois le jugement d’existence (afférant au sujet) et le jugement d’attribution (lien sujet/prédictat). Je maintiens ce point de vue quel que soit l’énoncé, même s’il s’agit d’un énoncé générique « pur ».

La différence entre énoncé événement et énoncé de type propriété tient à la façon dont est défini ce « t ». Dans un énoncé événement, « t » est défini au niveau du jugement d’attribution tandis que dans un énoncé de type propriété, « t » est défini au niveau du jugement d’existence.” (Danon-Boileau 1989 : 41)

⁸⁾ “Si l’article est défini, la définition de « t » est externe. Le « t » du jugement d’existence n’est pas construit à partir du « t » du jugement d’attribution de l’énoncé en cours. En raison de sa forme anaphorique, l’article défini donne le nom sur lequel il porte comme défini dans un jugement d’existence préalable à l’énoncé en cours.” (Danon-Boileau 1989 : 46)

態を断定するかを考察したが、本章では、素材そのもの、(1) (2) (3) のようなく SN qui SV) 構文自体がたった今眼前で知覚された出来事を表す有標の現象文タイプにおいて、名詞句で表される指示対象が、限定詞の機能とともにどのような存在として解釈されるかを考察する。

5.1.2. 現象文と限定詞の機能

前節では、単一判断（現象文）と二重判断（判断文）という文タイプの違いから、文に含まれる指示対象の存在様態についての先行研究を参照し、現象文の指示対象に使用される限定詞について説明すべき課題が残されていることをみた。本節では、限定詞の機能が、どのように現象文に反映されるかという観点から、指示形容詞と定冠詞の指示対象の与え方についての Kleiber (1987) の論考を参照する。

Kleiber (1987) は、(8) のような、指示形容詞と定冠詞がともに容認される、発話現場の状況が指示対象の同定に関与する直示的とよばれる用法において、指示形容詞と定冠詞の指示対象の与え方を考察している⁹⁾。

- (8) Cette auto / L'auto (que tu vois / que je te montre) est à moi.
(This(That) car / The car (that you see / that I show you) is mine.)

Kleiber は、それまでの先行研究において両者の違いが、(9) (10) のような事例をもとに、指示対象の知覚可能性によって説明される点に疑問を呈する。

- (9) a. Ouvrez le capot et nettoyez le carburateur ! (Ducrot 1972)
(Open the bonnet and clean the carburetor!)
b. ? Ouvrez le capot et nettoyez ce carburateur ! (Ibid.)
(Open the bonnet and clean this(that) carburetor!)
(10) Beware of the dog (Hawkins 1978)

例えば Ducrot (1972) では、発話時の状況においては、le carburateur は目に見えないので (9a) は容認されるが、指示形容詞を用いた (9b) は容認されないと説明される。また、Hawkins (1978) においては、(10) のような立て札に定冠詞は用いられるが、指示形容詞が用いられないのは、指示形容詞は発話時に聞き手が見ることができることが必要であるからと説明される。このような「定冠詞は発話時に聞き手が指示対象を知覚できなくても使用できるのに対し、指示形容詞は聞き手が知覚できることを要求する」とする先行研究に対し、Kleiber (1987) は、そのような仮説では説明できない以下のような事例を検討し、

⁹⁾ Kleiber は、指示形容詞と定冠詞がともに容認される照応的用法についても、「指示対象の与え方」という観点から Kleiber (1986) において論述している。

異なる仮説を提示した。

まず、【状況 1】（現在時刻は 8 時 10 分。コルマール駅 1 番ホーム 1 番線にて、ストラスブール行 8 時 3 分発の電車ヴァンチミーユ号¹⁰を待っている）のように、話し手と聞き手が同じ電車を待っている場合、まだ到着していない電車について、話し手は指示形容詞を用いてごく自然に発話できるのに、定冠詞を用いることは難しい (11)。一方、【状況 2】（その後ヴァンチミーユ号がホームに入って来るのが見えた）においては、発話現場で指示対象が知覚できるにもかかわらず、この電車の到着を、指示形容詞で表現するのは難しく、定冠詞を用いた表現が自然であると Kleiber は指摘する (12)。話し手が眼前で知覚した事態を表す (12b) が、〈 SN + SV 〉（主語＋述語）形式で表現されたタイプの現象文である。

(11) a. Ce train a toujours du retard. (Kleiber 1987 : [8])

(This train is always delayed.)

b. ? Le train a toujours du retard.¹¹ (Ibid. : [9])

(The train is always delayed.)

(12) a. ? Ce train arrive. (Ibid. : [10])

(This train is coming.)

b. Le train arrive. (Ibid. : [11])

(The train is coming.)

このように、発話現場で指示対象が知覚可能かどうかによる説明では、(11) (12) における両限定詞のふるまいを説明できないことを指摘した上で、Kleiber は、両限定詞の選択において決定的要因となるのは、「指示対象の与え方」であるとし、Kaplan (1977) の「発話状況 (context of use / contexte d'énonciation)」「値踏み場¹² (circumstances of evaluation / circonstances d'évaluation)」の概念を参照し、両限定詞の指示対象の与え方を以下のように提示する。

(13) 指示対象の与え方¹³ (Kleiber 1987 : 傍点は筆者)

¹⁰ Vintimille という列車名の発音については、/vɛ̃timi//vɛ̃timil//vɛ̃timij/ の 3 つの中で、インフォーマントの間で一致をみななかった。ここでは、ヴァンチミーユと記述する。

¹¹ 原文では、難しいと述べるのみで、容認度判定の記号はついていない。これは、同論文の別の箇所でも述べられているように、特定の電車ヴァンチミーユではなく、電車一般について総称的に述べる解釈ができるようになることに因ると思われるが、例文の比較をわかりやすくするため、(12b) に「？」をつけて記述する。

¹² 「値踏み場」は野本 (1997) の訳。井元 (1989) では、「評価状況」と訳されている。

¹³ “Article défini et adjectif démonstratif ne s’opposent pas basiquement sur le plan de la localisation du référent, mais sur celui du mode de sa désignation :

- l’adjectif démonstratif renvoie directement au référent par l’intermédiaire du contexte d’énonciation de son occurrence ;

- l’article défini, s’il est référentiel, le désigne indirectement, en renvoyant aux circonstances

指示形容詞：「発話状況」を介して、指示対象を直接的に指示する。

定冠詞：「値踏み場」において、指示対象を間接的に指示する。

「発話状況」とは、話し手が特定の時点・特定の場所において一回一回の発話行為が行われる場のことであり、「値踏み場」とは、命題の真偽とその命題で用いられた指示表現の適切性が判断される領域のことをいう（東郷 2001a,b）。

その上で Kleiber は、(13) の仮説により、なぜ【状況 1】において指示形容詞が選好され、【状況 2】において定冠詞が選好されるのかという点について、特に、値踏み場の連続性という観点から、以下のように説明する。

発話現場で同じ電車を待っているという事実は、「値踏み場」での把握を正当化するような、一連の事実・出来事・行為・属性を含む、「認知的枠組み¹⁴⁾」を形成する。しかし、【状況 1】の述語 *être toujours en retard* は、この電車の恒常的な遅刻に言及しており、発話現場で同じ電車を待つことにより形成される認知的枠組みを超えているので、(11) のように、直接的に指示対象を指示する指示形容詞が選択されるとする¹⁵⁾。一方、【状況 2】の述語 *arriver* は、「電車(x)を待つ」→「電車(x)の到着」という筋の通った「値踏み場」の連続となる出来事であり、電車(x)の出現が知覚される発話の場がその境界となる。そしてこのような連続性のある「値踏み場」において把握されるべき指示対象(x)は、(12) のように、定冠詞によって、この「値踏み場」を通して間接的に指示されると説明する¹⁶⁾。また、このような状況で直接的に指示対象を指示する指示形容詞を使用するのは強すぎると述べ、定冠詞による (11b) の文では、話し手は電車に対して断定するのではなく、発話の場に対して断定し電車の到着を伝えたとし、(14) のような対比を示す (Kleiber 1987 : [28] [29]より一部抜粋)。

d'évaluation.” (Kleiber 1987 : 112)

¹⁴⁾ 認知的枠組みの脚注として、Kleiber は Minsky (1975) と Schank & Abelson (1975) を参照している。本論文の参考文献表では Minsky (1977) と Schank & Abelson (1977) の論文にあたる。

¹⁵⁾ “La raison essentielle tient à ce que le prédicat habituel *a toujours du retard*, dans la situation d'énonciation imaginée, implique une sortie de la circonstance d'évaluation constituée par cette situation. (...) Le fait d'attendre un train comporte toute une série de faits, événements, actions, propriétés qui justifient une saisie dans la circonstance d'évaluation tracée par cette situation d'énonciation, ce cadre cognitif que constitue le fait d'attendre un même train. *Être toujours en retard* n'en fait pas partie. En évoquant les retards antérieurs du train en question, il marque, au contraire, une sortie de cette situation d'énonciation.

Celle-ci n'est pas le topique de (8) . Le prédicat *être toujours en retard* exige que celui-ci soit constitué par le référent.” (Kleiber 1987: 118 ; 2-18)

¹⁶⁾ “L'arrivée du train attendu est un événement qui est une suite logique de la circonstance d'évaluation délimitée par la situation d'énonciation. Le référent, en conséquence, doit être saisi dans cette circonstance d'évaluation, c'est-à-dire indirectement, par une référence définie, comme étant le x qui vérifie la propriété d'être « le train » dans cette circonstance d'évaluation.” (Kleiber 1987 :120 ; 10-15)

- (14) a. *Voici/là le train qui arrive / Le voilà qui arrive / Le train!* (Kleiber, *op.cit.*)
 (Here comes the train / Here it comes / The train!)
- b. *Voici/là ?ce train / ?Ce train !* (Kleiber, *op.cit.*)
 (Here comes this train / This train!)

Kleiber は、このように、直示的用法における限定詞選択の決定的要因を指示対象の与え方であるとし、指示形容詞は、発話行為を介した指示対象の直接指示を行うのに対し、定冠詞は、「値踏み場」による間接指示を行う、言い換えれば、「値踏み場」に指示対象の存在を前提していると考えているのである。

上記のような Kleiber (1987) の論考をもとに、本章では、現象文の指示対象の存在様態を限定詞の機能とともに、以下の二つの問題点をめぐって考察する。

まず一つ目は、現象文において、なぜ指示形容詞が用いられないかという問題である。Kleiber は、(12) のような状況で指示形容詞を使うのは強すぎ、指示対象自身をテーマ (トピック) とすることによって、電車の到着を状況的枠組みの外の出来事として提示してしまうと述べている。そして、指示形容詞付き名詞句による指示は、対象が目の前にあることは不可欠ではなく、対象を同定できればよいことを主張するために、(12) の事例を説明の中心とするが、同様に、(15) の事例においても、指示形容詞よりも定冠詞がよいとしている。しかしながら (15) のインフォーマント調査を行うと、確かに指示形容詞付き名詞句 (15a) よりも定冠詞 (15b) の方が選好されるが、(12a) に比べるとそれほど悪くはない。例えば、プラットホームがいくつもあるターミナル駅など、他の電車も次々と到着、出発するような駅では、指示形容詞付き名詞句の (15a) も容認されやすくなる。

- (15) a. *? Ce train a du retard.* (Kleiber, *op.cit.*)
 (This train is delayed.)
- b. *Le train a du retard.* (Kleiber, *op.cit.*)
 (The train is delayed.)

つまり、(12b) のような現象文には、指示形容詞を容認しない強い動機があると考えられる。また、発話状況の枠組みを超えると、定冠詞は使用されにくくなるが、発話状況内だからといって、指示形容詞が使用できない理由にはならない。実際、以下のような指示形容詞を用いて発話現場で知覚した事態を述べる事例の存在も先行研究で観察されている。

- (16) *Oh ! Ce monsieur qui mange toute la barquette !* (Rothenberg 1971)
 (Oh! This man is eating the whole pie!)

上記の事例は、〈 SN qui SV 〉形式で述べられた文であるが、〈 SN + SV 〉形式においても、問題なく容認される。

- (17) Oh ! Ce monsieur mange toute la barquette !
(Oh! This man is eating the whole pie!)

5.2 節では、(15a) (16) (17) の指示形容詞で表される事態と、(12) のような指示形容詞を用いることのできない現象文で表される事態に、どのような違いがあるのか、「出来事に含まれる指示対象」とはどのような存在なのかを指示形容詞の機能とあわせて考察する。また、(16) のような文タイプは後で触れるように本論文では現象文とは考えないが (5.2.1.節)、なぜ (17) のような 〈 SN + SV 〉形式ではなく、(16) のような 〈 SN qui SV 〉形式が用いられているかについても考える。

二つ目の問題点は、Kleiber の 〈 SN + SV 〉形式の現象文 (12b) に含まれる定冠詞の議論をもとに、以下のような 〈 SN qui SV 〉形式の現象文に含まれる定冠詞について生じる疑問である。

- (18) Regardez ! Le vase qui va tomber ! (Rothenberg 1971)
(Look! The vase is going to fall!)
(19) Tiens ! Le livre qui est tombé par terre ! (Wehr 1984)
(Well well! The book has fallen on the floor!)

(18) (19) の 〈 SN qui SV 〉タイプで表現される事例からは、Kleiber の【状況 2】で説明されたような、「値踏み場」の連続性（先行場面とのつながり）は感じられない。むしろ、突発的な事態を表している。では、一体どのようにして定冠詞が使用され得るのだろうか。定冠詞が指示対象の存在を前提する「値踏み場」はどのようにして得られるのかというのが、二つ目の問題である。

5.2. 現象文に含まれる指示対象とトピック

この節では、一つ目の問題点として、現象文に含まれる指示対象がなぜ指示形容詞付き名詞句と共起しないかを説明することにより、現象文で表される出来事がどのような出来事であるかを示す。

5.2.1. 知覚により局所的時空領域で捉えられる指示対象

前節で見たように Kleiber (1987) は、(20) (=12) や (21) (=11) のような限定詞選択が行われる重要な理由として、ホスト文¹⁷⁾の述語の性質をあげる。そして、指示形容詞

¹⁷⁾ la phrase-hôte (ホスト文) : 問題とする指示表現が含まれる文をいう。

は、(20) のように発話現場への電車の到着という発話状況に組み込まれるような述語とは共起できず、(21) のように、個体についての恒常的な属性を表し、発話状況の枠組みから出る述語と共起すると述べている。

- (20) a. ? Ce train arrive! (=(12a))
 (This train is coming!)
 b. Le train arrive ! (=(12b))
 (The train is coming!)
 (21) a. Ce train a toujours du retard. (=(11a))
 (This train is always delayed.)
 b. ? Le train a toujours du retard. (=(11b))
 (The train is always delayed.)

確かに指示形容詞付き名詞句は、前節で述べたように、(20)のような発話現場への電車の到着という発話状況に組み込まれるような述語とは特に共起しにくい、(15a) (16) (17) のように、発話状況の一時的状態や発話現場に現存する指示対象の動作を表す述語には、指示形容詞付き名詞句と共起し得る、あるいは共起する事例もある。Kleiber 自身も論文の最後に、(20) (21) のような定冠詞と指示形容詞の分布の規則は、即座の発話状況にしか適用されないとしており、どのような状況が分布に影響を与えるのか考える余地が残されているとしている¹⁸⁾。

この点について、坂原 (2000) では、定冠詞付き名詞句と指示形容詞付き名詞句が異なるふるまいをする環境として、「現象文」を注でとりあげており、「目の前で起こっている事件を報告する現象文では、指示形容詞付き名詞句で目の前にいる猫が指せず、定冠詞付名詞句を使わなければならない (日本語では、裸名詞)」とし、「指示形容詞付き名詞句を使うと、現象文ではなく、次の文 (=23) と同じように、単なる結果の報告になってしまう。」(坂原 2000 : 247-248) としている。

- (22) a. { The / *This }¹⁹⁾ cat yawns. (坂原 2000)
 b. { ø / *この } 猫があくびした。 (Ibid.)

¹⁸⁾ “Qu’on ne se méprenne point sur la portée des règles de distribution situationnelle formulées ici : elles ne concernent que le secteur limité des situations immédiates, qui sont à même de donner lieu, avant que n’intervienne le rôle de *p*, à une saisie définie ou démonstrative. C’est dire que ces règles demandent à être complétées par une analyse des situations elles-mêmes.” (Kleiber 1987 : 121)

¹⁹⁾ フランス語の *Le chat baille.* のインフォーマント判断では、定冠詞を用いると、指示対象は「私の家の猫」と解釈されやすく、「見知らぬ不特定の猫」とは解釈されない。定冠詞と不定冠詞の違いについては、5.3.3.節にて説明する。また、*Ce chat baille.* よりも、*Ce train arrive.* の方が容認度はかなり悪い。

- (23) a. This cat likes ham. (Ibid.)
 b. この猫はハムが好きだ。 (Ibid.)

そして、「現象文は、事件の生起を分割できない全体として記述する。つまり、現象文は無題文である。ところが、指示形容詞付き名詞句を使うと、まず指示形容詞付き名詞句で指される要素が同定され、次にそれに対してなんらかの情報を付け加えるという有題文の構造になってしまう。そのため、無題文である現象文では指示形容詞付き名詞句は使えないのである。」(坂原 2000 : 248) と説明している。

本論文でも、現象文はトピック・コメント構造をとれず、そのため、トピックとなる指示形容詞付き名詞句を用いることができないと考える。2章で参照した益岡 (1991) が、事象叙述文に有題文と無題文を認めているように、トピック・コメント構造をとる有題文は、個体レベル述語であっても、局面レベル述語であっても叙述することができる。したがって説明すべきは、(20b) のような現象文は、なぜトピック・コメント構造をとれないかという点であり、「事件の生起を分割できない全体として記述する」(坂原 2000) とはどのような意味なのか、また、現象文に含まれる指示対象はなぜトピックになれないのかという問題として捉えられる。

まず、指示形容詞付き名詞句で表される指示対象がトピックとなる点から考えてみよう。Kleiber (1987) は、指示形容詞は、話し手が、発話の文脈を介して同定された指示対象について、直接的に、すなわち、値踏み場とは独立して、ひとつの Ni²⁰である事物として語りたときに用いると述べている²¹⁾。また、坂原 (2000) は、定冠詞と指示形容詞の違いについて、以下の事例を用い、(24a) の *the verb* は、二つの文で別の動詞を指してもよいが、(24b) の *this verb* が指す動詞は、二つの文で同じでなくてはならないと述べ、「定冠詞付き名詞句は固定指示詞的でなく、指示形容詞付き名詞句は固定指示詞的である」ことを説明している。

- (24) a. In these two sentences, the verb is put in the past. (坂原 2000)
 b. In these two sentences, this verb is put in the past. (Ibid.)

つまり、指示形容詞により発話文脈を利用して同定された指示対象は、ホスト文が解釈される領域とは独立した固定された指示対象であり、個体として語られる対象 (トピック) になるということである。

²⁰⁾ Ni は、i で表される特定の名を表す名詞の意味。語彙的に同じ名詞が照応に使用されるかどうか (忠実照応 Un Ni → Le Ni / Ce Ni と非忠実照応 Un Ni → Le Nj / Ce Nj) を明示するために表記されたりする。

²¹⁾ “-ce est utilisé lorsque le locuteur entend parler du référent identifié par le truchement du contexte d'énonciation, de façon directe, c'est-à-dire indépendamment de la circonstance d'évaluation disponible dans la situation d'énonciation, uniquement en le fixant comme l'entité ou chose qui est un Ni.” (Kleiber 1987 : 115)

このような指示形容詞付き名詞句によって同定された指示対象が、(21a) において、どのように叙述されるかを談話モデルによって表すと図 5.1 のようになる。

図 5.1 同定された指示対象についての知識情報の共有²²⁾

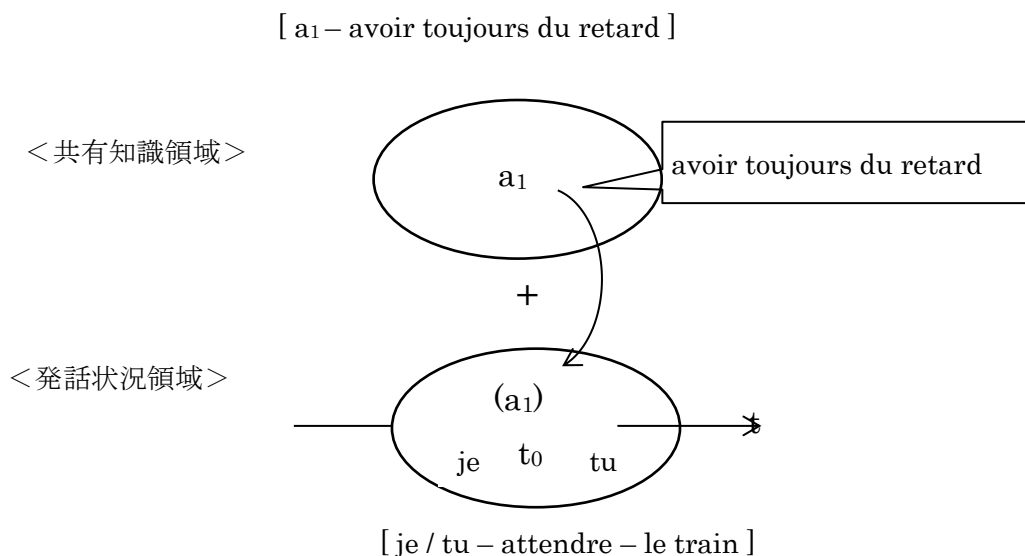
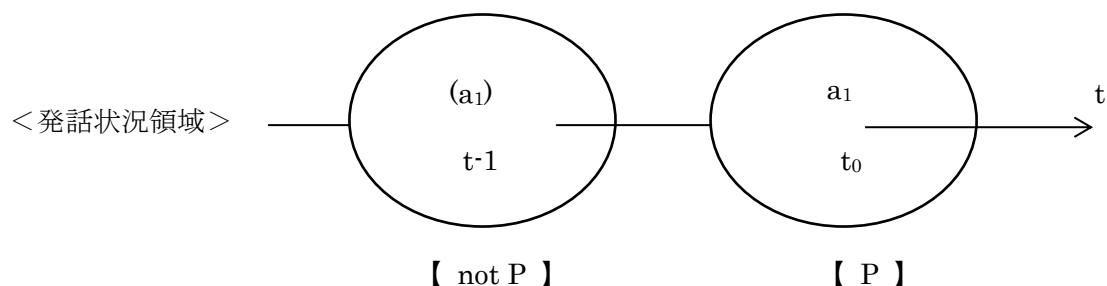


図 5.1 の共有知識領域内の談話指示子 a₁ は、話し手と聞き手が待っている電車の、時空に束縛されない個体レベルの存在であり、発話状況領域内のまだ発話現場に出現していない括弧でくくった談話指示子 (a₁) は、発話時点において遅れている電車の局面レベルの存在である。両者を結ぶ弓型の矢印線は、個体レベルの談話指示子と局面レベルの談話指示子を結ぶ局面・個体コネクタである。矢印の向きは、指示形容詞付き名詞句で指示された談話指示子の同定に、「話し手と聞き手がともに同じ電車を待っており、電車が遅れている」という発話現場の状況とあわせて、発話現場の状況に関与的な無時間的恒常的な述語情報 [avoir toujours du retard] が利用されることを表している。そして同定された談話指示子 a₁ について、話し手が共有知識領域内で保持する、無時間的恒常的な知識情報 [avoir toujours du retard] を表すことを、吹き出しによって表している。固定指示的な指示形容詞の性質から、話し手の共有知識領域（エピソード記憶領域）において談話指示子 a₁ が保持する無時間的情報を、話し手は容易に叙述することができる。聞き手は、この発話をうけて聞き手の共有知識領域の談話指示子についての情報を査定する。

一方、(20b) のような現象文は、発話現場への「電車の到着」の知覚を図 5.2 のように表現していると考えられる。

²²⁾ 実際には、発話により談話モデルの言語文脈領域を経由して聞き手の共有知識領域において述定内容が査定されることになるが、ここでは言語文脈領域の図を省略する。また、四角で囲われた情報 [avoir toujours du retard] は、話し手の共有知識領域に存在する談話指示子 a₁ にタグ付けされ、言語的に表現された属性情報を表す。

図 5.2 発話時 t_0 における出来事の知覚と指示対象 a_1 : 現象文(20) : [a_1 -arriver]



発話時 t_0 に知覚された指示対象の談話指示子 a_1 は、 $t-1$ 時点においては発話現場に出現していないので括弧で表示している。【 P 】の P は(20) では述語 [arriver] を表す。この図で示されるように、(20b) の現象文は、発話時現在 t_0 における、 a_1 の未完了の動作の、話し手による瞬間的な知覚を表す。つまり (20b) の現象文は、発話現場で知覚された事態（電車の到着）を、発話時 t_0 の発話状況領域を境界とする、談話指示子 a_1 の【 not P 】→【 P 】への状態変化の場面（(20b) の事例においては、最も状態変化が顕著な非存在→存在）として表現しているのである。

しかしながら、坂原の説明で見たように指示形容詞は固定指示的であり、話し手の直接指示により指示対象が決定される。このような指示形容詞による直接指示を Kleiber は (20) のような文には「強すぎる」と表現しているが、指示形容詞が現象文に用いられないのは、指示形容詞が持つ固定指示的な時間的に安定した性質が、発話時 t_0 の発話状況領域で知覚された出来事（【not P】→【P】への状態変化）に含まれる対象となることを妨げることによると考えることができる。

また、(25) (=15) のような例文は、発話状況領域における一時的状態を述べてはいるが、瞬間的な知覚を表した現象文ではない。

- (25) a. ? Ce train a du retard. (=(15 a))
 (This train is delayed.)
 b. Le train a du retard. (=(15 b))
 (The train is delayed.)

(25) の文は、指示対象である電車についての到着時刻と今到着していないという事実とが連携した知識表現であり、発話状況領域において、【not P】→【P】の状態変化を表す瞬間的な知覚を表す現象文とは異なる。したがって、発話状況に組み込まれた存在前提を持つ指示対象として、定冠詞の使用が選択されやすい指示対象ではあるが、指示形容詞を使用することを積極的に妨げるまでには至らないと考えられる。

このような考察をふまえ、本論文では、現象文に含まれる指示対象とトピックとの関係を以下のように考える。

(26) 現象文に含まれる指示対象とトピック

現象文に含まれる指示対象は、発話現場の発話時 t_0 に知覚された瞬間的な未完了の事態に含まれる、発話状況領域という局所的な時空領域で捉えられる事態の主体である。このような指示対象は時間と場所に制約された局面レベルの存在であり、出来事をはなれて語られる独立した指示対象となり得ないのでトピックにはなれない。

5.2.2. トピックと真偽判断のモダリティー

前節では、指示形容詞付き名詞句は指示対象を話し手の指示意図により固定的に指示し、共有知識領域の情報を参照することで、トピックとして機能することを示した。では、(27) (=16) のように、発話現場ではじめて遭遇した指示対象を指示形容詞付き名詞句で指示し、知覚で得た指示対象の動作を表す文は、現象文といえるのだろうか。あるいは、現象文とはどのように違うのだろうか。

(27) Oh ! Ce monsieur qui mange toute la barquette !

(=16), A. Daudet, *Lettre du mon moulin*)

(Oh! This man is eating the whole pie!)

(28) Tiens ! Ces phoques qui mangent des cailloux !

(J. Verne, *Les enfants du capitaine Grant*)

(Look! These seals are eating pebbles!)

(29) Tiens ! Ce malingreux²³⁾ qui demande l'aumône !

(V. Hugo, *Notre-Dame de Paris*)

(Look! That malingerer is asking for alms!)

まず、これらの指示形容詞付き名詞句による文も現象文も知覚に基づいた文ではあるが、現象文が瞬間的な知覚を表現するのに対し、これらの文は、ある時間幅の話し手の観察に基づく指示対象についての表現であり、発話時における発話状況領域への出現や状態変化を表す文ではない。そのため、指示形容詞付き名詞句による文は、以下のように、指示対象を切り離して述べることもできるが、現象文は、指示対象を切り離して表現すると容認されにくくなる。

²³⁾ “malingreux”という語は、小学館ロベール仏和辞典には記載がなく、“malingre” (【形容詞】虚弱な、ひ弱な、【名詞】《稀》虚弱な人) となっている。仏和辞典の TLF(Trésor de la Langue Française)の電子版には、mendiant qui feint d'être en mauvaise santé (健康状態が悪いふりをする物乞い) という説明とともに、(29)の Hugo の例文が引用されている。

- (30) a. Regardez ce monsieur ! Il mange toute la barquette !
 (Look at this man! He is eating the whole pie!)
- b. Regardez ces phoques ! Ils mangent des cailloux !
 (Look at these seals! They are eating pebbles!)
- c. Regardez ce malingreux ! Il demande l'aumône !
 (Look at this destitute man! He is asking for alms!)
- (31) a. ?? Regardez ce train ! Il arrive !
 (Look at this train! It is coming!)
- b. ?? Regardez ce facteur ! Il passe !
 (Look at this postman! He is passing!)

また、指示形容詞付き名詞句の指示対象は、Reinhart (1981) により提示されたトピックテスト²⁴でトピックとして容認されるが、現象文に含まれる指示対象は容認されにくい。ただし、間接話法の形式になるためと考えられるが、容認度の差がやや少なくなる。

- (32) a. Paul dit de ce monsieur qu'il mange toute la barquette.
 (Paul says about this man that he is eating the whole pie.)
- b. Paul dit de ces phoques qu'ils mangent des cailloux.
 (Paul says about these seals that they are eating pebbles.)
- c. Paul dit de ce malingreux qu'il demande l'aumône.
 (Paul says about this destitute man that he is asking for alms.)
- (33) a. ? Paul dit de ce train qu'il arrive.
 (Paul says about this train that it is coming.)
- b. ? Paul dit de ce facteur qu'il passe.
 (Paul says about this postman that he is passing.)

これらの点から、(27)~(29)のような指示形容詞付き名詞句による文は、現象文とは異なる文タイプと考える。

では、なぜ、以下のような、通常の〈 SN + SV 〉形式ではなく、〈 SN qui SV 〉形式が用いられているのだろうか。

- (34) a. Tiens ! Ce monsieur mange toute la barquette !
 (Look! This man is eating the whole pie!)

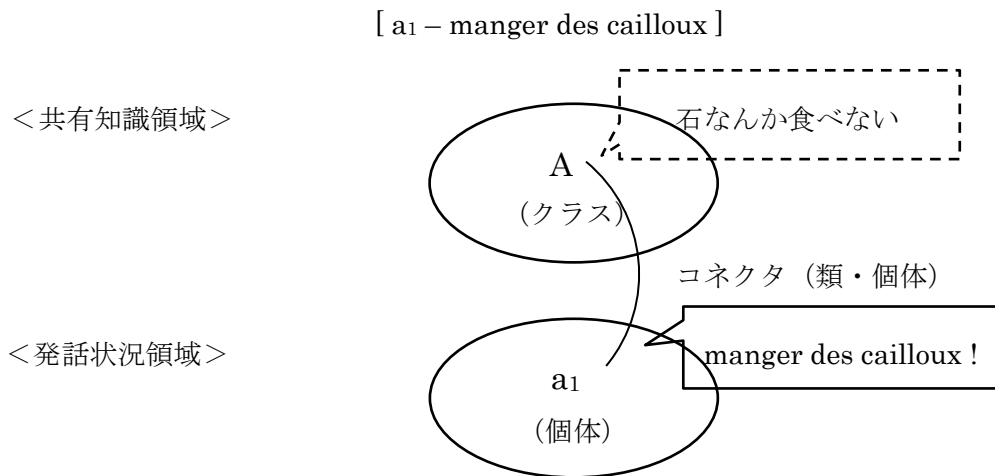
²⁴ Reinhart は、トピック性のテストとして、[17]のような文において about に後続できる名詞句は、埋め込み節のトピックとして機能すると述べている。

[17] He said {about/of} the book that many more people are familiar with its catchy title than are acquainted with its turgid text. (Reinhart 1981)

- b. Tiens ! Ces phoques mangent des cailloux !
 (Look! These seals are eating pebbles!)
- c. Tiens ! Ce malingreux demande l'aumône !
 (Look! This destitute man is asking for alms!)

〈 SN qui SV 〉形式の指示形容詞付き名詞句の指示対象は、話し手の瞬間の知覚を表す出来事に含まれる対象ではないが、話し手が発話現場ではじめて遭遇した対象であり、個体として共有知識領域に存在前提を持つ対象ではない。(27) は「家にはじめてやってきたお客」、(28) は「はじめて訪れた海辺にいる大アザラシ」、(29) は「街頭で目にとまった乞食」が行った行為を観察の結果述べたものである。そして、指示対象の行為が、名詞 N で表されるクラスに属する対象が行う標準・規範的な行為から逸脱していることに対する驚きを表す文である。そのため、トピック・コメント構造により、話し手の真偽判断 (断定) を表す形式を避け、〈 SN qui SV 〉形式を用いて表現していると考えられる。(28) の例文を談話モデルで表す (図 5.3)。

図 5.3 指示形容詞付き名詞句による 〈 SN qui SV 〉構文



実際には、発話により談話モデルの言語文脈領域を經由して聞き手の共有知識領域あるいは発話状況領域において解釈されることになるが、ここでは言語文脈領域の図を省略する。点線の四角で囲われた「石なんか食べない」は、談話指示子 a₁ と類・個体コネクタによって結ばれた、話し手の共有知識領域に存在するクラス A にタグ付けされている属性情報であり、実線の四角で囲われた [manger des cailloux] は、言語的に表現された事態を表す。前節で図 5.1 を用いて示した共有知識領域の知識情報を述べる文とは異なり、共有知識領域で参照されるのは、名詞 N で表されるクラス A についての知識情報であり、個体としての知識情報ではない。そしてこれらの文では、クラス A についての「お客は家にあるお菓子を全部食べつくしたりせず、行儀よくふるまう」「動物は、石を食べたりせず、他の動物や

植物を食べて生活する」「健康状態の悪い人は普通大人しくしており、高いところによじ登って人目をひくような行動をとらない」というステレオタイプな知識情報に対して、逸脱する目を引く行為が、発話状況領域の談話指示子 a_1 について観察されたことを表している。

ここで、トピックと真偽判断のモダリティーの関係について考えたい。益岡 (1991) は、日本語のトピックと真偽判断の関係について、以下のような二つの仮説をたてている。

(35) 益岡 (1991) におけるトピックと真偽判断についての二つの仮説

1. 真偽判断文は「有題文」(「主題-解説」文) である。
2. 非真偽判断文 (真偽判断文のモダリティーを持たない文) は無題文である。

ここで考えたいのは、(35-2) の仮説である。(27) (28) (29) の指示対象は、(30) (32) で見たように、出来事から指示対象を切り離すことができ、トピックとして容認され得ることが、現象文と異なる点であった。つまり、これらの指示形容詞付き名詞句を用いて話し手によって指示された指示対象は、個体として共有知識に存在前提は持たないが、発話現場に現存する、出来事とは独立した指示対象であり、トピックとして指示された対象と考えられる。しかしながら、文の構造としては、通常の「主語+述語」〈 SN + SV 〉形式の動詞の活用による、話し手の判断モダリティー (断定) を欠いている。つまり、トピックとして指示された指示対象は存在するが、話し手による真偽判断のモダリティーを欠いた文タイプといえる。

実際、(28) の発話 A に対して、聞き手 B は以下のように談話を続けている。語り部分を略して掲載する。

(36) A1 : *Tiens ! Ces phoques qui mangent des cailloux !* (=28a)

B1 : *Parbleu ! Le fait est certain ! On ne peut nier que ces animaux ne paissent les galets du rivage.*

A2 : *Une singulière nourriture, et d'une digestion difficile !*

B2 : *Ce n'est pas pour se nourrir, mon garçon, mais pour se lester, que ces amphibiens avalent des pierres. C'est un moyen d'augmenter leur pesanteur spécifique et d'aller facilement au fond de l' eau. ...*

(J. Verne, *Les enfants du capitaine Grant*)

(A1 : Look! These seals are eating pebbles!

B1 : Good Heavens! It is a fact! One cannot deny that these animals do eat beach pebbles.

A2 : A particular food, and of a difficult digestion!

B2 : It is not to nourish themselves, my boy, but to ballast themselves, that these amphibians swallow stones. It's a way to increase their specific

gravity and go more easily deep in the water.)

まず、A1 の真偽判断のモダリティーを欠いた、断定を避けた半信半疑の発話をうけて、B1 は、Parbleu !と、驚きを示したあと、2 文目、3 文目で目の前で起きた事態が否定しようのない事実であることを述べる。そして、A2 の半信半疑の原因となった、「消化に悪い」という事実に対して、B2 で「餌のために食べるのではなく、重しにして海底に行くためだ (陸に上がると吐き出す)」と説明をつづけていくのである。

この談話を見ても明らかなように、指示形容詞を含む〈 SN qui SV 〉形式の発話は、驚き (信じられないという気持ち) を表現するために、真偽判断のモダリティーを欠く形式を話し手は採用しているが、指示対象自体は、トピックとして容認される表現となっている。以下に〈 ce N qui SV 〉形式のトピックと真偽判断のモダリティーの関係を示す (表 5.2)。

表 5.2 トピックと真偽判断のモダリティーの関係

	トピック	真偽判断	文の解釈領域
現象文 (単一判断)	×	×	発話状況領域
判断文 (二重判断)	○	○	共有知識領域
〈 ce N qui SV 〉	○	×	発話状況領域

したがって、益岡 (1991) は、(35) のように、日本語の主題 (～ハ) の存在と真偽判断のモダリティーが連動しているという仮説をたてているが、トピックと解釈可能な指示対象を提示しながら、判断を述べずに指示対象の行為を述べる (27) (28) (29) のような文が存在することを考慮すると、トピックと真偽判断のモダリティーは、必ずしも連動するとはいえないと考えられる²⁵⁾。そして、〈 ce N qui SV 〉タイプは、真偽判断モダリティーを欠く点と文の解釈領域が発話状況領域である点は現象文と同じであるが、指示形容詞 ce の持つ固定指示性により、名詞句で表される指示対象が、事態に含まれる指示対象としてではなくトピックとして解釈される文となる点において現象文とは異なる考える。

5.3. なぜ定なのか：定冠詞の「値踏み場」は何によって得られるのか

前節では、現象文 (単一判断の文) は、発話時現在 t_0 における瞬間的な知覚を表す文であり、そのような現象文に含まれる指示対象はトピックとして語られる存在とはならないことを考察した。この節では、Kleiber (1987) で提示された「値踏み場」の概念を参照し、現象文で用いられる定冠詞の「値踏み場」が何によって得られるのかを考察する。

²⁵⁾ ただし、ここでのトピックは、(～ハ) ではなく、「このお客さん {o}、お菓子全部食べてしまおうよ。」「このアザラシ {o}、石ころ食べてる」のように、主題マーカ「ハ」を含め、格マーカを用いない方が自然と思われるが、この点については本論文の議論の範囲を超えるので、考察から除外する。

本論文では、Kleiber の「値踏み」の概念を参照し、定冠詞は「値踏み」に指示対象を間接的に指示する、つまり「値踏み」における指示対象の存在前提を表すと考える。5.1.2 節でのべたように、Kleiber (1987) は、(37) (= (12b)) の述語 *arriver* は、筋の通った「値踏み」の連続となる出来事であり、そのような連続性のある「値踏み」において把握されるべき指示対象は、定冠詞によって、その「値踏み」を通して間接的に指示されると説明する。しかし(38) (39) のような〈SN qui SV〉タイプの現象文には、そのような「値踏み」の連続性は感じられず、むしろ突発的な事態を表している。

- (37) *Le train arrive.* (=(12b))
 (The train is coming.)
- (38) *Regardez ! Le vase qui va tomber !* (Rothenberg 1971)
 (Look! The vase is going to fall!)
- (39) *Tiens ! Le livre qui est tombé par terre !* (Wehr 1984)
 (Well well! The book has fallen down on the floor!)

本論文は、Kleiber (1987)、東郷 (2001a) (2001b)、小田 (2012) の冠詞についての議論を踏まえ、〈SN qui SV〉タイプの現象文の定冠詞の「値踏み」は、発話現場と適合する記憶の中の「フレーム」と呼ばれる知識構造によって形成されるという仮説を提示する。「フレーム」や「シナリオ」といった、共有知識領域に格納されている、共同体の成員であれば持っている想定されるステレオタイプな知識は、文化や社会制度などに依存し、談話の様々な局面で利用されていると考えられる。まず、5.3.1.節で、「フレーム」と「シナリオ」²⁶⁾の概念の違いを説明したのち、5.3.2.節で、〈voilà SN qui SV〉タイプとの比較、5.3.3.節で、〈SN qui SV〉タイプの不定冠詞が使用される事例との比較を行い、現象文になぜ定冠詞が用いられるかを説明する。

5.3.1. 「フレーム」か「シナリオ」か

Minsky (1977) によって提唱された概念「フレーム」とは、「人が新たな状況に遭遇した際、記憶から引き出される、ステレオタイプな状況を表すデータ構造」をいう。「フレーム」は、節点と関係からなるネットワークとして考えられ、フレームの頂点は固定されており、下のレベルにはたくさんの末端がある。末端は、特定の事例やデータによって埋められるスロットとなっており、普通、『デフォルト』の割り当てが行われている」と説明される²⁷⁾。

²⁶⁾ 津田 (2018) では、「シナリオ」という用語ではなく、同様の概念である Schank&Abelson (1977) の用語「スクリプト」を用いている。本論文では、「(事態連鎖の) シナリオ」という用語に統一する。ただし、Schank&Abelson (1977) の記述については、原文に則り「スクリプト」という用語を用いる。

²⁷⁾ “When one encounters a new situation (or makes a substantial change in one’s view of a problem), one selects from a memory a structure called a *frame*. (...) A *frame* is a

例えば、「家フレーム」や「誕生日会フレーム」には、以下のようなデフォルトの割り当てが想定される。

- (40) a. 家フレーム：玄関、屋根、窓、台所、居間、風呂場、etc.
b. 誕生日会フレーム：プレゼント、誕生日ケーキ、飾り、料理、etc.

そして、このようなフレームの末端のデフォルト要素は、たとえ談話に新しく登場した指示対象であっても、発話現場に適合するフレーム知識を介して、存在が前提されたものとして、定冠詞を用いて表すことができる²⁸⁾。

- (41) a. [不動産屋が物件を案内して] *Voici le salon. La cuisine est là-bas.*
(Here is the living-room. The kitchen is over there.)
b. [誕生日会で] *Où est le gâteau d'anniversaire ?*
(Where is the birthday cake?)

例えば、(41a) は、目の前にある居間や台所を現場指示的に指示しているのではない。家を内見するというステレオタイプな状況によって、「家フレーム」が喚起され、内見している家のデフォルト要素としての指示対象が定冠詞によって表現されている。(41b) も同様に、「誕生日会フレーム」が喚起されることによって、どこかに準備されているはずの存在前提をもつ誕生日ケーキとして、定冠詞を用いて、今どこにあるのかを尋ねているのである。存在が前提されていないものの在りかを尋ねることはできない。一方、発話現場が喚起しない(適合しない)フレームのデフォルト要素は、存在前提が認められない。例えば、レストランには一般にトイレがあると想定されるので、はじめて登場する指示対象であっても定冠詞を用いることができるが、バスの停留所には、デフォルト要素としてトイレは想定されないので、定冠詞を用いることはできない(42)。

- (42) a. [レストランで] *Où sont les toilettes ?*
(Where is the bathroom?)
b. [バスの停留所で] ?? *Où sont les toilettes ?*
(Where is the bathroom?)

data-structure for representing a stereotyped situation like being in a certain kind of living room or going to a child's birthday party.(...) We can think of a frame as a network of nodes and relations. The 'top levels' of a frame are fixed, and represent things that are always true about the supposed situation. The lower levels have many terminals – 'slots' that must be filled by specific instances or data.(...) *A frame's terminals are normally filled with 'default assignments.'* (Minsky 1977: 355-356)

²⁸⁾ 認知フレーム(フレームとシナリオの両概念を含む)と定冠詞の関係については、小田(2012)が詳しい。

このように、談話に新たに登場した指示対象であっても、発話現場がおかれた状況が適合するフレームのデフォルト要素は、存在が前提されたものとして、聞き手に定冠詞を用いて提示できることがわかる。

一方、Schank & Abelson (1977) が提示した概念「スクリプト (シナリオ)」とは、「特定の文脈において、その場にふさわしい一連の出来事を記述する構造」のことで、「よく知られた状況を説明する、一連のステレオタイプの行為連鎖」をいう。「スクリプトに含まれる事物は、明示的に導入されていなくても、スクリプト自体がそれらの事物を暗黙のうちにすでに導入しているので、**the** が使える」と述べられている。また、「物語の理解には、推論が、入力された各概念を物語内の他の入力された概念に結びつけるのだが、この連結プロセスに、スクリプト知識が利用される」と説明される (Schank & Abelson 1977) ²⁹⁾。

例えば、(43a) のような「スクリプト」からの逸脱のない文には、(43b) のような「レストランスクリプト」が想定されて解釈されているとされる。「推論による連結にスクリプト知識が利用される」とは、(43a) には、食事場面は登場しないが、通常我々は、(43b) のような「スクリプト」を無意識に想定し、食事は行われたと考えるということである。

(43) a. John went into the restaurant. He ordered a hamburger and a coke. He asked the waitress for the check and left. (下線は筆者)

b. レストランスクリプト

場面 1 : 入店 (店に入る→席を探す→席を見つける→席にむかう→座る)

場面 2 : 注文 (メニューをもらう→読む→注文を決める→注文する)

場面 3 : 食事 (料理がくる→食べる)

場面 4 : 出店 (勘定書きをたのむ→勘定書きをうけとる→チップを渡す→レジにむかう→レジで支払う→店を出る)

(Schank & Abelson 1977 から抜粋)

ここで、「フレーム」と「シナリオ (スクリプト)」の関係を、(43a) の文をもとに考える。例えば、(43a) の **the check** を **the menu** におきかえることは難しい。勘定書きとメニューは、どちらも、レストランのフレーム知識には一般にデフォルトとして含まれる要素では

²⁹⁾ “A script, as we use it, is a structure that describes an appropriate sequence of events in a particular context. (...) a script is a predetermined, stereotyped sequence of actions that define a well-known situation. A script is, in effect, a very boring little story. Scripts allow for new references to objects within them just as if these objects had been previously mentioned; objects within a script may take ‘the’ without explicit introduction because the script itself has already implicitly introduced them. (...) We have discussed previously how paragraphs are represented in memory as causal chains. This work implies that, for a story to be understood, inferences must connect each input conceptualization to all the others in the story that relate to it. This connection process is facilitated tremendously by the use of scripts.” (Schank & Abelson 1977: 422-423)

あるが、店を出る前にウェイトレスに頼むのは、勘定書であり、メニューではない。つまり、「シナリオにより喚起される指示対象の存在は、フレームのデフォルト要素に比べ、時間軸上で、より活性化された状態にある」といえる。「フレーム」も「シナリオ」も、記憶の中に形成されたステレオタイプな状況に関する知識だが、「フレーム」は、上位レベルの項目と下位レベルのデータ要素の関係（役割）をとらえた知識であるのに対し、「シナリオ」は、行為連鎖に基づく、時間的進行を伴う動的な事態連鎖の知識である。

Kleiber (1987)、東郷 (2001a) (2001b)、小田 (2012) の冠詞についての議論を踏まえて行った、このような「フレーム」と「シナリオ」の考察をもとに、ここで本論文では、現象文〈SN qui SV〉について、定冠詞の機能に関する以下のような仮説をたてる。

(44) 現象文〈SN qui SV〉における定冠詞の機能に関する仮説

〈SN qui SV〉タイプの現象文は、「フレーム」の存在により定冠詞で表される指示対象の存在前提を持っているが、出来事の発生自体は想定外であり、突然生じた事態の知覚を表す文となる。

以下では、この仮説を二つの観点から検証する。まず、5.3.2節では、同じように定冠詞の指示対象を持つ〈voilà SN qui SV〉タイプとの比較を行い、〈SN qui SV〉構文は〈voilà SN qui SV〉構文とは異なり、「事態連鎖のシナリオ」による先行場面がないことにより、突発的な事態を表すが、指示対象そのものは発話現場に適合する「フレーム」に存在し得る要素であることを説明する。そして、5.3.3節では、〈SN qui SV〉タイプの現象文の名詞句の定・不定を「フレーム」の有無の観点から検証し、定名詞句の指示対象は、「フレーム」により指示対象の存在前提が保証され、想定外の突発的な事態を表すのに対し、不定名詞句の指示対象は、想定外の指示対象の出現を表すことを説明する。

5.3.2. 〈voilà SN qui SV〉構文と〈SN qui SV〉構文

5.3.2節では、〈voilà SN qui SV〉構文と〈SN qui SV〉構文の比較を行い、〈SN qui SV〉構文についての前節最後に提示した(44)の仮説を検証する。

本論文では、第4章において、〈voilà SN qui SV〉構文について、以下のような仮説をたてた。

(45) 〈voilà〉現象文としての〈voilà SN qui SV〉構文についての仮説

〈voilà SN qui SV〉構文は、指示対象の状態変化【not P】→【P】を伴う場面転換を表す。定名詞句で表される〈voilà SN qui SV〉構文は、「出来事連鎖のシナリオ」を持つ。

そこで、まず5.3.2.1節と5.3.2.2節において、〈voilà SN qui SV〉構文と〈SN qui SV〉

構文の関係節内の動詞を分析し、〈 SN qui SV 〉構文は「事態連鎖のシナリオ」を想定した先行場面を持たないために、突発的な事態を表すことを説明する。そして、5.3.2.3.節では、〈 voilà SN qui SV 〉構文には「事態連鎖のシナリオ」が、先行場面のない突発的な知覚を表す〈 SN qui SV 〉構文には、発話現場と適合する「フレーム」知識が関与することを説明する。

5.3.2.1. コーパスデータの分析

本節では、両構文の関係節内の動詞について、先行研究の観察を踏まえたうえで、コーパスデータの分析を行う。

第3章で見たように、Rothenberg (1971) は、(46b) のような〈 voilà SN qui SV 〉構文も (46a) のような〈 SN qui SV 〉構文も、どちらも発話の場で発生した出来事を述べ、交換可能と考えている。ただ、〈 voilà SN qui SV 〉構文はさらに注意喚起の意味を持ち、何らかの感情（後悔、怒り、喜び、驚きなど）を伴い、反応を刺激するとされている。しかし、両者の違いは明確にされていない。

- (46) a. Regardez ! Le voleur qui s'enfuit ! (Rothenberg 1971)
 (Look! The thief is running away!)
 b. (Mon dieu !) Voilà le voleur qui s'enfuit ! (Ibid.)
 (Oh my god!) (There's the thief running away!)

そして、〈 voilà SN qui SV 〉構文の関係節内の述語の時制は、現在形か半過去で、動詞の語彙的アスペクトは、完結相 (telic) の動作動詞で、状態動詞は容認されないとしている。一方、voilà 構文について研究した Lafontaine (1989) は、第4章でみたように、〈 voilà SN qui SV 〉構文について、事態は進行中という感覚を持ち、(47a) のような継続相の事態も (47e) (47f) のような点括的 (punctual) な事態もともに容認するが、(47b) (47c) (47d) などのアスペクト動詞とは共起しにくいとしている。

- (47) a. Voilà Marie qui chante. (Lafontaine 1989)
 (There's Marie singing.)
 b. ? Voilà Marie qui est en train de chanter. (Ibid.)
 (There's Marie singing. / There's Marie busy singing.)
 c. ? Voilà Marie qui se met à chanter. (Ibid.)
 (There's Marie starting to sing.)
 d. ? Voilà Marie qui finit de chanter. (Ibid.)
 (There's Marie stopping (now) singing.)
 e. Voilà Marie qui arrive. (Ibid.)

(Here comes Marie.)

f. Voilà Marie qui part.

(Ibid.)

(There goes Marie.)

両先行研究には、次のような二つの異なる観察がみられる。

1. Rothenberg が指摘するように、〈 voilà SN qui SV 〉構文に完結相の動作動詞が多くみられるのは確かだが、(48) のような、容認されにくい動詞が存在することを Lafontaine は指摘している。

(48) ? Voilà le livre qui tombe !

(Lafontaine 1989)

(There's the book falling!)

2. Rothenberg は、〈 voilà SN qui SV 〉構文の関係節内の動詞は完結相の動作動詞に限るとしているが、Lafontaine は、(47a) のように継続相の動詞も共起するとしている。

このような先行研究の分析をふまえ、両構文でどのような動詞が共起しているかをコーパスデータにより観察する。

〈 voilà SN qui SV 〉については、第4章のコーパスデータで抽出した単一の出来事を表す61件(不定11件、定50件)を基礎データとする。〈 SN qui SV 〉については、2016年度のフランス語コーパス FRANTEXT を用い、出来事や一時的状態を表す〈 SN qui SV 〉の66件(不定27件、定39件)を以下の手順で取り出す。その結果をまとめたのが表5.3である。

- 1) 句読点などで分断された直後の〈 SN qui SV 〉+〈 ! 〉の短い文を抽出する³⁰⁾。
- 2) 不定名詞句 (un / une) 177件、定名詞句 (le / la + 所有形容詞) 205件の中で、各100件をランダム抽出する。そして、直前直後の統語位置や文脈と関係節内の述語を基に、局面レベルの指示対象を含む〈 SN qui SV 〉の件数を数える。

表 5.3 〈 SN qui SV 〉の不定／定比率

不定名詞句		定名詞句		合計	
件数	(%)	件数	(%)	件数	(%)
27	(40.9)	39	(59.1)	66	(100.0)

³⁰⁾ FRANTEXT (2016年度) の定冠詞 le+N+qui+最大4語+!を取り出す場合のコマンド例：
(.|,|:|!|?|!|?|!|”|«) le ^ (voilà|voici) qui & q (1,4)! (^ (voilà|voici)は(voilà|voici)を除くコマンド)。関係節内の語数を最大4語にしたのは、1語だと時制が現在形などに自ずと限定されてしまい、また長すぎると通常の制限／非制限の比率が高くなってくるため。

定／不定の問題については、5.3.3節で考察するが、従来〈 SN qui SV 〉構文については、定名詞句中心の観察が多く、Wehr (1984) では〈 SN qui SV 〉構文はほぼ定名詞句に限定されるとしている。しかし、出来事や一時的状態を表すと考えられる〈 SN qui SV 〉の中にも、不定名詞句 100 件中 27 件の事例が存在した。これらについての具体的な分析は 5.3.3節で行う。

次に、〈 voilà SN qui SV 〉 61 件（不定 11 件、定 50 件）と、〈 SN qui SV 〉 66 件（不定 27 件、定 39 件）の動詞タイプを観察する。まず、時制については、両文タイプとも現在形が圧倒的に多く、〈 voilà SN qui SV 〉で 98.4%、〈 SN qui SV 〉で 87.9%が現在形である。現在形以外の時制は、〈 voilà SN qui SV 〉で複合過去 1 件、〈 SN qui SV 〉で複合過去 4 件、半過去 4 件が観察された。次に、動詞の語彙的アスペクトの分布を表 5.4 にまとめる³¹⁾。

表 5.4 〈 voilà SN qui SV 〉 / 〈 SN qui SV 〉 の動詞タイプ

	〈 voilà SN qui SV 〉		〈 SN qui SV 〉	
	不定 (11 件)	定 (50 件)	不定 (27 件)	定 (39 件)
状態	3	1	5	9
活動	1	11	13	11
到達	6	32	6	12
達成	1	6	3	7

この表をみると、両構文の差は、定名詞句において顕著である。〈 voilà SN qui SV 〉は、Rothenberg の主張どおり確かに到達動詞が多いが、Lafontaine が指摘するように活動動詞も存在する。状態動詞はほぼ観察されない。一方、〈 SN qui SV 〉は、動詞タイプによる偏りがあり見られず、状態動詞の事例も 9 件（内、否定 2 件）存在し、不定名詞句よりも件数が多い。不定名詞句に関しては、〈 SN qui SV 〉の不定名詞句に活動動詞が多くみられる。

さらにコーパス全体の例文も参照し、両構文の定名詞句を持つ文で、出来事や一時的状態を述べる文についての特徴を例文とともに以下に記述する。

まず、〈 voilà SN qui SV 〉構文については、特に発話現場への出現を表す動詞が多い(49)。発話現場からの退出を表す動詞も散見されるが、出現の動詞に比べるとかなり少ない。活動動詞も問題なく容認される。特に音（声）の発生を表す動詞が多い(50)。状態変化動詞の中には、Lafontaine の指摘する(48)の *tomber* のように、容認されにくいものもあるが、(51)「夜露がおりる」のように、場面全体が変化を被るような事態においては、頻繁に

³¹⁾ Vendler (1967) の語彙的アスペクトの分類により、表をまとめる。動詞の否定形については、「状態」に含めて計算した。

使用される。このような事例では、(48)「本が落ちる」などの指示対象の一回きりの状態変化を表す到達動詞から、継続的事態を表す活動動詞への意味的アスペクト変換が起きると考えられる。また、*enfin*, *maintenant*, *encore* などの、何らかの事態発生についての期待を表す表現と共起しやすい (52)。さらに、事態の開始、反復を表す動詞 *commencer*, *recommencer* も頻繁に使用される (53)。

- (49) Nous n'arriverons pas, répète le groom. Voilà le train qui arrive !
 (J. Huret, *Enquête sur l'évolution littéraire*)
 (We will not arrive, repeats the teamster. There comes the train!)
- (50) Voilà les vêpres qui sonnent ! (G. Sand, *La Petite Fadette*)
 (There are the vespers ringing!)
- (51) Voilà le serein qui tombe ! (H. Balzac, *La Peau de chagrin*)
 (There's the serein falling!)
- (52) Voilà le patron qui rit maintenant ! (E. Zola, *Au bonheur des dames*)
 (There's the boss laughing now!)
- (53) Allons, voilà la discussion qui va recommencer, ...
 (A. Dumas, *Les Trois mousquetaires*)
 (Oh no, there's the same discussion starting again...)

一方、〈 SN qui SV 〉構文については、(54) のように「おしゃべりしている間に火にかけていた牛乳が煮えたぎる」、(55) のように「継母の悪口を言っていると、不意に父親が戻ってくる」、(56) のように「テーブルに置いていた本が知らないうちに地面に落ちていく」などの突発的な思いがけない事態の発生を表すものが多い。また、(57) 「ろうそくが一晩中ともされて燃え尽きている」、(58) 「片付いているべき寝室が片づけられていない」のように、話し手が移動先で遭遇した予想外の事態の、瞬間的な知覚を表す表現であり、先行場面で予測されていない、先行場面と切り離された事態の表現である。

- (54) Allons bon ! Le lait qui bout ! (M. Arland, *L'ordre*)
 (Oh no! The milk is boiling!)
- (55) Pet-pet ! Le vieux qui revient ! (H. Bazin, *Vipère au poing*)
 (Pet-pet! The old one is coming back!)
- (56) Tiens ! Le livre qui est tombé par terre ! (= (39), E. Zola, *Pot-bouille*)
 (Well well! the book has fallen on the floor!)
- (57) Saigneur ! La chandelle qui est toute brûlée ! (V. Hugo, *Les Misérables*)
 (Good lord! The candle is all burnt up!)
- (58) Mon dieu ! C'est vrai, la chambre qui n'est pas faite ! (E. Zola, *Germinal*)

(My god! Really? The room hasn't been done!)

本論文では、このような〈 voilà SN qui SV 〉構文と〈 SN qui SV 〉構文のコーパスデータの観察に見られる両構文の差は、先行場面における何らかの事態連鎖の想定、「事態連鎖のシナリオ」の有無にあると考える。次節では、Rothenberg (1971) と Lafontaine (1989) の先行研究で主張の異なった点を中心に、動詞タイプごとに文脈とともに例文を考察する。

5.3.2.2. 先行場面と「出来事連鎖のシナリオ」

この節では、先行研究の Rothenberg と Lafontaine の主張が異なった二つの動詞アスペクト「到達動詞」「活動動詞」と、コーパス調査において、両構文の差が認められた「状態(結果状態)」の動詞タイプについて考察する。

5.3.2.2.1. 到達動詞

まず、Lafontaine が指摘した、〈 voilà SN qui SV 〉構文で共起しにくい *tomber* などの動詞タイプについて考える。

〈 voilà SN qui SV 〉構文には、Rothenberg の指摘どおり、コーパス分析においても、完結相 (telic) の動作動詞が多く、特に、発話現場への出現を表す移動動詞は多くみられる。しかし、Lafontaine が指摘した通り、状態変化動詞 *tomber* は〈 voilà SN qui SV 〉構文で容認度が低い。一方〈 SN qui SV 〉構文では容認される。特に “Attention!” などの突発的な出来事への注意を示す表現と共起しやすい (59)。同様に〈 SN qui SV 〉構文が容認される (60) のような事態においても、〈 voilà SN qui SV 〉構文は容認されにくい。

(59) a. ? Voilà le vase qui tombe !

(There's the vase falling!)

b. (Attention !) Le vase qui tombe !

(Watch out!) (The vase is falling!)

(60) a. ? Voilà le lait qui bout !

(There's the milk boiling!)

b. Le lait qui bout !

(=54)

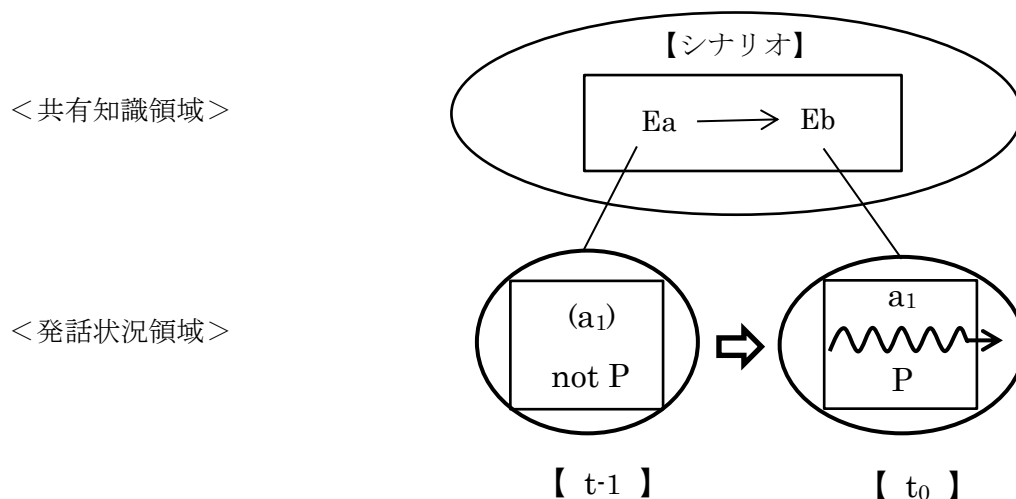
(The milk is boiling!)

なぜ、(59) や (60) のような事態は〈 voilà SN qui SV 〉構文において容認されにくいのだろうか。また、なぜ〈 SN qui SV 〉構文では問題なく容認されるのだろうか。

4章では、〈 voilà SN qui SV 〉構文は、「出来事連鎖のシナリオ」を持ち指示対象の状態変化【not P】→【P】を伴う場面転換を行うことを示した。

この仮説を「出来事連鎖のシナリオ」と知覚された対象である談話指示子 a1 と展開中（波線）の動作 P として表したものが図 5.4 である。Ea→Eb という「出来事連鎖のシナリオ」により、話し手が t₀ において知覚する事態に含まれる談話指示子 a1 の状態変化が想定可能な事態として提示されることを示している。一方、(59) の「花瓶が倒れる」や (60) の「牛乳が煮えたぎる」という事態は、予想外の出来事（アクシデント）である。図 5.4 に (59) や (60) の事態をあてはめようとする、発話時 t₀ の先行場面 t-1 において、Eb：「花瓶が倒れる」「牛乳が煮えたぎる」という出来事やその事態に含まれる談話指示子 a1（「花瓶」や「牛乳」）の状態変化前の存在が t-1 時点において喚起されていることになる。しかしながら (59) や (60) のような事態は、一般に出来事連鎖のシナリオを持たないアクシデントであり、指示対象の状態変化は想定外の出来事である。したがって、「シナリオ」を持った、先行場面 t-1 からの場面転換を表す〈voilà SN qui SV〉構文を用いた表現と共起しない。

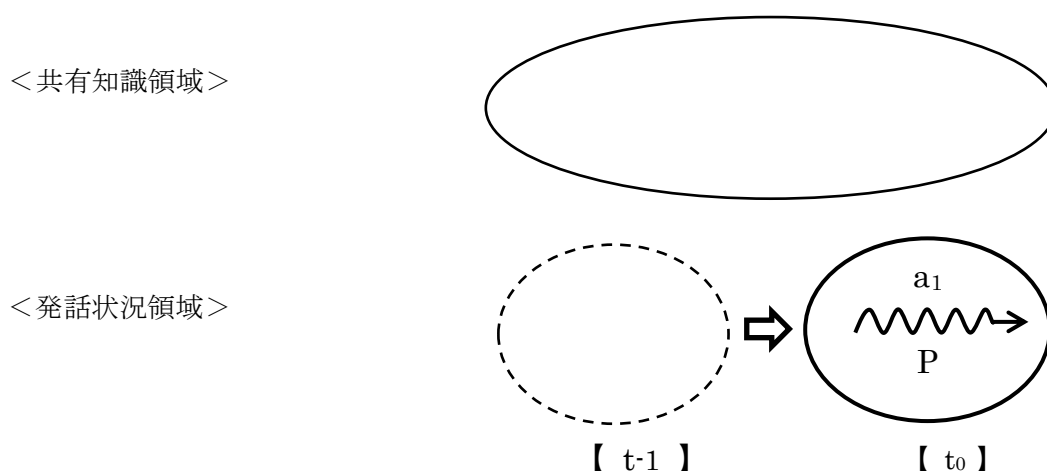
図 5.4 事態連鎖のシナリオによる想定を持つ〈voilà SN qui SV〉構文³²⁾



一方〈SN qui SV〉構文は、「出来事連鎖のシナリオ」を持たず、知覚した事態をそのまま表現する文タイプなので、発話時 t₀ に生じた突然の想定外の事態と共起する。図 5.5 で示すように、先行場面 t-1 において談話指示子 a1 を含むような「出来事連鎖のシナリオ」による想定はない。したがって、発話時 t₀ における、談話指示子 a1 の未完了の動作 (P) が予想外の突発的な事態の知覚として表現されるのである。

³²⁾ 図 5.4、図 5.5 は、言語文脈領域や談話プロセスを省略し、シナリオと指示対象の状態変化の関係を中心に表している。

図 5.5 シナリオによる想定を持たない〈 SN qui SV 〉構文



このように、同じ状態変化動詞を用いた両構文の容認度の差は、先行場面における事態連鎖の想定「シナリオ」の有無にあると考えられる。したがって、(60a) において〈 voilà SN qui SV 〉構文において容認されにくかった状態変化動詞 *bouillir* でも、先行場面において、「シナリオ」による想定があるような、以下のような状況では、湯を沸かすステレオタイプなシナリオ (Ea : お水を火にかける → Eb : 湯が沸く) が働き、〈 voilà SN qui SV 〉構文も容認されるようになる (61)³³⁾。

- (61) (ラーメンを作ろうとお湯を火にかけている。トイレから戻ってくると、お湯がちょうどわいている。)

Voilà l'eau qui bout ! Maintenant attends encore trois minutes !

(There's the water boiling! Now wait another three minutes!)

同様に、両構文とも容認されるような事態 [*le vent – se lever*] においても、先行場面での「シナリオ」の有無により、構文の選好が変わる。(62) のように、予期せぬ突風でクロスが煽られるような事態には〈 SN qui SV 〉構文が選好されやすく、(63) のように、風が来るのを待って行動に出ようとしている場合、〈 voilà SN qui SV 〉構文が選好されやすい。

- (62) (公園でピクニック中、予期せぬ突風にクロスが煽られる)

a. ? *Voilà le vent qui se lève !*

(There's the wind picking up!)

³³⁾ 4章でみた所有形容詞つき定名詞句の (57) の実例 (*Madame, voilà votre eau qui bout.*) も、シナリオに基づく想定内の状態変化を表す事例である。

- b. Tiens ! Le vent qui se lève !
 (Oh! The wind is picking up!)
- (63) (パラグライダーたちが、山の上から飛び立とうと、風を待っている)
- a. Voilà le vent qui se lève !
 (There's the wind picking up!)
- b. ?? Tiens ! Le vent qui se lève !
 (Oh! The wind is picking up!)

また、〈 voilà SN qui SV 〉構文と共に起しやすい、以下のような出現を表す移動動詞も、先行場面において指示対象の出現が想定されていない場合には、〈 SN qui SV 〉構文が選択される。

- (64) Nous n'arriverons pas, répète le groom. Voilà le train qui arrive ! (=49)
 (We will not arrive, repeats the teamster. There comes the train!)
- (65) Pet-pet ! Le vieux qui revient ! (=55)
 (Pet-pet! The old one is coming back!)

(64) は、電車に乗ろうとホームに急いで向かっている状況のところへ、電車がやってくるのが見えたときの表現であり、電車は先行場面において事態連鎖のシナリオの中に含まれる。一方、(65) は、継母の悪口を言っている子供たちのところへ、父親がやって来る気配を感じた子供の一人が皆に警告する発話であり、シナリオのない、想定外の事態を表現している。

これらのことから、先行場面における事態連鎖の想定（シナリオ）の有無が、両構文の違いと考えられる。

5.3.2.2.2. 活動動詞

では、先行研究の主張が異なった活動動詞はどうだろうか。〈 voilà SN qui SV 〉構文に活動動詞は容認されないとの主張もあったが、コーパスから両構文とも容認されることが判明した。シナリオの有無は両構文にどのような意味の違いをもたらすのだろうか。

まず、〈 voilà SN qui SV 〉構文は、状態変化の知覚しやすさ（非存在→存在）、またシナリオの描きやすさという点で発話現場への出現を表す移動動詞（到達動詞）が多いと考えられる。しかし、以下の事例のように、音が鳴っていることに気付いたり、少し前の状態と異なる動作を行っている主体に気付いたり、活動動詞で表される事態が展開している中での知覚による気づきを表す事例も少なくない。

- (66) (祭りの日。ミサやお祈りをはさんで、踊りや食事を楽しむ時間がある)

Voilà les vêpres qui sonnent ; avec qui vais-je danser après ? (=50))

(There are the vespers ringing; with whom am I going to dance afterwards?)

(67) (一晩中踊った朝。お祈りに行こうと話していると、鐘が鳴り出す)

Silence ! cria-t-il, *voilà l'Angelus qui cloche !*

(G. Sand, *Les Maîtres sonneurs*)

(Silence! he shouted. There's the Angelus tolling!)

(68) (首切りが横行する職場で、近くにいる経営者たちの様子をうかがっている)

Voilà le patron qui rit maintenant ! (=52))

(There's the boss laughing now!)

まず、(66) (67) の例は、日課の鐘の音の知覚を表す文だが、このような音の知覚は、シナリオを持った場面転換となりやすい。例えば(66) は、祭りの日の鐘の音で、祈りの後には踊りの時間があり、単に「鐘が鳴っている」という事態だけではなく、事態連鎖の中で事態を表現していることは、その後の発話「晩のお祈りがすんだら誰と踊ろうかしら」という発話に示されている。また (67) では、鐘の音を、朝の活動（お祈り）の始まりとして表現している。単に「鐘が鳴っている」ではなく、先行場面において事態連鎖の想定（シナリオ）を持ち、「夜明けの鐘が鳴り出した。お祈りに行こう」という出来事連鎖の始まりを表すようになる。さらに (68) では、経営者の態度に職場の人員配置の動向を読み取ろうとして様々な想定をする社員が、経営者の動作を表す表現となっている。〈 *voilà SN qui SV* 〉構文と共起しやすい「*maintenant* 今度は」に、今までも経営者に注意を払っていたことが表されている。

一方、以下のような〈 *SN qui SV* 〉構文には、そのような事態連鎖の想定が含まれているとは考えにくい。

(69) (真っ暗な部屋でピアノが音をたてた。誰かいるのかと恐る恐る近づくと、今度は、誰もいないはずなのにピアノがメロディーを奏で始める)

Dieu ! Le piano qui joue tout seul ! Le piano est hanté ! (Furukawa 2013)

(God! The piano is playing all by itself! The piano is haunted!)

(70) (陸軍少佐のもとへ派遣され、山の尾根を通過して進む二人の友人。突然、死角になっていた斜面から、連隊の楽団が練習をする音が聞こえてくる)

Tout à coup les deux garçons, d'un même mouvement, se tournèrent l'un vers l'autre, se regardèrent, les yeux larges...

— *La musique qui répète !* (H. Montherlant, *Le Songe*)

(Suddenly the two boys, in one movement, turned to each other, looked at each other, eyes wide...

— The band is rehearsing!)

これらの事態は、事態連鎖のシナリオを持つ〈voilà SN qui SV〉構文とは全く異なる。

〈SN qui SV〉構文は、先行場面において「出来事連鎖のシナリオ」を持たないため、「ピアノが（誰もいないのに）ひとりでに鳴っている」「（視界に入っていなかった）軍楽団が練習している」など、突然の予想外の手続きの知覚を表すのであり、「（ほら、ようやく）ピアノがひとりでに鳴り出した」「（ほら、ようやく）楽団が練習し始めた」というような、指示対象の状態変化を含む場面転換を表すのではない。

つまり、前節の図 5.4 で示したように、一般に、発話現場において、話し手と聞き手は、両者が行っている活動を時間の流れ（文脈）とともに理解している。そのような文脈の流れの中で、先行場面からのシナリオを持った場面転換を表すのが〈voilà SN qui SV〉構文である。そのため、事態が展開中の活動動詞で表される事態も、「ほら、～してるよ。」とか「ほら、～しだした。」というように、事態の始まりを表す表現となる。一方、図 5.5 で示すように、突発的な予想外の手続きの発生により、シナリオを持たず突然の知覚を表す〈SN qui SV〉構文は、「あ！～してる！」というように想定外の手続きの出現を表すのである。

それでは、〈voilà SN qui SV〉構文とは共起せず、〈SN qui SV〉構文と共起する、結果状態を表す表現について次節で考えよう。

5.3.2.2.3. 結果状態・一時的状態

まず、〈SN qui SV〉構文には、〈voilà SN qui SV〉構文とは異なり、以下のような結果状態を表す事例が観察された。

(71) Tiens ! Le livre qui est tombé par terre ! (=56)

(Well well! The book has fallen on the floor!)

(72) Saigneur ! La chandelle qui est toute brûlée ! (=57)

(Good lord! The candle is all burnt up!)

これらは、指示対象の状態変化後の結果状態を表し、話し手が移動先で遭遇した予想外の手続きを表している。では、どうして〈voilà SN qui SV〉構文には、指示対象の結果状態のみを表す事例が観察されにくいのだろうか³⁴。それは、図 5.4 で示したように、〈voilà SN qui SV〉構文が、先行場面を持ち、事態が展開する中で発話時における指示対象の状態変化を伴う場面転換を表すために、指示対象の結果状態だけについての知覚を表現するのではなく、先行場面からの指示対象の状態変化を表す表現となってしまうからである。

³⁴ FRANTEXT (2018 年度) の定冠詞では、Voilà le lechón(cochon de lait) qui est revenu. (語り)、Voilà le soleil qui est tout à fait couché derrière la montagne où vos bois noircissent. Vous n'aurez que le temps de redescendre avant la nuit noire dans la vallée. (話相手の帰路を気にかけて発話) の 2 件のみ。

そして、voilà が指示対象の結果状態を表す場合には、4章で〈 voilà SN 属詞 〉構文として見たように、以下のように qui est を取り除き、指示対象の結果状態を明示的に示す〈 voilà SN + P.P. 〉が用いられるためと考えられる。

(73) (宝石箱を引っ張り合っているうちに)

Ah ! voilà la boîte brisée !

(Beaumarchais, *La Mère coupable ou L'Autre Tartuffe*)

(Ah! The box has broken!)

(74) (出発しようとする息子に、くどくどと注意を与える母親にむかって)

Eh bien, adieu, maman ; on va partir, voilà le cheval attelé.

(H. Balzac, *Un début dans la vie*)

(Well then, farewell mom; we are leaving, the horse has been hitched.)

これらの事例は、予想外の事態ではなく、「箱を引っ張り合う」→「箱が壊れる」「馬車での出発準備」→「馬を馬車につなぐ」というように、先行場面からの想定可能な文脈の中で、指示対象の状態変化を伴う事態の発生が表現されている。このような文脈において〈 SN qui SV 〉構文を用いると、「箱が壊れている」「馬が馬車につながれている」という、指示対象の一時的状態のみを提示することになり、先行場面とのつながりがなくなり、文脈にそぐわなくなる。

(75) ? Ah ! La boîte qui s'est brisée !

(Ah! The box is broken!)

(76)?? Adieu, maman ; on va partir, le cheval qui est attelé. ³⁵⁾

(Well then, farewell mom; we are leaving, the horse is hitched.)

また、4章でもみたように〈 voilà SN + P.P. 〉は、指示対象が意識の前面におかれているとき、以下のように人称代名詞が多く用いられることがよく知られている。

(77) (恋人の裏切りを知り、痙攣が再発したボヴァリー夫人を見つめ、夫が)

Pauvre femme !... pauvre femme !... la voilà retombée !

(G. Flaubert, *Madame Bovary*)

(Poor woman!... Poor woman!... Now she has fallen ill again!)

(78) (世話をしている一歳半の子供を昼寝させている。子供が目を覚ましたのに気付

³⁵⁾ この例文においては、単に知覚を表すだけでなく、「馬が馬車につながれている」という事態を先行文脈の理由や説明として用いていると解釈できることも〈 SN qui SV 〉構文の容認度の低さにつながっていると思われる。

いて)

Eh ! *Le voilà réveillé !*

(E. Zola, *La joie de vivre*)

(Heh, Now he has woken up!)

これらの事例では、意識の前面にある指示対象「精神的に不安定な妻」「目を覚まさないかと気をつけてみている子供」の、想定可能な事態への状態変化を表している。

したがって、結果状態を表す事態においても、〈 SN qui SV 〉構文は、以前の状態からの状態変化ではなく、目の前で起きた予想外の事態の出現を表すのに対し、〈 *voilà* SN + P.P. 〉は、先行場面において意識にのぼっていた指示対象に対する状態変化を述べており、「事態連鎖のシナリオ」の有無という違いがみられる。

さらに、一時的状態を表す事例においても、同様の観察が可能である³⁶⁾。

(79) (主人のすぐ後からやってきた召使が、主人の甥の寝室が乱れているのに驚いて)

Mon dieu ! C'est vrai, *la chambre qui n'est pas faite !* (=58))

(My God ! Really? The room hasn't been done!)

(80) (空中に飛翔して)

Etrange Spectacle ! *Voilà le globe qui est là, devant moi, et je l'embrasse d'un coup d'œil ;...* (G. Flaubert, *Smarh*)

(Weird scene! There is the globe in front of me, and I kiss it in a blink of an eye.)

どちらの事態も、話し手の移動先で遭遇する一時的状態を表すが、先行場面とのつながりの有無という点で、大きく異なる。〈 SN qui SV 〉構文においては、想定外の事態を表すことが、*C'est vrai*, (まさかそんな) という驚きの表現や、関係節内の述語の否定形からも明らかである。一方、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文は、飛翔することによる先行場面からのつながりを持った場面転換であり、地球が一望できるようになったという状態変化を表している。

5.3.2.2.節では、到達動詞（特に両構文で違いの出る状態変化動詞）、活動動詞、結果状態・一時的状態と、様々な局面のアスペクトについて両構文を検討した。そして、両構文の違いは、関係節内の述語の語彙的・文法的アスペクトにあるのではなく、先行場面での「出来事連鎖のシナリオ」の有無にあることを明らかにした。

5.3.2.3. 先行場面の有無と「シナリオ」／「フレーム」

前節では、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文が先行場面において「シナリオ」を持った場面転換を表すのに対し、〈 SN qui SV 〉構文は、「シナリオ」を持たず、予想外の事態の出現

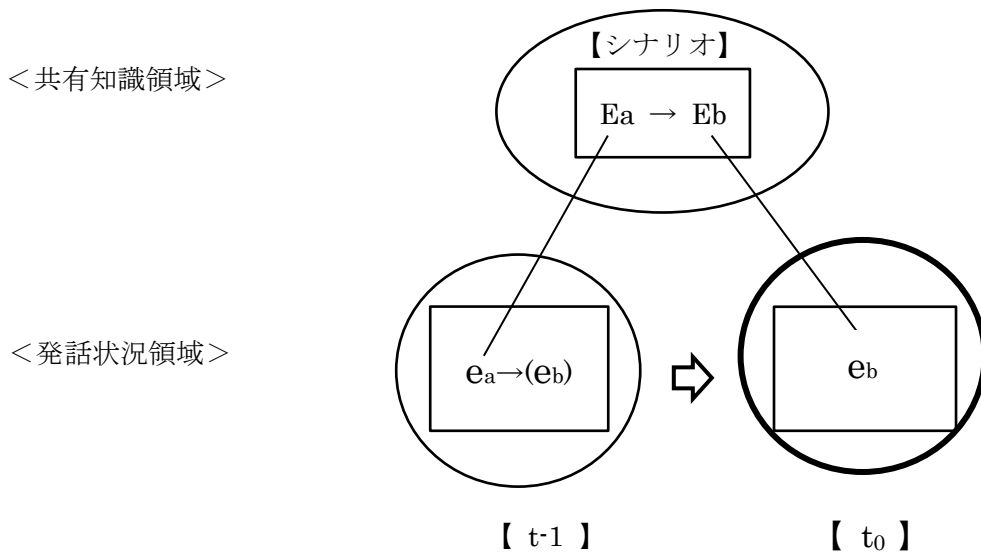
³⁶⁾ ただし、〈 *voilà* SN qui SV 〉構文の関係節内の動詞が一時的状態を表す事例は少ない。

を表すことを明らかにした。

本節では、このような両構文の持つ意味から、それぞれの構文に含まれる定冠詞の「値踏み場」はどこにあるのか、定冠詞の存在前提はどこから得られるか、という、本章の二つ目の問題点に立ち戻り、〈voilà SN qui SV〉構文と〈SN qui SV〉構文で使用される定冠詞の「値踏み場」について以下のように考える。

まず、〈voilà SN qui SV〉構文や、5.1.2節で参照した Kleiber (1987) の事例 (12b) の〈SN + SV〉タイプの現象文では、前節や第4章でも述べた、以下のような「出来事連鎖のシナリオ」と出来事発生の知覚のメカニズムが機能していると考えられる (図 5.6)。

図 5.6 〈voilà SN qui SV〉構文：「シナリオ」と出来事発生の知覚



例えば、以下に再掲する〈voilà SN qui SV〉構文のコーパス事例 (81)=(49) や、Kleiber が提示した (82)=(12b) のような事例での〈SN + SV〉タイプの現象文においては、どちらも電車の到着の瞬間的な知覚を述べる文であるが、発話現場の先行場面 t-1 において、状況：e_a [ホームに向かっている (81) / ホームで待っている (82)] を話し手と聞き手は共有している。発話現場で共有しているこの状況が、話し手・聞き手が共有知識に保有する「出来事連鎖のシナリオ」：Ea→Eb を喚起し、先行場面 t-1 において予測可能な事態：e_b [電車の到着] に含まれる存在が前提される指示対象として、定冠詞付き名詞句の解釈を促すのである。先行場面 t-1 の (e_b) の丸括弧は、t₀ に知覚される事態：e_b [電車の到着] が想定可能な事態として表現されていることを表している。また、想定可能な事態に含まれる指示対象は、先行場面 t-1 においてすでに存在が前提されており、事態 e_b は指示対象の状態変化【not P】→【P】を表すことになる。

(81) Nous n'arriverons pas, répète le groom. Voilà le train qui arrive! (=49)(64)

(We will not arrive, repeats the teamster. There comes the train!)

(82) Le train arrive. (=12b))

(The train is coming.)

話し手や聞き手の共有知識領域に含まれる「シナリオ」は、経験から抽出され一般化された時系列のデータ構造である。上記の図の大文字の E_a や E_b は、個別事例ではなく、一般化された事態連鎖の知識構造である。その一般化に適合する $t-1$ 時点における個別の事態 e_a が、発話状況領域で発生した（発生している）ことにより、一般化された事態連鎖の $E_a \rightarrow E_b$ が喚起され、事態連鎖の個別事例の後続場面として e_b が推論されている。そして、先行場面において e_b に含まれる指示対象として存在前提を持つ指示対象は、発話時 t_0 においては、先行場面の $t-1$ 時点から存在前提を持つ指示対象として定冠詞が用いられているのである。

しかしながら、ここで一つ注意しておかないといけないことがある。〈 SN + SV 〉タイプの現象文に含まれる定冠詞付き名詞句は、Kleiber が提示した (82) のような文脈においては、文脈によって「シナリオ」のある事態に含まれる指示対象といえるが、「シナリオ」のある事態を表す有標の構文ではないという点である。5.3.1.節でみたように、定冠詞付き名詞句は時系列の事態連鎖の知識構造としての「シナリオ」により存在が前提される場合もあれば、時系列の事態連鎖のつながりはなくとも、状況に適合する知識構造「フレーム」にデフォルトで含まれる要素であれば用いることができた。次節で検証するが、〈 SN + SV 〉タイプの現象文は、想定外の事態を表すこともできる。したがって、「出来事連鎖のシナリオ」があることを明示的に示す〈 voilà SN qui SV 〉構文とは異なり、〈 SN + SV 〉タイプの現象文に含まれる定冠詞付き名詞句は 5.3.1.節で考察した「シナリオ」「フレーム」の違いについては中立的と考えられる。

それでは、〈 SN qui SV 〉構文の定冠詞の存在前提は、どのようにして得られるのだろうか。(54) ~ (58) のコーパス事例で見たように、〈 SN qui SV 〉構文で表される事態は、突発的な事態の発生や、話し手が移動先で遭遇した予想外の事態であり、先行場面から切り離された瞬間的な知覚を表す表現である。以下に再掲する。

(83) Allons bon ! Le lait qui bout ! (=54)

(Oh no! The milk is boiling!)

(84) Pet-pet ! Le vieux qui revient ! (=55)

(Pet-pet! The old one is coming back!)

(85) Tiens ! Le livre qui est tombé par terre ! (=39)(56)

(Well well! the book has fallen on the floor!)

(86) Saigneur ! La chandelle qui est toute brûlée ! (=57)

(Good lord! The candle is all burnt up!)

- (87) Mon dieu ! C'est vrai, la chambre qui n'est pas faite ! (=58)
(My god ! Really? The room hasn't been done!)

したがって、これらの例文に先行場面における「シナリオ」の存在を想起させる *voilà* を付加すると、容認されにくい。

- (88) ? Allons bon ! *Voilà* le lait qui bout !
(Oh no! There's the milk boiling!)
(89) Pet-pet ! *Voilà* le vieux qui revient !³⁷⁾
(Pet-pet! Here comes the old one again!)
(90) ? Tiens ! *Voilà* le livre qui est tombé par terre !
(Well well! There's the book that has fallen on the floor!)
(91) ? Saigneur ! *Voilà* la chandelle qui est toute brûlée !
(Good lord! There's the candle that is all burnt up!)
(92) * Mon dieu ! C'est vrai, *voilà* la chambre qui n'est pas faite !
(My god! Really? There's the room that hasn't been done!)

つまり、〈 SN qui SV 〉構文の定冠詞の「値踏み場」の形成に「シナリオ」は関与していない。それでは、〈 SN qui SV 〉構文の定冠詞は、どのように存在前提を得ているのだろうか。本論文では、〈 SN qui SV 〉構文では、それまで意識されていなかった、共有知識領域に格納されている「フレーム」知識が発動されると考える³⁸⁾。

5.3.1.節でみたように、「シナリオ」と「フレーム」の差は、事態連鎖の知識により、指示対象の存在が活性化されているかどうか、指示対象が先行場面において存在前提を持ち得るかどうかの違いである。例えば、(83) では、ミルクの焦げるにおいがしたり、(84) では、継母の悪口を言っている時に父親が来る足音が聞こえたり、(85) では、机の上にあるはずの本が地面に落ちていたり、(86) では、薄暗い部屋の中でローソクが燃え尽きていたり、(87) では、整えられているはずの寝室が乱れていたりなど、通常とは異なる想定外の事態を表す。しかし、事態に含まれる指示対象自体は、発話現場と適合する「フレーム」

³⁷⁾ この事例は *voilà* の有無によるインフォーマントの容認度の差が少なかった。実例では〈 SN qui SV 〉構文が使用されているが、「(家の中で) 父親が戻って来る」という事態が、シナリオとして想定しやすい事態であるためと考えられる。

³⁸⁾ 小田 (2012) では、第 2 章において、「認知フレーム」が喚起されうる状況では、存在前提を持つ諸要素を、いきなり定名詞句を使って談話に導入することができることを説明している。しかし小田 (2012) の「認知フレーム」は、本論文での「フレーム」と「スクリプト (シナリオ)」の両概念を含むものであり、「フレーム」と「シナリオ」の違いに基づく説明はなされていない。また、現象文について書かれた第 4 章 2.4.節の p.225 (21 行目～28 行目) で説明される「認知フレーム」は、「述語が指示対象にとって本質的な特徴・機能を表しており、名詞と動詞を結びつけるもの」とされており、本論文での指示対象そのものは発話現場と適合する「フレーム」に存在するという説明とは異なる。

のデフォルトとなる要素である。台所フレームにミルク (83)、家族フレームに父親 (84)、部屋フレームに本 (85) やローソク (86)、家事フレームに寝室 (87) は、容易に、それぞれの「フレーム」において役割を持つデフォルトとなる。

つまり、現象文〈SN qui SV〉構文においては、名詞と動詞で表される事態は、事態連鎖の「シナリオ」のない通常想定されにくい出来事だが、定冠詞付き名詞句で表される指示対象そのものは、発話現場に適合する共有知識領域の「フレーム」内のデフォルト要素として存在前提を持ち得るのである。

図 5.7 〈SN qui SV〉構文：「フレーム」と想定外の出来事の知覚³⁹⁾

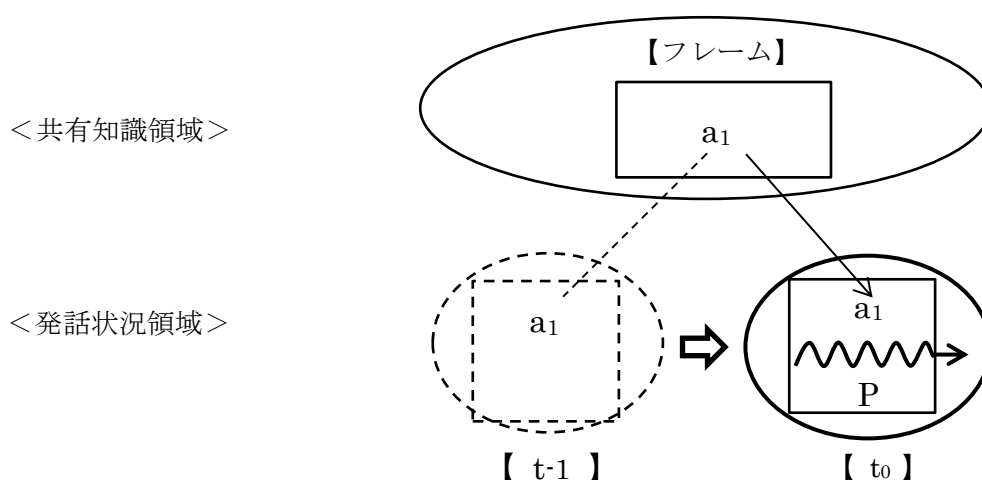


図 5.7 で示すように、〈SN qui SV〉構文で表現される、発話現場で発生した想定外の事態に含まれる発話時点 (t_0) の発話状況領域の談話指示子 a_1 は、共有知識領域に格納されている発話現場に適合するフレーム内のデフォルト要素 a_1 とコネクタで結ばれている。この共有知識領域内のフレームのデフォルト要素である談話指示子 a_1 は、発話現場に存在していたとしても、フレームの機能・役割として通常想定される状態 (not P) であれば知覚の対象とはなりにくい。また、シナリオのある想定可能な状態変化に含まれる存在ではないので、発話時 (t_0) に先行する時点の先行場面 ($t-1$) では、話し手・聞き手に意識されていないことが多い。つまり、フレームのデフォルト要素として存在が前提され得る対象の、発話時 (t_0) における、想定外の事態の出現を〈SN qui SV〉構文は表すのである。

図 5.4 や 図 5.6 で示した〈voilà SN qui SV〉構文の定名詞句は、聞き手の共有知識領域の「シナリオ」により、発話時 (t_0) に先行する $t-1$ 時点の先行場面において存在前提を持つ対象として解釈される。一方、図 5.7 で示した〈SN qui SV〉構文の定名詞句で表される指示対象は、発話現場で生じた想定外の事態に含まれる対象であり、事態連鎖の「シナリオ」は持たないが、発話現場に適合する「フレーム」のデフォルト要素として存在前提を持ち得る対象として解釈されるのである。

³⁹⁾ 聞き手の DM のみ示す。言語文脈領域は省略する。

5.3.2.節では、〈 voilà SN qui SV 〉構文との比較により、〈 SN qui SV 〉構文が先行場面から切り離された想定外の事態を表現すること、したがって、事態連鎖の知識である「シナリオ」は使用されないことを明らかにした。そして、〈 SN qui SV 〉構文の定冠詞の存在前提は、発話現場に適合可能な「フレーム」知識により得られるとする以下の仮説を検証した。

(93) (=44) 現象文 〈 SN qui SV 〉における定冠詞の機能に関する仮説

〈 SN qui SV 〉タイプの現象文は、「フレーム」の存在により、定冠詞で表される指示対象の存在前提は持っているが、出来事の発生自体は想定外であり、突如生じた事態の知覚を表す文となる。

この仮説をさらに検証するために、適合する「フレーム」知識から存在前提が得られないような事例を次節にて考察する。

5.3.3. 指示対象の定・不定と「フレーム」

この節では、現象文 〈 SN qui SV 〉の名詞句の指示対象が、「フレーム」のデフォルト要素である場合に定冠詞が使用されることを、定・不定の比較を通して検証する。まず、5.3.3.1 節で、〈 SN + SV 〉形式の現象文の定・不定についての先行研究を参照し、5.3.3.2 節で、〈 SN qui SV 〉形式の現象文について、定・不定の比較を行う。その上で、〈 SN qui SV 〉タイプの現象文の定名詞句についての仮説を検証する。さらに、コーパスなどで発見された、この事例にあてはまらない〈 SN qui SV 〉の不定冠詞の事例について、5.3.3.3. 節で考察する。

5.3.3.1. 先行研究

先行研究では、現象文 〈 SN qui SV 〉タイプの定・不定の用法の違いについてあまり述べられていないが、小田 (2012) では、〈 SN + SV 〉タイプの現象文について、定名詞句は不可能で不定名詞句が可能な例があるとし、定・不定の区別に基づいて、以下のように、「出来事的現象文」と「存在的現象文」の二種類の現象文タイプを認めている。

(94) a. 出来事的現象文：

名詞句の指示対象は出来事に従属した存在として提示される。指示対象よりも出来事を伝える文である。→定名詞句 the N / le N が用いられる。

(小田 2012 : 221)

b. 存在的現象文：

出来事よりも指示対象の存在情報を伝える文であり、一種の擬似的現象文である。→不定名詞句 a N / un N が用いられる。

(小田 2012 : 223)

そして、以下のような出来事的現象文の例文を提示し、(95) は、「公園に犬が存在すること自体は珍しいことではないから、『公園に犬がいる』という犬の存在情報を伝えるための発話ではなく、公園で『犬が全速力で走っている』という出来事を述べる現象文」(小田 2012 : 222) であり、(96) は、「鍋の存在情報を伝えることが主眼ではなく、『鍋がふきこぼれている』という事態が重要」(小田 2012 : 220-221)であると説明される。

(95) [公園で]

Regarde ! { *Le chien / *Un chien* } court à toute vitesse !⁴⁰⁾ (小田 2012 : [61b])

(Look! { *The dog / *A dog* } is running very fast!)⁴¹⁾ (Ibid.: [61a])

(96) [台所で、火にかけられた鍋が一つある]

Maman, { *la casserole / *une casserole* } déborde ! (Ibid. : [59b])

(Mom, { *the saucepan / *a saucepan* } is overflowing!) (Ibid. : [59a])

一方、以下のような存在的現象文の例文については、(97) は、「『スープでハエが泳いでいる』という出来事を伝えたい文ではなく、『スープにハエがいる』というハエの存在情報を伝える存在的現象文」(小田 2012 : 224) であり、(98) は、「台所にいるべきではないネズミが台所を走り抜けるのを見つける発話であり、指示対象であるネズミの存在を導入する現象文である (このネズミはペットではないと仮定する)」(小田 2012 : 224) と説明される。

(97) [レストランで]

Le client : Regardez ! { **La mouche / Une mouche* } nage dans ma soupe !

Le serveur : Ne vous inquiétez pas, Monsieur. Vous ne payez pas de supplément. (Ibid. : [69b])

(The client⁴²⁾: Look! { **The fly / A fly* } is swimming in my soup!

The waiter: Don't worry, Sir. There is no extra charge.) (Ibid. : [69a])

(98) [台所で]

Chéri ! { **La souris / Une souris* } court dans la cuisine ! (Ibid. : [67b])

(Darling! { **The mouse / A mouse* } is running in the kitchen!) (Ibid. : [67a])

40) あらためてインフォーマント調査を行うと、Tiens ! Un chien court à toute vitesse ! を容認するインフォーマントもいる。Tiens ! Y a un chien qui court à toute vitesse ! は 3 名のインフォーマントすべてに容認された。

41) 本論文では英語訳については容認度を表記していないが、(95) (96) (97) (98) の例文は、小田 (2012) からの引用であるので、小田 (2012) の英語の容認度表示を記載している。

42) フランス語では常連客という意味で client という語を用いることもあるが、英語では弁護士の依頼人などを client、レストランなどのお客さんについては customer の方が自然と思われるが、ここでは引用元に忠実に記述しておく。

このような小田 (2012) の出来事的現象文と存在的現象文の分析をもとに、本論文では、定・不定で表される指示対象の違いは、発話現場に存在することが自然と捉えられるか否か、つまり、発話現場に適合する「フレーム」にデフォルトとして存在し得る対象かどうかによると考える⁴³⁾。次節では、〈 SN qui SV 〉タイプの現象文について、この仮説を検証する。

5.3.3.2. 現象文 〈 SN qui SV 〉の指示対象と「フレーム」

まず、〈 SN qui SV 〉タイプの現象文について、発話現場が喚起する「フレーム」にデフォルトとして存在しないような指示対象は、定冠詞が使用できないかどうかを検証する。

(99) [自宅の居間で]

{ ?? Le lion / Un lion } qui rugit !
({ The lion / A lion } is roaring!)

(100) [男子寮で]

{ ?? La fille / Une fille } qui arrive !
({ The girl / A girl } is coming!)

(99) のように、発話現場が自宅の居間であるとする、普通、家にライオンを飼っている人は少ないだろうから、家畜やペットのデフォルトとしてのライオンは存在せず、定冠詞ではなく、不定冠詞を用いるのが自然と判定される。また、(100) のように、発話現場が男子寮であるとする、管理人や当直教師はいるかもしれないが、女の子はいないはずである。そのような場合には、デフォルトとしては存在しないはずの女の子の存在が、不定冠詞で伝えられ、定冠詞は使用されない。したがって、発話現場と適合する「フレーム」にデフォルトで存在しないような指示対象には、定冠詞が使用されないことが検証される。また、(99)(100) のような文は、現象文 〈 SN qui SV 〉と同じ形式ではあるが、発話現場

⁴³⁾ 小田 (2012:221; 16~18 行目)では、「出来事的現象文では、名詞句の指示対象は出来事に従属した存在として提示される。この『出来事性』と視覚領域とが意味解釈のフレームを構築することで、定名詞句のいわゆる直示的用法が可能となる」と述べている。意味解釈のフレームは、概ね本論文の「値踏み場」に相当する。小田 (2012) では、現象文が用いられる文脈では、何らかの認知フレームが想定できる場合もあるが、明確な認知フレームが想定しにくいケースもあるとし、その場合、指示対象が話し手および聞き手によって知覚されている(視認を重視)ことを定名詞句の使用条件としている。現象文の定・不定で表される指示対象についても、知覚可能であれば定、知覚できないと不定が使用されるとの記述もあり(小田 2012: pp. 217-218)、現象文の指示対象の定・不定について「フレーム」のデフォルトであるかどうかという説明はなされていない。本論文では、現象文は、話し手がたった今知覚した事態を表す(聞き手に視認されているとは限らない)にもかかわらず、なぜ存在前提を持つ定名詞句が使用できるかを問題としているので、小田 (2012) とは考え方が異なる。また、小田 (2012) の「出来事性」には、本論文で〈 voilà SN qui SV 〉構文との対比により明らかにした、出来事発生の意外性という考えは含まれていない。

でライオンが「うなっている」という出来事や、女の子が「やってくる」という出来事を表しているのではない。発話現場への「ライオン」「女の子」の想定外の出現を表す文である。

不定冠詞で表される〈SN qui SV〉構文が、出来事ではなく発話現場への想定外の出現を表すことは、場所句との共起関係からも裏付けられる。

(101) [レストランで]

a. Regardez ! Une mouche qui nage *dans ma soupe* !⁴⁴⁾

(Look! A fly is swimming in my soup!)

b. ?? Regardez ! Une mouche qui nage !

(Look! A fly is swimming!)

(102) [台所で]

a. ?? Mon dieu ! Le rôti qui prend feu *dans le four* !⁴⁵⁾

(My god! The roast is on fire in the oven!)

b. Mon dieu ! Le rôti qui prend feu !

(My god! The roast is on fire!)

(101) のように、発話現場から喚起される「フレーム」にデフォルトとして存在しない指示対象には不定冠詞が用いられるが、どこに存在するかを示す場所句と共起する。そして、関係節内の場所句を取り除くと容認度が落ちる。これに対して、(102) のように、発話現場から喚起される「フレーム」にデフォルトで存在する指示対象として定冠詞が用いられ、想定外の出来事が述べられる現象文においては、場所句は普通用いられない。場所に関する情報は、「フレーム」の中に背景として織り込まれており、そこでたった今起きた想定外の出来事を伝える文なのである。

また、不定冠詞が用いられた場合、関係節を用いず、指示対象のみを伝えるのが最も自然とされることが多い。例えば、(103) において、聞き手が遠くの部屋にいる場合には、場所句を用いた発話も可能だが (103a)、発話現場の「今・ここ」での指示対象の発見という、背景情報を織り込んだ一語文が最も自然な発話として選択される (103c)。また、場所句が用いられる場合も、動詞を除き、指示対象と場所句のみの表現の方が選択されやすい(103d)。(101b) の「泳ぐ」もそうだが、(103b) の「走る」などの出現の意味を表さない動詞のみとは共起しにくい。発話現場である台所「フレーム」のデフォルトでない指示対象の想定外の出現を表す文は、「目の前にねずみがいる」「台所にねずみがいる」ことを伝える文だからである。

⁴⁴⁾ 前節で引用した小田 (2012) の例文 ((97)の *Le client* の不定冠詞による発話) を〈SN qui SV〉構文にし、場所句との共起関係についてインフォーマントの判断を調査する。

⁴⁵⁾ Wehr (1984) で収集された例文 *Le rôti qui brûle !* や小田 (2012:222 [63b]) の *Maman ! { La poêle / *Une poêle } a pris feu!* を参考に例文を作り、場所句との共起関係を調査する。

(103) [台所で]

- a. Chéri ! Une souris qui court *dans la cuisine* !⁴⁶⁾
(Darling! A mouse is running through the kitchen!)
- b. ?? Chéri ! Une souris qui court !
(Darling! A mouse is running!)
- c. Chéri ! Une souris !
(Darling! A mouse!)
- d. Chéri ! Une souris dans la cuisine !
(Darling! A mouse in the kitchen!)

最後に、特定の「フレーム」が想定されにくい、車窓から外を眺めていたり、外を散歩したりしているような場合で、デフォルト要素を持たない場合を検証すると、その場合にも、不定冠詞が選択されるが (104a)、一語文が最もよいとされる (104c)。また、出現を表さない動詞との共起も好まれない (104b)。さらに、指示対象が存在する場所を指し示すという意味において場所句とも共起可能だが (104d)、やはり一語文が最も自然とされる。

(104) [車窓から外を眺めていると、鹿が草原を走っている]

- a. Tiens ! { ??*Le cerf / Un cerf* } qui marche dans le pré !
(Look! { The deer / A deer } is walking in the pasture!)
- b. ? Tiens ! Un cerf qui marche !
(Look! A deer is walking!)
- c. Tiens ! Un cerf !
(Look! A deer!)
- d. Tiens ! Un cerf dans le pré !
(Look! A deer in the pasture!)

また、「フレーム」のデフォルト要素でない指示対象の出現と、「フレーム」が想定されにくい場合の指示対象の出現では、場所句が表す意味は少し異なっていると考えられる。例えば、男子寮で女の子を思いがけず見た事例においては、発話現場と適合する「男子寮フレーム」との対立を表す上で場所句 *dans le pensionnat* を付け加えた文も容認されるが、流れ星の場合は、星が空に出現するのは当たり前で存在場所との対立を表すのではなく、「たった今日の前に」出現した指示対象を表すので場所句 *dans le ciel* は容認されにくい。

⁴⁶⁾ 前節で引用した小田 (2012) の例文((98)の不定冠詞による発話) を〈 SN qui SV 〉構文にし、場所句との共起関係や一語文にした場合のインフォーマントの判断を調査する。

- (105) [男子寮に女の子がいるのを見て]
- a. Tiens ! Une fille !
(Oh! A girl!)
 - b. Tiens ! Une fille dans le pensionnat (de garçons)⁴⁷⁾ !
(Oh! A girl in the dormitory!)
- (106) [空を眺めている星が流れるのを見て]
- a. Regarde ! Une étoile filante !
(Look! A shooting star!)
 - b. ?? Regarde ! Une étoile filante dans le ciel !
(Look! A shooting star in the sky!)

これらの考察により、〈 SN qui SV 〉タイプの現象文の指示対象に用いられる定・不定の違いからも、〈 SN qui SV 〉タイプの現象文の定冠詞の存在前提は発話現場が喚起する「フレーム」によって得られ、想定外の事態の出現を表す文となるという (93)=(44) の仮説が検証された。また、「フレーム」のデフォルトでない、指示対象の想定外の出現を表す場合や、特定の「フレーム」がない場合に、不定冠詞が用いられることを検証した。

5.3.3.3. 出来事の出現か指示対象の出現か

前節では、〈 SN qui SV 〉タイプの現象文の指示対象の定・不定について、発話現場と適合する「フレーム」との関係をもとに、想定外の事態の出現を表す文か、あるいは指示対象の出現を表す文であるかを説明した。ここで、〈 SN qui SV 〉タイプの指示対象の定・不定ごとに、発話状況領域で生じた何が驚きの源泉になっているのか、これまでの分析をもとに整理してみよう。

まず、定冠詞で表現される〈 SN qui SV 〉タイプの現象文は、発話現場と適合する共有知識領域内の「フレーム」のデフォルト要素として存在前提を持つ。そして、発話現場で生じた事態連鎖のシナリオを持たない、想定外の事態【P】によって、事態【P】とともに指示対象が知覚されるのであった。つまり、「フレーム」内で通常想定される状態【notP】と異なることにより指示対象は際立ちをもって知覚され、想定外の事態として表現されると考えられる。例えば (107) のような事例において、料理フレームに牛乳は存在前提を持つが、牛乳は「温める」ものであって、「煮えたぎる」のは想定外の事態であり、この想定外の事態の出現を〈 SN qui SV 〉タイプの現象文で表現している。

- (107) Allons bon ! *Le lait* qui bout ! (=(54))
(Oh no! The milk is boiling!)

⁴⁷⁾ 男子寮という意味では *de garçons* が必要だが、この発話においては、なくとも男子寮を意味することは含意される。

一方、不定冠詞で表現される〈 SN qui SV 〉タイプの一つである、発話現場と適合する「フレーム」のデフォルトではない指示対象の想定外の出現を表す場合、発話現場への出現を表さないような述語とは共起しにくい、場所句とは共起することが検証された。ただし、場所句も通常は「今・ここ」が背景に織り込まれているので、言語化されないことが多い。つまり、「今・ここ」の発話現場と適合する「フレーム」に通常デフォルトでは存在しないと想定される指示対象の出現【P】（être）を、驚きとともに表現していると考えられる。

(108) [自宅の居間で]

Un lion (qui rugit) ! (=(99))

(A lion (is roaring)!))

(109) [無人と思われた土地で] (ピアノの音がどこから聞こえてくる)

Un piano dans le désert ! (J, Verne, *Les Enfants du Capitaine Grant*)

(A piano in the desert!)

例文 (108) は、「自宅の居間フレーム」には存在しないはずのライオンの出現、コーパスの事例 (109) では、「無人の土地フレーム」には存在しないはずのピアノの存在に対する驚きが背景となる対立的な場所句とともに表現されている。

また、不定冠詞で表現される〈 SN qui SV 〉タイプのもう一つとして、特に「フレーム」そのものが想定しにくい場合が考えられる。この文タイプも、指示対象の目の前への出現を表す文タイプなので、発話現場への出現を表さないような動詞とは共起しにくく、一語文が自然であった (104c)。例えば、見知らぬ土地を旅したり、ふと外を眺めたりするような場面が考えられる。(110) は、列車の中から外を眺めている場面での発話だが、車窓から見た見知らぬ土地の風景には、特定の「フレーム」は想定されにくい。

(110) [車窓から外を眺めていて]

Oh ! Un cerf! (G. Maupassant, *Bel-Ami*)

(Oh! A deer!)

両者の違いは、特定の「フレーム」の有無という点から、場所句の持つ意味の違いとして現れる。発話現場と適合する「フレーム」のデフォルトとして想定しにくい指示対象の場合には、発話現場と適合する「フレーム」となる場所句を、指示対象の出現場所として付加することができるのに対し、(110) のような「フレーム」が特に想定されない事例においては、付加されずとも、指示対象が出現している場所を指し示すような、例えば *là-bas* (over there) の意味においてであり、発話現場と適合する「フレーム」から逸脱している

という意味においてではない。

したがって、(107) のような定冠詞付き名詞句による 〈 SN qui SV 〉 構文は、存在前提のある指示対象に対して予想外の事態の発見（出来事存在）を表し、不定冠詞付き名詞句による 〈 SN (qui SV) 〉 構文は、発話現場での予想外の指示対象の出現 (108)(109) や新たな指示対象の出現 (110) を表すといえる。

ここで、不定冠詞が使用されるがこれまでの事例とは異なる二つの文タイプを説明しておく。

一つ目は、「特定のフレーム」に存在前提があるにもかかわらず、不定冠詞が用いられる 〈 SN qui SV 〉 の以下のような事例である。

(111) Mon Dieu, *un enfant* qui crie ! c'est la plus petite !

(M. Cardinal, *Les ports pour le dire*)

(My god, a child is crying! It's the smallest (one)!)

(112) J'ai troué mon bas ! *Une maille* qui a filé ! (J. Tardieu, *La Comédie du drame*)

(There's a hole in my stocking. A stitch has come loose!)

これは、以下のような偽の不定冠詞とも呼ばれる、隠れた存在前提を持つ指示対象と考えられる。

(113) Mon Dieu, un de mes enfants qui crie !

(My god, one of my kids is crying!)

(114) Une maille de mon bas qui a filé !

(A stitch of my stocking has come loose!)

つまり、(111) の「自宅フレーム」のデフォルトとして子供 *mes enfants* は存在し、子供たちの存在前提はあるのだが、その中の不特定の一人という意味で不定冠詞が用いられている。(111) の後続文において最上級の冠詞 *la* が使われていることからわかるように、母集合の *mes enfants* の存在前提があることは明らかである。また、(112) においては、*mon bas* 中の不特定の *une maille* であることから間接的に存在前提を持つ。したがって、これらの文は、隠れた存在前提を持つ指示対象に発話状況で起こった想定外の事態として捉えることができる一方で、私の子供の中で「泣いている子がいる」、私のストッキングのどこかで「電線している網目がある」という部分的な存在情報をも表している。

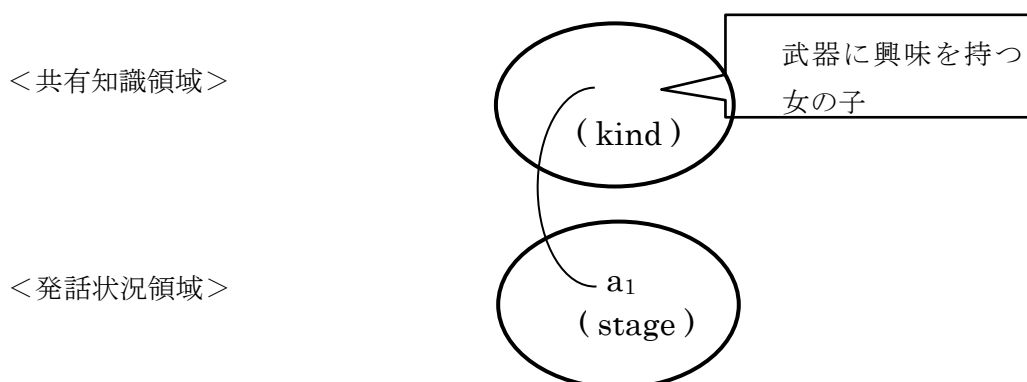
もう一つの文タイプは、突然の指示対象の出現でないにもかかわらず、不定冠詞で 〈 SN qui SV 〉 構文が用いられる以下のような事例である。また、(115) の事例においては、既知の指示対象であるにもかかわらず、不定冠詞を用いている。

- (115) (名前を知っている女の子が武器を販売する店をのぞいているのに気付いて)
 Tiens, *une fille* qui s'intéresse aux armes ! (V. Thérême, *Bastienne*)
 (Well well! A girl (that's) interested in weapons!)
- (116) (公爵の馬が話し始めたのにびっくりした小姓が)
 Ah seigneur Jésus, s'écria le page, *un cheval* qui parle !
 (R. Queneau, *Les fleurs bleues*)
 (Oh Lord Jesus, shouted the servant, a speaking horse!)

これらの事例は、目の前の指示対象が不定冠詞で表される N のクラスとして信じられない属性を持つことを表している。たとえば (115) のように、たとえ名前 (*Bastienne*) を知っている指示対象であっても、*un N* として指示対象を表現することにより、名詞 N が信じられない属性を持つことを示している。つまり、そのような、共有知識領域のサブクラスにおいて通常想定されない属性を持つ指示対象 (武器に興味を持つ女の子、しゃべる馬) が、目の前に「いる」ことが、驚きとなって表現されていると考えられる。

以下の 図 5.8 では、「女の子であり、かつ武器に興味を持つ」ようなサブクラスの類レベルの談話指示子が共有知識領域には登録されていないことを表している。また、発話状況領域の談話指示子 *a1* は、発話現場の今ここでの存在を表す、局面レベルの存在である。

図 5.8 共有知識に存在しないサブクラスの発見 : 〈 SN qui SV 〉
 [*fille* ∧ *s'intéresser aux armes*]



これらの文が、発話現場への指示対象の想定外の出現に対する驚きを表す文タイプと異なる点は、*il existe* との共起関係においてみることができる。たとえば想定外の指示対象の出現を表す文タイプは、以下で示すように *il existe* と共起しない。ただし *il y a* とは共起する⁴⁸⁾。つまり、*il y a* が話し手の知覚領域という限られた時空領域で解釈されることにより、

⁴⁸⁾ Kleiber (1981) は、恒常的属性を表す述語は、*il y a* と *il existe* を区別なく用いることができるのに対し、一時的状態・出来事を表す述語は、*il y a* のみが適格となることを示している。東

指示対象の発話現場への出現と解釈される。

(117) 【男子寮で】

Tiens ! { Il y a / *Il existe } une fille qui arrive !

(Look! { There's / There is } a girl coming!)

(118) 【自宅の居間で】

Papa ! { Il y a / *Il existe } un lion qui rugit !

(Dad! { There's / There is } a lion roaring!)

一方、共有知識に存在しない下位クラスの発話現場での発見を表す文タイプは、il existe と共起し得る。ただし、(120) の「馬がしゃべる」「しゃべる馬」のインフォーマント調査においては、たとえ目の前でその事実を見たとしてもそのようなサブクラスの存在を「断定」しにくい場合には、容認度はおちる。

(119) Tiens ! { Il y a / Il existe } une fille qui s'intéresse aux armes !

(Well well! There IS a girl interested in weapons! / Girls interested in weapons DO exits.)

(120) Ah seigneur Jésus, { il y a / ?il existe } un cheval qui parle !

(Oh Lord Jesus, there IS a speaking horse! / Speaking horses DO exit!)

つまり、このような事例において不定冠詞による〈 SN qui SV 〉構文が用いられているのは、「武器に興味を持つ女の子」「しゃべる馬」という共有知識領域において存在しないサブクラスの局面レベルの存在の発見が驚きの源泉となっていると考えられる。また、サブクラスの形成に関係節の表す属性は必須であるため、指示対象の想定外の出現を表す文タイプとは異なり、関係節は省略できない。

(121) ?? Tiens, une fille !

(Well well! A girl!)

(122) ?? Ah ! Un cheval !

(Oh! A horse!)

これらのことから、この文タイプは、「今・ここ」という局所的な時空領域における出来事や指示対象の想定外の出現が問題とされる現象文や存在一語文ではなく、共有知識領域に

郷 (2009) では、さらに Carson の存在レベルと解釈領域を用いて、il y a 構文の意味論を展開している。

存在しないサブクラスの局面レベルの存在の発見を表す文であるといえる⁴⁹⁾。

5.4. まとめ

本章では、現象文に含まれる指示対象がどのような存在であり、限定詞の機能によってどのように表現されるかを考察した。

まず、5.1 節で、Kuroda (1972) の単一判断と二重判断のふたつの文タイプの議論において、出来事を離れて独立した存在となれないとされる現象文（単一判断）に含まれる指示対象がどのような存在であるかを、限定詞の機能という観点から Kleiber (1987) を考察し、以下の二つの問題点を提起し、それぞれの問題を 5.2 節、5.3 節、において論じた。

1. なぜ、指示形容詞付き名詞句は現象文の指示対象になれないか。
2. 現象文の定冠詞で表される指示対象の存在前提はどのようにして得られるのか。

5.2 節では、指示形容詞の固定指示的な性質から、指示形容詞付き名詞句で表される主語名詞句がトピックとなることを説明した上で、現象文に含まれる指示対象は、時間と場所に制約された局所的な存在であり、出来事を離れて語られる独立した指示対象となり得ないので、指示形容詞付き名詞句を用いて表されるトピックとはなれないことを論じた。また、トピックと真偽判断のモダリティーが連動すると考える先行研究（益岡 1991）に対し、フランス語で反例と考えられる事例の存在を提示した上で、トピックと真偽判断のモダリティーを独立のパラメータとし、〈 SN qui SV 〉型の現象文は両者とも持たない文と考えた。

5.3 節では、現象文の定冠詞の「値踏み場」が何によって得られるかという点について、「フレーム」と「シナリオ（スクリプト）」という共同体の成員であれば持つと想定される知識構造を用いて説明した。まず、〈 voilà SN qui SV 〉構文と〈 SN qui SV 〉構文との対比から、〈 voilà SN qui SV 〉構文が「事態連鎖のシナリオ」を持つ場面転換を表すのに対し、〈 SN qui SV 〉構文は「事態連鎖のシナリオ」を持たず予想外の事態の出現を表すことを明らかにした。そして〈 voilà SN qui SV 〉構文の定冠詞の値踏み場は、発話現場が適合する「シナリオ」により得られるのに対し、〈 SN qui SV 〉構文の定冠詞の値踏み場は、発話現場と適合する「フレーム」により得られると考えた。さらに、現象文〈 SN qui SV 〉の定冠詞に「フレーム」が用いられることの検証として、名詞句の定・不定による比較を行い、現象文〈 SN qui SV 〉の定冠詞で表される指示対象の存在前提は、発話現場から喚起される「フレーム」によって得られることを明らかにした。また、定名詞句で表される現象文〈 SN qui SV 〉は、存在前提のある指示対象に対して予想外の事態の出現（出来事の存在）を表すのに対し、不定冠詞による存在一語文〈 SN 〉は、発話現場での予想外の指示対象の出現を表すことを明らかにした。

⁴⁹⁾ この文タイプには、東郷 (2009) の部分集合文と場所存在文との関係を含め、説明の余地が多く残されているが、ここでの議論の範囲を超えるので本論文では論じない。

5章では、通常の「主語＋述語」〈SN+SV〉形式ではなく、「未展開文」と呼ばれる〈SN qui SV〉形式を用いることによって、どのような事態として聞き手に解釈されるかを、限定詞の機能とともに分析した。そして、指示形容詞、定冠詞、不定冠詞のそれぞれの機能により、異なる意外性をそれぞれ表していることを示した。指示形容詞付き名詞句による〈SN qui SV〉構文は、類（クラス）の成員のもつステレオタイプな知識情報とは異なる行為を発見したことを表す。定冠詞付き名詞句による〈SN qui SV〉構文は、発話現場にデフォルトとして存在し得る対象に起きた想定外の事態を表す。そして不定冠詞付き名詞句による〈SN (qui SV)〉構文は、指示対象の出現に対する驚きを表す。つまり、意外性の性質は異なっても、〈SN qui SV〉形式は、主動詞による「断定を欠く」形式をとることにより、「意外性・驚き」という構文として共通の意味を持っているといえる。

結論

本論文は、フランス語の〈SN qui SV〉構文が、「なぜ主動詞を持たないにもかかわらず、たった今目の前で起きた事態を述べる文（現象文）として解釈されるのか」という問について論じた。一般に、文は、要となる動詞の活用により「法・人称・時制」が与えられ、話し手の現実の表象を表す、つまり現働化すると考えられている。事態の現働化には時空領域が必要となるが、無標の〈SN + SV〉構文においては、事態を表す動詞句内の動詞の活用により、現在や過去、仮定の世界など、ある時空領域で起きた出来事として表現される。しかしながら〈SN qui SV〉構文は、統語的には名詞句であり主動詞を持たない。では、どのようにして目の前に起きた事態を表す文として成立するのだろうか。本論文は、文の主題構造に基づく解釈領域の違いの点から、〈SN qui SV〉構文を二つの文タイプに分けた。そして、現象文タイプの〈il y a SN qui SV〉構文 / 〈voilà SN qui SV〉構文の事態の提示方法の違いを明らかにした上で、〈SN qui SV〉構文が、話し手による事態の提示（断定）を欠くことにより、想定外の驚きの事態を表し、発話現場を解釈領域として聞き手に事態を追体験させる構文となることを論じた。

各章においては、まず第1章で、先行研究を概観した上で冒頭に述べた問題を提起した。次に第2章で、分析に必要な概念・モデルとして、文の主題構造、指示対象の情報構造・存在様態についての概念、話し手・聞き手の相互行為としての談話モデルを導入した。

そして第3章では、〈SN qui SV〉構文には、聞き手の疑問により設定された「課題の場」で解釈される文タイプと、話し手がたった今知覚した事態を聞き手が「発話の場」で解釈する現象文タイプの二つの文タイプがあることを〈c'est〉 / 〈il y a〉との共起関係をもとに明らかにした。聞き手の問いかけにより同定すべき事態（課題）の存在が前提される「課題の場」が設定されている場合には、〈c'est SN qui SV〉 / 〈il y a SN qui SV〉によって話し手が事態を聞き手に同定・提示できるだけでなく、〈SN qui SV〉構文によっても、聞き手自身が設定した「課題の場」で事態を解釈できることを示した。一方、「課題の場」が設定されていない状況においては、〈c'est SN qui SV〉構文や〈SN qui SV〉構文は容認されず、事態の存在を話し手が断定する〈il y a SN qui SV〉構文のみが容認されることを示した。しかしながら、話し手がたった今知覚した事態を表す場合においては、〈il y a SN qui SV〉構文とともに〈SN qui SV〉構文も何らかのメカニズムで文として容認されることを示した。

さらに上記の分析で、様々な文脈・状況で用いられることを示した〈il y a SN qui SV〉構文を、3つの文タイプに分類し、そのトピック・コメント構造を吟味した。そして、同じ文形式を持つ〈il y a SN qui SV〉構文の中で、〈il y a〉現象文と呼ぶ文タイプのみが、トピック・コメント構造を容認せず、話し手の知覚領域でたった今起きた事態として解釈されることを示した。

第4章では、従来「存在」「直示」の違いとして捉えられてきた〈il y a〉〈voilà〉が、どちらも話し手がたった今知覚した事態を表す現象文として使用される点に着目し、両者の事態の提示メカニズムの違いを明らかにした。まず、〈il y a SN qui SV〉構文と〈voilà SN qui SV〉構文で表される現象文タイプについて、指示対象の情報特性・状態変化の有無の観点から分析した。そして〈il y a〉現象文は話し手の知覚領域に新たな事態が存在することを断定するのに対し、〈voilà〉現象文は発話状況領域の場面転換を表すことにより事態を断定するという、事態の断定（提示）メカニズムの違いから、聞き手と共有可能な先行場面の存在を伴う提示となるかどうかという違いが生じることを論じた。

さらに、出来事を表す〈voilà SN qui SV〉構文では定名詞句が使用される場合が多いことを示した上で、定名詞句が使用される場合、発話現場が喚起する共有知識領域に格納されている「出来事連鎖のシナリオ」により、先行場面からの予測可能な場面転換として提示されることを示した。一方、定名詞句による事態の中核となる参与者を持つ〈voilà que 節〉構文においては、事態の中核となる参与者が「出来事連鎖のシナリオ」に含まれないため、想定外の事態として提示されるという仮説を提示した。

このように第4章では、〈il y a〉/〈voilà〉現象文が、それぞれの断定（提示）のメカニズムにより、話し手がたった今知覚した事態をどのように提示するかを示すとともに、〈SN qui SV〉構文が、話し手による事態の存在の提示、また事態を成立させる時空領域の提示を欠く文タイプであることを示した。

その上で第5章では、〈SN qui SV〉構文内部の指示対象がどのような存在であるかを、限定詞（指示形容詞・冠詞）の機能とともに吟味した。先行研究においては、〈SN qui SV〉構文は定名詞句が多いとされるが、話し手がたった今知覚した事態であるにもかかわらず、なぜ定名詞句が使用されるのかは明らかにされていない。まず、指示形容詞付き名詞句の固定指示的な性格を示した上で、現象文に含まれる指示対象は、時間と場所に制約された局所的な存在であり、出来事を離れて語られる独立した指示対象となり得ないので、指示形容詞付き名詞句とは共起しないことを示した。また指示形容詞付き名詞句による〈SN qui SV〉タイプの文が存在することを示した上で、トピックと真偽判断のモダリティーを独立のパラメータとする観点から、〈SN qui SV〉形式で表される現象文は、トピックも真偽判断のモダリティー（話し手による断定）も持たないことを示した。次に、〈voilà〉現象文との比較、また定／不定の比較をもとに、〈SN qui SV〉構文の現象文は、定冠詞で表される指示対象の存在前提は発話現場に適合する「フレーム」によって得られるが、「出来事連鎖のシナリオ」は持たず、事態の発生自体は想定外であり、突然の予想外の事態を表すことを明らかにした。あわせて、不定冠詞付き名詞句による存在一語文は、発話現場での予想外の指示対象の出現を表すことも示した。そして、〈SN qui SV〉構文が、話し手による事態の断定を欠くことにより、発話現場における想定外の事態の出現を表す文として聞き手によって解釈されるという仮説を提示した。

このような各章の分析をもとに、「文法的には大きな名詞句である〈SN qui SV〉構文が、なぜ文として成立するのか」という問に対して、以下のように結論を提示する。

Bally (1932) が「明示的な文は、『言表様相』(modus)と『言表事態』(dictum)から成る」と述べているように、文は、ある対象の有り様や出来事を述べると同時に、それらの内容に対する話し手の判断が重なり合って成立すると考えられる。

「課題の場」「発話の場」で解釈される二つの〈SN qui SV〉構文は、共に、話し手による事態の「断定」を欠くという点において共通点を持つが、その「断定」の欠如が持つ意味合いは大きく異なっている。

- 1) 「課題の場」で解釈される〈SN qui SV.〉
- 2) 「発話の場」で解釈される〈SN qui SV!〉

まず、1)の「課題の場」で解釈される〈SN qui SV.〉構文は、発話現場の状況をもとにした聞き手の問(部分疑問)に対する答としての発話である。したがって、解釈のための枠組みは聞き手によってあらかじめ設定されており、話し手による事態の「断定」がなくとも、「課題の場」で存在が前提された事態として、聞き手は〈SN qui SV.〉構文を解釈できる。共有知識領域内のスキーマ化された事態の因果関係などにより、設定された課題に対する答として〈SN qui SV.〉は、聞き手によって結びつけられて解釈される。

一方、2)の「発話の場」で解釈される〈SN qui SV!〉は、発話の状況が全く異なる。話し手はたった今知覚した事態を表し、文脈によるつながりもなく、聞き手が解釈する枠組みは全く設定されていない。そのような状況で、〈il y a〉〈voilà〉による話し手の事態の「断定」なくして、どのようにして発話現場で起きた事態を表す文として解釈されるのだろうか。

指示形容詞付き名詞句による〈SN qui SV!〉構文においても、断定を欠く形式をとることにより、個体の属性に関する話し手の驚きを表すことを分析したが、〈SN qui SV!〉構文の現象文も、断定を欠く形式を敢えてとることにより、想定外の事態の出現に対する驚きを表していると考えられる。つまり〈SN qui SV!〉構文は、話し手による「断定」を欠如させることによって、共有知識領域では通常想定されない属性を持つ個体や、通常想定されない事態の出現を表すことができるのである。そのため、事態に対する意外性や驚きを表す感嘆符を伴う。そして、現象文としての〈SN qui SV!〉構文は、事態の解釈に必要な時空領域として、話し手・聞き手が共有する時空領域である発話現場を聞き手に発動させる。このように、〈SN qui SV!〉構文は、話し手による「断定」を欠如させることによって、想定外の事態に対する驚きを表現するとともに、聞き手自身に自ら事態を追体験させる、現場密着型の文として成立すると考える。

本論文は、主動詞を持たない〈SN qui SV〉構文で表される、特に、たった今話し手が

知覚した事態を表す現象文と呼ばれる有標の文形式が、文として解釈されるメカニズムを論じたが、今後の言語研究（フランス語学、理論言語学）において、以下のような観点の重要性を認識させるものであり、同時にその観点に基づく説明の例示ともなっている。

まず、「文脈」あるいは「解釈領域」の重要性である。言語の異なる形態が異なる意味を表すことは自然だが、同じ形態が異なる意味を表すこともある。それは「文脈」が異なることに因る。一見自明と思われる「ことば」と「文脈」の関係だが、言語研究において「文脈」との関係を一般化することは難しい。これまでの研究では、文の「主題構造」に文脈との関係をみることができている。例えば「トピック」となる対象を持つ文は、「トピック」について話し手は叙述し、聞き手は「トピック」について叙述されたものとして解釈しようとするという点において、「トピック」という限定された文脈（解釈領域）を持つといえる。本稿で研究対象とした〈SN qui SV〉構文は、「トピック・コメント」構造を持たない単一判断文だが、〈SN qui SV〉構文で表される事態を解釈する領域が、聞き手に設定されているかどうかという、文脈とのつながりによって、〈SN qui SV〉構文が大きく二つの文タイプとして捉えられることを説明した。同じ形式の〈SN qui SV〉構文においても、文脈（解釈領域）の違いにより両構文の違いを明らかにすることができることを例示し、「文脈」「解釈領域」の重要性を示した。

次に、「話し手と聞き手の相互行為」に基づく談話としての言語研究の重要性である。文は、叙述内容に対する話し手の様々な発話内の力（陳述、問いかけ、命令など）によって、聞き手に伝えられる。本稿で対象とした〈SN qui SV〉構文が、話し手による事態の断定という陳述の力を欠いているにもかかわらず、文として成立するのは、場を共有する聞き手の相互行為に支えられ解釈されるからに他ならない。聞き手の問いかけによって設定された「課題の場」においては、問いを引き起こした発話現場の状況と、〈SN qui SV〉構文で表された事態が、聞き手によって結び付けられて解釈される。一方、文脈をもたず、突然発せられた〈SN qui SV〉構文においては、事態が存在する時空領域として、話し手・聞き手が共有する「発話の場」を、聞き手自身が解釈領域とすることにより文として成立する。このような解釈メカニズムは、談話を「話し手と聞き手の相互行為」として捉えることの重要性を示している。

さらに本論文は、話し手・聞き手が保有する「談話資源」がどのように使用されるかについて、言語現象をもとに研究することの重要性を示した。「談話資源」としての「文脈」の重要性については先に述べたとおりだが、人は「記憶」の中にも様々な知識を保持しており、状況に応じて「談話資源」として言語活動に使用する。本論文では、因果関係など時系列の知識構造としての「事態連鎖のシナリオ」と、節点とそれと関係をもつ要素により構成される、社会・文化的に規定される状況の知識構造である「フレーム」の概念を区別した上で、〈voilà SN qui SV〉構文と〈SN qui SV〉構文の違いを「事態連鎖のシナリオ」の有無という点から明らかにした。特に、同じ「現象文」タイプの文において、先行場面において「事態連鎖のシナリオ」を保有していたかどうかは構文間の差異となる

ことから、どのような「記憶（知識構造）」が、どのようなメカニズムで使用されるかを説明することの重要性を示した。

最後に、残された課題・今後の研究の方向性として、3章、4章、5章、それぞれに関連する問題を挙げる。

3章では、聞き手によって「課題の場」（トピック）が設定されている場合、（*c'est / il y a*）〈SN qui SV〉構文が、それぞれどのような状況において容認されるかを分析したが、解釈のメカニズムについての説明は十分とはいえない。本論文は「現象文」を考察の中心とし、「現象文」との解釈領域の違いを中心に説明したが、共有知識領域における、（*c'est / il y a*）〈SN qui SV〉構文の解釈メカニズムの違いについても明らかにしていきたい。

4章では、現象文として使用される場合の〈*il y a*〉〈*voilà*〉の提示の違いを論じたが、異なる環境でどのように〈*il y a*〉〈*voilà*〉が用いられるかを吟味することにより、〈*il y a*〉〈*voilà*〉の機能について、さらに一般化された説明を与えることができると考える。例えば、複数の事態を提示する場合や、埋め込みの容認度などを吟味することにより、両者の提示のメカニズムの違いをさらに浮き彫りにしていきたい。

5章では、事態に含まれる指示対象と事態の関係を論じ、存在一語文に不定冠詞付き名詞句が用いられることを示したが、目の前に指示対象が無く、実在を欲する・希望するような「水!」「お医者さん!」のような一語文においても、フランス語では部分冠詞や不定冠詞付き名詞句が用いられる。両者の違いは、解釈領域の違いという点から説明可能と思われるが、別の機会にあらためて説明を行いたい。

参考文献

- Bally, C. (1932), *Linguistique générale et linguistique française*, Berne, Francke. (小林英夫訳『一般言語学とフランス言語学』岩波書店, 1970年)
- Benveniste, E. (1966), *Problèmes de linguistique générale, 1*, Paris, Gallimard.
- Bergen, B.K. & M.C. Plauché (2001), “Voilà *voilà* : Extensions of Deictic Constructions in French”, Cienki, A., B.J. Luka & M.B. Smith (eds), *Conceptual and Discourse Factors in Linguistic Structure*, Stanford, CSLI Publications, 45-61.
- Bergen, B.K. & M.C. Plauché (2005), “The convergent evolution of radical constructions: French and English deictics and existentials”, *Cognitive Linguistics* 16-1, 1-42.
- Bolinger, D. (1977), *Meaning and Form*, London, New York, Longman. (中右実訳『意味と形』こびあん書房, 1981年)
- Cadiot, P. (1976), “Relatives et infinitives "déictiques" en français”, *DRLAV* 13, 1-64.
- Cannings, P. (1978), “Definiteness and relevance: the semantic unity of *il y a*”, Suñer, M. (ed) *Contemporary Studies in Romance Linguistics*, Georgetown UP, 62-89.
- Carlson, G.N. (1977), *Reference to Kinds in English*, Ph.D. thesis, University of Massachusetts, Amherst, reproduced by Garland.
- Carlson, G.N. & F.J. Pelletier (eds), (1995), *The Generic Book*, Chicago, The University of Chicago Press
- Chafe, W. (1987), “Cognitive constraints on information flow”, Tomlin, R.S. (ed) *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam, John Benjamins, 21-51.
- Chafe, W.L. (1976), “Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics, and point of view”, Li, C.N. (ed) *Subject and Topic*, New York, Academic Press, 27-55.
- Cornish, F. (1999), *Anaphora, Discourse, and Understanding. Evidence from English and French*, Oxford, Oxford University Press.
- Damourette, J. & E. Pichon (1911-1934), *Des mots à la pensée. Essai de grammaire de la langue française*, Paris, d'Artrey.
- Danon-Boileau, L. (1989), “La détermination du sujet”, *Langages* 94, 39-72.
- Declerck, R. (1981), “Pseudo-Modifiers”, *Lingua* 54, 135-163.
- Dubois, J., M. Giacomo, L. Guespin, C. Marcellesi, et al. (1973), *Dictionnaire de linguistique*, Librairie Larousse. (伊藤晃他編訳『ラールース言語学用語辞典』大修館書店, 1980年)
- Ducrot, O. (1972), *Dire et ne pas dire*, Paris, Hermann.
- Erteschik-Shir, N. (2007), *Information Structure. The Syntax-Discourse Interface.*, Oxford, Oxford University Press.
- Fauconnier, G. (1984), *Espaces mentaux : aspects de la construction du sens dans les*

- langues naturelles*, Paris, Les éditions de Minuit. (坂原茂・水光雅則・田窪行則・三浦博訳『メンタル・スペース』白水社, 1996年)
- Fauconnier, G. (1997), *Mappings in Thought and Language*, Cambridge, Cambridge University Press. (坂原茂・田窪行則・三藤博訳『思考と言語におけるマッピング』岩波書店, 2000年)
- Furukawa, N. (1996), *Grammaire de la prédication seconde. Forme, sens et contraintes*, Louvain-la-Neuve, Duculot.
- Furukawa, N. (2013), “Emotion et (a)thématicité: le type d'énoncé *Le facteur qui passe!* revisité”, *Langue française* 180, 113-126.
- Giry-Schneider, J. (1988), “L'interprétation événementielle des phrases en *il y a*”, *Linguisticae Investigationes* 12-1, 85-100.
- Grégoire, A. (1949), “Un type de phrase méconnu”, *Le français moderne* 17, 7-9.
- Hawkins, J.A. (1978), *Definiteness and Indefiniteness : A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, London, Croom Helm.
- Kaplan, D. (1977), “Demonstratives”, Reprinted in Almong, J., J. Perry & H. Wettstein (eds), *Themes from Kaplan* (1989), Oxford, Oxford University Press, 481-563.
- Kleiber, G. (1981), “Relatives spécifiantes et relatives non spécifiantes”, *Le français moderne* 49, 216-233.
- Kleiber, G. (1986), “Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate”, *Langue française* 72, 54-79.
- Kleiber, G. (1987), “L'énigme du Vintimille ou les déterminants « à quai »”, *Langue française* 75, 107-122.
- Kleiber, G. (1988), “Sur les relatives du type *Je le vois qui arrive*”, *Travaux de linguistique* 17, 89-115.
- Kleiber, G. (1994), *Anaphores et pronoms*, Louvain-la-Neuve, Duculot.
- Kuno, S. (1971), “The position of locatives in existential sentences”, *Linguistic Inquiry* 2-3, 333-378.
- Kuroda, S.-Y. (1972), “The categorical and thethetic judgement”, *Foundations of Language* 9, 153-185.
- Lafontaine, L. (1989), *Valeurs et comportements de voici et voilà*, Master of Arts thesis, Université de Sherbrooke, Ottawa.
- Lakoff, G. (1987), *Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal About the Mind*, Chicago, University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳『認知意味論』紀伊國屋書店, 1993年)
- Lambrech, K. (1987), “On the status of SVO sentences in French discourse”, Tomlin, R.S. (ed) *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam, J.Benjamins,

217-261.

- Lambrech, K. (1988), "Presentational cleft constructions in spoken French", J.Haiman & S.Thompson (eds), *Clause Combining in Grammar and Discourse*, Amsterdam, John Benjamins, 135-179.
- Lambrech, K. (1994), *Information Structure and Sentence Form*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Lambrech, K. (2000), "Prédication seconde et structure informationnelle. La relative de perception comme construction présentative", *Langue française* 127, 49-66.
- Langacker, R.W. (1991), *Foundations of Cognitive Grammar*, Stanford University Press.
- Langacker, R.W. (2001), "Discourse in cognitive grammar", *Cognitive Linguistics* 12-2, 143-188.
- Léard, J.-M. (1992), *Les Gallicismes. Etudes syntaxique et sémantique*, Louvain-la Neuve, Duculot.
- Lefevre, F. (1999), *La phrase averbale en français*, Paris, L'Harmattan.
- Löbner, S. (1985), "Definites", *Journal of Semantics* 4, 279-326.
- Milsark, G.L. (1974), *Existential Sentences in English*, Ph.D. thesis, MIT.
- Milsark, G.L. (1977), "Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English", *Linguistic Analysis* 3-1, 1-29.
- Minsky, M. (1974), "A framework for representing knowledge", Winston, P. (ed) *The Psychology of Computer Vision*, New York, McGraw-Hill, 211-277.
- Minsky, M. (1977), "Frame-system theory", Johnson-Laird, P.N. & P.C. Wason (eds), *Thinking. Readings in Cognitive Science*, Cambridge, Cambridge UP, 355-376.
- Moignet, G. (1969), "Le verbe VOICI-VOILA", *Travaux de linguistique et de littérature* 7-1, 189-202.
- Pottier, B. (1949), "A propos d'un type de phrase «le facteur qui passe»", *Le français moderne* 17-2, 91-92.
- Pottier, B. (1974), *Linguistique générale-théorie et description*, Paris, Klincksieck.
- Prince, E.F. (1978), "On the function of existential presupposition in discourse", *Chicago Linguistic Society* 14, 362-376.
- Prince, E.F. (1981), "Toward a taxonomy of given-new information", Peter, C. (ed) *Radical Pragmatics*, New York, Academic Press, 223-255.
- Prince, E.F. (1992), "The ZPG Letter : subjects, definiteness, and information-status", Mann, W.C. & S.A. Thompson (eds), *Discourse Description : Diverse Linguistic Analyses of a Fund-Raising Text*, Amsterdam, John Benjamins, 295-325.
- Radford, A. (1975), "Pseudo-relatives and the unity of subject raising", *Archivum Linguisticum* 6, 32-64.

- Recanati, F. (1996), “Domains of Discourse”, *Linguistics and Philosophy* 19, 445-475.
- Reinhart, T. (1981), “Pragmatics and linguistics : an analysis of sentence topics”, *Philosophica* 27, 53-94.
- Rothenberg, M. (1971), “Les propositions relatives à antécédent explicite introduites par des présentatifs”, *Etudes de linguistique appliquée* 2, 102-117.
- Rothenberg, M. (1972), “Les propositions relatives adjointes”, *Bulletin de la société de linguistique de Paris* 72-1, 175-213.
- Rothenberg, M. (1979), “Les propositions relatives prédicatives et attributives”, *Bulletin de la société de linguistique de Paris* 74, 351-392.
- Sandfeld, K. (1936), *Syntaxe du français contemporain*, Paris, Droz.
- Sanford, A.J. & S.C. Garrod (1981), *Understanding Written Language*, New York, John Wiley & Sons.
- Sasse, H.-J. (1987), “Thethetic/categorical distinction revisited”, *Linguistics* 25, 511-580.
- Schank, R.C. & R.P. Abelson (1977), “Scripts, plans, and knowledge”, Johnson-Laird, P.N. & P.C. Wason (eds), *Thinking : Readings in Cognitive Science*, Cambridge, Cambridge University Press, 421-432.
- Tranel, B. (1973), “Voici and Voilà”, Jacobs, R.A. (ed) *Studies in Language : Introductory readings in Transformational Linguistics*, Lexington, Massachusetts/Toronto, Xerox College Publishing, 141-151.
- Vendler, Z. (1967), *Linguistics in Philosophy*, New York, Cornell University Press.
- Wagner, R.-L. (1964), “*Il y a*”, *Le français dans le monde* 29, 10-15.
- Wehr, B. (1984), *Diskurs-Strategien im Romanischen Ein Beitrag zur romanischen Syntax*, Tübingen, Gunter Narr Verlag.
- Willems, D. & M. Meulleman (2010), “«*Il y a des gens ils viennent acheter des aspirines pour faire de l'eau gazeuse*». Sur les raisons d'être des structures parataxiques en *il y a*.”, Béguelin, M.-J., M. Avanzi & G. Corminboeuf (eds), *La Parataxe*, Berne, Peter Lang,
- 朝倉季雄 (2002) 『新フランス文法事典』白水社.
- 朝倉季雄 (2005) 『フランス文法集成』白水社.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の『タ』 — 主文末の『…タ』の意味について —」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房, 97-163.
- 井元秀剛 (1989) 「le N と ce N による忠実照応」『フランス語学研究』 23, 25-39.
- 小川彩子 (2016) 「Il y a Y qui + V 構文と X avoir Y qui + V 構文の働き — <名詞句 (Y) + qui + 動詞句>型表現の分析を通じて」『フランス語学研究』 50, 1-21.
- 小田涼 (2012) 『認知と指示—定冠詞の意味論』京都大学出版会.

- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版.
- 金子真 (2003) 「擬似関係節と喚体句」『フランス語学研究』37, 48-53.
- 川本茂雄 (1985) 『言語の構造 — フランス語そのほか —』白水社.
- 木下光一 (1978) 「フランス語の非人称ヴァリエントと発話の意味構造」『フランス語学研究』12, 1-16.
- 金水敏 (2001) 「テンスと情報」田窪行則編『統語情報と意味・談話構造を統合する言語モデルの研究』科学研究費成果報告書, 1-15.
- 金水敏, 田窪行則編 (1992) 『指示詞』ひつじ書房.
- 金田一春彦 (1953) 「不変化助動詞の本質—主観的表現と客観的表現の別について— (上・下)」『国語国文』22-2,3. 『日本の言語学 第3巻 文法 I』(1978), 大修館書店に再録.
- 金田一春彦 (1953) 「不変化助動詞の本質、再論—時枝博士・水谷氏・両家に答えて—」『国語国文』22-9. 『日本の言語学 第3巻 文法 I』(1978), 大修館書店に再録.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 阪倉篤義 (1978) 「陳述」『日本の言語学 第三巻 文法 I』大修館書店, 619-623.
- 坂原茂 (2000) 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」坂原茂編『認知言語学の発展』ひつじ書房, 213-249.
- 佐治圭三 (1973) 「題述文と存現文 — 主語・主格・主題・叙述 (部) などに関して —」『大阪外国語大学学報』29, 111-121.
- 定延利之 (2004) 「ムードの『た』の過去性」『国際文化学研究』(神戸大学) 21, 1-68.
- 定延利之 (2008) 『煩惱の文法 — 体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』筑摩書房.
- 定延利之編 (2014) 『日本語学と通言語的研究との対話—テンス・アスペクト・ムード研究を通して』くろしお出版.
- 高橋太郎 (1956) 「『場面』と『場』」『国語国文』(京都大学文学部国語国文学研究室) 25-9, 53-61.
- 田窪行則編 (1989) 『名詞句のモダリティー』くろしお出版.
- 田窪行則 (2010) 『日本語の構造—推論と知識管理』くろしお出版.
- 田窪行則, 金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3, 59-74.
- 津田洋子 (2009) 『フランス語の voilà 構文と il y a 構文 — 現象文の談話機能 —』京都大学人間環境学・研究科 修士論文
- 津田洋子 (2012) 「現象描写文としての IL Y A 名詞句+関係節」『フランス語学研究』46, 19-34.
- 津田洋子 (2013) 「IL Y A 構文と VOILA 構文の談話機能 — 指示対象の情報特性とアスペクトの分析を中心に」『フランス語学研究』47, 17-32.
- 津田洋子 (2014) 「<voilà+名詞句+関係節>構文をめぐって：先行場面とスキーマ化され

- たシナリオ」『フランス語学研究』48, 19-36.
- 津田洋子 (2017) 「眼前描写文と事態の予測可能性 — フランス語の (VOILA) 「名詞句＋関係節」の分析をもとに —」『Proceedings of the Forty-First Annual Meetings of The Kansai Linguistic Society』37, 109-120.
- 津田洋子 (2017) 「二つのタイプの〈SN qui SV〉 — 〈C'est / Il y a SN qui SV〉との比較をもとに」『フランス語学研究』51, 43-64.
- 津田洋子 (2018) 「現象描写文〈SN qui SV〉における冠詞の機能」『フランス語フランス文学研究』113, 235-250.
- 坪本篤朗 (1992) 「現象(描写)文と提示文」文化言語学編集委員会編『文化言語学：その提言と建設』三省堂, 564-578.
- 坪本篤朗 (2009) 「〈存在〉の連鎖と〈部分〉/〈全体〉のスキーマ — 「内」と「外」の〈あいだ〉 —」坪本篤朗, 早瀬尚子, 和田尚明編『「内」と「外」の言語学』開拓社, 299-351.
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能 — アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」岩倉具実教授退職記念論文集出版後援会編『言語学と日本語問題』くろしお出版.
- 東郷雄二 (1998) 「フランス語の話し言葉の特徴 — 談話方略を中心に —」『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』科学研究費成果報告書, 1-33.
- 東郷雄二 (1999) 「談話モデルと指示 — 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」『京都大学総合人間学部紀要』6, 35-46.
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』7, 27-46.
- 東郷雄二 (2001) 「定名詞句の『現場指示的用法』について」『京都大学総合人間学部紀要』8, 1-17.
- 東郷雄二 (2001) 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究』35, 1-15.
- 東郷雄二 (2002) 「不定名詞句の指示と談話モデル」『談話処理における照応過程の研究』科学研究費成果報告書, 1-35.
- 東郷雄二 (2005) 「談話の構築と領域」『フランス語学研究の現在 — 木下教授喜寿記念論文集 —』白水社, 55-74.
- 東郷雄二 (2005) 「名詞句の指示とコピュラ文の意味機能」『指示と照応に関する語用論的研究』科学研究費成果報告書, 1-59.
- 東郷雄二 (2009) 「フランス語の存在文と探索領域 — 意味解釈の文脈依存性と談話モデル —」『会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究』科学研究費成果報告書, 1-54.
- 東郷雄二 (2012) 「存在文と不定名詞句の意味解釈」『フランス語学の最前線1』ひつじ書房, 53-77.
- 東郷雄二, 大木充 (1986) 「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラキー」『フランス語学研究』20, 1-15.

- 東郷雄二, 大木充 (1987) 「非人称構文の談話機能について — 倒置構文との比較をめぐって」『フランス語学研究』 21, 1-20.
- 時枝誠記 (1950) 「用言に於ける陳述の表現」『日本文法 口語篇』岩波書店, 256-261. 『日本の言語学 第3巻 文法 I』 (1978), 大修館書店に再録.
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能 — 関連性理論の観点から —』くろしお出版.
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄, 益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版, 1-56.
- 野田春美 (1997) 『「の (だ)」の機能』くろしお出版.
- 野本和幸 (1997) 『意味と世界—言語哲学論考』法政大学出版局.
- 服部四郎, 大野晋, 阪倉篤義, 松村明編 (1978) 『日本の言語学 第3巻 文法 I』大修館書店.
- 平塚徹 (1991) 「文脈・状況を受ける *c'est NP qui VP*」『フランス語学研究』 25, 12-24.
- 福地肇 (1985) 『談話の構造』大修館書店.
- 藤田康子 (1997) 「*avoir* と *il y a*」『関西学院大学フランス学会 年報・フランス研究』 31, 107-119.
- 藤田康子 (1997) 「フランス語の存在文と所有文」『人文論究』(関西学院大学) 47-1, 233-243.
- 古川直世 (1983) 「関係節の指示機能と記述機能について」『フランス語学研究』 17, 61-77.
- 古川直世 (1984) 「フランス語における擬似関係節について」『文芸言語研究 言語篇』(筑波大学) 9, 109-134.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 益岡隆志編 (2008) 『叙述類型論』くろしお出版.
- 松下大三郎 (1924) 「断句の構成」『標準日本文法』紀元社. 『日本の言語学 第3巻 文法 I』 (1978), 大修館書店に再録.
- 三尾砂 (1948) 『国語法文章論』三省堂. 『三尾砂著作集 I』 (2003), ひつじ書房に再録.
- 三尾砂 (2003) 『三尾砂著作集 I』ひつじ書房.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館.
- 渡辺実 (1953) 「叙述と陳述 — 述語文節の構造 —」『国語学』 13-14. 『日本の言語学 第3巻 文法 I』 (1978), 大修館書店に再録.